

平安京跡研究調查報告

第12輯

押 小 路 殿 跡
平安京左京三条三坊十一町

財團法人 古代學協會

昭和59年

序 文

平安京左京三条は、院の御所や邸宅が立ちならび、京内でも枢要の地であった。その中でも三坊は、押小路殿、三条東殿、三条西殿など、摂関期から院政期にかけて、政治的・文化的中心の一翼を担って栄えた場所であった。

本報告書は、この三坊のうち、十町（押小路殿）と十一町における3件の発掘調査の成果を纏めたものである。

押小路殿は、後鳥羽上皇の院の御所として知られ、また降っては「龍躍池」を中心とした二條家の押小路殿の庭園の美しさは、しばしば詩文にとりあげられるところとなった。十一町には備中守高階為清の邸宅が営まれ、応保元年には炎上したと伝えられている。

今回の調査では、平安時代の顕著な遺構は検出できなかったものの、江戸時代に至るまでの各期の良好な史料を得ることができた。この成果が、斯界にいささかなりとも貢献できれば、我々の望外の喜びとするところである。

発掘調査から報告書刊行にいたるまで、各方面から様々な協力、助言をいただいた。明治生命保険相互会社には、調査費用の負担をはじめとして、一方ならぬ御協力を得た。特に故高木金次社長は、押小路殿跡第1次調査に際し、現地視察されるなど、我々の研究に大きな理解を示された。ここに篤く感謝の意を表するものである。

昭和59年2月

財古代学協会専務理事

平安博物館館長

角 田 文 衛

目 次

	頁
はじめに	1
第1部 平安京押小路殿跡第2次調査	
第1章 はじめに	2
第1節 調査の発端	2
第2節 調査の組織	2
第2章 調査の概要	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 調査の経過	5
第3節 土層の観察	8
第3章 検出遺構	12
第1節 I地区の検出遺構	12
第2節 II地区の検出遺構	13
第4章 発見遺物	18
第1節 II地区井戸7出土の遺物	18
第2節 I地区焼土層及びII地区方形土壇出土の遺物	18
第3節 I地区井戸1出土の遺物	20
第4節 瓦類	22
第5節 陶磁器類	34
第6節 土師質土器類	43
第7節 石製品類	43
第8節 金属製品類	45
第9節 土製品類	45
第5章 結び	48
おわりに	49
第2部 平安京押小路殿跡第3次調査	
第1章 発掘調査の経過	52
第2章 遺構の概要	54
第3章 遺構・遺物	59
第1節 平安時代	59
第2節 鎌倉時代	62
第3節 室町時代	67
第4節 江戸時代	72
付 論 土師器皿(Bタイプ系)の器形, 規格の 変化と製作技術について	82

目 次

第3部	平安京左京三条三坊十一町の調査	
第1章	発掘調査の経過	88
第2章	遺構と遺物	90
第1節	溝	90
第2節	井戸	97
第3節	土壌	107
第4節	その他の遺構・遺物	120
第3章	姉小路烏丸の地と大甕について	133

図 版 目 次

- 第 1 部
図版第 1 調査地遠景
図版第 2 上：I 地区発掘前近景
下：I 地区第 1 文化面全景
図版第 3 左：I 地区第 2 文化面全景
右：同第 3 文化面全景
図版第 4 I 地区完掘後の全景
図版第 5 上：I 地区鍛冶場跡
下：同完掘状況
図版第 6 上：I 地区礫土墳 1
下：I 地区礫土墳 2
図版第 7 I 地区井戸 1 上：完掘状況
下：埋没状況
図版第 8 上：I 地区井戸 1
下：同土師質皿出土状況
図版第 9 上：I 地区溝 1 近景
下：井戸 2・4・5 近景
図版第 10 上：I 地区北壁断面
下：I 地区石積み遺構裏込め断面
図版第 11 上：I 地区井戸 2 瓦埋没状況
下：I 地区石積み状況
図版第 12 上：塩壺出土状況
下：軒丸瓦出土状況
図版第 13 上：土師質鍋出土状況
下：発掘作業風景
図版第 14 上：II 地区発掘前全景
下：II 地区第 1 文化面全景
図版第 15 上：II 地区第 1 文化面全景
下：II 地区第 1 文化面鍛冶場跡
図版第 16 左：II 地区完掘状況
右：II 地区完掘状況
図版第 17 上：II 地区東壁際石組み遺構
下：II 地区土墳 10
図版第 18 左：II 地区井戸 5
右：II 地区暗渠
図版第 19 上：II 地区石階段と井戸 8
下：II 地区土墳 1
図版第 20 上：II 地区集石遺構
下：II 地区土墳 8
図版第 21 上：II 地区土墳 6
下：II 地区土墳 4
図版第 22 上：II 地区井戸 4
下：II 地区井戸 3
図版第 23 II 地区井戸 2 と井戸 6
図版第 24 上：II 地区井戸 1 全景
下：同近景
図版第 25 上：II 地区井戸 1 木柁埋没状況
下：同遺物出土状況
図版第 26 上：II 地区井戸 1 完掘状況
下：同南壁木柁検出状況
図版第 27 II 地区井戸 1 上右：木柁南西隅細部 上左：木柁北西隅細部
下：木柁西隅細部
図版第 28 上：II 地区東壁断面
下：II 地区北壁断面
図版第 29 上：II 地区東壁断面と石垣
下：II 地区南壁断面
図版第 30 上：II 地区埋戻し完了状況
下：調査地付近に建立された各石碑
図版第 31 出土軒丸瓦(1)
図版第 32 出土軒丸瓦(2)
図版第 33 出土軒丸瓦(3)
図版第 34 出土軒丸瓦(4)
図版第 35 出土軒丸瓦(5)
図版第 36 出土軒丸瓦(6)
図版第 37 出土軒平瓦(1)
図版第 38 出土軒平瓦(2)
図版第 39 出土軒平瓦(3)
図版第 40 出土瓦類
図版第 41 出土平瓦類
図版第 42 出土平瓦類及び丸瓦類
図版第 43 出土丸瓦類
図版第 44 瓦製埴
図版第 45 I 地区井戸 1 出土遺物(1)
図版第 46 I 地区井戸 1 出土遺物(2)
図版第 47 I 地区井戸 1 出土遺物(3)
図版第 48 土師質皿類(1)
図版第 49 土師質皿類(2)
図版第 50 土師質土器類
図版第 51 須恵器(1～9), 陶器(10), 銀箔片(11)
図版第 52 中国製磁器(1)
図版第 53 中国製磁器(2)
図版第 54 瀬戸系陶器
図版第 55 唐津系陶器
図版第 56 美濃・瀬戸系陶器
図版第 57 美濃(志野)系陶器・美濃(織部)系陶器・伊万里系陶器・京焼系陶器

図 版 目 次

- 図版第58 瓦質鉢・備前系陶器・信楽系陶器・丹波系陶器
- 図版第59 焼塩壺，伏見人形，石製器
- 図版第60 フィゴの羽口・埴塙各種
- 図版第61 貨幣及び鉄製品
- 図版第62 泥面子(1)
- 図版第63 泥面子(2)
- 第2部
- 図版第64 上：調査前全景 下：北部茶褐色土層全景
- 図版第65 上：北部完掘後全景
下：南部完掘後全景(東から)
- 図版第66 上：井戸206 下：井戸205
- 図版第67 上：井戸205 下：同完掘後
- 図版第68 上：井戸203 下：土壇207・柱穴204
- 図版第69 上：柱穴201 下：柱穴202
- 図版第70 上：柱穴201 下：溝203
- 図版第71 上：溝201 下：土壇101遺物出土状態
- 図版第72 井戸206出土遺物
- 図版第73 井戸205出土遺物(1)
- 図版第74 井戸205出土遺物(2)
- 図版第75 土壇207・柱穴203・溝203出土遺物
- 図版第76 土壇206出土遺物
- 図版第77 土壇204・203出土遺物
- 図版第78 土壇101出土遺物(1)
- 図版第79 土壇101出土遺物(2)
- 図版第80 土壇101出土遺物(3)
- 図版第81 土壇101出土遺物(4)
- 図版第82 土壇101出土遺物(5)
- 図版第83 土壇101出土遺物(6)
- 図版第84 土壇101出土遺物(7)・井戸203出土遺物
- 図版第85 上：木野の土師皿窯 下：うつげ
- 第3部
- 図版第86 調査地全景 上：W区 下：E区
- 図版第87 溝1(烏丸小路西側溝)
- 図版第88 1：井戸11 2・3：同遺物出土状態 4：溝2
- 図版第89 1：井戸4 2：井戸9 3：井戸10 4：井戸3 5：井戸6 6：井戸2
- 図版第90 上：土壇6 下：土壇13
- 図版第91 土壇5 上：大甕出土状態
- 下：W区北壁断面
- 図版第92 土壇14 上：全景 下：大甕出土状態
- 図版第93 石積土壇3 上：全景 下：完掘後
- 図版第94 1：石積土壇1 2：石積土壇2 3～5：ピット群
- 図版第95 上：溝1出土遺物 下：溝2出土遺物(1)
- 図版第96 溝2出土遺物(2)
- 図版第97 井戸11出土遺物
- 図版第98 上：土壇12出土遺物 下：井戸4出土遺物
- 図版第99 上：井戸9出土遺物 中：井戸10出土遺物 下：井戸3出土遺物
- 図版第100 井戸7出土遺物
- 図版第101 井戸2出土遺物
- 図版第102 上：土壇6出土遺物 下：土壇13出土遺物
- 図版第103 土壇5出土大甕(1)
- 図版第104 土壇5出土大甕(2)
- 図版第105 上：土壇5出土大甕(3) 下：土壇14出土大甕
- 図版第106 上：土壇14出土遺物 下：土壇5出土遺物(1)
- 図版第107 上：土壇5出土遺物(2) 下：石積土壇1出土遺物
- 図版第108 軒丸瓦
- 図版第109 軒平瓦
- 図版第110 上：土製品 下：輸入磁器(1)
- 図版第111 輸入磁器(2)
- 図版第112 瀬戸系陶器
- 図版第113 瀬戸・美濃系天目茶碗・皿類
- 図版第114 織部系陶器
- 図版第115 織部・志野系陶器
- 図版第116 唐津系陶器
- 図版第117 唐津・伊万里系陶磁器
- 図版第118 木製品・石硯・銭貨

挿 図 目 次

	頁		頁
第1図 発掘調査地位置図	1	第31図 泥面子拓影図(1)	46
第1部		第32図 泥面子拓影図(2)	47
第2図 発掘区位置と調査地付近	4	第2部	
第3図 発掘区位置図	5	第33図 発掘調査地トレンチ位置図	52
第4図 土層観察図	6	第34図 発掘区平面図(1)	54
第5図 I地区遺構平面実測図	7	第35図 発掘区平面図(2)	55
第6図 II地区遺構平面実測図	9・10	第36図 井戸203・202実測図	56
第7図 I地区第4文化面瓦集積図	14	第37図 発掘区平面図3・断面図	57・58
第8図 方形横棧式井戸図	14	第38図 井戸206実測図	59
第9図 各種遺構実測図	16	第39図 井戸206直上土壌 出土遺物実測図	60
第10図 II地区井戸7出土 遺物実測図	19	第40図 緑釉耳皿・瓦実測図 及び拓影	61
第11図 I地区焼土層及びII地区 方形土壌出土遺物実測図	21	第41図 石帯実測図・写真	62
第12図 I地区井戸1出土 遺物実測図(1)	23	第42図 井戸205実測図	63
第13図 I地区井戸1出土 遺物実測図(2)	24	第43図 井戸205出土遺物実測図(1)	64
第14図 軒丸瓦拓影図(1)	26	第44図 井戸205出土遺物実測図(2)	66
第15図 軒丸瓦拓影図(2)	27	第45図 土壌207出土遺物実測図	67
第16図 軒丸瓦拓影図(3)	28	第46図 柱穴203・溝203・201 出土遺物実測図	69
第17図 軒丸瓦拓影図(4)	29	第47図 土壌206・204・203 出土遺物実測図	71
第18図 軒丸瓦拓影図(5)	30	第48図 江戸初期の調査地付近	72
第19図 軒丸瓦拓影図(6)	31	第49図 土壌101出土遺物(1)	73
第20図 軒丸瓦拓影図(7)	32	第50図 土壌101出土遺物(2)	75
第21図 軒丸瓦拓影図(8)	33	第51図 土壌101出土遺物(3)	76
第22図 軒平瓦拓影図(1)	35	第52図 土壌101出土遺物(4)	77
第23図 軒平瓦拓影図(2)	36	第53図 土壌101出土遺物(5)	78
第24図 軒平瓦拓影図(3)	37	第54図 土壌101出土遺物(6)	79
第25図 軒平瓦拓影図(4)	38	第55図 Bタイプ系土師器皿の 器形変化	82
第26図 軒平瓦拓影図(5)	39	第56図 室町後期の土師器皿	83
第27図 特殊瓦拓影図	40	第57図 土師器皿(Bタイプ系) 口径/器高図表	84
第28図 中国製陶磁器類実測図	41		
第29図 各種出土遺物実測図	42		
第30図 貨幣拓影図	44	第3部	

挿 図 目 次

	頁		頁
第58図	発掘調査地トレンチ位置図……………89	第78図	土壙 5 出土大甕実測図(2) ……113
第59図	調査地平面実測図, 断面図 ……91・92	第79図	土壙 5 出土大甕実測図(3) ……114
第60図	溝 1 実測図, 断面図……………93	第80図	土壙 5 出土大甕実測図(4) ……115
第61図	溝 1 出土遺物実測図……………94	第81図	土壙 5 出土遺物実測図 ……116
第62図	溝 2 出土遺物実測図(1)……………95	第82図	土壙14出土大甕実測図 ……117
第63図	溝 2 出土遺物実測図(2)……………96	第83図	土壙14出土遺物実測図 ……118
第64図	井戸11実測図……………98	第84図	石積土壙 1 出土遺物実測図(1) ……119
第65図	井戸11出土遺物実測図……………99	第85図	石積土壙 1 出土遺物実測図(2) ……120
第66図	土壙12出土遺物実測図 ……100	第86図	軒丸瓦拓影, 実測図(1) ……121
第67図	井戸 4 出土遺物実測図(1) ……101	第87図	軒丸瓦拓影, 実測図(2) ……122
第68図	井戸 4 出土遺物実測図(2) ……101	第88図	軒平瓦拓影, 実測図(1) ……124
第69図	井戸 9・10出土遺物実測図 ……102	第89図	軒平瓦拓影, 実測図(2) ……125
第70図	井戸 3 出土遺物実測図 ……103	第90図	土器類実測図 ……127
第71図	井戸 6・7 出土遺物実測図 ……105	第91図	輸入磁器実測図(1) ……128
第72図	井戸 2 出土遺物実測図 ……106	第92図	輸入磁器実測図(2) ……129
第73図	土壙 6 実測図 ……107	第93図	石製品実測図 ……130
第74図	土壙 6 出土遺物実測図 ……108	第94図	古銭拓影 ……131
第75図	土壙13出土遺物実測図 ……109	第95図	備前福岡の市 ……132
第76図	土壙 5, W区北壁断面図 ……110	第96図	応永三二, 三三年酒屋分布図 ……133
第77図	土壙 5 出土大甕実測図(1) ……112		

表 目 次

第 2 部	第 3 部
第 1 表 井戸205遺物出土表 ……65	第 3 表 土壙 5, 14出土大甕計測表 ……111
第 2 表 土壙101遺物出土表 ……74	

例 言

1. 本書は明治生命保険相互会社の委託を受けて、平安博物館が実施した発掘調査の報告書である。
2. 報告は発掘調査の年次及び地点により以下の3部構成とした。
 - 第1部 押小路殿跡第2次調査(昭和52年)
 - 第2部 押小路殿跡第3次調査(昭和55年)
 - 第3部 平安京左京三条三坊十一町(昭和55年)
3. 執筆分担は下記の通りである。
 - 第1部 松井忠春
 - 第2部 横田洋三, (寺島孝一)
 - 第3部 芝野康之, (寺島孝一)
4. 章だては各部ごとに独立させたが、挿図、図版は索引の便のため通し番号を付した。
5. 本書の編集は寺島が行った。

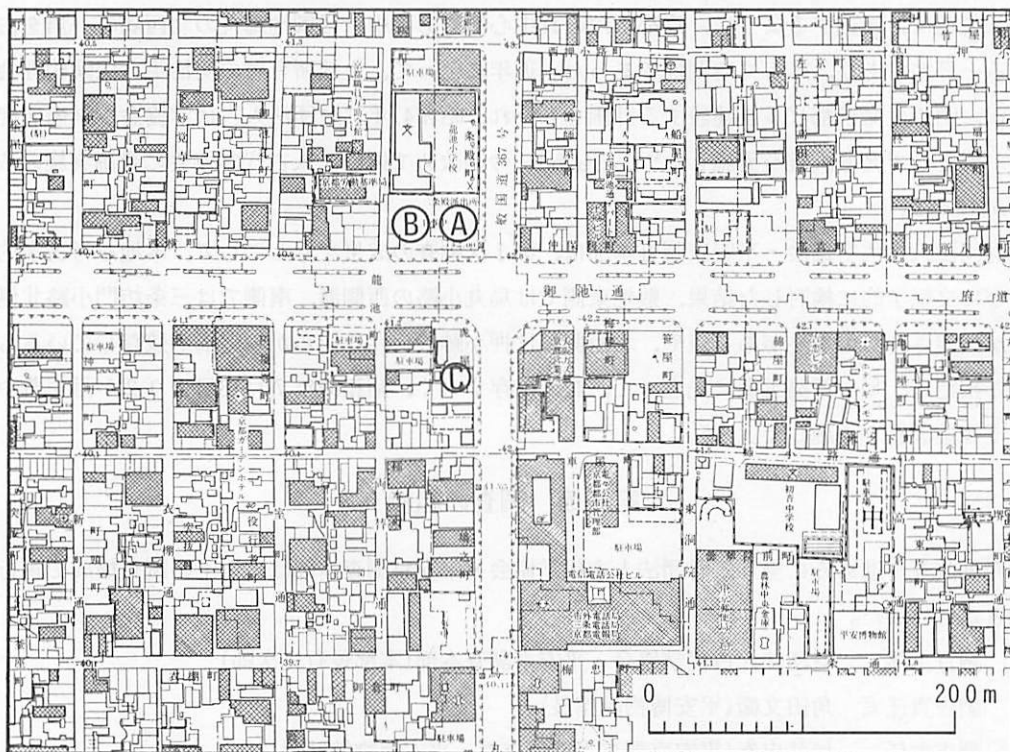
はじめに

本報告書は昭和52年7・8月に実施した押小路殿第2次調査，昭和55年の同第3次調査，そして昭和56年12月から実施した平安京左京三条坊門十一町の3件の調査の報告を纏めたものである。前2者は御池通(三条坊門通り)の北側に位置し，明治生命保険相互会社京都ビルの新築工事に伴うもの，後者は明治生命旧二条営業所の跡地の調査である(第1図)。

それぞれ第1部から第3部まで独立させたものとした。そのうち第1部と第2部は平安京押小路殿跡推定地という同じ一町の中にある地点であり，本来であれば，平安博物館がこれ以前に行った第1次調査¹⁾とあわせて，押小路殿跡についての総合的な検討・研究を行うべきであったが，今回は実現できなかった。三条通から三条坊門通周辺にかけては，我われの手がけた発掘調査も多く，これらを集積して，平安時代後期に，政治的，経済的にも重要な役割を果たしたこの地域の研究を今後進めてゆかねばならないと考えている。これらの発掘調査に協力を惜しまれなかった明治生命保険相互会社に対し，心から謝意を表する次第である。

註

- 1) 瀧谷寿・中谷雅治「押小路殿の研究」(『平安博物館研究紀要』第2輯，京都，昭和46年)



第1図 発掘調査地位置図

A：押小路殿跡2次 B：同3次 C：平安京左京三条坊門十一町

第1部 平安京押小路殿跡第2次調査

第1章 はじめに

第1節 調査の発端

京都市内は碁盤目状に配された南北、東西方向の幾条かの道路によって区画されているが、この道路網は、平安京の名残りを伝えていることは広く世に知られている。この京都市街地は、今日、都市再開発により近代化に向って大きく変貌しようとしている。それに伴い、埋蔵文化財の発掘調査も、従来の平安宮内中心から平安京中心へと移行しつつ、さらに面積的に大規模化している。それは近年來の平安京城における発掘調査が何よりも顕著に物語っている。たとえば六角堂跡¹⁾、三条西殿跡²⁾、高階泰仲邸跡³⁾、土御門内裏跡、国鉄京都駅前など枚挙にいとまがない。ここに報告しようとする押小路殿跡もその一例である。

この地は、後述するように、京都市内の真中心地である中京区御池烏丸の北西隅の一角を占める一等地であり、久しく空閑地であった。近年に至って、土地所有者の明治生命保険相互会社が、明治生命京都ビルを建設する計画をもたれ、昭和41年に財団法人古代学協会が学術研究の一環として発掘調査を実施した⁴⁾こともあり、今回改めて財団法人古代学協会に発掘実施の依頼があった。

財団法人古代学協会・平安京調査本部は、第1次調査の成果をもとにして、本地を考古学的並びに文献学的に検討した結果、敷地東側では烏丸小路の西側溝、南側では三条坊門小路北側溝が検出される可能性がある点や、北西側には押小路殿に伴う何らかの遺構が残存しているものと推定し、ビル新築工事に先立って、記録保存すべく、昭和52年7月18日より2か月を費やして発掘調査を実施した。

第2節 調査の組織

発掘調査を進めるに当り、財団法人古代学協会・平安京調査本部は、以下の調査構成で遂行することにした。

調査主体	財団法人古代学協会・平安京調査本部(本部長有光次郎)
調査責任者	角田文衛(平安博物館館長)
調査主任	松井忠春(平安京調査本部調査員・平安博物館助手)
調査員	佐々木英夫(同上)
	飯島武次(同主任調査員・平安博物館講師) (職名は調査当時)

また調査期間中には、調査補助員として多くの大学生の参加があった。

山下武久，木村 滋，片山淳子(以上関西大学)，成川雅治(甲南大学)，三宅憲明，原田雅裕，鈴木俊則，大槻真純(以上京都産業大学)，有田亮一，福永 治，水戸博之，駒沢幸雄，山上節子，岩松 桂，石川みどり，大橋不二子，和田二月子，小林雅子，田中暁子，泉田暁美，辻 康子，宇尾晶子(以上上智大学)，渡辺美栄子，村山ちぐさ，角高裕子

なお，調査開始前や期間中，下記の諸氏より種々の指導，助言を得た。記して感謝の意を表する次第である。

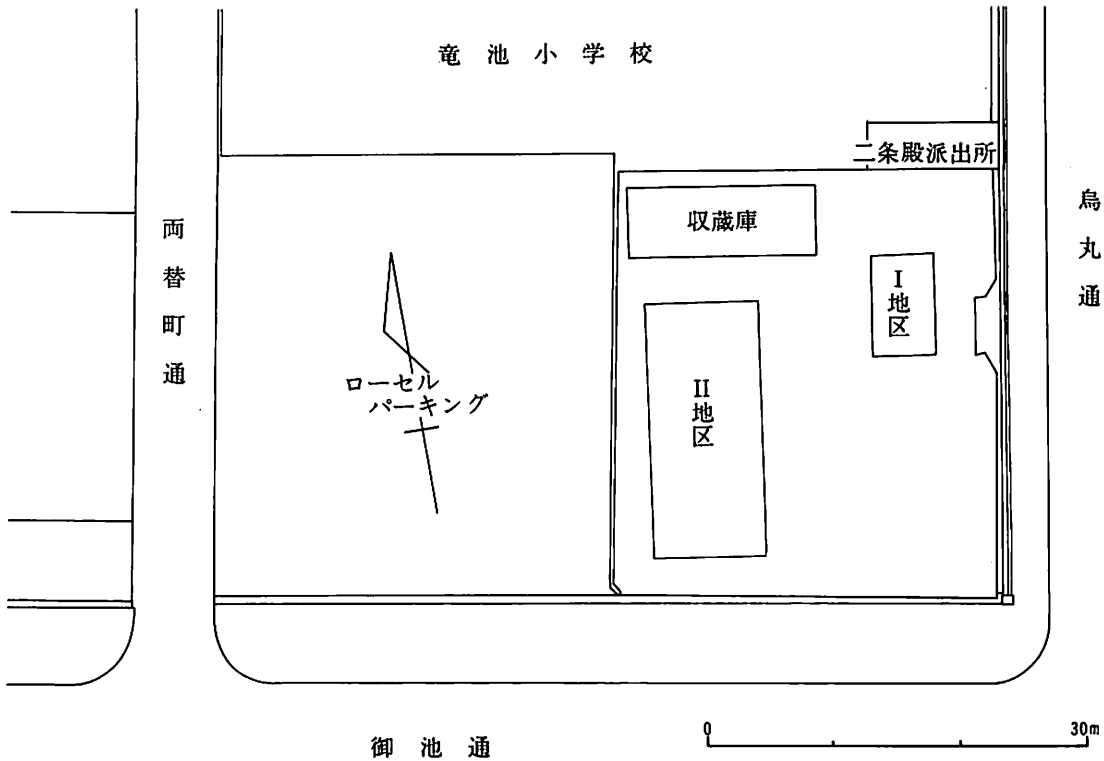
中谷雅治(京都府教育委員会文化財保護課)，峰 魏(京都市立考古資料館)，永田信一(財・京都市埋蔵文化財研究所)，小森俊寛(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会)，甲元真之(熊本大学)，梶川敏夫(京都市観光局文化財保護課)，小沢 弘(名古屋大学)

第2章 調査の概要

第1節 遺跡の位置

調査地は行政上は、京都市中京区烏丸通御池上ル二条殿、同竜池町に属する。すなわち京都市内における縦横の幹線道路である烏丸通と御池通の交差点の北西隅にあたり(図版第1)、交通量も京都市では最も多いところである。京都市内を地図で見る限り、この地は京都市の中心部にあたり、南々東約400mには「京都のへそ」で有名な頂法寺六角堂がある。

平安京条坊復原によれば、この地域一帯は平安京左京三条三坊十町にあたり、東は烏丸小路、南は三条坊門小路、北は押小路、西は室町小路によって画され、「拾芥抄」に「押小路殿」が存したことが記載されている(第1図)。押小路殿は別名「二条殿」とも呼称され、関白・左大臣二条良実の邸宅でもあり、その邸宅名がそのまま現小字「二条殿町」として存続しているが、文献的に十分証明されているとは言えない。また近世には金座・銀座・朱座が置かれ、周辺にはそれを顕彰すべく石碑が建立されている(図版第30下)。



第2図 発掘区位置と調査地付近(縮尺：1/200)

現地形は東側は鴨川まで平坦で何らの起伏も認められないが、調査地西側とローヤルパーキングとの境界から大きく西側に下降して堀川通まで下がり、その比高差は約5mである。南北間は南下すれどもその差は僅小で約40cmである(第2図)。

なお、調査地II地区西辺の南・北両ポイントの国土座標数値は以下のとおりである⁵⁾。

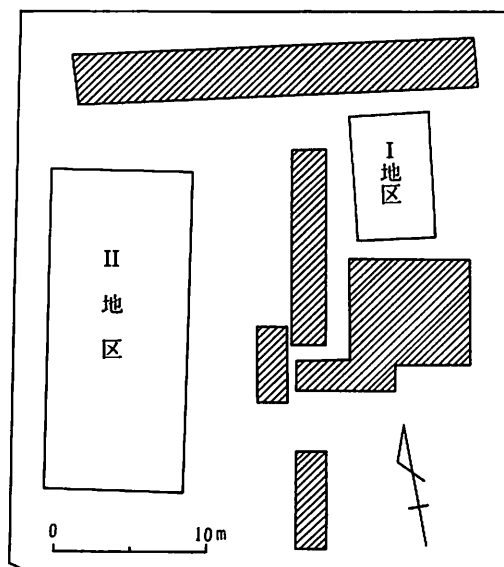
北側ポイント X = -110,015.720m

Y = -21,716.408m

南側ポイント X = -110,035.703m

Y = -21,715.913m

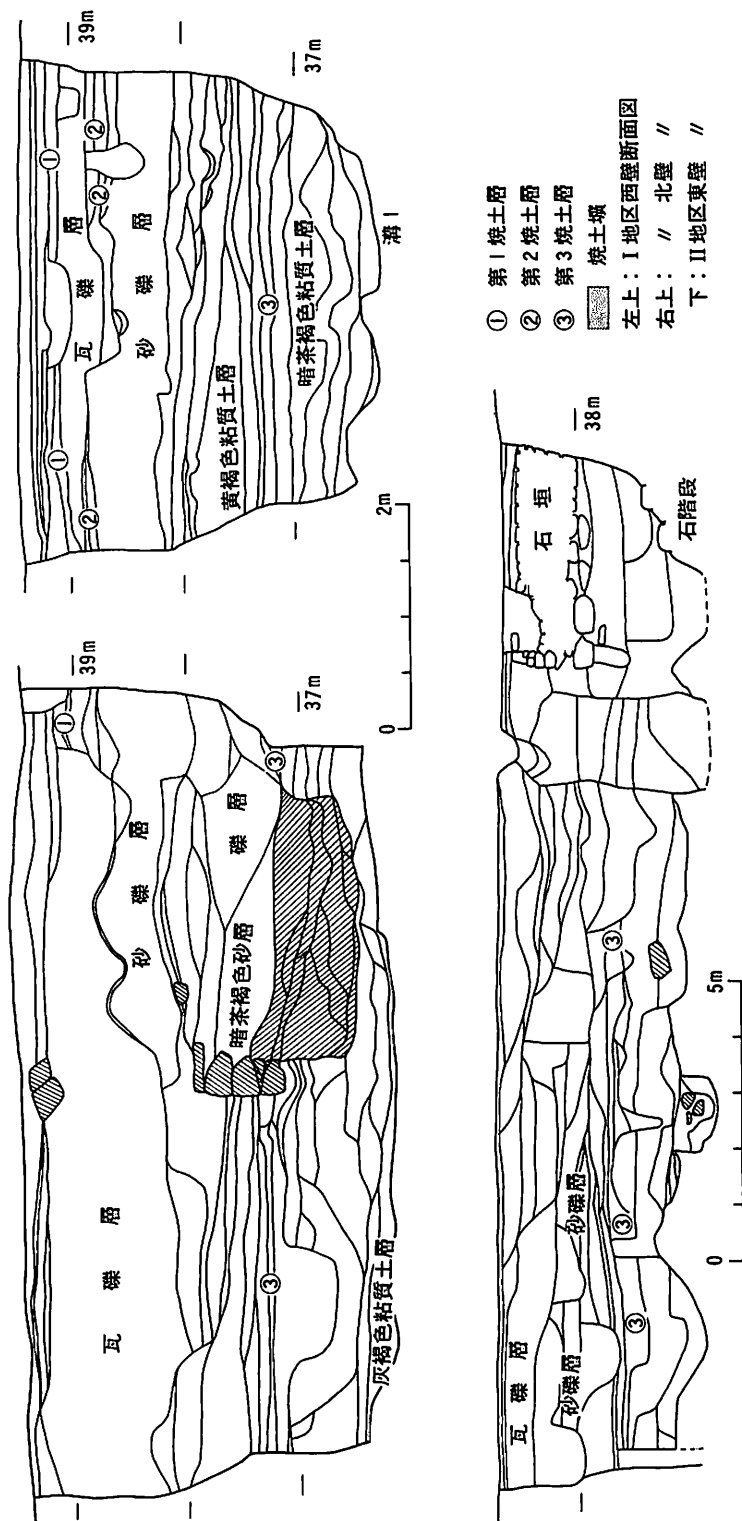
第2節 調査の経過



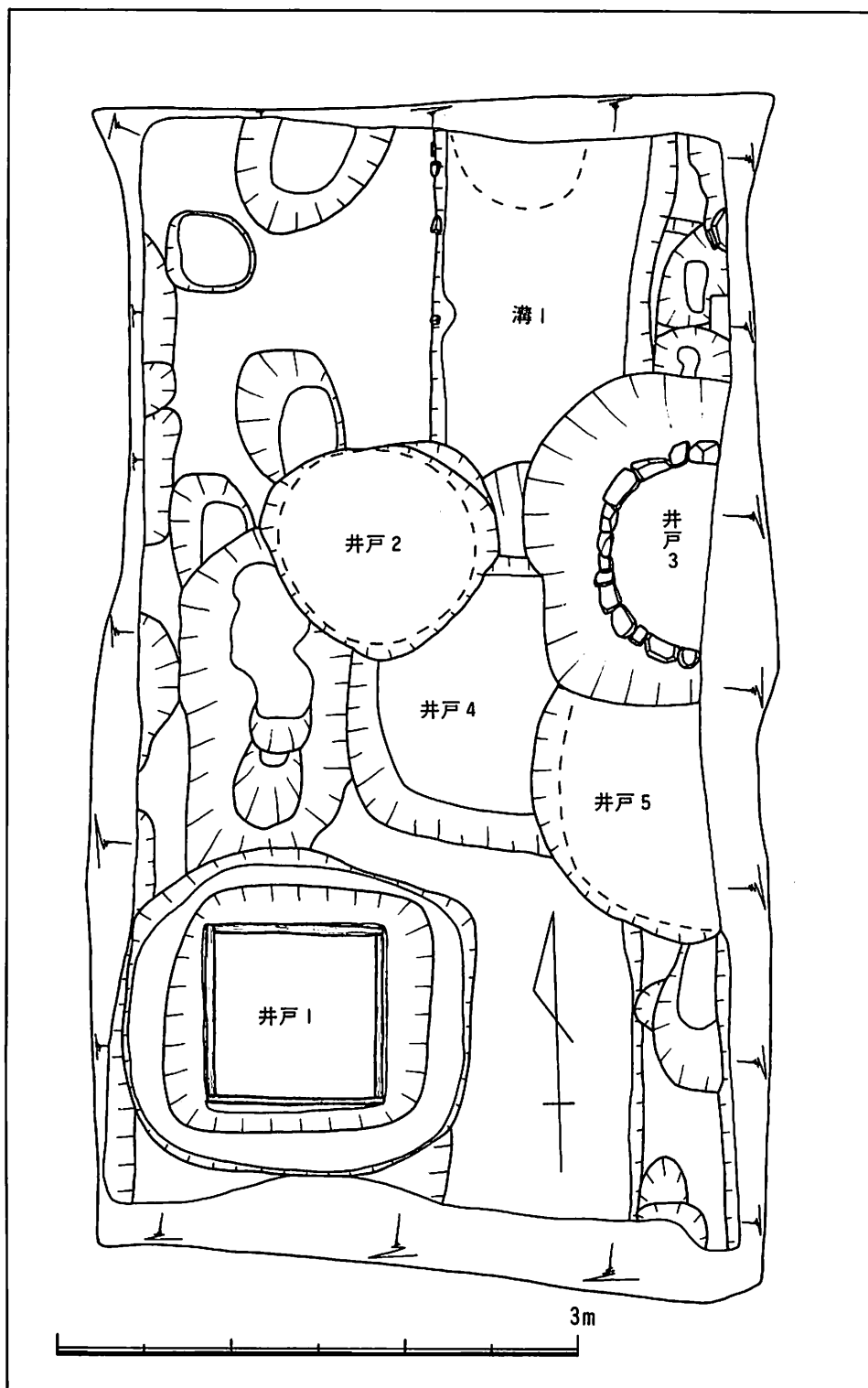
本調査対象地は、平安京条坊復元によれば、第3図 発掘区位置図(斜線部は第1次調査分)対象地の東側で烏丸小路、南端で三条坊門小路が想定されたため、この2遺構の検出に主眼を置きつつ、押小路殿に伴う何らの遺構をも究明すべきことを主目的とし、昭和41年度に実施された第1次発掘の調査地を避けて、烏丸通側と敷地西側寄りに各々I・II地区を設定した(第3図)。これは、烏丸通周辺の調査では現地表下から地山面まで約3mを測ることが多く、壁面の崩壊に伴う事故を極端に恐れたことと、さらに第1次調査時の調査結果を再確認するとともに補填すべきことも考慮したためである。

まず、第1次調査では表土下約180cmまで攪乱層で、今回の両地区も攪乱層が十二分に想定されたため、バック・ホーで表土下約180cmまで慎重に掘り下げていった。その結果夥しい攪乱ではあったが、第1次調査にレンガと判断された焼瓦は、江戸時代後半から末期にわたる赤瓦であり、また元治元年(1864)の焼土層も部分的に確認できた。

バック・ホーによる掘鑿後、I地区から調査を開始した。清掃後壁面を観察しつつ文化面を追求した結果、I地区中央部で東西に横走する石組みを検出した(第7図、図版第3左)。この石組みは3段から成っており、それより南側は数回に亘り叩きしめられていた。この整地土層内から主として瓦類が出土したが、江戸時代前期から中期のものであった。地区南側の同一文化面上から鍛冶場跡と推定される土壌が確認された(第9図2、図版第5)。その土壌内からはふいごの羽口や鉄滓、瓦などが出土した。3段の石垣の北側は大きな凹地になっており、その中に焼土・炭と共に瓦質土器、土師質皿、陶磁器などが多量に廃棄されていた(第11図1～9、図版第10下、12上、13上)。遺物から観て江戸時代初頭頃と考えられた。それより下位は文化面としては把握し得ない層序を呈していた。ただ北壁付近は安定しており壁面観察では約4枚の文化層を検出できた(第4図)。表土下約3.2mで地山の黄色粘土層にあたる。この地山面では、



第4図 土層観察図



第5図 I地区遺構平面実測図(縮尺: 1/40)

東壁に沿って南北に走る浅い溝1(第5図, 図版第9上)と西南隅で木枠の井戸1を検出した(第5図, 図版第7・8)。溝1からは平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺物, 井戸1からは平安時代後期中葉の遺物(第12・13図, 図版第45～47)が出土した。底面は現地表下約5mに達した。

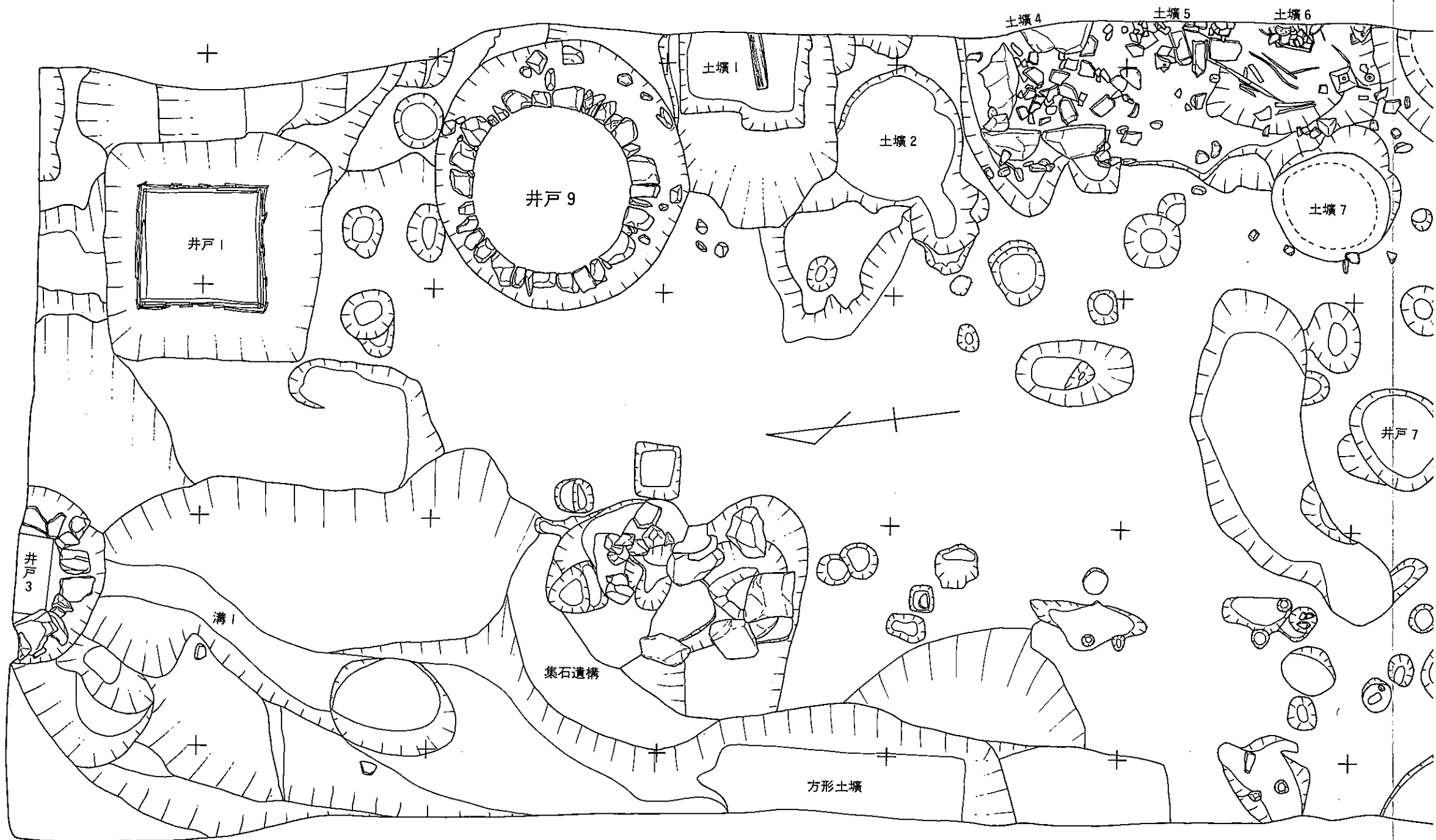
I地区の壁面断面図や平面図の作成と併行して, II地区の発掘に着手した。しかしI地区同様に後世の破壊が夥しく, 特に調査地区南側では近世末の大きな掘り込みが地山面を切っていた(図版第29下)。調査地北側では文化面を残しつつも表土下約250cmまでは見るべき顕著な遺構は確認されず, I地区で検出された鍛冶場跡とは若干趣きを異にした土壌(図版第15下)やふいごの羽口, あるいは鉄滓, 暗渠(図版第18右), 方形石積遺構などを検出するに止まった。その後, 層序に従って掘り下げて行ったが判然とすることなく, 建物の礎石状の石(根石)が2～3個残存していたのみで, 他は井戸(図版第22)や土壌が認められたにすぎず, 現地表下約3mで黄色粘土層の地山にあたる。地山面では調査地の南・北各1個所で平安時代に構築されたと推定される井戸1(図版第24～27)・井戸2(図版第23)を発掘した。しかし南側の井戸2は近世の石組み井戸(井戸6)で大半を破壊され底面は確認しえなかった。その他に調査区東壁に沿って土壌が9件検出されたが, その内土壌1・4～6は室町時代に属する中世墓と考えられる(図版第21)。また層序から考えて中世に掘さくされた溝1や集石遺構(第9図3, 図版第20上)などがあるが, その大半は井戸ないし井戸状遺構や土壌・ピットであり, 押小路殿(あるいは二条殿)に直接関与すべき建築遺構は認められなかった。

なお, 調査地はI地区が8m×5mの範囲で, II地区は20m×19mの範囲内であって, 共に狭小な面積であったため, 十二分に面ごとに把握するには至らなかった。ただ全体的に観た増合は第1次調査時に補填されるべき資料がより多く検出し得たと考えている。

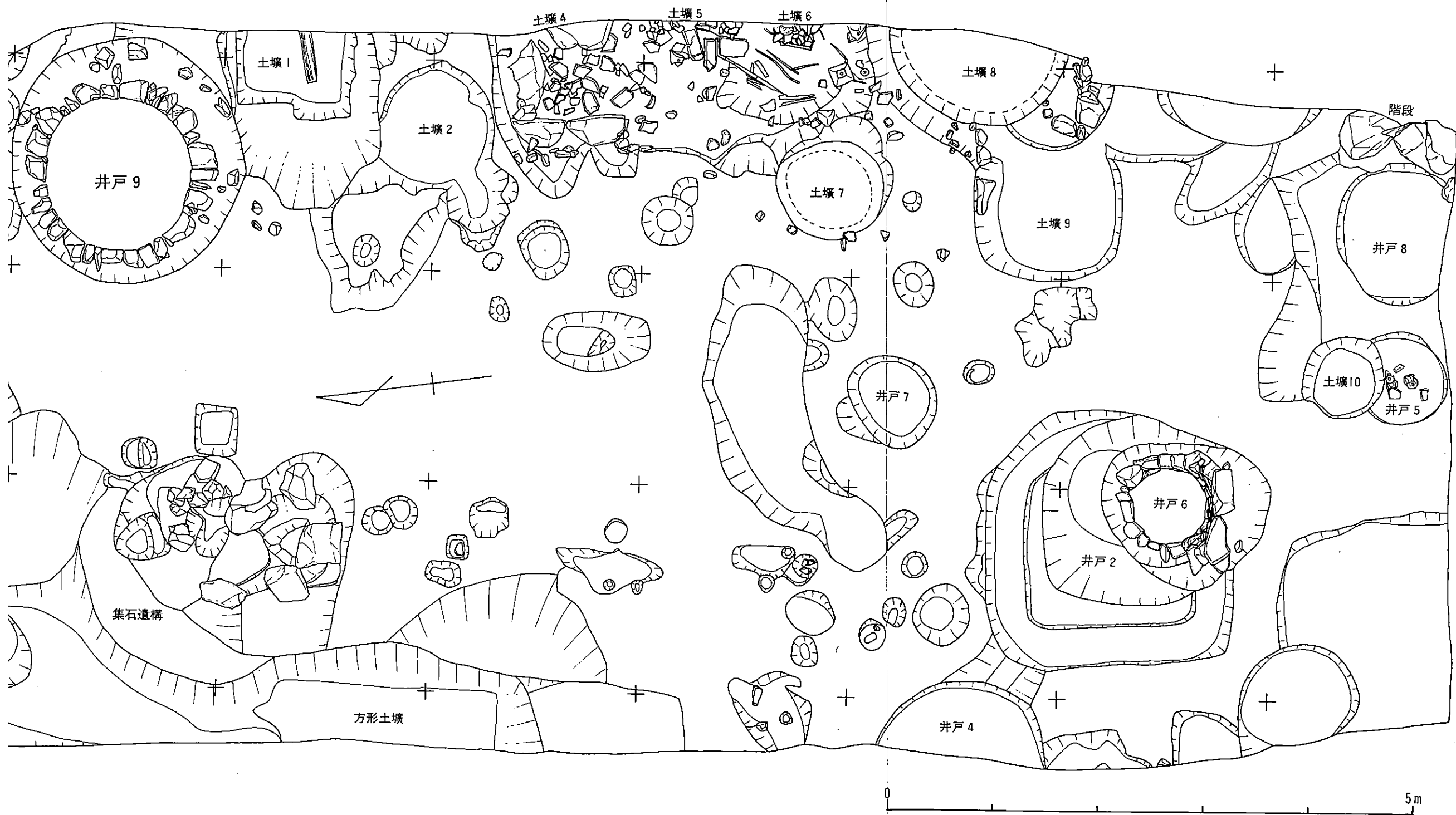
発掘調査は昭和52年7月18日(月)から同年9月21日(木)までの2か月余に亘ったが, 終了後細々と図面や出土遺物の整理を行った。その間, 後述するように平安京研究に資することが大なることが判明したため, 機会あるごとに調査の概要に関して報告してきた⁶⁾。遺物整理作業には, 山下武久, 木村 滋, 片山淳子, 植松なおみ(以上関西大学), 三宅憲明, 鈴木俊則, 原田雅裕(以上京都産業大学), 新居和昭(龍谷大学), 角高裕子, 村山ちぐさ, 渡辺美栄子の諸氏が労苦ををともにして下さった。また, 檜崎彰一(名古屋大学教授), 亀井明德(九州歴史資料館), 中野 徹(大阪市立美術館), 井上喜久雄(愛知県陶磁資料館), 平出紀男(名古屋市教育委員会), 小沢 弘(名古屋大学), 田中嗣人(同志社大学講師), 渡部明夫(香川県教育委員会), 六車恵一, 田村久雄, 江崎 武の諸先生方から有益な御助言・指導を頂戴した。併せ記して謝意を表する。

第3節 土層の観察

両地区の土層の堆積状況は, 調査地の四壁ともども安定した層序を呈してはいない(第4図, 図版第10・28・29)。地山の黄色粘土層から現地表下までおよそ3mの堆積ではあるが, いずれも中世・近世段階での掘込みや井戸, 土壌などによって掘さくされ, その上面に文化面を築きつつも各種遺構構築に伴って切り合うと言う関係上からその堆積状況は極めて複雑だと言わざ



第6図 II地区遺構平面実測図(縮尺:40分の1)



第6図 II地区遺構平面実測図(縮尺:40分の1)

るを得ない。所謂、各種遺構の断面図が地区層序図に表示されていることになる。その内で最も安定した層序を示すのがI地区北壁断面である(第4図右上、図版第10上)。この断面を重視しつつ、他の断面と比較して堆積状況を述べてみることにする。

約10cmの表土下に現代のコンクリートが張られており、その下部に3枚の黒褐色の土層がある。これは近・現代の遺物を含み、第1次調査時に調査地西側に存した土蔵と同一時期の堆積であろう。その下に江戸末期の焼土層が瓦等を含んで横たわっている。この焼土層は元治元年(1864)の火災で生じたものと推定され、頂法寺六角堂跡でも検出されている⁷⁾。瓦礫層は、淡褐色を呈し、その上面は叩きしめられていた。この瓦礫層はI地区西壁やII地区東壁にも共通して見られる。この下位に薄い焼土層が部分的に在する。瓦礫層を挟んだ上・下2枚の焼土層はさほど時間的差異は認められず、下方の焼土層はあるいは嘉永七年(1854)の火災に関連する可能性が指摘できる。この第2焼土層の下位には、約60cmを測る厚い砂礫層が黄褐色粘質土層などを被っている。この砂礫層は大形の礫を全く包含せず、丸味を帯びた礫と細かい砂で形成され、部分的に腐植沈殿物からなる帯状の粘土帯がみられ、砂粒の方向は南方に流れる。恐らくは鴨川の氾濫によるものであろう。江戸時代中期から後半期に亘って京都は鴨川の氾濫によって大洪水の被害に遭遇している。この砂礫層と同時代のものが土御門内裏跡⁸⁾(KBS放送会館)や平安京内繕町跡⁹⁾、京都御所内の一条大路跡¹⁰⁾でも検出されている。一連のものとして把握すべきであろう。この砂礫層はI地区西壁にも存し、II地区の東壁では約20cmの堆積となって認められた。西方に向って徐々に砂礫層が薄くなっていることは洪水が西方に向って緩やかであったことを意味していよう。この砂礫層の下位は約70cmの数条からなる土層を挟んで、焼土層(第3焼土層と呼ぶ)が約10cmの厚さで拮っている。焼土層上部の土層は主として東方にやや傾斜して堆積している。ただ第3焼土層直上の平坦な土層上面はI地区西壁でみる石垣の基底部に相当し、さらに南方は幾重の薄層で形成されていることなどから観て、この北壁のそれは石垣の裏込めの叩きしめ土層であると判断され、寧ろ文化的には石垣南側の版状堆積層がそれを示していると推定される。この石垣や裏込めは共伴遺物から江戸時代の前半期に相当する。なお、石垣の南側では鍛冶場跡である土塋が検出されている(図版第5)。また南壁沿いに土塋が2基東西に並列して存した(図版第6)。これはあるいは井戸に相当するかもしれない。第3焼土層は最大厚20cmを測り、地表下約2.1mで調査地全域に認められた。この焼土層内には瓦礫と共に多くの土師質土器などが出土した。さらにこの焼土層が充填された土塋がI地区では西壁沿いの上記石垣の裏込め層下部で検出された(図版第12上・13上)。またII地区西壁沿い中央でも方形土塋が存した。両土塋から土師器類、陶器類などが発掘され(第27図)、これらの遺物から後述するように、江戸時代初期の元和6年(1620)の火災に伴うものと推定される。この第3焼土層から地山の黄色粘土層までには約6枚の堆積層が見られるが、鎌倉～室町時代に漸次形成したものである。地山を掘り凹めた溝1の上部には幅約80cmの凹みが存するが、これは溝1が時代が降るにつれ、原位置を保ちつつ構築された溝の断面である。このような高低差を有しつつも同一機能をはたした溝は東洞院大路跡¹¹⁾や一条大路跡¹²⁾でも確認されている。

第3章 検出遺構

第2章で述べたとおり、I・II両調査地区で検出した諸遺構について説明を加える。

第1節 I地区の検出遺構

溝1(第5図, 図版第4, 同9上) 調査地区の東壁に沿って南北に走る溝で, 幅は最大で140cm, 最小で120cmを測り, 深さは20cmである。断面を観る限り幅広の浅い溝といえる。西肩は低く, 東肩は高い。その差は約40cmである。東肩の東側(調査地北東隅)は平坦で, 根石状の石が安座していた。現状では井戸2・4・5で分断されているが, その南側では東肩は地山の黄色粘土で堅緻であるが, 西肩は井戸1の埋土を穿って構築されているためその強度はさほどではない。溝内は灰褐色粘質土が埋まり, 土器の小片が小礫と伴出した。底面のレベルは北→南に低くなる。平安時代末期～鎌倉時代に比定される。

井戸1(第5図, 第8図左, 図版第7・8) この井戸は調査地西南隅の地山である黄色粘土層を穿って構築されていた。平面形は隅丸方形を呈し, 東西長約2m, 南北長約1.9mを測り, 若干東西に長い。約70cm下方で幅20cmのテラスを設け, それより底面に向って幅を狭げめ, 底面で120cm四方となる。所謂二段掘り形式である。深さは上面より約180cmである。底面には横棧の木材が四方に組まれた状態で残存していたが, 側板(縦板)などは全て朽ち果てていた(図版第7-下, 同8-下)。ただし縦板はその痕跡から最大幅約20cmであることが確認された。井戸内には焼土・炭・灰・礫と共に土師器・須恵器・軒瓦・中国製陶磁器・石製品など(第12・13図, 図版第45~47)が遺棄されていた。また掘方内からは須恵器の大甕片が出土した(図版第45-5)。底面近くでは炭と灰が多量に堆積していた。底面には粘土が貼り付けられていた。これは井戸最深部では地山が粘土層から砂利層に変化しておりその砂利層からの水漏れを防止するためのものと推定される。平安時代後期に比定される。

井戸2(図版第9下, 同11上) この井戸は直径1.3mを測り, 深さは現地表下6mまで追求したがさらに穿孔されているようである。上面には多量の瓦類が放棄されていたが, それを除去すると, 内部に崩壊した大形の平瓦が検出された(図版第44)。この瓦は両側端面の上・下2か所に小さな長形状の小孔が穿たれていた。井戸の下方では井戸壁面に沿って円形に連結されていた。小孔をホゾ孔としてクサビで瓦類を結いで円形として井戸枠を形成していたものである。平安京域内では時折検出されている。出土瓦類から江戸時代末期に想定される。

井戸3 調査地の表土直下で確認した石積み井戸で, 内径1.1m, 掘方径約2mを測る。石は20~30cm大の河原石を内側にツラを合せて平積みしていた。裏ゴメは褐色粘質土と小礫からなっていた。井戸内からは近・現代の陶器片や瓦片, あるいはガラス片が出土した。現代に構築されたものであろう。

井戸4 隅丸方形を呈し, 北辺・東辺を後世の井戸で削平されている。一辺約1.6mを測る。

底面はさほど深くなく、地山面からは約60cmである。井戸内からは主に室町時代後半期に属する瓦類が出土した。

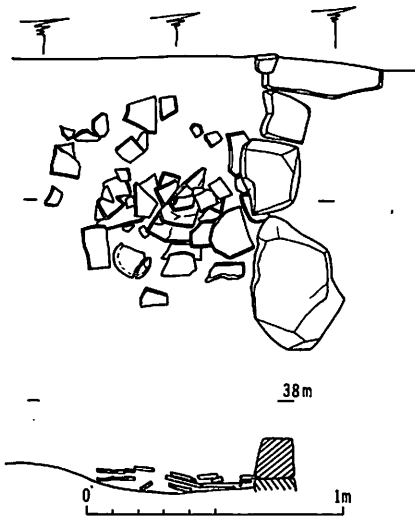
井戸5 井戸4の東側に存し、円形を呈する、径約1.6mの素掘り井戸である。底面は井戸2同様極めて深く、測り得なかった。

瓦集積と石垣(第7図, 図版第3左, 同11下) これは建物に伴う石垣と考えられる。石の平坦面を南面に揃えて三段積みし、その北側の基壇裏込めは暗茶褐色砂層・礫層と茶褐色粘質土で表面を固めていた。石材は安山岩系に属し、あまり角張らない。その南面は版築状を呈した文化面が数枚認められ、そのうち上部から2枚目にはこの瓦集積が検出された。この瓦集積は江戸時代中期頃の平瓦・棧瓦が主で、平面的に堆積していた。この瓦集積を除去すると、この地点が低く凹んで溝状となっていた。その幅は約50cmである。

鍛冶場跡(第9図2, 図版第5) 前述した石垣南側の文化堆積層の第3面で確認した。中心部の「小舟」相当部分は二段に亘って掘削されていた。南側は45度、北側は30度と傾斜面をもって15cm下り、それより垂直に20~25cm下降し、底面は南北間では平坦であるが東西間は西方に低くなる。この小舟の北東方に一段高く径25cmの通風孔が横方向にトンネルとなり、その入口にはふいごの羽口(図版第60~3)が横転して存在していた。小舟部の壁面は堅緻に焼け、溶鉱が行われていたことを証明している。小舟内から板葺瓦片やふいごの羽口片が出土した。文化面の出土遺物からこの遺構は江戸時代前期に属するものと推定される。

第2節 II地区の検出遺構

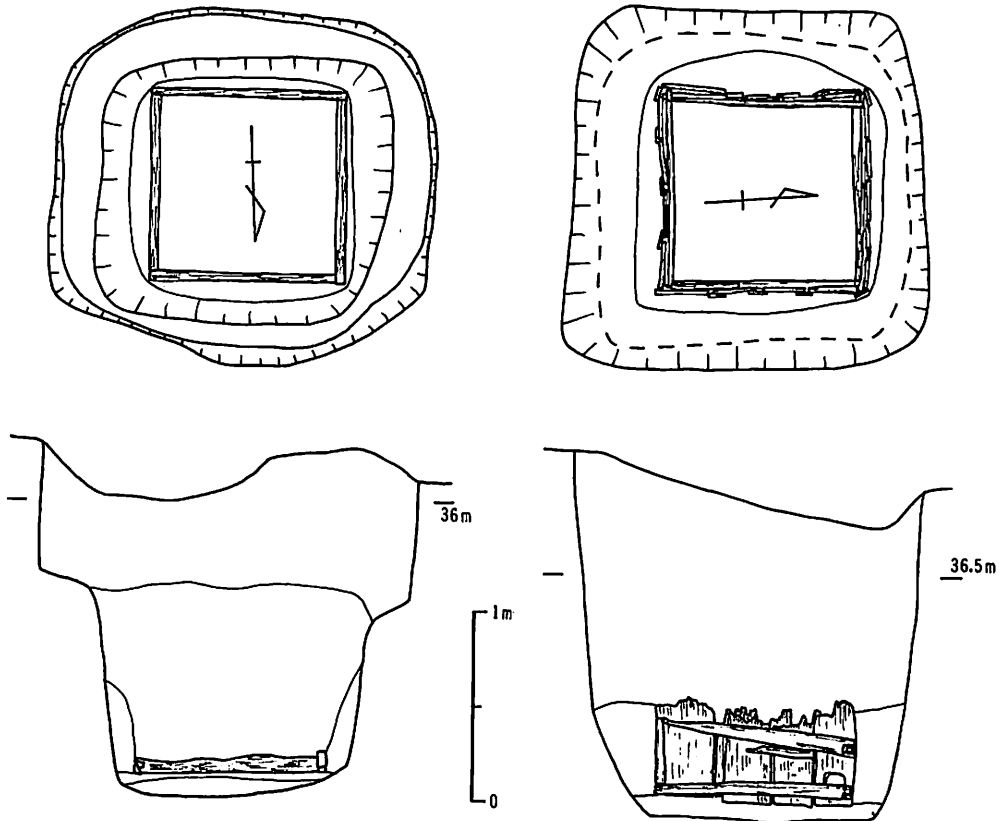
井戸1(第6図, 第8図右, 図版第24~27) 今回の調査で検出した平安時代に属する3件の井戸の内、最も保存状態が良好であった。最下段の横棧及び側板(縦板)が現状のままで発掘できた。一辺約180cm、深さ約180cmの隅丸方形を呈し、縦板と横棧からなる井筒をほぼ中央に設けている。長さ約1m、厚さ8cm×5cmの角材を方形に組んだ横棧が底部とそれより約35cm上部の2か所に横架させ、その四隅を4cm×3cm幅で長さ35cmの角柱を用いて固定させている。側板(縦板)は残存長約55cm、幅20~30cm、厚さ約2cmで、北面は5枚、東・西・南は各4枚から成り、その外側の各縦板の隙間を埋めるかのように厚さ2cm、幅10cmの添え板を北・西面に各3枚東・南に各4枚配していた。西北隅及び北面中央の側板の底部に約5cm四方の吸水を下一段の横棧直上に穿っていた(図版第27下)。底面は砂層で、地山の黄色砂礫層を被っていた。井戸内は当初四方からの巨大な圧力によって折り畳んだような形状で板材が検出された(図版第25上)。この板材から考えて最低4段以上、高さにして2m以上の井戸であったことが窺える。なお裏込めは砂利層であった。埋土からは両脇に巴文を配し中央に格子目を浮彫りさせた小形軒平瓦(第22図12, 図版第37-10)、剣頭文小形軒平瓦(第22図5, 図版第37-4)、緑釉陶器(近江系)、土師器片や銀箔片(図版第51-11)が出土した。また底面からは巴文軒丸瓦(第14図8, 図版第31-10)、中国製白磁片、土師質皿等が発掘された。これから平安時代末期に属するものと推定される。



第7図 I地区第4文化面瓦集積図

井戸2・井戸6(第9図1, 図版第23) 井戸2は井戸6によって大半は破壊され、上面及び西・北両壁を検出したにすぎない。上面は一辺約240cmの隅丸方形で、約30cmの段を設けて底面に続く。埋土中に木片が存したことから井戸2も井戸1同様の形態であったと推定される。出土遺物には巴文軒丸瓦(第14図7, 図版第31-9)や土師器片あるいは灰釉陶器片がある。12世紀中葉頃と考えらる。井戸6は、掘方外径1.5m, 内径70cmを測る石組み円形井戸である。30~40cmの長形状の自然石を面を内側に合せて丁寧に平積みしている。掘方内から美濃系の花瓶(第29図11, 図版第57-1)が1点出土した。江戸時代前半期に属するものであろう。

井戸3(図版第22下) 調査地北壁中央部で検出さ



第8図 方形横棧式井戸図(左: I地区井戸1 右: II地区井戸1)

れたが、全体の半部分である。直径1.5cmの掘方内に、内径1mの石組みを約1.2m積み上げ、底面には一辺80cmの方形板状木樋を構えている。壁面際のため危険性が增大したため略記するに止めたので底面の深さなどは不明である。室町時代に比定される。

井戸4(図版第22上) 調査南側の西壁際で検出された。井戸3同様に全体の半部分であり上部堆積土が陥没する可能性が高かったため、危険を避けて略測するに止めた。径は約1.6mを測り、底面中央には十六角形に縦板を幅狭く連続させていた。径は約1mで、底面に向って径が小さくなる。底面は不明であるが地山面より180cmは超える。埋土内より室町時代の土師器片や陶磁器片、瓦質土器が出土した。

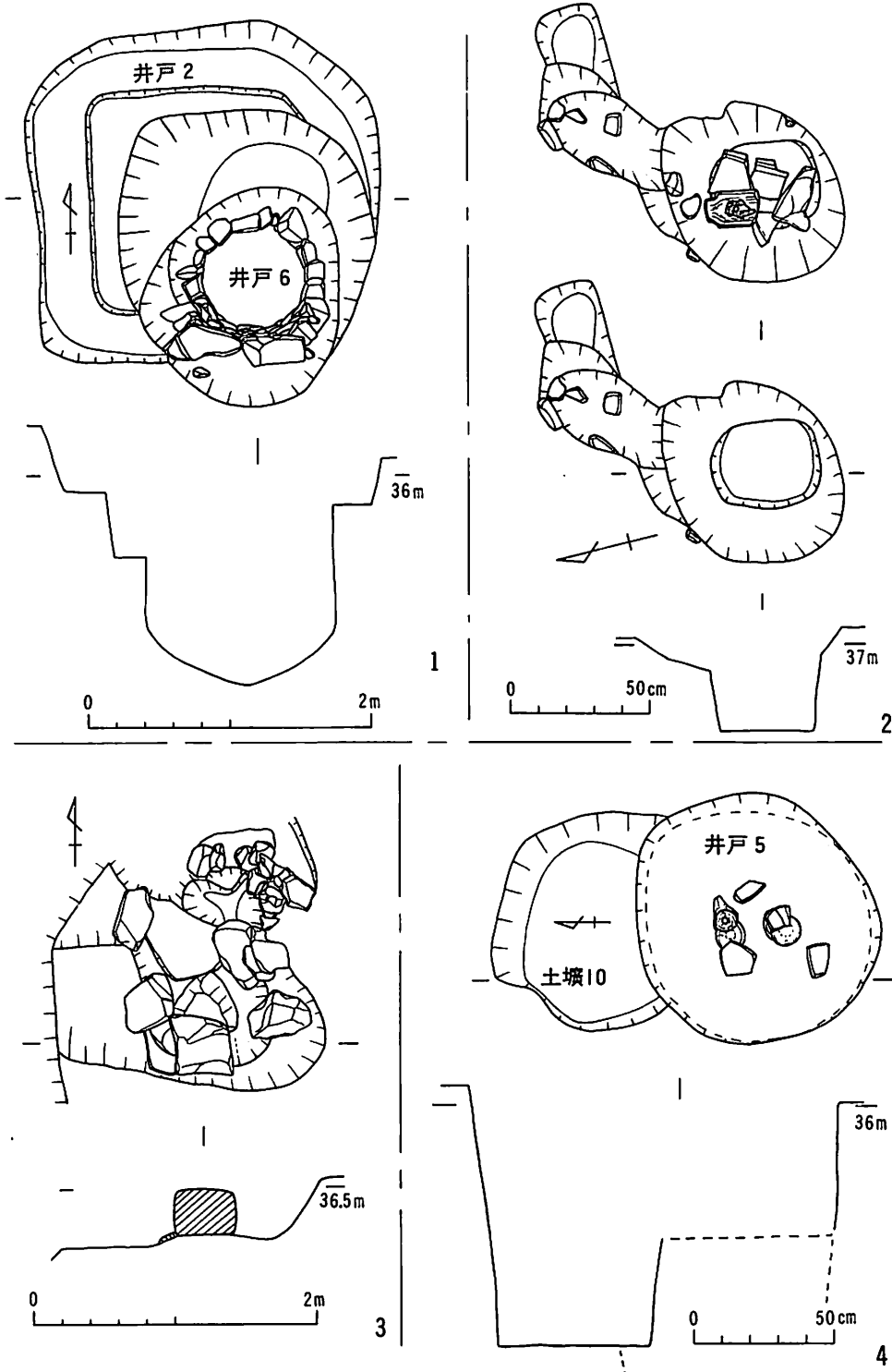
井戸5(第9図4, 図版第18左) 南壁近くのはぼ中央部で検出した。径90cmの比較的小形の井戸で、所謂素掘り円形井戸である。内側から黄瀬戸系皿(第29図15, 図版第54-1)1枚と土師質皿3枚が出土し、さらに竹筒が垂直に立って朽ち果てた状態で検出できた。これは井戸を埋める際に神事として靈魂を鎮るために用いられたが、本来は埋没させる際に生ずるメタンガス抜きの効用を齎らすものである。桃山時代に属するものであろう。

井戸7 円形の素掘り井戸で、径1.2mで深さは約2.8mを測る。埋土内からは青銅製の火鋤(図版第51-12)が出土した。II地区第1文化面の鍛冶場と何らかの関連が考慮される。

井戸8(図版第19上) 調査区東南隅で検出された径1.2mの円形素掘り井戸である。井戸周辺には土塙10を含めて黄色の漆喰が一面に貼り付けられていた。江戸時代末期～明治時代にかけてのものであろう。なおこの井戸は土塙10の東隣の石階段とは一連のものであり、1m大の大石を螺旋状に階段を作り井戸8で汲水し、土塙10が配水の役割を果たしたと思われる。

井戸9 掘方が約2.2mで、石組みの内径は1.5mを測り、裏込めは礫で充填されていた。ただ全体の掘方からすれば石組みそれ自体は西方に偏している。石組みの間隙は漆喰でかためられており、内側には銅板や鉄板などの廃材が遺棄されていた。近・現代に属する。

土塙ないし土塙状のものは10基を数えるがその内土塙1・4・5・6は中世墓であろう。いずれも調査地東壁に沿って検出されたため、全体の半部分しか様相を知り得ない。土塙1(図版第19下)は、一辺1.1mの方形で、深さ80cmの木棒が横転して出土した。無遺物である。土塙4(図版第21下)～同6(図版第21上)は、一つの土塙内に3基並列しているが、土塙4は50～80cmの横長の巨石を方形に組みその内側には瓦片が散乱し、土塙5は軒丸瓦や平瓦類が方形基壇を形作るように配されているし、また土塙6は底面を前2基より若干低くし東壁際に軒瓦を利用して台座を作り、その上に直径約20cmの木材を立てていたように、各々が独立している。しかし切合関係が認められず、底面には灰・炭・土師質皿・竹が散乱している状況から同一時期に構築されたものであろう。一応木塔婆の有した中世墓を考えられる。ただ五輪塔婆の中世墓も存したらしく、その残欠の風輪部が土塙6の西南隅から出土した(図版第59-18)。また土塙2・7・9は小形で円形を呈するが、無遺物で性格不明である。土塙10(図版第17下)は、径70cm、深さ93cmの円形素掘り土塙である。上面は漆喰が貼り付けられ、内側はさらに漆喰で上・下二段に区画されている。すなわち上段は熨斗瓦5枚を横方向に倒置させ、漆喰を挟んで下段には熨斗



第9図 各種遺構実測図

(1 : II地区井戸 2・6 2 : 鍛冶場跡 3 : II地区集石遺構 4 : II地区土壇 10・井戸 5)

瓦を6枚縦方向に立てていた。この熨斗瓦はI地区井戸2にそれと同一寸法で諸特徴も同様のものが出土している。同時期の所産と考えられ、江戸時代末期頃～明治時代に比定できよう。井戸8と一連のものである。

集石遺構(第9図3, 図版第20上) 大形の自然石が集中する。一辺約1m強の方形土壌上に配され、後世に落ち込んだような状況で、あるいは土壌4と同一形態であったかも知れない。

方形土壌 西壁中央部で検出された南北長約3mの長方形土壌で、焼土・炭・土師質土器・陶磁器類が多量に埋没していた。第2章第3節で記したように第3焼土層と同一時期で江戸時代初期のものである。

溝1 最大幅2.2mを測り、深さ1.5mである。溝内は砂礫層から成り、無遺物状態である。この溝と井戸3が切り合っていることから鎌倉～室町時代前半期に比定できよう。なおこの溝1は南西方向に走り、第3次調査でもその続きが確認されている(本報告書「第2部」参照)。

土壌3(図版第15下) 調査区の第1文化面の中央部で確認された。径1m、深さ30cmの円形掘り込みである。内側は底面に砂を8cm位敷きその上面を砂利層が被っていた。土壌上面には平瓦・丸瓦の各瓦片が散乱し、北西隅には大形石製埧(図版第60-7)が在した。この土壌の南側1m付近は焼砂利層が拡っていた。

以上のほかに、II地区では五輪塔の風輪部(図版第59-17)を利用した一段のみの石垣(図版第17上)や、調査区北側で検出された江戸期の暗渠(図版第18右)、2m×3mの長方形の石組み遺構などが確認された。

第4章 発見遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、発掘面積に比して密度が高く、整理箱で約150箱にも達する。それらは瓦類、土器類、陶磁器類、貨幣などの金属製品、土製品、石製品など各種にわたり、その他に種子などの自然遺物もみられる。そしてこれら遺物のほとんどは近世に属するものであり、瓦類が大部分を占める。ここでは個別解説を極力回避し、各類に従って通観し、さらに重要遺構の一括遺物をも記述することにする。

第1節 II地区井戸7出土の遺物

井戸7から出土した遺物は、国産陶器と土師器に2分類できる。以下類別に若干の説明を加える。

国産陶器は、形態及び用途から坩形(第10図1・2)と向付(第10図3)に、生産地では瀬戸・美濃系(第10図1)と唐津系(第10図2・3)に分かれる。1は鉄釉が高台以外すべて施釉され、ケズり出し高台は内・外面とも素肌のままで、高台をケズり出すためのヘラケズリ痕が顕著に認められる。体部は小さく内湾しつつ立ち上り、口縁部で垂直になり口縁端部を外反させている。2は濃緑色の釉を高台内外面以外全体に施す。底部から直線的に斜立し、口縁部を丸く仕上げる。高台はケズり出しであるが、ヘラの挟りが強いいため高台端部は幅狭い。三角形の断面高台である。3は2同様の色調で、施釉も同じである。高台はケズり出しによるが、高台付近を強く挟ったため、底部内面中央が盛り上っている。口縁部は短かく45度の角度で立ち上り、丸く端部を収める。内側底面は若干周辺部に向って高くなる。

土師器類には土師質皿と蓋とがある。土師質皿は全体的に器壁が厚く、特に口縁部は肥大化する(第10図4・6・7)。その逆に口縁端部に向って薄くなる例(第10図5)もある。いずれも口縁部外面と内面全体をヨコナデ仕上げするが、前者は底面との境が一段と強く小さく凹む。後者は体部で一度屈曲して口縁端部で小さく摘みあげている。4・5の体部外面には指頭圧痕が顕著に認められる。この両者が新旧の過渡的様相を示していると言えよう。蓋(第10図8)は、恐らくは古式の塩壺類(図版第59-1~10)に伴うものと推定される。口縁部の内外面をヨコナデ仕上げし、天井部は若干凹む。また内面は断面山形で壺の口縁部と合致するかのよう高めている。

これらの遺物の年代については明確にし難いが、瀬戸・美濃系坩や土師質蓋から観て、17世紀前半頃に比定しては如何であろうか。

第2節 I地区焼土層及びII地区方形土壇出土の遺物

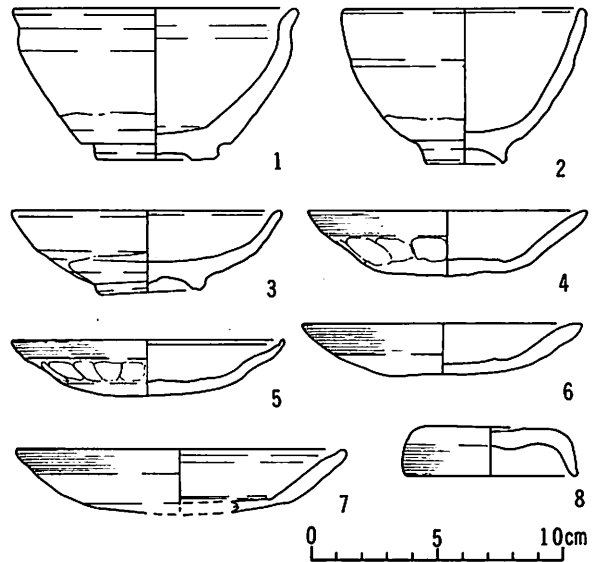
第2・3章で述べたように、この焼土層と方形土壇は同時期に堆積し、埋没したものであるから、一括遺物として説明することにする。

出土遺物(第11図)は、土師器類と国産陶器類に大別され、器種では鍋・皿・向付・堦・蓋・塩壺に細分される。

土師器には焙烙鍋(1~3, 図版第50-1・2)・皿(9・10)・蓋(14)・塩壺等がある。焙烙鍋は大きさが近似し、手法も大差ない。底面から湾曲しながら立上り、口縁部では45度の角度で外反し口縁端部を摘み上げて内傾させている。口縁部の内・外面は丁寧なヨコナデ調整痕がみられ、胴部内面には顕著な刷目痕が残り、同外面の刷目痕はナデ消されている。内面は黄褐色、外面は黒色を呈し、焼成は硬質で、胎土は稠密である。なお口縁部内面に「×」のカマ印が存する例もある(1, 図版第50-1)。土師質皿は、器壁が厚く、口縁部外面と内面全体をヨコナデする。口縁部は丸くおさめる。底部との境に沿って一段強く、円形に浅く凹む。褐色系類に属する。塩壺(図版59-4)は、手づくね技法で作られており、外面は丁寧にナデ調整を行うが、内面は口縁部のみヨコナデし胴部は無調整である。口縁部外面もヨコナデがみられるが、胴部から摘み上げて口縁部を造り出す際に生ずる指頭圧痕が残る。黄土色で焼成硬く、胎土は良質である。最古型式に属するものであろう。蓋は袍衣壺のそれに酷似する。天井部は平坦で、口縁部は外反し、端部は丸味を帯びる。内面全体と口縁部外面は丁寧にナデ調整するが、天井外面は無調整で砂っぽい肌ざわりである。黄土色を呈し、焼成は硬く、胎土は若干粗い。

陶器は向付・堦・皿に大別される。4(図版第57-3)は志野系の向付で乳白色を呈し、上・下2段に文様が描かれる。表面には二次的な高温による釉薬のタダレがみられる。内面はロクロ痕が顕著で、底部外面には糸切り痕が残る。5(図版第57-2)は志野系の皿で、器壁は厚く、口縁部は小さく外反する。底部の高台は低く断面三角状を呈す。底部内側には三叉トチの跡がある。6(図版第54-9)は黄瀬戸系の向付で、黄緑色を呈し、底部外面は凹む。体部は垂直に立上る。器壁は全体的に薄い。7は瀬戸・美濃系の天目茶堦である。ケズリ出し高台で、口縁部は2段に内・外反し、端部を丸くする。赤茶色の釉調で、底部外面のみ無釉である。8と10は唐津系の堦である。8は底部から口縁部へ向かって器壁が薄くなり、高台は小さく不整形にケズリ出している。釉は内面全体と外面口縁部付近までで、濃緑色の釉を高台部以外全体に施す。底部から45度に立上りさらに口縁部を大きく外反させる。高台は断面逆台形にケズリ出す。共に硬質焼成で、胎土も稠密である。11は黄瀬戸系の皿で、内面は幅の狭い丸ノミ彫りで菊花を表す。

ケズリ出し高台で、口縁部は2段に内・外反し、端部を丸くする。赤茶色の釉調で、底部外面のみ無釉である。8と10は唐津系の堦である。8は底部から口縁部へ向かって器壁が薄くなり、高台は小さく不整形にケズリ出している。釉は内面全体と外面口縁部付近までで、濃緑色の釉を高台部以外全体に施す。底部から45度に立上りさらに口縁部を大きく外反させる。高台は断面逆台形にケズリ出す。共に硬質焼成で、胎土も稠密である。11は黄瀬戸系の皿で、内面は幅の狭い丸ノミ彫りで菊花を表す。



第10図 II地区井戸7出土遺物実測図

器壁が厚い割には高台を小さく断面三角状にケズリ出し、トチの痕が円形状に残る。13は中形の皿であるが産地同定には至らなかった。内面底部は一段高く平坦で、口縁部は45度に低く立上る。高台はケズリ出しである。この他に図版第56-1の天目茶碗がある。これは、釉調が青黒色を呈し、底部以外に全て施す。底部はケズリ出しで高台をつくるが、ナデ調整はない。極めて硬質で、胎土はやや粗い。色調は地肌部では茶色である。あるいは中国製かも知れない。

これらの遺物の年代に関しては、美濃・瀬戸系陶器が「美濃編年」¹³⁾の大窯V期を中心とし、12の唐津系は同IV期と併行する¹⁴⁾。ただし土師質皿はII地区井戸7のそれと同一技法によっているものであるから、16世紀後半に中心を置きつつもその下限は17世紀前半に求められよう。

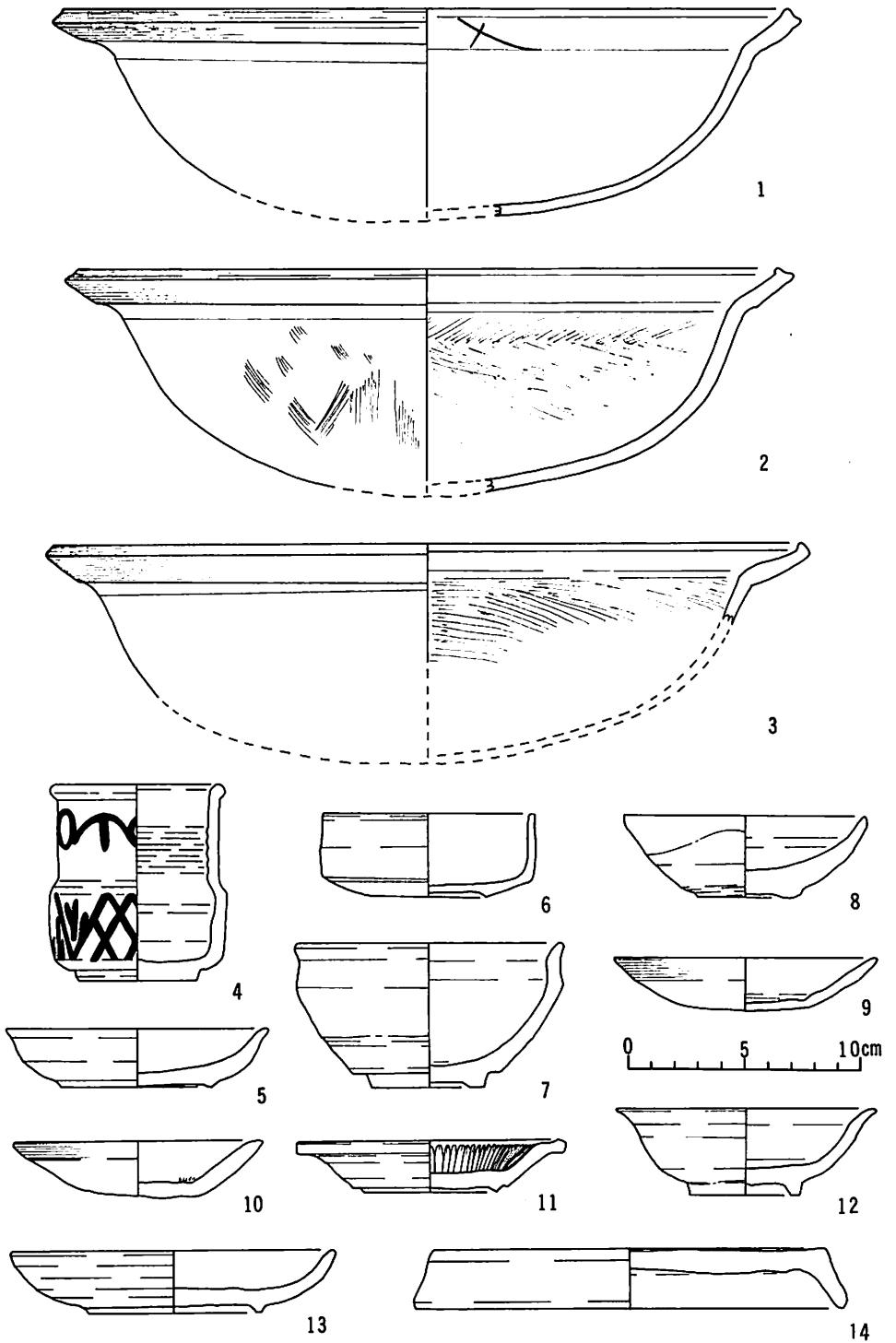
第3節 I地区井戸1出土の遺物

井戸内の埋土中から出土した遺物は、瓦・須恵器・灰釉陶器・中国製陶磁器・石製品・土師器などである(第12・13図, 図版第45~47)。

瓦では軒平瓦が2点出土した(第12図1・2, 図版第45-1・2)。1は、逆C字形の中心飾りから左右対称形に3反転する唐草文を配する均整唐草文軒平瓦である。顎から平瓦部凸面には縦方向の縄目叩き痕があり屈曲部ではその上面を横方向に縄目叩きを施す。全体に火気に焙られたためか、表面は壊れやすく、赤褐色を呈す。典型的な丹波の亀岡市王子瓦窯産¹⁵⁾である。平安時代中期後葉と推定される。2は全体に媒けたように濃青灰色を呈する偏行唐草文軒平瓦である。右脇区から唐草文が上・下に6反転する。外縁は無い。上外区から平瓦部凹面に亘って大きく欠損している。幡枝窯系統に属する。平安時代後期前半頃の瓦である。

須恵器は甕の口縁部片(図版第46-9)と底部片2点(第12図3, 図版第46-12・13)、口縁部片と底部片とから成るもの(図版第45-4)が出土した。底部片の2点は表面を粗い叩きが斜に施され底部付近はヨコナデされる。内面は左上りにナデてカキ上げ底部内面は粗雑にナデている。これは、底部外周と胴部の外周とを一致させて接合させ、内面に粘土を厚く補填して形作っている。この技法は香川県綾南町十瓶山麓出土の須恵器¹⁶⁾に共通する。図版第45-5は器壁の極めて薄い甕である。青灰色を呈し、胴部にはナデ消された格子目叩き痕が数か所残っている。底部内面は円形にナデ調整される。口縁部は丁寧な仕上げである。焼成も堅緻で金属音を発するかのようなようである。胎部は稠密で、器壁内部は茶褐色を呈す。あるいは大阪陶邑系に属するかも知れない。

灰釉陶器が出土量では最も多い(第13図1~5, 図版第46-1~10, 同47)。壺・碗・鉢に器種分類でき、その多くは愛知県猿投窯系に属する。特に第13図3の三筋壺は、表面は灰釉独特の緑色を呈し底部に向って薄色化する。器壁は口頸部は薄いが胴部は厚くなる。内面はヨコ方向のナデが見られる。全体に形が整った丁寧な作りである。肩部には2条の沈線を廻す。通常三筋壺はこの沈線を肩部・胴部中央・胴部下半の3ヵ所に施すことから、若干特異と言わざるを得ない。東山H-105号窯系に属する。碗はすべて外反する貼り付け高台で、器壁の厚さは各々一定していない。唯し底部内面は全て磨かれており、共通利用した事が窺われる。鉢(図版第47



第11図 I地区焼土層及びII地区方形土塼出土遺物実測図
(1-9: I地区焼土層 10-14: II地区方形土塼)

-1・2)の口縁端部は外反する。これら一群の灰釉陶器の他に灰釉陶器系として第12図5(図版第46-10)がある。上記の一群とは胎土が異なり粗質である。小さく外反する高台は貼り付けである。愛知県渥美窯系の可能性がある。さらに茶褐色を呈した短頸壺(第12図4, 図版第45-3)もあるが産地同定はしがたい。

中国製陶磁器は、全て小破片で、全体の形状は判然とはしないが、盤・碗・水瓶の3種が考えられる。盤(図版第45-8)は、底部の破片で内面には黄釉が施こされるが外面はナデ調整のみである。内面には鉄絵が描かれているが文様は不明である。平安宮・京域内で類例を余り見ない。碗には龍泉窯系青磁碗(図版第45-9)や玉縁口縁の灰白磁碗(第13図6, 図版第45-7・11)があるが輸入磁器としてのこの種の形式では古式に属する。特異なものとして灰白磁水瓶がある(図版第45-10)。把手部の破片であり、その形状は知りたい。恐らく大津市比叡山採集の水瓶¹⁸⁾と近似するものと推定される。

石製品は1点出土した(第12図6, 図版第45-6)。硬砂岩製で、上面の厚さ0.8cm, 内高約3cmをはかり、底面に向って厚さを増す。両側面には鳳凰が大きく嘴を開けて右下方向をめがけて飛雄する姿と1輪の立花が線描写されて、外縁上面には草枝文が陰刻されている。方形の小型水盤と推定される。文様から推して平安時代後期と考えられる¹⁹⁾。

土師器は皿類のみである(第12図7, 図版第46-14~19)。大きさは各々不規則ではあるが、内面はヨコナデがみられ、外面は口縁部のみヨコナデする。底面は押捺調整され指頭圧痕がみられる。すべて褐色系である。

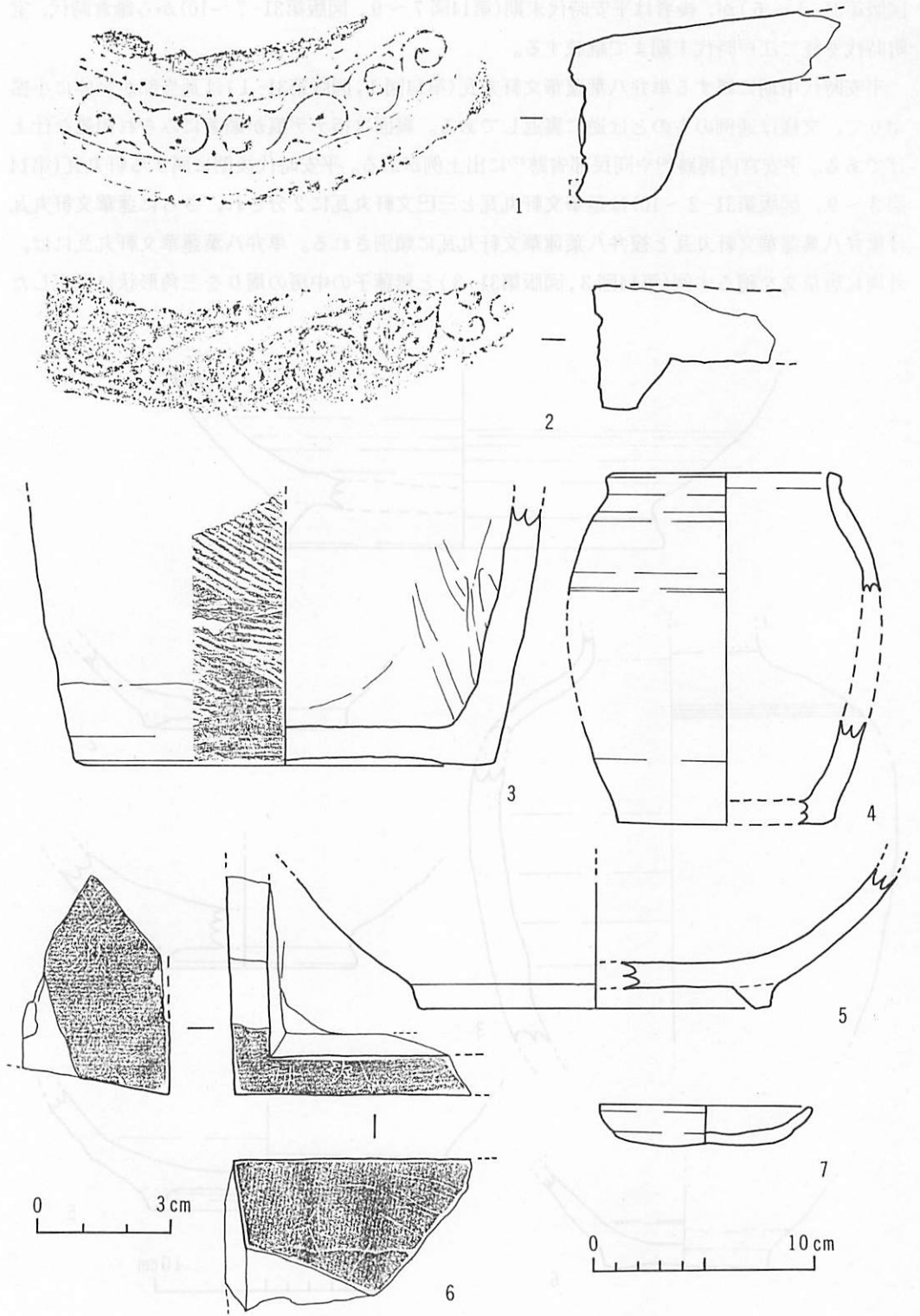
以上の他に黒色土器片(図版第46-11)や白色陶器の高坏の脚部片(図版第46-20)、内面に暗文を有した三脚(あるいは四脚)付大形土師質鉢などがある。

これらの遺物の年代に関しては、出土遺物の中でも丹波系軒平瓦と三筋壺及び土師質皿がその指標となる。丹波系瓦は前述したとおり法成寺の創建(寛仁四年)を契機として造瓦されたものである²⁰⁾が、本例はその中でも新しい型式で後期I期²¹⁾とも推定され、上限を寛仁四年(1020)とし、下限を承保二年(1075)とできる。三筋壺は東山H-105号窯で12世紀前半に位置付けされている²²⁾。土師質皿の内、完形品(第12図7, 図版第46-14)は、六角堂跡S D339の中層出土例²³⁾や平安京左京五条三坊十五町の井戸Cの出土例²⁴⁾から11世紀後半~12世紀頃と想定される。とすれば上限年代を差しおいても下限年代はおおよそ12世紀初頭~前半と推定される。この年代は黄釉鉄絵盤や石製水盤、灰釉陶器の鉢、讃岐系須恵器甕²⁵⁾などとも矛盾しない。

第4節 瓦類

発掘調査で検出しえた瓦類の量は膨大であるが、用途に応じて分類すれば、軒丸瓦・軒平瓦・棧瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・獅子口・板瓦などとなり、時代的には平安時代中期から江戸時代末期までに至るものである。以下、各類ごとに略述してみよう。

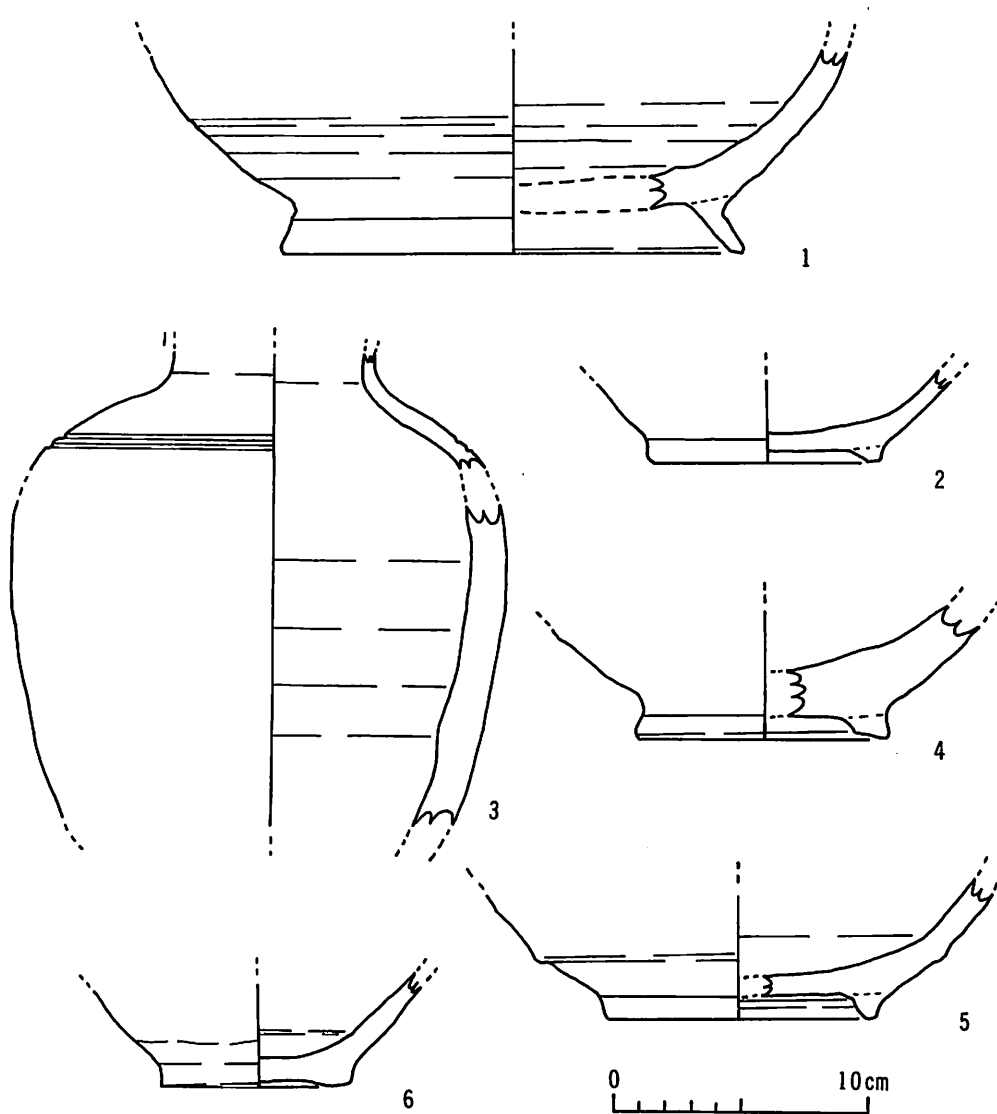
軒丸瓦(第14~21図, 図版第31~36) 軒丸瓦は、瓦当文様から、蓮華文軒丸瓦と三巴文軒丸瓦に2大別される。さらに時代的には、前者は全て平安時代中期~後期に属する(第14図1~6,



第12図 I地区井戸1出土遺物実測図(1)

図版第31-1～6)が、後者は平安時代末期(第14図7～9, 図版第31-7～10)から鎌倉時代, 室町時代を経て江戸時代末期まで継続する。

平安時代中期に属する単弁八葉蓮華文軒丸瓦(第14図1, 図版第31-1)は瓦当部が全体に小振りで、文様は通例のものとは逆に裏返しである。裏面は指ナデ痕が顕著にみられ粗雑な仕上げである。平安宮内裏跡²⁶⁾や同民部省跡²⁷⁾に出土例がある。平安時代後期に属する軒丸瓦(第14図3～9, 図版第31-2～10)は蓮華文軒丸瓦と三巴文軒丸瓦に2分され、さらに蓮華文軒丸瓦は単弁八葉蓮華文軒丸瓦と複弁八葉蓮華文軒丸瓦に類別される。単弁八葉蓮華文軒丸瓦には、外周に唐草文を廻らす例(第14図3, 図版第31-3)と無蓮子の中房の周りを三角形に退化した



第13図 I地区井戸1出土遺物実測図(2)

蓮華文を廻らす例(第14図6, 図版第31-2)がある。前者の類例として平安宮朝堂院跡²⁸⁾, 同修理職跡²⁹⁾がある。複弁八葉蓮華文軒丸瓦(第14図4, 図版第31-6)は, 中房内に「卍」を陽刻した小振りの軒丸瓦で, 平安京三条西殿跡³⁰⁾や太秦広隆寺³¹⁾から類品が出土している。三巴文軒丸瓦には, 巴文が扁平な例(第14図7・9, 図版第31-7・9)と豊満な例(第14図8, 図版第31-8・10)があり, 前者の完形品(第14図7, 図版第31-9)の場合は巴文の尾尻が長く三巴文に連続して一重圏線状と化している。このような例は京都市醍醐栢杜遺跡³²⁾や六波羅蜜寺³³⁾からも出土しており, 醍醐栢森遺跡から推して1150年頃に比定されている。一方後者は瓦当表面に砂粒が認められる。これは範おこしの際に砂を用いる鎌倉時代以降の技法と共通する。しかし瓦当自体は平安時代後期の技法を踏襲しており, 時代的には転換期を示す好例と言える。その他小破片として, 単弁蓮華文軒丸瓦(第14図5, 図版第31-5)や三巴文軒丸瓦(第14図9, 図版第31-7)があるが両者は造瓦技法などから観て播磨産瓦と推定される。

鎌倉時代以降に入る三巴文軒丸瓦に統一される。挿図は時代順に掲載したが一瞥しても明らかのように, 時代が下るにつれ, 外縁幅が徐々に拡がり, 珠文帯の珠文が大形化すると共に珠文間も開きそれに反比例して珠文数が減少していく。また巴文の尾尻が細長いものから太く短かいものへと変化するようであり, 頭部がより大きく視覚される。瓦当裏面は円形にナデ調整されるが近世前半期では下半部の外周に沿ってさらに強いナデ調整が約1cm幅で施される。瓦当の厚さは総じて大差はないが丸瓦との接合部分ではより厚くなる傾向がある。

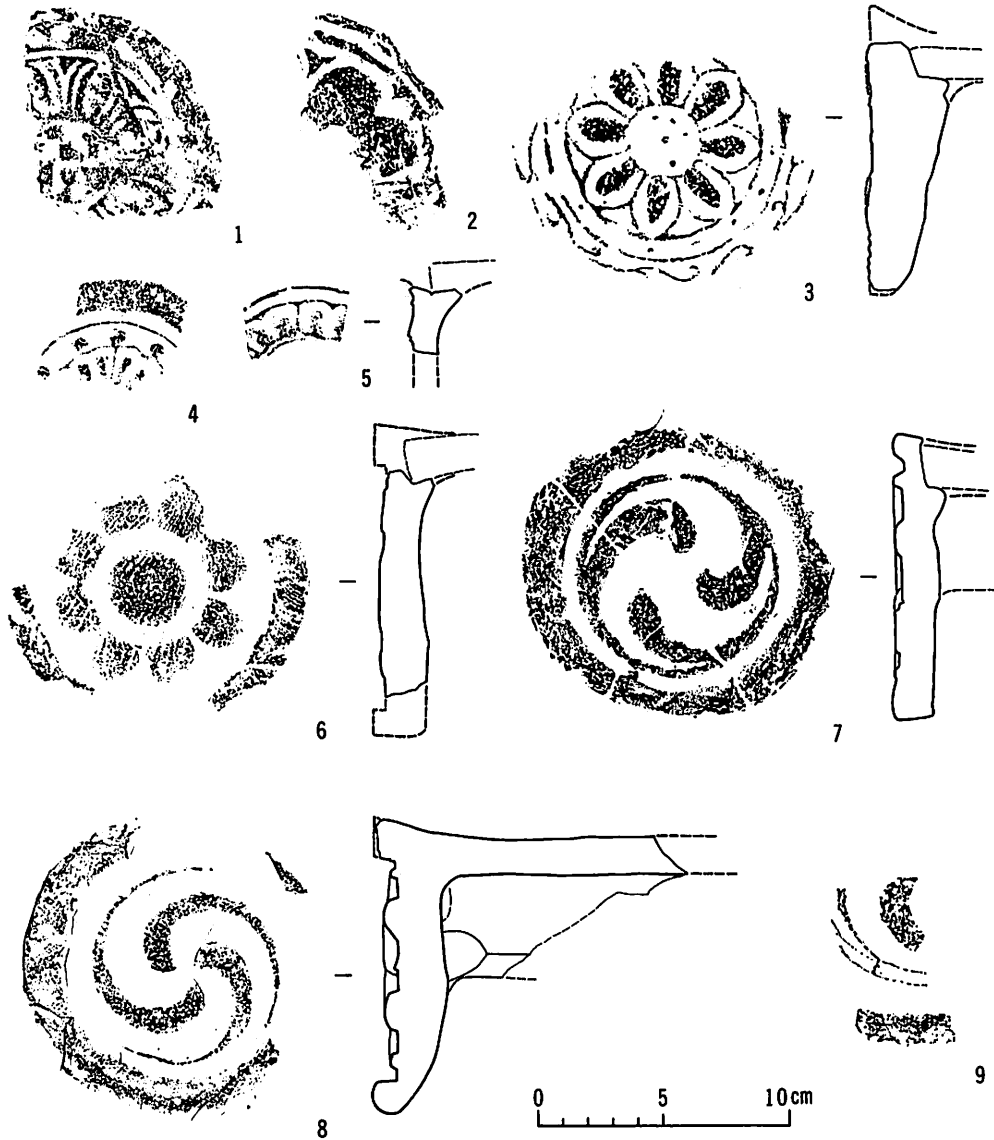
これは瓦当部と丸瓦を接合させる場合, 丸瓦の接合位置が徐々に低くなり, その逆に補填される粘土を厚くして接合度を強めたものと判断される。このような例は六角堂跡でもすでに指摘されている³⁴⁾。丸瓦は上面は丁寧な縦方向のナデ調整が施されるが, そのナデ幅が拡がっていく。裏面には古式のものには布目痕が認められるが, 徐々に抹消され江戸時代になると姿を消してしまう。厚さは増す傾向にある。個別的な諸特徴としては, 三巴文の大半が左巻きであるのに対して1例のみ右巻きが存する(第16図3, 図版第32-4)点や, 圏縁に菱形文を有する例(第11図5・6, 第16図1, 図版第32-1・2, 同33-6), 三角文をもつ例(第16図4, 第17図1~4, 図版第32-5~8), 丸瓦内面に水返し用粘土帯を造出した例(第16図1, 図版第32-2), さらに赤瓦(第18図9, 図版第34-6)が近世初頭段階で出現する, などが例挙できる。そうして江戸時代末期には, 表面が極めて堅緻で, 瓦当の仕上げがシャープになり(第21図3~6, 図版第36-6~9), 棧瓦(第21図4, 図版第36-7)も存している。

軒平瓦(第22~26, 図版第37~39) 軒平瓦は, 瓦当文様から, 唐草文軒平瓦と剣頭文軒平瓦に大別され, 格子目文軒平瓦が1点特殊に存する。前者は平安時代後期から江戸時代末期まで連続し, 全て左右対称形の均整唐草文を配す。後者は平安時代後期に限定される。

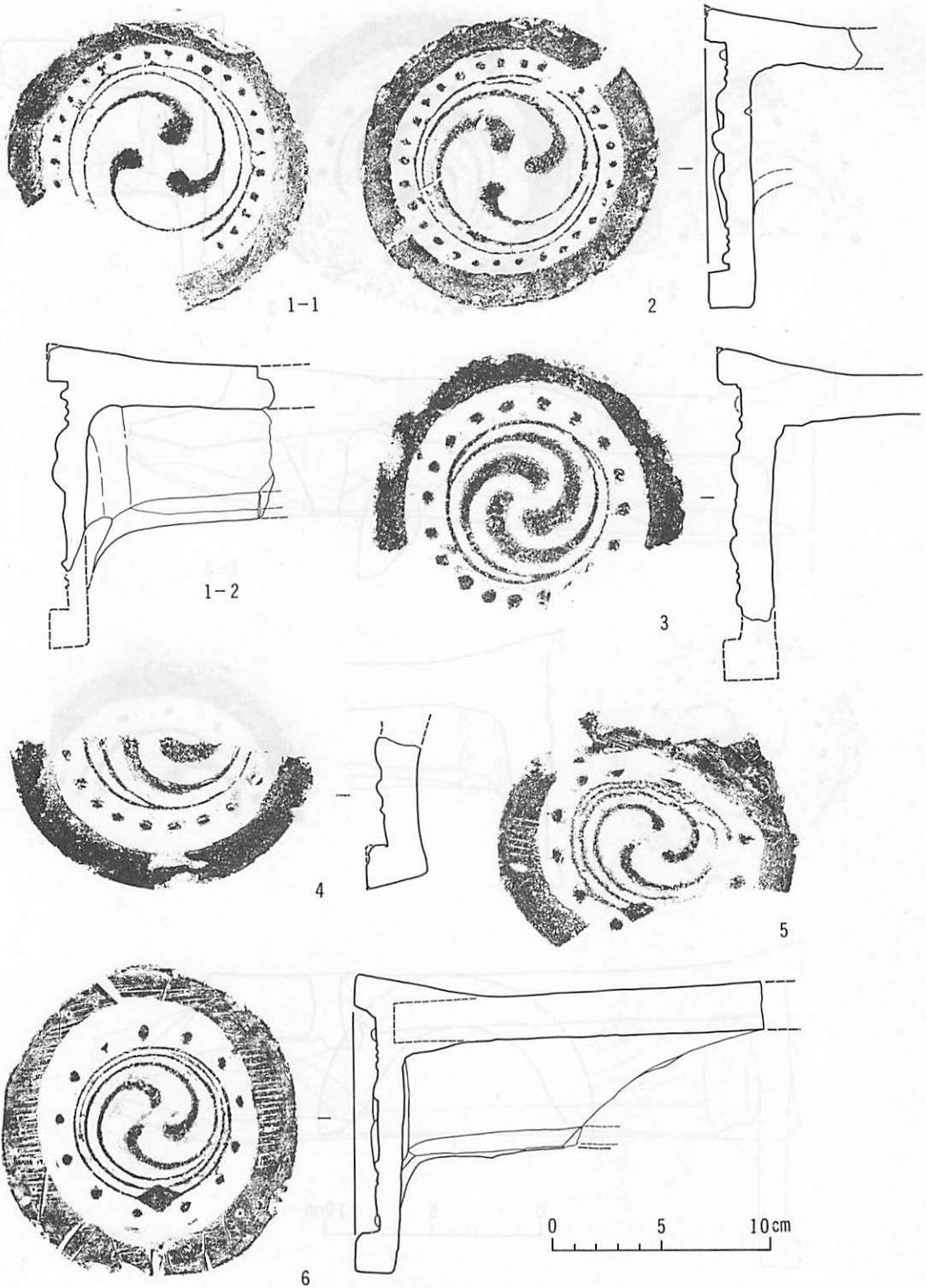
平安時代の軒平瓦(第22図1~12, 図版第37-1~10)には主として播磨産の均整唐草文軒平瓦(第22図1, 図版第37-1)と幡枝系の剣頭文軒平瓦があり, 剣頭文軒平瓦は瓦当幅をもって2分される。また小破片で文様は判然としないが唐草文をもつもの(第22図2, 図版第37-2)や小形三巴文を右脇に配するもの(第18図10)があり, さらに特殊文様瓦として, 左右両脇に左回りの

三巴を各1個を配してその中間部を格子目文で飾る例(第22図12, 図版第37-10)があるが, 平安京域内では類例を知らない。ただし京都市北区上賀茂神社から同文瓦が先年採集されている(第22図13, 図版第37-11)³⁵⁾。総じて, 平安時代瓦は末期に属するものと推定される。

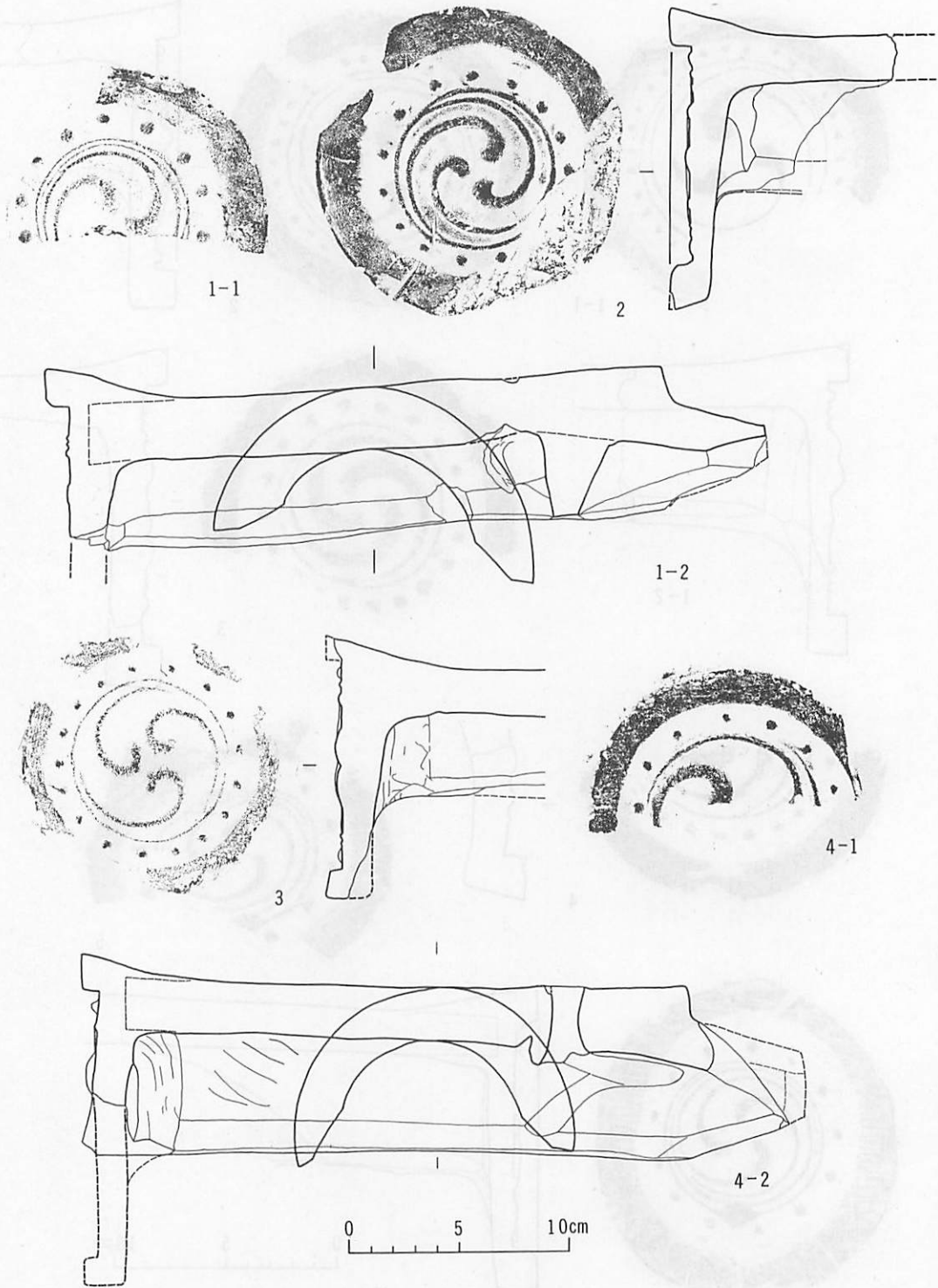
鎌倉時代以後江戸時代末期までは全て均整唐草文軒平瓦に統一されている。挿図(第23~26図)は一応検出遺物等の検討を通じて編年順に並べたものである。鎌倉時代では唐草文が華麗に3~4反転し中心飾りもC字形で囲まれ, 平安時代の延長線上に存する(第23図1~3, 図版第37-12・14・15)。室町時代になると, 唐草文の退化が急速に進み単純化する。中心飾りも呼応す



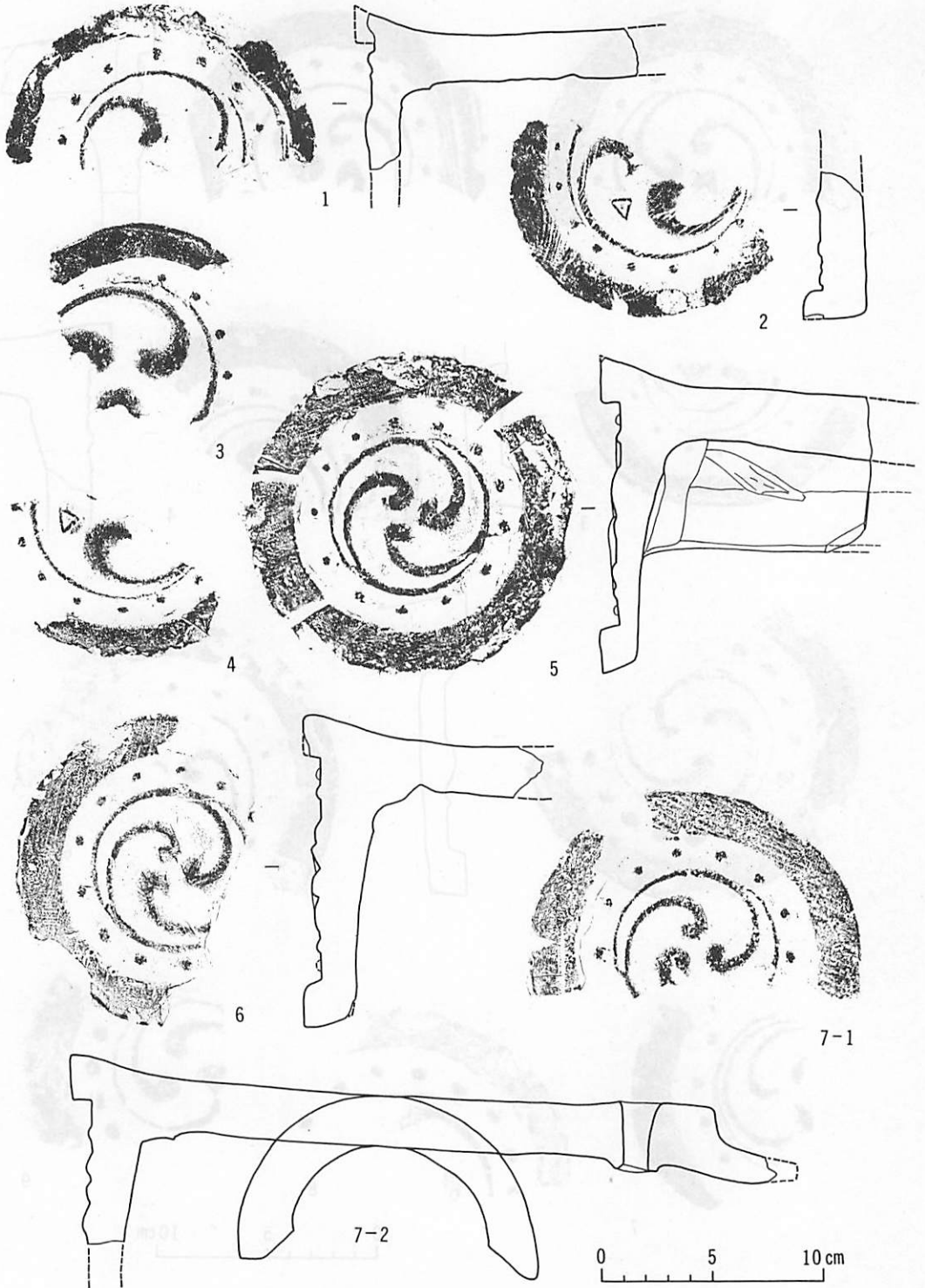
第14図 軒丸瓦拓影図(1)



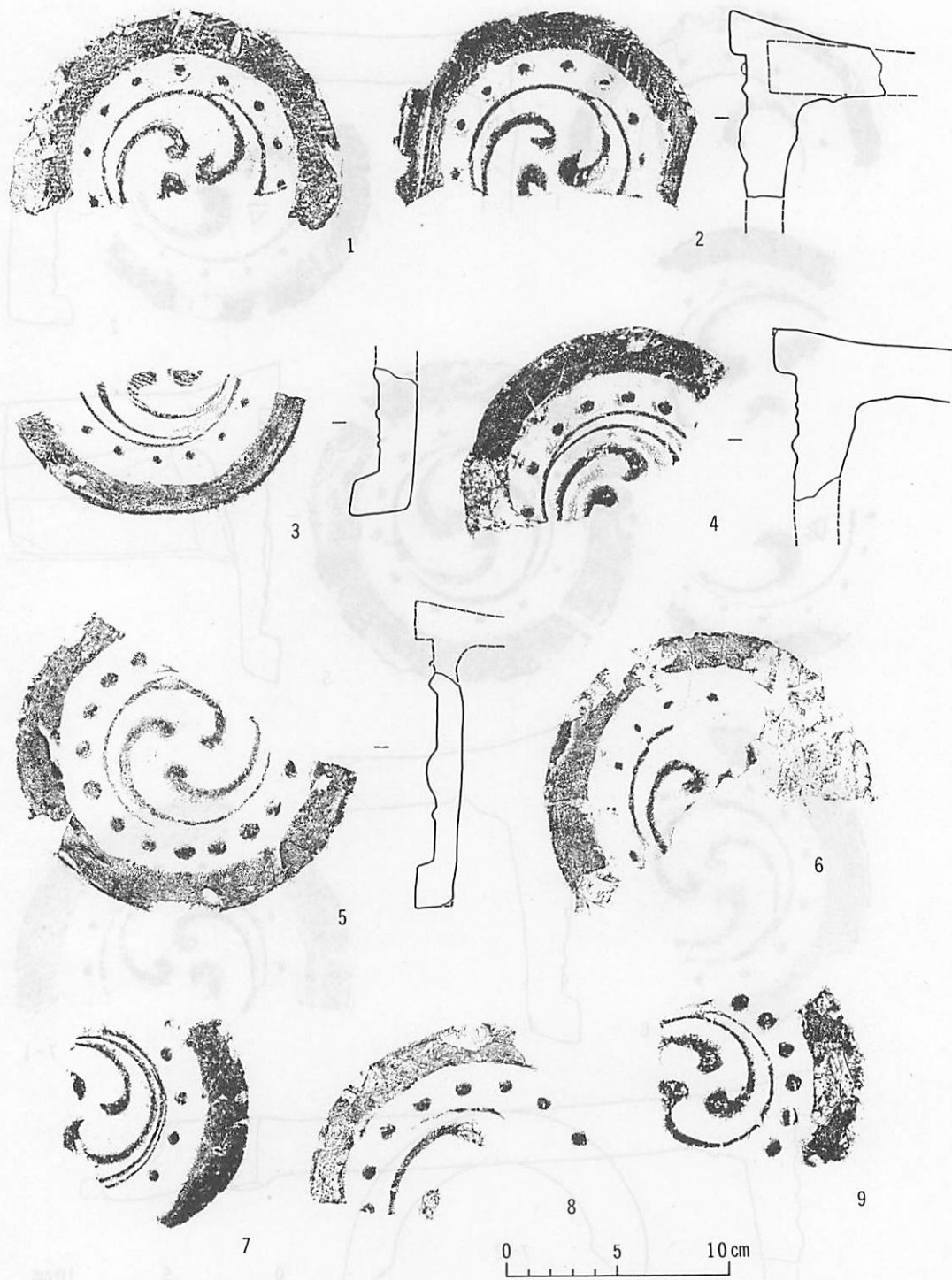
第15图 軒丸瓦拓影图(2)



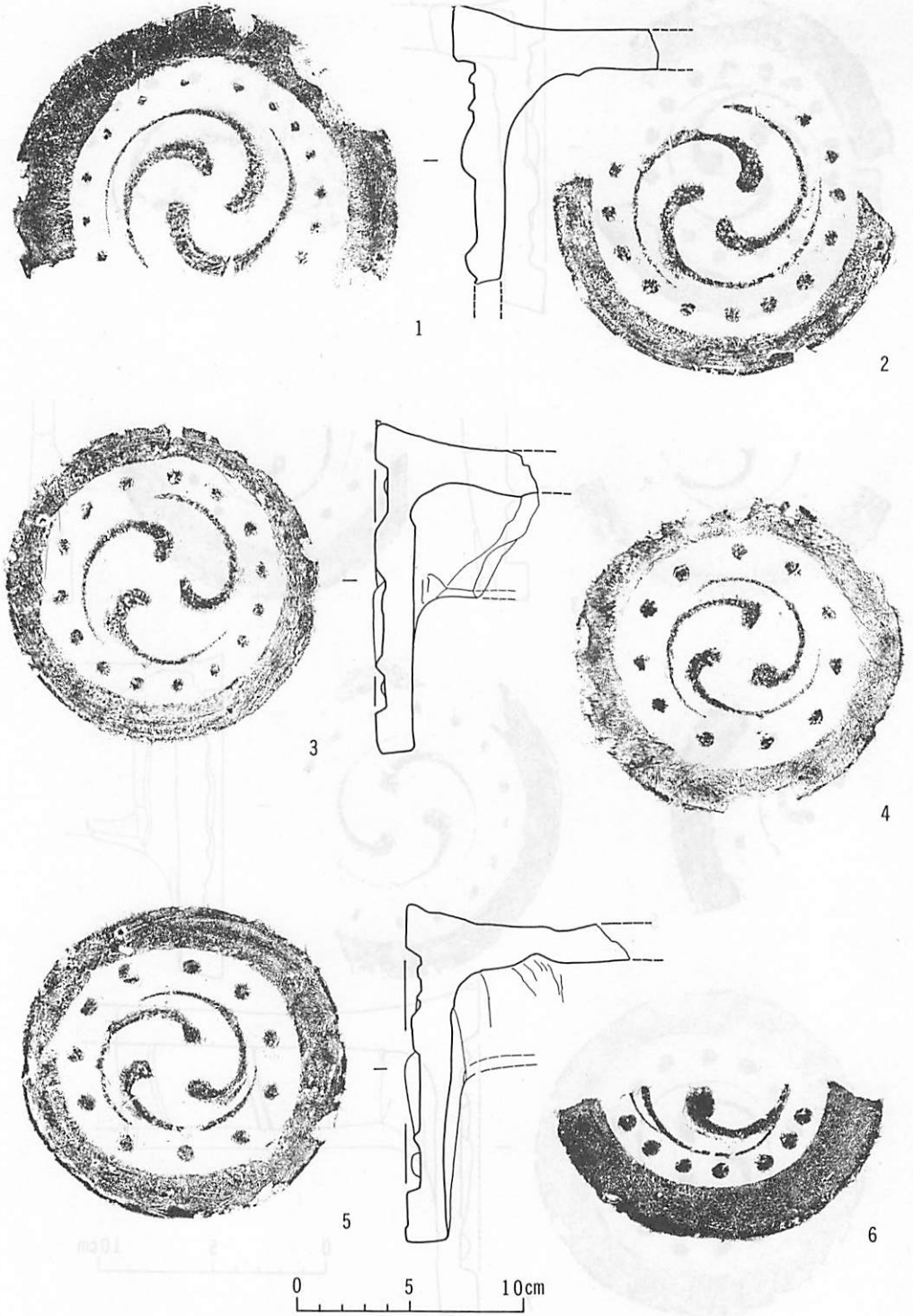
第16図 軒丸瓦拓影図(3)



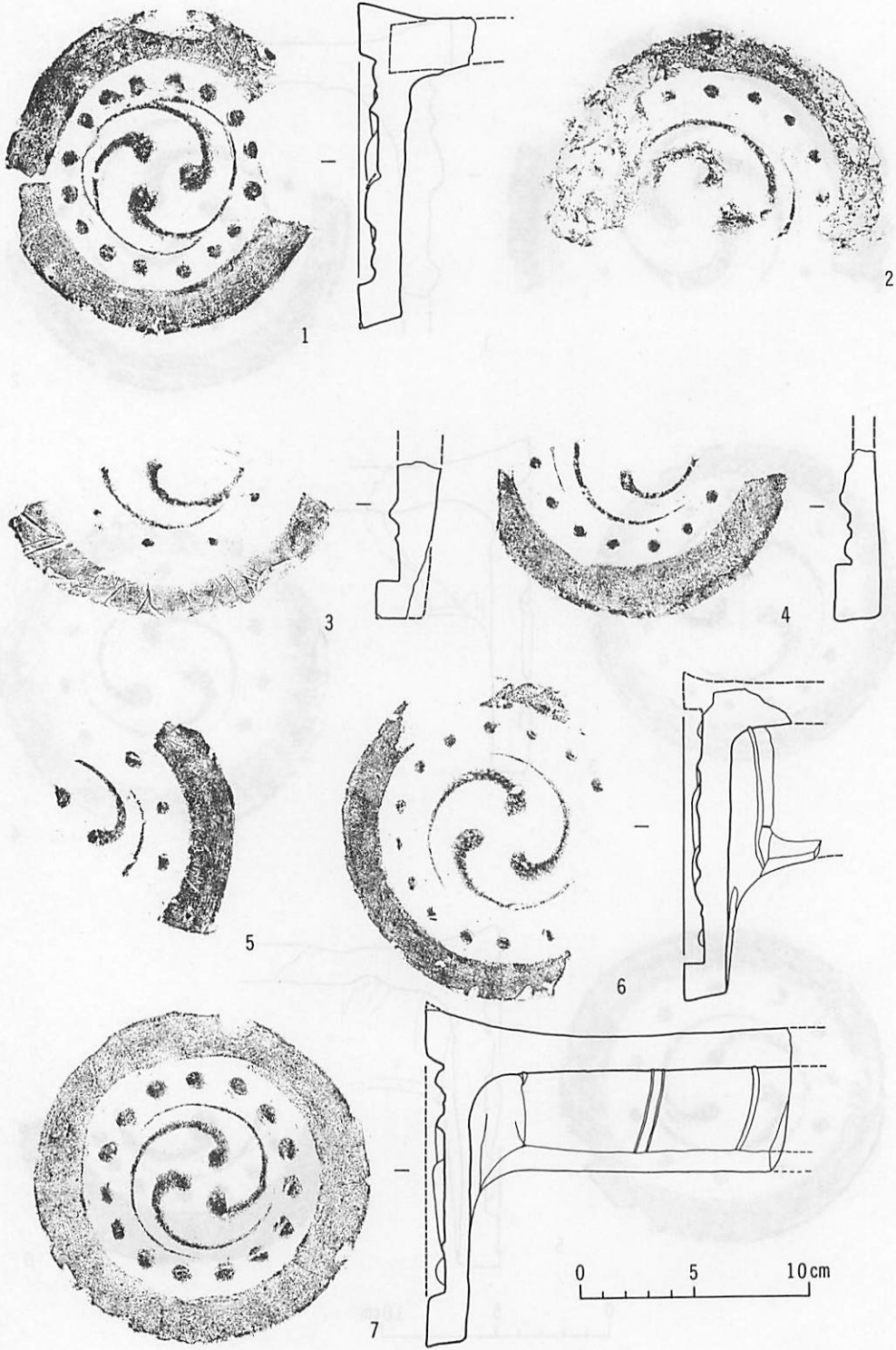
第17図 軒丸瓦拓影図(4)



第18図 軒丸瓦拓影図(5)



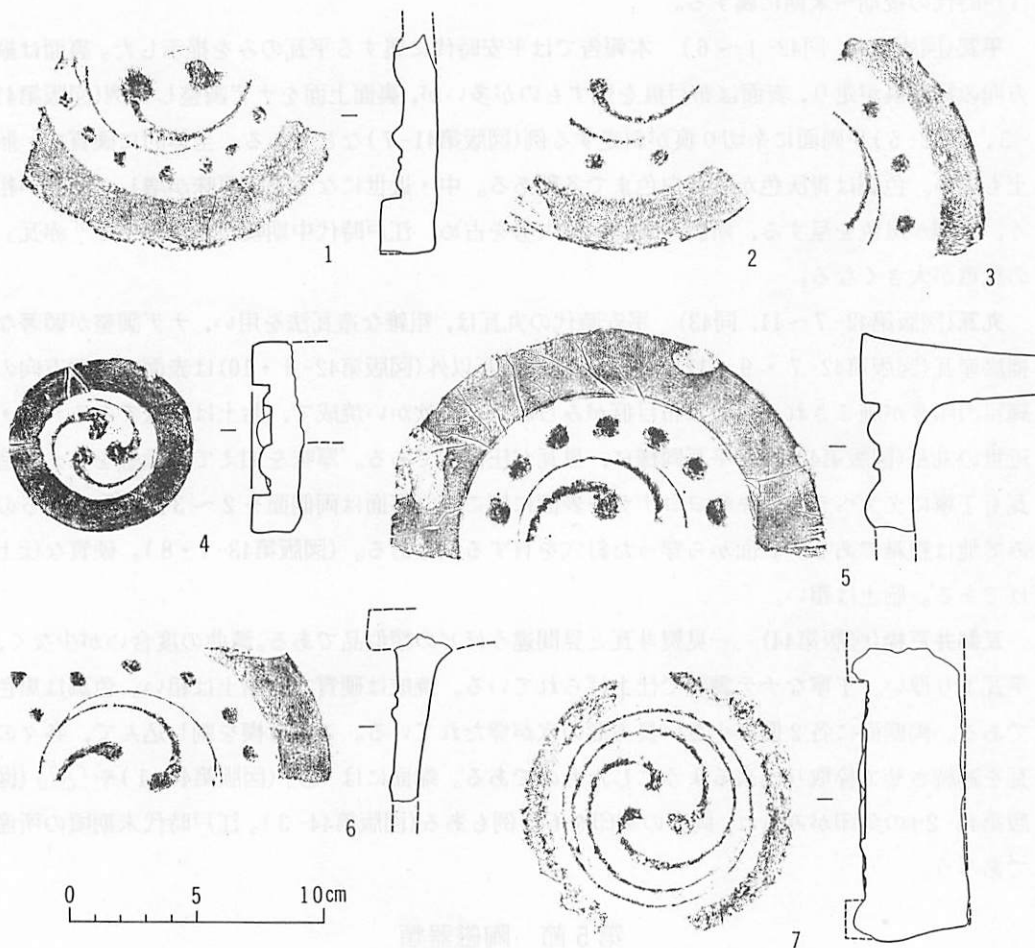
第19図 軒丸瓦拓影図(6)



第20図 軒丸瓦拓影図(7)

るかのように変形し、凝宝状(第23図4, 図版第37-16), 蜘蛛形(第23図6, 第24図1, 図版第38-2・6), 楓葉状(第24図4, 図版第38-12)のものが出現する。界線を廻らす例(第23図5・6, 図版第38-1・2)も存するが本時期を最後とするようである。近世に入ると、唐草文はより一層衰微し、子葉もなくなり、巻き込みも殆んどなくなる。中心飾りは3~4条の棒状の蕊蓋で表現している。その代表例が第25図5(図版第39-2)である。そして脇区の幅が肥大化することも特徴である。

造瓦技法としては、剣頭文軒平瓦のみが1枚造りであり、他は瓦当と平瓦を接合させる通例法である。しかし細部を観察すると、接合の際の貼付粘土を薄くし、さらに平瓦と密着度が高くなるように、ヘラケズリ調整するため、中世以前では接合角度が垂直に近い。しかし近世時にはそのヘラケズリが135度の角度を有するようになる。恐らく瓦当部を突出させて屋根先を飾ると言う思想上の変化が生じたものと推定される。その他に水返しを両脇上部にもつもの(第23図4, 図版第37-6)もある。



第21図 軒丸瓦拓影図(8)

特殊瓦(第27図, 図版第40-1~6) 左ないし右脇上部に水返しを作り, その反対側には浅溝を走らせ, 上・下弦が直線的で, 下弦には顎をもつ。棟込み瓦かと推定される。第27図5は軟質で黒灰色を呈するか, 他は硬質で灰黒色である。瓦当面に木目痕を残す例もある(第27図4, 図版第40-3)。いずれも近世初頭と考えられる。

獅子口(第21図7, 図版第40-7) 左回転の三巴文を配した厚手の瓦片で, 左・右・上部は欠損しているが, 下部は原形を留め平坦である。裏面黒灰色を呈し, 胎土は粗い。裏面はナデ調整を施す。室町時代に比定出来よう。

鬼瓦(図版40-8) 左下部の破片で, 大形の連珠文を2本の太い突帯で挟み, 内側に牙につく口唇を表現した縦走帯を施す。焼成は軟質で, 灰黒色を呈し, 胎土は粗い。鎌倉時代に遡上するかも知れない。

板瓦(図版第40-9・10) 平瓦の一種であるが, 湾曲しない点を特徴とする。10はその典型的例であり, ヘラ沈線を外縁に沿って施し, その隅に方形の釘穴を穿っている。出土瓦の大半が江戸時代の後期~末期に属する。

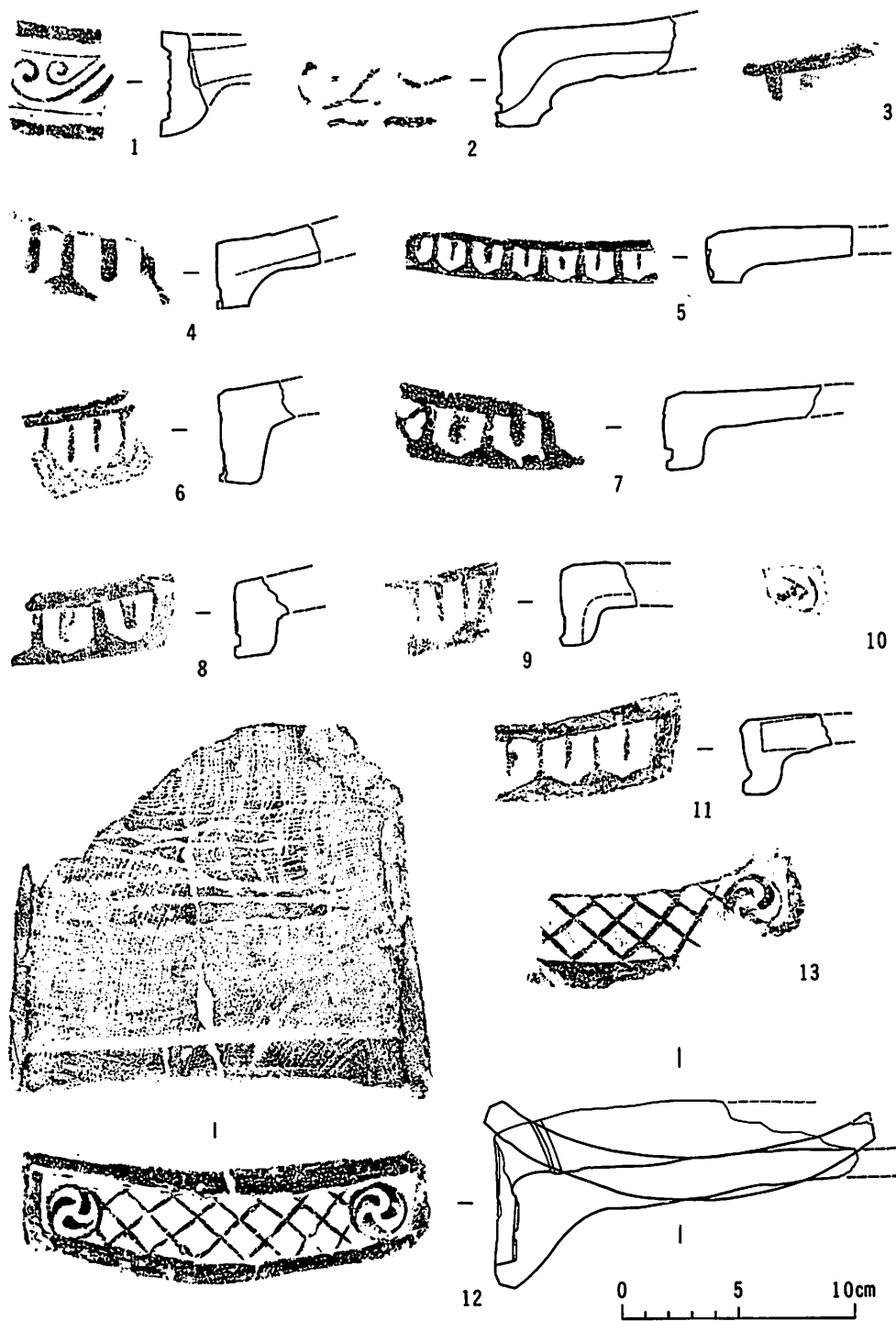
平瓦(図版第41, 同42-1~6) 本報告では平安時代に属する平瓦のみを提示した。裏面は縦方向の縄目痕が走り, 表面は布目痕を残すものが多いが, 裏面上面をナデ調整した例(図版第41-3, 同42-5)や両面に糸切り痕が斜走する例(図版第41-7)などもある。全体的に硬質で, 胎土も細い。色調は青灰色から黄白色まで各種ある。中・近世になると, 厚味が増し, 胎土が粗く, 色調が黒色を呈する, 所謂「黒瓦」が大勢を占め, 江戸時代中期頃からは薄手の「赤瓦」の比重が大きくなる。

丸瓦(図版第42-7~11, 同43) 平安時代の丸瓦は, 粗雑な造瓦法を用い, ナデ調整が顕著な播磨産瓦(図版第42-7・9・11)を含む。播磨産瓦以外(図版第42-8・10)は表面には縦方向の縄目の叩きが施こされ, 裏面は布目痕がみられ, 若干軟かい焼成で, 胎土は緻密である。中・近世の丸瓦(図版第43)は, 平瓦同様に, 黒瓦が圧倒的である。厚味を加えて重量感を与え, 造瓦も丁寧にタテヘラミガキやヨコナデを表面に施こす。裏面は両側面を2~3回面取りするのみで他は粗雑である。表面から穿った釘穴を有する例もある。(図版第43-7・8)。硬質な仕上げである。胎土は粗い。

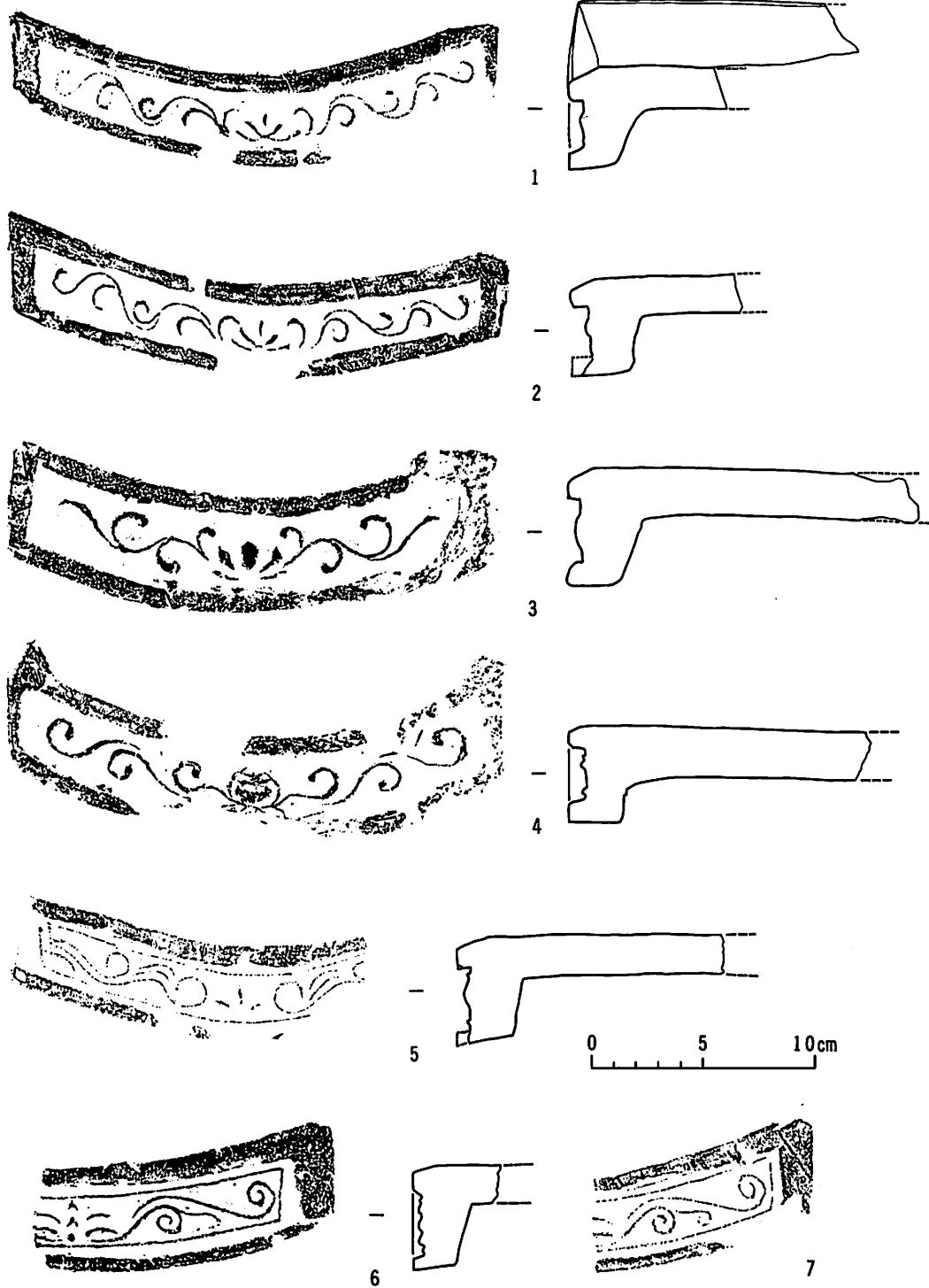
瓦製井戸枠(図版第44) 一見熨斗瓦と見間違ふほどの類似品である。湾曲の度合いが少なく, 平瓦より厚い。丁寧にナデ調整で仕上げられている。焼成は硬質で, 胎土は粗い。色調は黒色である。両側面に各2個の小さい長方形の穴が穿たれている。これは楔を刺し込んで, 各々の瓦を連続させて枠取り出来るようにしたものである。端面には「○」(図版第44-1)や「𠄎」(図版第44-2)の刻印がみられ, 両方の刻印をもつ例もある(図版第44-3)。江戸時代末期頃の所産であろう。

第5節 陶磁器類

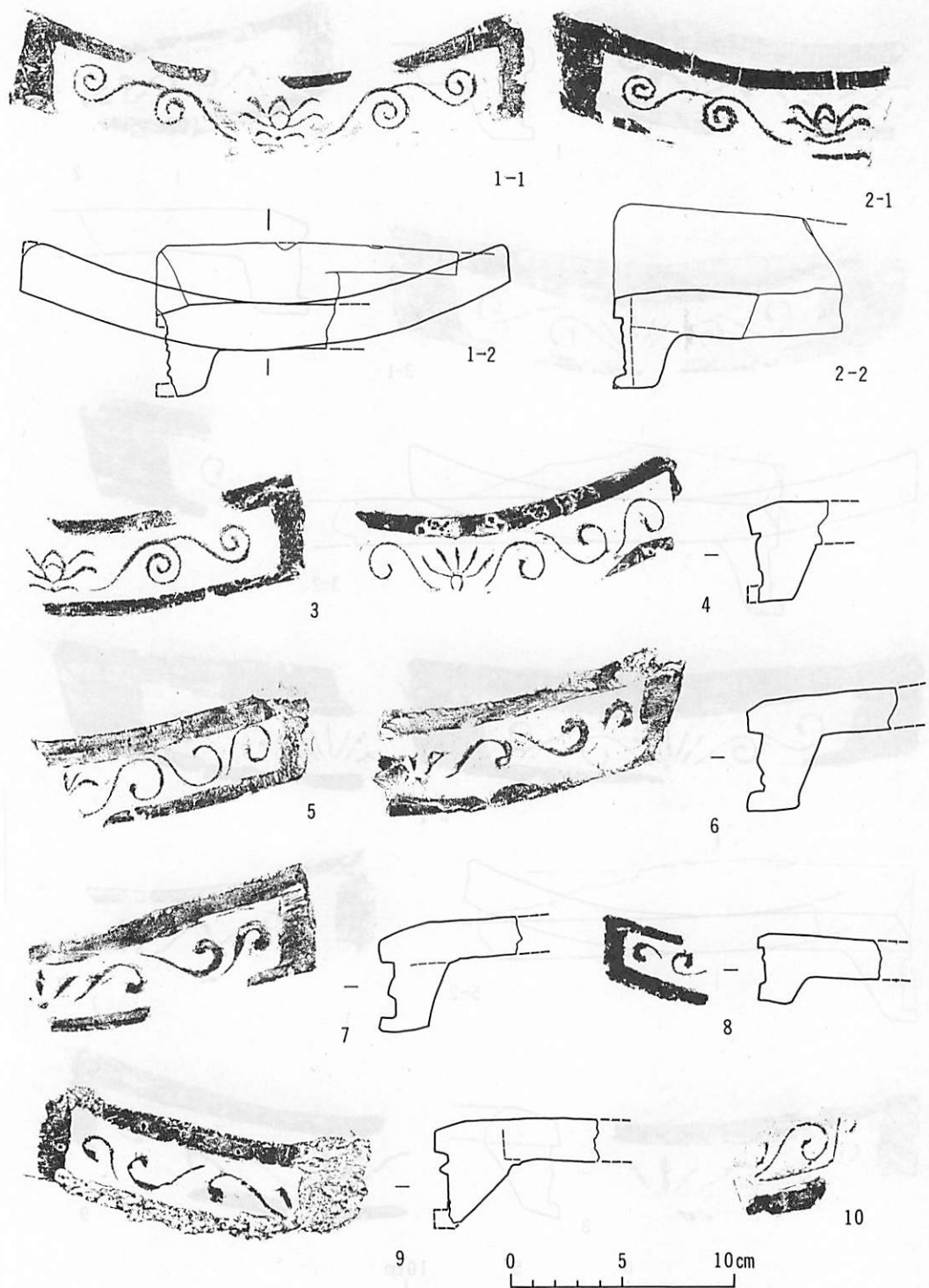
陶磁器類は, 今回の発掘調査で検出した遺物中, 瓦類に次いで多く, そのうらでも国産の陶



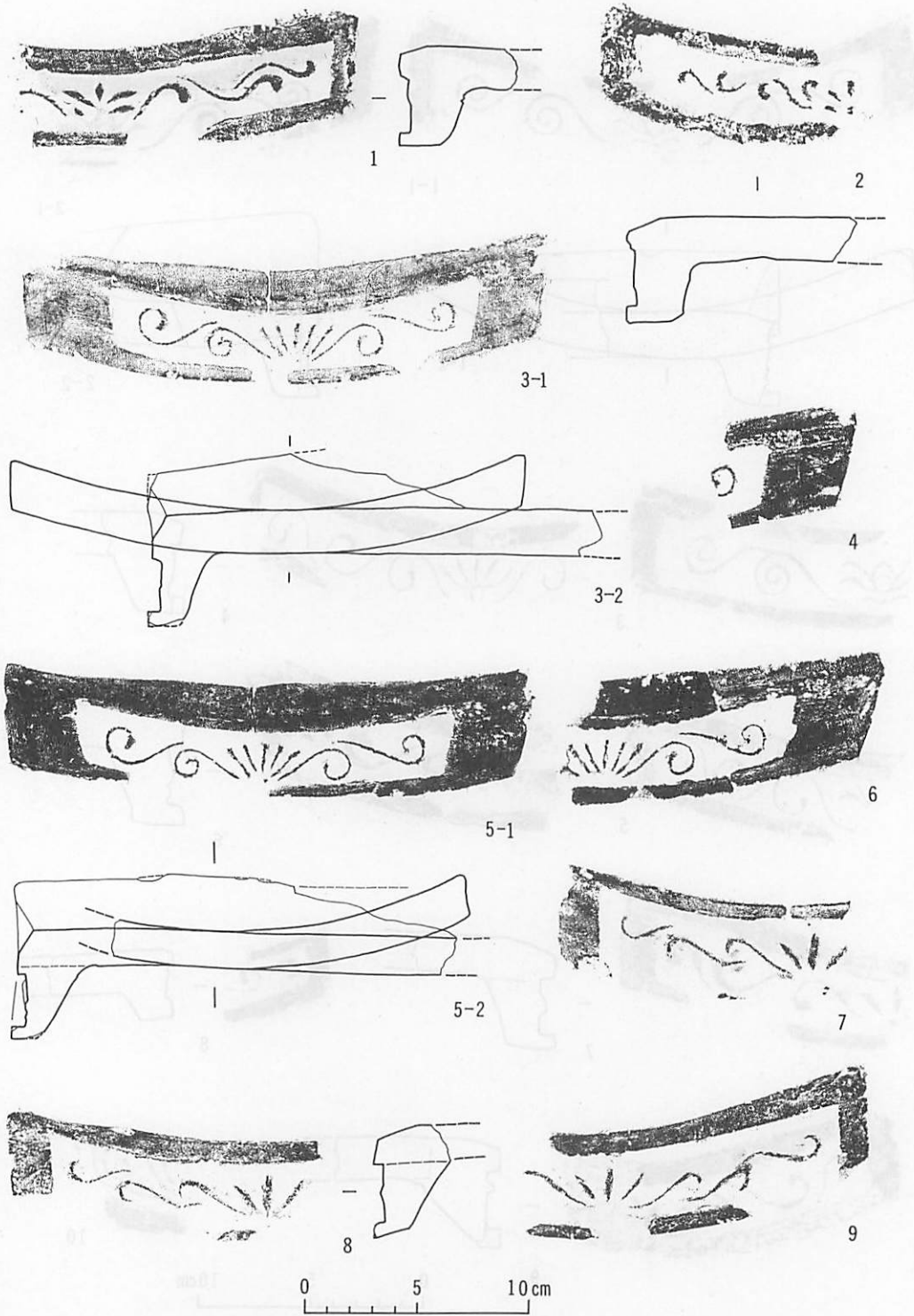
第22圖 軒平瓦拓影圖(1)



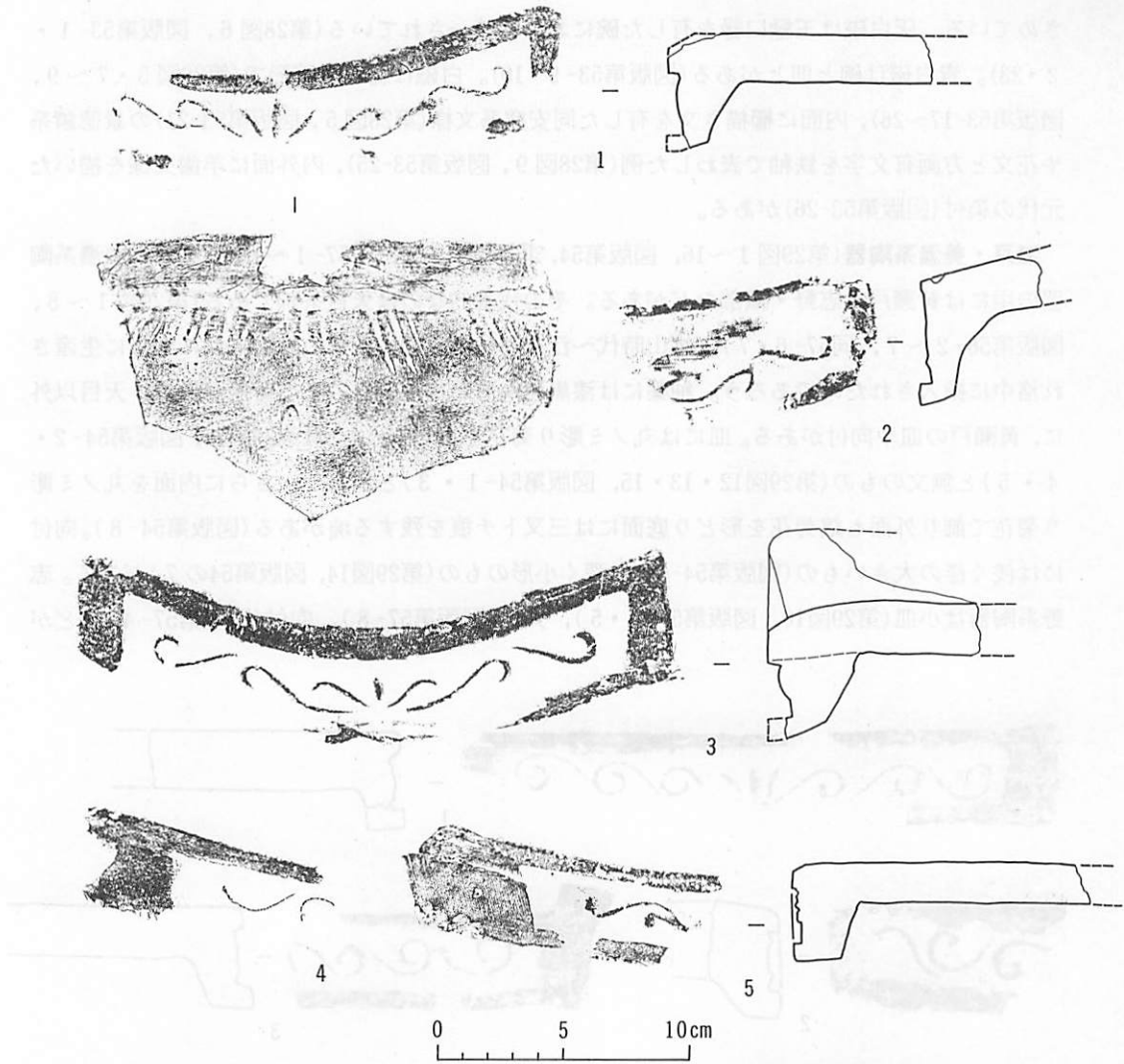
第23图 軒平瓦拓影图(2)



第24図 軒平瓦拓影図(3)



第25図 軒平瓦拓影図(4)



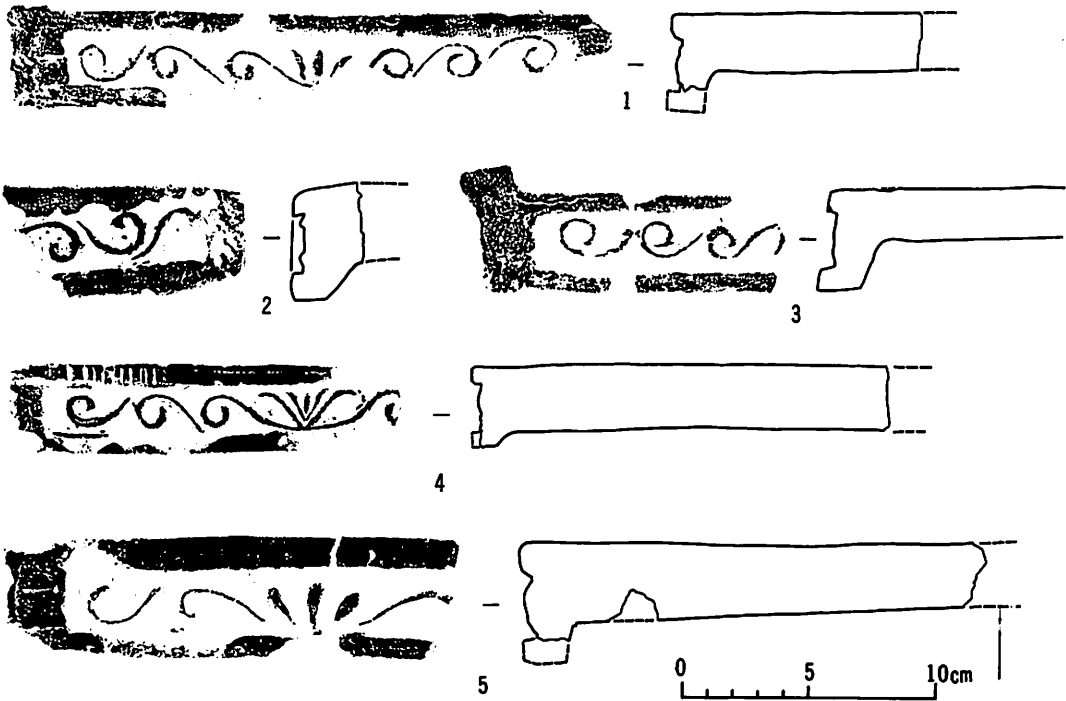
第26図 軒平瓦拓影図(5)

磁器類がその大半を占めている。これら陶磁器類については識別が難しく、一部誤謬を犯していないかと危惧する。そのため、極力図版に掲載して大方の御指導を仰ぎたいと思う。

中国製磁器(第28図, 図版第52・53) 平安時代末期から室町時代に至る期間, 多くの中国製磁器が流入している。その殆んどは高台付碗で, 少量ながら小皿(第28図4, 図版第52-17, 同53-10)や壺などの器種もみられる。釉調別には青磁・白磁・灰白磁に分類される。青磁は龍泉窯系の碗が圧倒的に多い。内面に飛雲文(第28図1, 図版第52-1)や印花文(図版第52-4)を有する。外面には肉彫りした鎬蓮弁(図版第52-3・5)や雷文(図版第52-20)や雷文くずし(図版第52-7)もみられるが, 無文も多い。南宋時代の製品が多く, 明代まで継続する。同安窯系小皿(第28図4, 図版第52-17)は内側底面に櫛描き文が施されている。底部外面は無釉である。若干

釉調が異なり青緑色を呈する四耳壺片(図版第52-21)などもある。図版第52には青磁類を総ておさめている。灰白磁は玉縁口縁を有した碗におよそ統一されている(第28図6, 図版第53-1・2・23)。青白磁は碗と皿とがある(図版第53-9・10)。白磁は総じて碗形で(第28図5・7~9, 図版第53-17~26), 内面に櫛描き文を有した同安窯系文様(第28図5, 図版第53-21)の景德鎮系や花文と方画有文字を鉄釉で表わした例(第28図9, 図版第53-25), 内外面に羊歯文様を描いた元代の染付(図版第53-26)がある。

瀬戸・美濃系陶器(第29図1~16, 図版第54, 同56-2~17, 同57-1~10) 瀬戸・美濃系陶器の中には黄瀬戸・志野・織部などがある。その代表的なのは天目茶壺である(第29図1~8, 図版第56-2~7, 同57-6・7)。桃山時代~江戸時代の時期に茶道の隆盛と共に大量に生産され洛中に搬入されたのであろう。釉薬には漆黒色から暗褐色のものまで変差がある。天目以外に, 黄瀬戸の皿や向付がある。皿には丸ノミ彫り菊花をあしらった例(第29図16, 図版第54-2・4・5)と無文のもの(第29図12・13・15, 図版第54-1・3)とがあり, さらに内面を丸ノミ彫り菊花で飾り外面も鎬菊花を形どり底面には三叉トチ痕を残す壺がある(図版第54-8)。向付には浅く径の大きいもの(図版第54-9)や深く小形のもの(第29図14, 図版第54の7)がある。志野系陶器は小皿(第29図10, 図版第57-2・5), 大皿(図版第57-8), 向付(図版第57-4)などが



第27図 特殊瓦拓影図

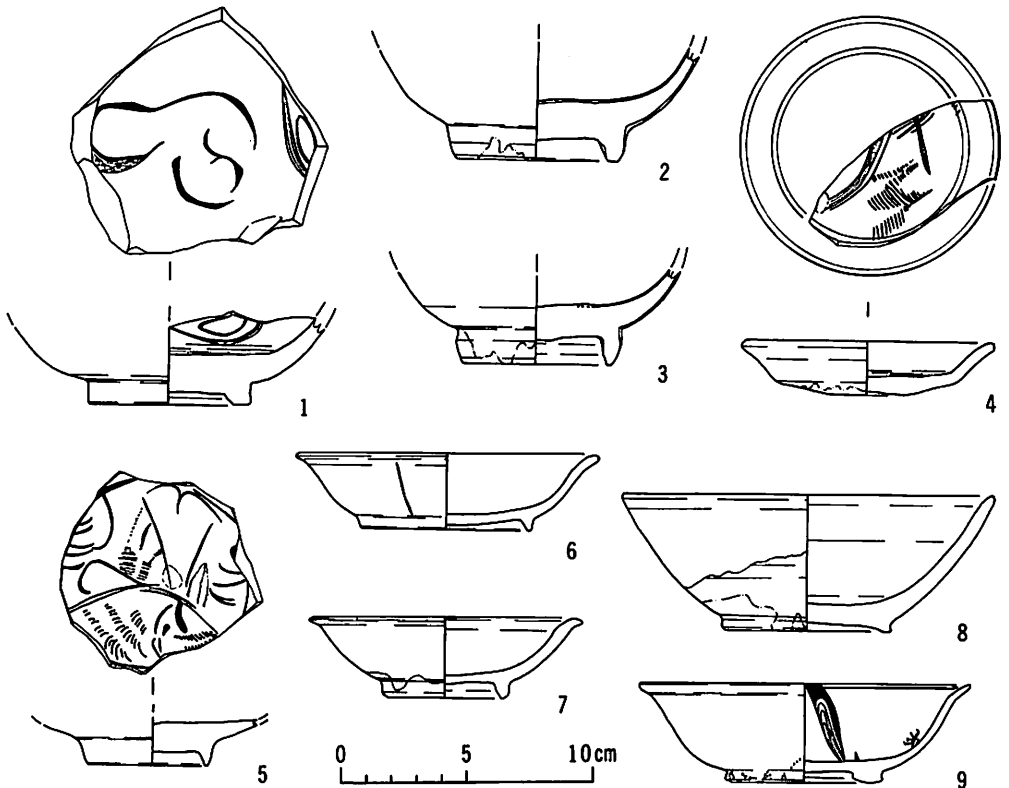
ある。全体的に小振りである。織部系陶器には長形状の浅い向付(図版第57-9・10)があるが他器種は皆無である。これらの他に美濃系の鉄釉グレの施された水瓶(第29図11, 図版第57-1)がある。これら美濃・瀬戸系陶器は主に第3焼土層や方形土壇から出土し、大窯Ⅲ期の水瓶から登窯Ⅲ期の天目茶碗に代表される、この時間内に集約され、その中心は大窯Ⅴ期と考えられる。17世紀前後、多量に瀬戸方面からもたらされたと推定される。

唐津系陶器(図版第55-1~20) この系統の陶器は台付碗(1~8), 台付の浅い碗(9~19)と絵唐津の台付大皿(20)に三分類できる。釉調は濃緑色から灰緑色まで変差ある。浅い碗のうち、輪花碗も在する(19)。17世紀前後の古唐津に属するものと推定される。

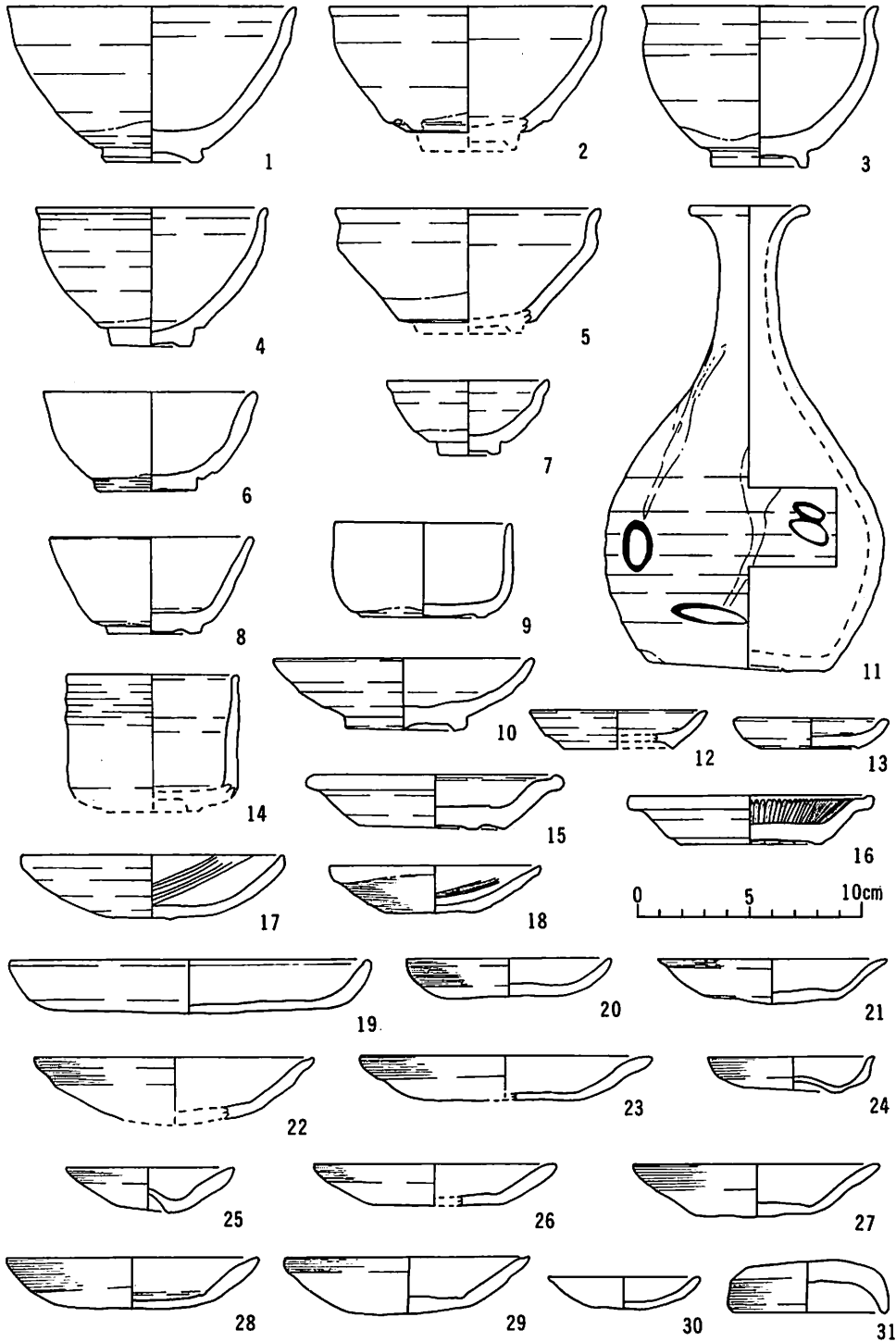
伊万里系磁器(図版第57-11~13, 16) 染付の中皿(11)や外面に雲文を描いた皿(12・13), 無文の高台付碗(16)がある。16のような碗が圧倒的に多く、江戸時代後期~末期の文化層及び諸遺構から出土している。

京焼系陶器(第29図17・18, 図版57-14・15) 猫掻き条線文を描いた小皿(第29図17.18), 茶瓶(図版第57-14)や菊皿(図版第57-15)などがある。他に碗もある。全体的に器壁は薄く、貫入が小刻みに見られる。硬質であり、地肌部にはロクロ痕が美麗である。

以上の他に備前系・信楽系・丹波系などの各陶器が散見されるが、その大多数は摺鉢に限定



第28図 中国製陶磁器類実測図



第29図 各種出土遺物実測図

(1~8・11:瀬戸美濃系 9・10:志野系

12~16:黄瀬戸系 17・18:京焼系 19~30:土師質皿 31:塩壺の蓋)

されているようである(図版第58-2~7)。

これら国産陶磁器類は、17世紀前後は瀬戸・美濃系や古唐津系の茶碗のように茶道を通じた奢侈品的なものに対して、備前系・信楽系などの日常什器もみられ、さらに江戸時代中期以降は天目茶碗類は衰退し、日常雑器としての皿・碗などが主を占め始める。それは生産地から見た場合、瀬戸・美濃系陶器の全盛期から古唐津系陶器が量を増加させると共に、碗・鉢・皿などが九州地方のものに転換されていく状況が窺い知れる³⁶⁾。

第6節 土師質土器類

土師質土器類には、平安時代の土師器は言うには及ばず近世末期の灯明皿までを含み、釜・鍋・塩壺・鉢などがあり、瓦質の鉢や火舎・香炉も存する。その内の大半を占めるのが土師質皿である。

土師質皿(第29図19~30, 図版第48-1~33, 同49-1~28) 大形(第29図19, 図版第48-3)から小形(第29図30, 図版第49-11~23)まで変差あるが、中皿がその大部分である。時代的に大きな特徴を示すへそ皿形式の例(第29図24・25, 図版第48-20・29)や、明らかに灯明用に使用されたと考えられる口縁部が煤けたもの(図版第49-6・7・9・10)もある。また宗教儀礼に伴って「鏡」(図版49-26)や「オン」「団」「パン」「カ」の梵字を両面に「九字」を表現する碁盤目状に墨書した皿(図版第49-27・28)がある³⁷⁾。色調上では褐色系が大半で、白色系も少量みられる。

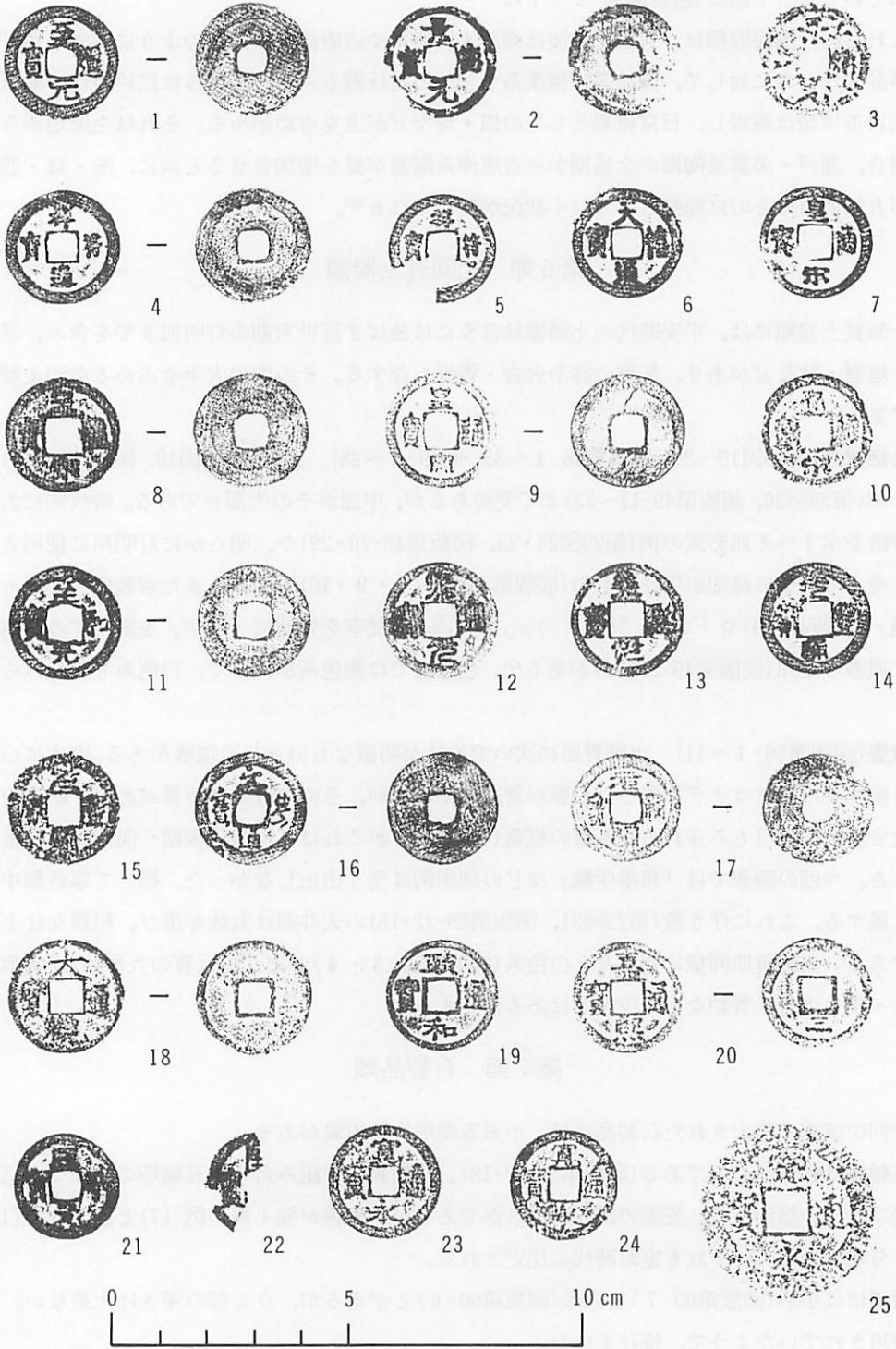
塩壺(図版第59-1~11) 土師質皿に次いで形状が明確なものとして塩壺がある。塩壺は口縁部を摘み上げてヨコナデ調整した形態が普遍的であるが、その度合いに差異があり、蛸壺のような姿態(5・6)もみられる。瓦質の塩壺(11)もあるがこれは江戸時代末期~明治時代と推定される。今回の調査では『泉湊伊織』などの刻印例は全く出土しなかった。総じて塩壺類中古式に属する。これに伴う蓋(第29図31, 図版第59-12・13)の天井部は丸味を帯び、粗雑な仕上げである。土師質皿同様に褐色系と白色系(図版第50-3・4)があり、瓦質の大形鉢(図版第58-1)・碗・火舎・香炉なども少量ではあるが存する。

第7節 石製品類

今回の調査で検出された石製品には、小形五輪塔片と埴塼がある。

五輪塔は水輪部のみである(図版第59-17・18)。花崗岩製の組み合せ式五輪塔の水輪で、正面に梵字「ラ」を陰刻する。笠部の反りが滑らかであるが、稜線が強く高い例(17)と緩いもの(18)に2分類される。いずれも室町時代に比定される。

埴塼には小形(図版第60-7)と大形(図版第60-8)とがあるが、ウミ部の深さは大差ない。共に使用されていたようで、焼けていた。



第30图 貨幣拓影图(縮尺：2/3)

第8節 金属製品類

金属製品には貨幣・刀の鐔・火鋸・銀箔などがある。貨幣は寛永通宝のみII地区南端の近世末期の土層内より出土し、その他の製品はI・II両地区の土層や各遺構から採集した。

貨幣(第30図, 図版第61-1~19)は都合26枚が検出されたが、大概「北宋銭」「南宋銭」の渡来銭と「寛永通宝」の2種に分類される。

渡来銭には、至道通宝(北宋, 第28図1, 図版第61-1), 景德元宝(北宋, 同図2・3, 同図版2), 祥符通宝(北宋, 同図4・5, 同図版3), 天禧通宝(北宋, 同図6, 同図版4), 皇宋通宝(北宋, 同図7~10, 同図版5~8), 至和元宝(北宋, 同図11, 同図版9), 熙寧元宝(北宋, 同図12・13, 同図版10・11), 元豊通宝(北宋, 同図14~16, 同図版13), 大観通宝(北宋, 同図18, 同図版14), 政和通宝(北宋, 同図19, 同図版15), 嘉熙通宝(南宋, 同図20, 同図版16), 端平元宝(南宋, 同図21)の13種類ある。しかしこれら総てが渡来銭とは限らず、元豊通宝には加治木改造銭の特徴を有するものが認められる。なお第28図22は破片で種類は不明であるが残存文字から推して渡来銭と推定される。

我国の古銭としては寛永通宝のみ3点出土した。総べて「新寛永」に属するが、大きさが異なる。また、元禄期七条銭(第28図24, 図版第61-18)や輪幅が御用銭ほど広くない折二銭(第28図25, 図版第61-19)に分類される。

貨幣の他に金属製品として、小孔を中心部に穿った鉄製円盤形製品(図版第61-20), 鉄製の小形刀鐔(図版第61-21), II地区井戸1の埋土内から出土した平安時代の銀箔片(図版第51-11), 青銅製の火鋸(51-12)がある。

第9節 土製品類

土製品には、泥面子、伏見人形、埴塼がある。泥面子の多くはII地区南端の江戸時代後期の掘り込みの埋土内より出土し、埴塼は鍛冶場跡の凹みから採集された。

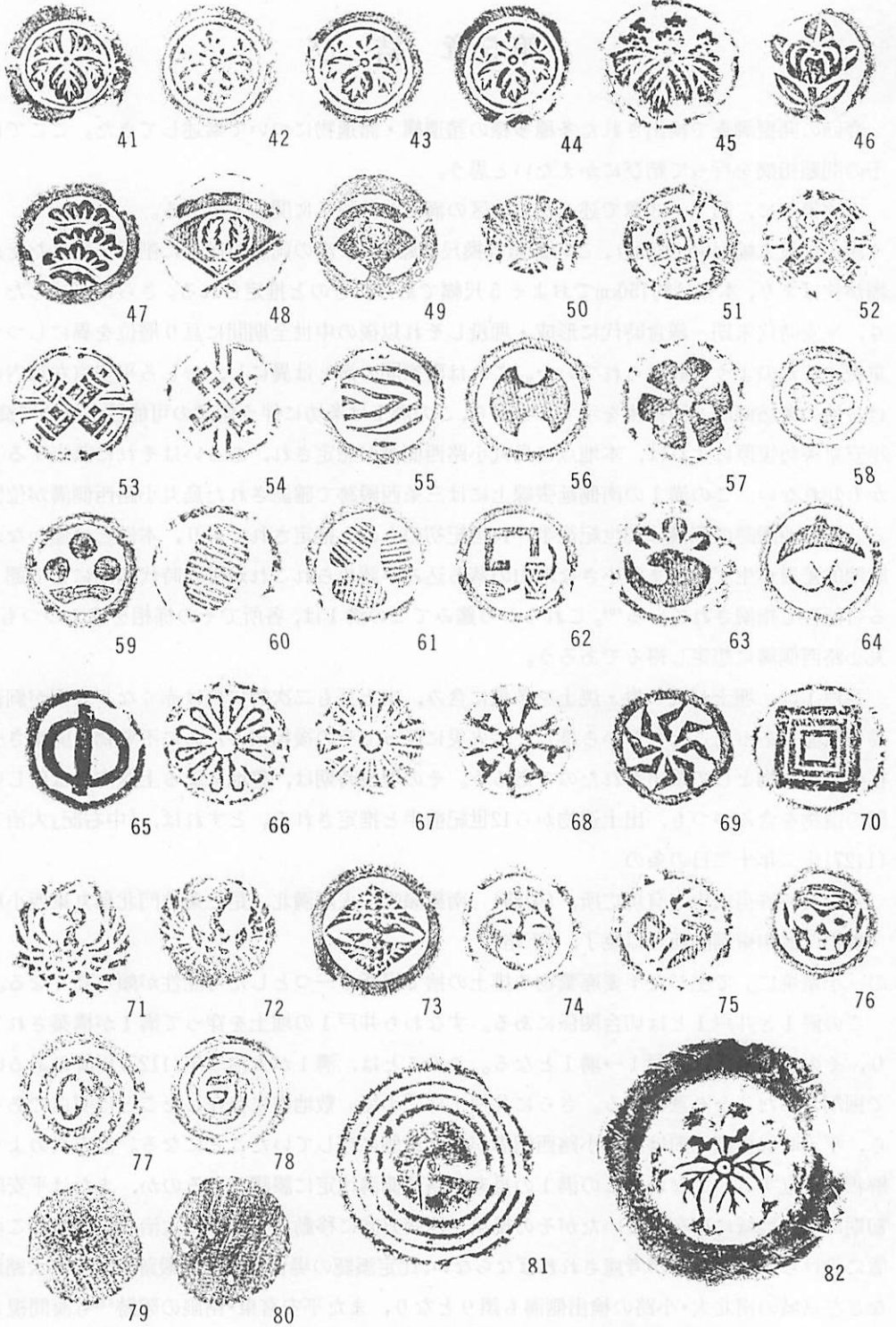
泥面子(第31・32図, 図版第62・63)は、賭けごとおもちゃの一つで、江戸時代中期以後幕末にかけてその全盛期を迎え、賭けごと遊びの「穴一」に使用されることが流行し種類も増加した³⁸⁾。その種類は2000種にもものぼるが、形状から6分類され、今回出土のそれは、第1分類と第2分類に属する³⁹⁾。漢字・平仮名・花文・動物・小判・巻物・扇子・小槌・家紋などの模様で、また桐御文の型(第82図82, 図版第63-43)も1点出土している。

伏見人形にはミニチュアの釜(図版第59-14)や烏笛(図版第59-15)がある。

埴塼は完形品(図版第60-5)と破片(図版第60-4・6)である。完形品をみると、口縁部には溶解物が付着し錆び付いている。口縁部に一条の凹みが横断し、これが溶解物の流入口であることは明確である。胴部から底面は表面が滑らかで丁寧な造りである。その埴塼に付随してふいごの羽口も数点検出された(図版第60-1~3)。



第31図 泥面子拓影図(1)(縮尺3分の2)



第32図 泥面子拓影図(2)(縮尺3分の2)

第5章 結 び

今回の発掘調査で検出された多種多様の諸遺構・諸遺物について素述してきた。ここでは若干の問題指摘を行って結びにかえたいと思う。

まず第1に、第2・3章で述べたI地区の溝1と井戸1に関してである。

溝1は最大幅140cmを測り、この数値は換尺し難いが、溝の両肩が後世に削平を受けたため溝幅が狭ばまり、本来は約150cmでおよそ5尺幅であったものと推定される。さらに既述したとおり、平安時代末期～鎌倉時代に形成・埋没しそれ以後の中世全期間に亘り層位を異にしつつも重複するかのようには設けられていた。これは町家間の溝とは異にし、むしろ平安京左京内における他の条坊側溝と同様相を示すことから、この溝1は条坊に伴う側溝の可能性が極めて高い。平安京条坊復原によれば、本地点に烏丸小路西側溝が想定され、あるいはそれに該当するものかも知れない。この溝1の南側延張線上には三条西殿跡で確認された烏丸小路西側溝が位置する。三条西殿跡の側溝は13世紀後半～14世紀初のものとして推定されており、本例とは僅かながら時間的差異が生ずる。また小さな地山の落ち込みが認められこれが平安時代初期にまで遡上する可能性も指摘されている⁴⁰⁾。これらから鑑みてこの溝1は、各所でその様相を違えつつも、烏丸小路西側溝に想定し得るであろう。

井戸1は、埋土が灰・炭・焼土を多量に含み、出土瓦も二次的に焼け赤くなり表面が剝落し易い状態であったことなどから推して、火災に伴ってその後始末のために不要物を廃棄させる格好の構造物として撰出されたのであろう。その埋没時期は、整地による上層内には新しい段階の遺物を含みつつも、出土遺物から12世紀前半と推定される。とすれば、『中右記』大治二年(1127)十二年十二日の条の

今夜亥時許当未申方有焼亡所、(中略) 南風頻吹、火煙満北、是三条坊門北烏丸東西小屋焼亡、此中東洞院西皆以焼了、(下略)

の「小屋焼亡」で生じた不要廃棄物や排土の捨て場所の一つとした可能性が頗る高くなる。

この溝1と井戸1とは切合関係にある。すなわち井戸1の埋土を穿って溝1が構築されており、その新旧関係は井戸1→溝1となる。このことは、溝1が大治二年(1127)以降のある時点で掘削されたことを意味する。さらに井戸1は「小屋」敷地内に存在したことは明白であるから、平安時代後期以前は烏丸小路西側溝がより東側に存していたことになる。他方次のような解釈も成立する。すなわちこの溝1の烏丸小路西側溝比定に誤謬があるのか、または平安時代初期には本地域に存在していたがその後東・西南方向に移動させさらに大治二年以後にこの位置に設けられたかなどが考慮されねばならない。比定誤認の場合は三条西殿跡や東洞院大路跡⁴¹⁾など左京域の南北大・小路の検出側溝も誤りとなり、また平安宮東・南限の隕跡⁴²⁾も疑問視されることになり、今日の条坊復原における根拠をすべて否定することになる。既述したように中世以後の側溝の様相と同様であることから観て、中世以後での烏丸小路西側溝であると考えて

大過なからう。また後者の場合は、第1次調査地区内や井戸1の北側地点にそれに該当する遺構が発掘されなかったことから、この推測は消去できるであろう。

今日の条坊復元は、『延喜式』京程記載事項と九条家本『宮城図』及び発掘調査で検出された各側溝などを基本として成立しているが、そのいずれも時間的相異が問題にされたり論究されたことが殆んどなく⁴³⁾、寧ろ空間論が圧倒的に支配していたと言える。現に平安宮民部省跡南築垣跡の検証から式部省～民部省間の通路幅10丈は、ある時点で道路拡幅が実施された結果の10丈であることが裏付けられた⁴⁴⁾。民部省跡例のように九条家本『宮城図』でさえ部分的であるにせよ合致しないことが明らかになり、本来の平安宮プランの復元に問題を投じた。今回検出の溝1と井戸1は將に平安京の条坊復元にあって今後大きな論議を呼ぶであろう。構築年代も含め再検討するとともに条坊比定にあたっては厳格な態度が要求されてくる。

次に第3焼土層及びII地区方形土壌に関してである。第3・第4章で同時に堆積・埋没したものと推測し、その時期は桃山～江戸時代初期を中心とするものの17世紀前半をその下限に求めた。文献によれば、元和六年(1620)に京都で大火が発生し、この罹災によって生じた焼土層などと理解される。この年代は、元和元年(1615)大坂夏の陣で落城した大坂城域内の調査で出土した諸遺物と相似している⁴⁵⁾ことから肯定されるであろう。その場合、大窯IV・V期に比定される瀬戸・美濃系の陶器が伝世品であるか、あるいは「美濃編年」が正鵠を得ていないかである。前者の場合、天目茶碗などの京都市域内での出土量や様相から、茶道との関連も追求されねばならないが、時間的空間は僅少だと推定される。後者は、今日的研究成果に基いた編年であり大網的には正確である。しかし昨今の調査で「美濃編年」の大窯II期に新たに1～2期を設定すべき考古学資料が確認され⁴⁶⁾、再考の段階にきている。今後の研究成果を待ってこの問題に対処したいと考える。

おわりに

今回の発掘調査で本調査地の歴史の変遷を辿るべき諸遺構・諸遺物を多数確認するとともに、烏丸小路西側溝を確認すると言う当初の調査目的の1つをも果すことが出来た。しかし狭小な面積の発掘のため平面的に十分把握できず、また第1次調査成果との関連も追求が困難を極めた。とは言え条坊復元に係わる大きな問題を提起し得たことは幸であった。

残された遺物は多種多様で膨大な量であった。総べての遺物を網羅して報告書に列挙すべく整理に着手したが、筆者の怠慢に加え、やむ得ぬ私事情も生じ、作業半ばにしてそれ以後直接整理を担当できずにすでに調査開始から6年有余月が経過して今日に至ってしまった。

この間に平安京の発掘調査、研究には目覚しい進歩があり、これらの研究成果に立脚して十分な考察を加えるべきところではあるが、筆者の力量不足のために本来正報告書として刊行すべきが結果的には概要報告で終ってしまった。偏えに筆者の責任である。深くお詫び申上げたい。

発掘調査から報告書刊行までには多くの方々から御指導・御鞭達を頂いた。また、調査期間

中には、盛夏の折、災天下のもとで発掘に参加していただいた学生諸君ならびに小谷工務店の作業員諸氏、調査の便宜を計って下さった明治生命保険相互会社京都支社長大島浩氏・竹中工務店秋田慶一・川田邦夫両氏に対して感謝の意を表する次第である。とりわけ鈴木俊則・三宅憲明・原田雅裕・木村滋の4君には頭の下がる思いである。刊行にまで漕ぎ着けられたのは彼ら4君の努力の賜物である。すでに学窓を旅立った今日でも筆者を叱咤激励し続けてくれている。決して満足すべき内容ではないが、ここに概要報告書を提出することでその恩に報いたいと思う。

註

- 1) 甲元真之他『平安京六角堂跡の発掘調査』(『平安京跡研究調査報告』第2輯, 京都, 昭和52年)。
- 2) 定森秀夫編『三条西殿跡』(『平安京跡研究調査報告』第7輯, 京都, 昭和58年)。
- 3) 佐々木英夫編『平安京左京五条三坊十五町』(『平安京跡研究調査報告』第5輯, 京都, 昭和56年)。
- 4) 臈谷寿・中谷雅治『押小路殿の研究』(『平安博物館研究紀要』第2輯, 京都, 昭和46年)。
- 5) 永田信一(財・京都市埋蔵文化財研究所), 小森俊寛(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会)両氏の御手を煩わした。
- 6) 拙稿『平安京発掘の成果と展望』(『歴史手帖』第5巻第5号, 東京, 昭和52年, 『中世の考古学』に再録, 昭和58年)。
拙稿『平安京押小路殿跡の発掘調査』(『日本考古学協会昭和53年度総会研究発表要旨』, 東京, 昭和53年)。
- 7) 註1)に同じ。
- 8) 古代学協会編『土事』第11号, (京都, 昭和54年)。
- 9) 平良泰久他『平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要』(京都府教育委員会編『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-第3分冊, 京都, 昭和55年)。
- 10) 松井忠春・佐々木英夫『平安京推定一条大路跡第二次調査概要』(『古代文化』第28巻第9号, 京都, 昭和51年)。
- 11) 寺島孝一・松井忠春編『東洞院大路・曇華院跡』(『平安京跡研究調査報告』第3輯, 京都, 昭和52年)。
- 12) 註10)に同じ。
- 13) 美濃古窯研究会編『美濃の古陶』(京都, 昭和51年)。
- 14) 井上喜久男『大阪城三の丸跡における初期近世窯の様相』(『大阪城三の丸跡II』, 大阪, 昭和58年)。
- 15) 安井良三『篠町A号瓦窯跡』(『亀岡市史』上巻, 亀岡, 昭和35年)。
- 16) 森浩一・伊藤勇輔『香川県綾南町十瓶山北麓窯跡調査報告』(『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告第4冊, 京都, 昭和46年)。
- 17) 江崎武氏の御教示による。
- 18) 東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁器』(東京, 昭和52年)。
- 19) 大阪市立美術館中野徹氏の御教示による。
- 20) 福山敏男・大塚ひろみ『法成寺の古瓦』(『仏教芸術』68号, 大阪, 昭和43年)。
- 21) 平安博物館編『平安京古瓦図録』(東京, 昭和52年)。
- 22) 檜崎彰一『初期中世陶における三筋文の系譜一第1部 三筋文系陶器とその編年一』(『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV, 名古屋, 昭和53年)。
- 23) 註1)に同じ。
- 24) 註3)に同じ。
- 25) 森浩一『南海道の古代窯業遺跡とその問題』(『日本歴史』第237号, 東京, 昭和43年)。
註16)に同じ。
- 26) 註21)に同じ。
- 27) //
- 28) //
- 29) //
- 30) //
- 31) //
- 32) 杉山信三他『栢杜遺跡調査概報』(京都, 昭和51年)。

- 和50年)。
- 33) 河原純之『六波羅蜜寺出土の瓦類』(『六波羅蜜寺の研究』, 奈良, 昭和50年)。
- 34) 註1)に同じ。
- 35) 京都市右京区在住の服部政義氏の採集品である。
- 36) 註1)に同じ。
- 37) 今日でも宗教儀礼として本例のような墨書土師質皿を使用することがある。
- 38) 齊藤良輔『日本のおもちゃ遊び』(東京, 昭和47年)。
- 39) 金刺伸吾『どろめんこの話』(『どるめん』3号, 東京, 昭和49年)。
- 40) 註2)に同じ。
- 41) 註11)に同じ。
- 42) 浪貝毅・玉村登志夫『平安宮東・南限の発掘調査概要』(『平安宮跡—京都市埋蔵文化財年次報告1973-I』, 京都, 昭和50年)。
- 43) 福山敏男『平安京とその宮城の指図』(『日本建築史研究 続編』, 東京, 昭和46年)。戸田秀典『九条家本延喜式所載の平安京図の作成について』(『柴田實先生古稀記念 日本文化史論叢』, 大阪, 昭和51年)。
- 44) 戸田秀典・松井忠春『平安宮推定民部省跡の発掘調査』『平安博物館研究紀要』第6輯, 京都, 昭和51年)。
- 45) 大手前女子大学史学研究所・大阪城三の丸跡調査研究会編『大阪城三の丸跡II』(大阪, 昭和58年)。
- 46) 昭和58年11月27日の第4回貿易陶磁研究集会において, 檜崎彰一・江崎武両氏より若干の報告があった。

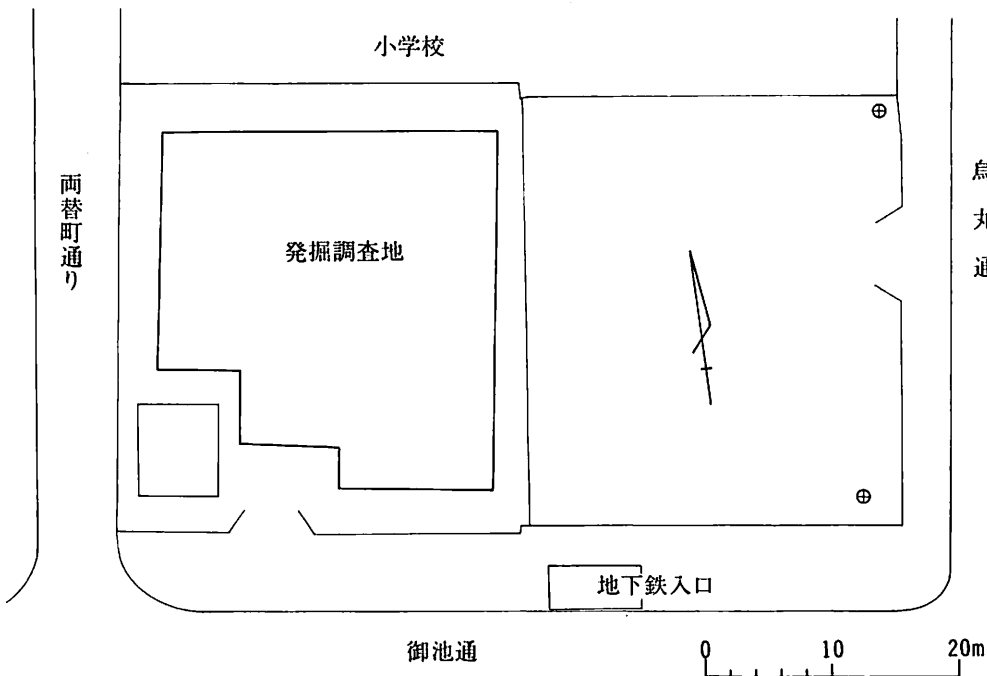
第2部 平安京押小路殿跡第3次発掘調査

第1章 発掘調査の経過

明治生命保険相互会社は、京都市中京区御池通烏丸東入ルの社有地の新築工事に先立ち平安博物館に発掘調査を委嘱された。この地は後鳥羽上皇の院の御所であった押小路殿の跡地で、やはり明治生命保険相互会社の所有する東側隣接地については、平安博物館が2次に渉る発掘調査を実施している¹⁾。

調査は、角田文衛館長を責任者として、佐々木英夫(平安京調査本部・当時)を調査主任、寺島孝一(同・当時)を調査員として昭和55年7月21日から10月31日の2ヵ月間にわたり実施した。また調査補助員として横田洋三・福土順子両氏をはじめとする多数の学生諸君の参加を得、作業員としては、主として小谷工務店の手をわずらわせた。

調査の対象となった場所は、京都市中京区烏丸通と御池通の交叉点北面角に位置している。明治生命御池ビル建設予定地東側は概に調査しており(第1部参照)、今回は最終調査として、西側半分が対象となった(第33図)。



第33図 発掘調査トレンチ位置図

発掘は、調査地のほぼ全面にわたって行なわれた。発掘に先立ち、北側・東側に、幅約1m、長さ30mの試掘を行い、層序の観察を行なった。この結果、地表下約70cmまで著しい層序の乱れが認められたため、これを重機で取り除いた。その下部は大きく2層に分かれ、上層茶褐色土層では江戸時代の、下層暗茶褐色土層では室町時代の遺構・遺物を包有することが予想され、調査は排土の関係から南北の二地区に分け、さらに図面・遺構・遺物の関係上、4m×4mのグリッドに調査区を細分し、順次、手作業で掘り進めた。

註

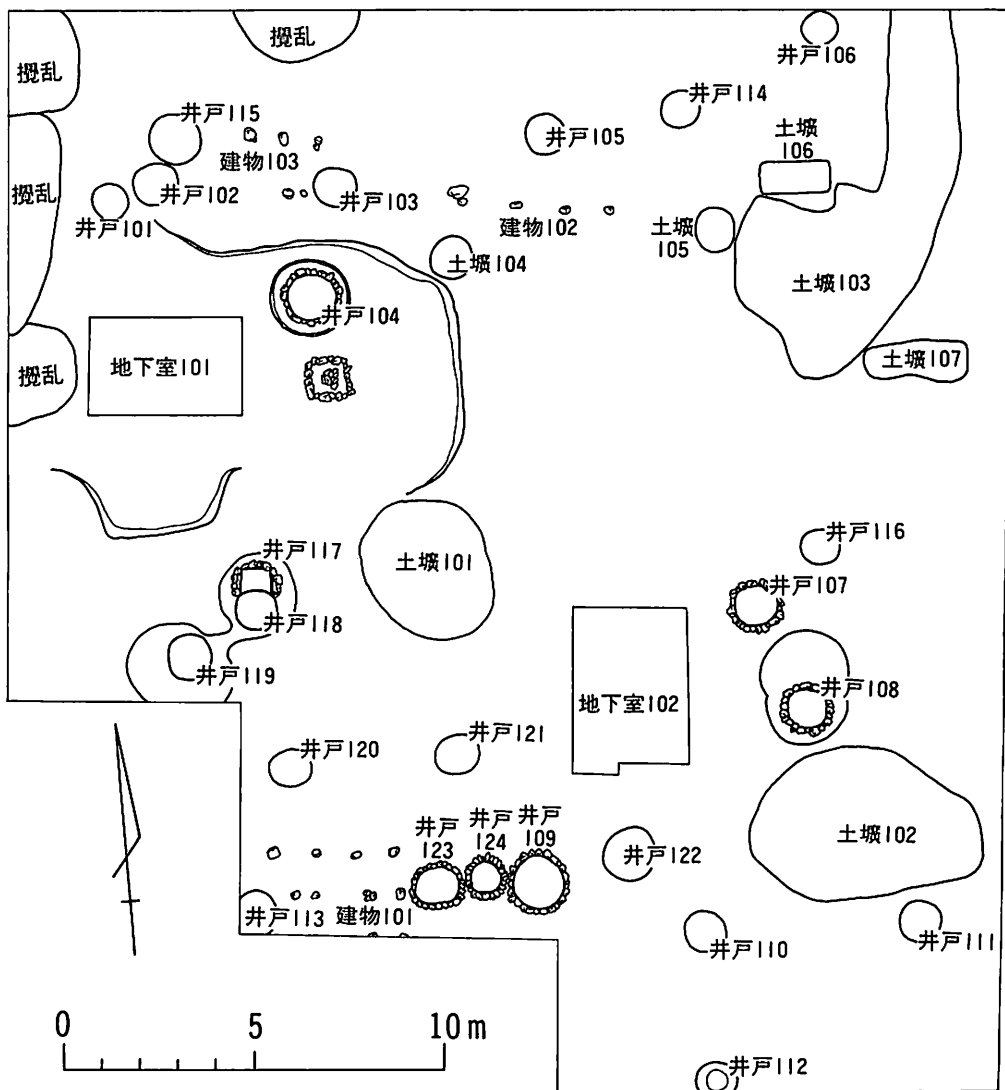
1) 第1次調査は昭和41年に実施された。臈谷寿・中谷雅治「押小路殿の研究」(『平安博物館研究紀要』第2輯所収、京都、昭和46年)。ま

た第2次調査は昭和51年に実施され、本書の第1部がその報告である。

第2章 遺構の概要

地表面直下から掘り込まれた土層では、焼瓦・焼土が多量に含まれており、蛤御門の変の時に焼亡した家屋のものと思われる。

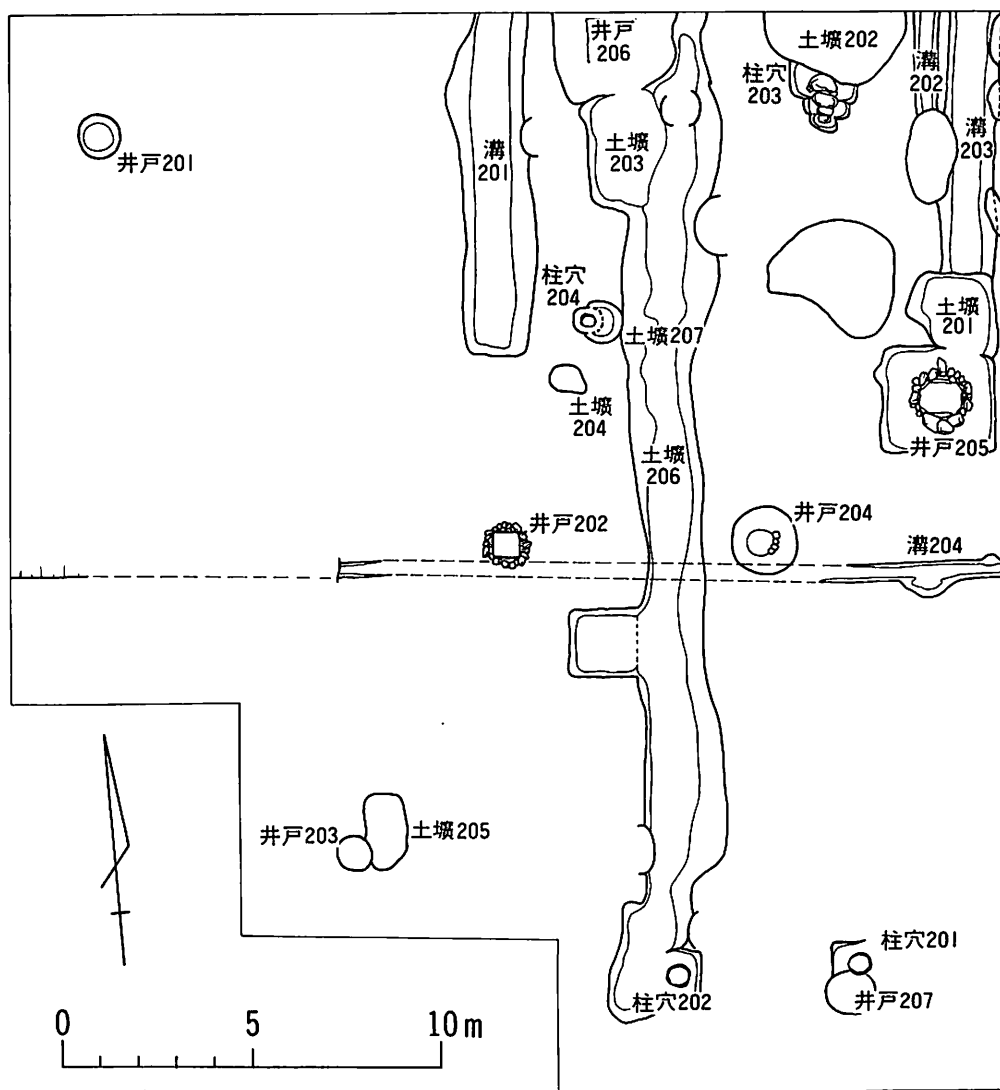
茶褐色土層上部においては、石組を漆喰で固めた壁を持つ地下室101・102下半部、石組の井戸104・108・109の他、墓と思われる円形・方形の石敷を多数検出した。いずれも江戸時代後期以後のものと思われる。茶褐色土層を順次掘り進めるにしたがって、江戸時代前期～後期にあたる遺構・遺物を全面で検出した。茶褐色土層最下層では、江戸初期と思われる遺構、井戸



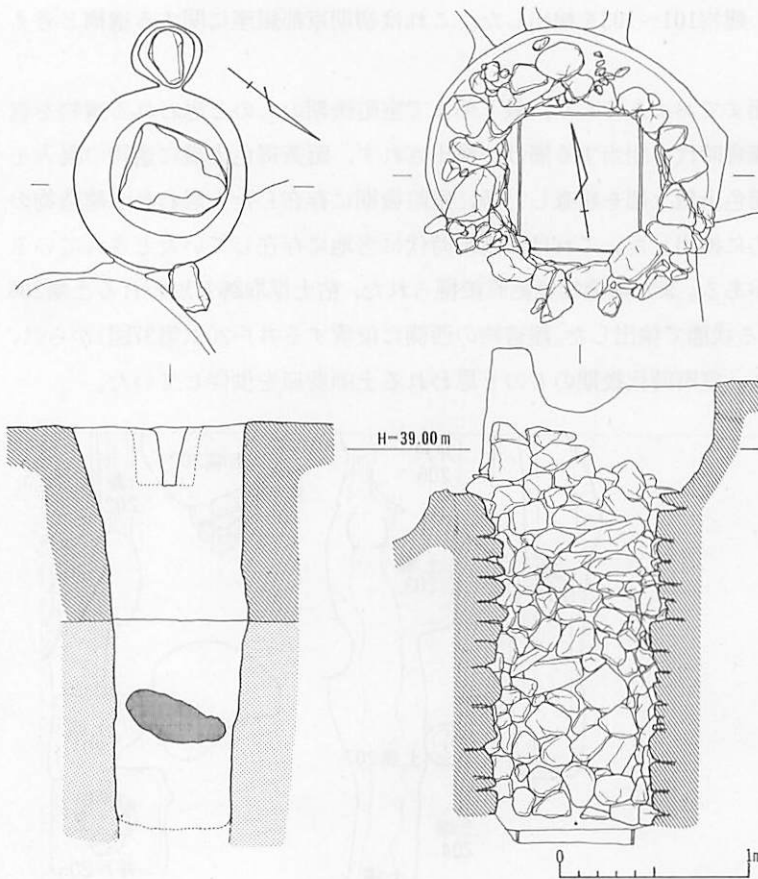
第34図 発掘区平面図(1)(茶褐色土層)

115～124, 土塙101・102, 建物101～103を検出した。これは初期京都銀座に関する遺構と考えられる(第34図)。

暗茶褐色土層は、地山面までおよんでおり、最下部まで室町後期のものと思われる遺物を包有している。平安時代～鎌倉時代に相当する層は、検出されず、暗茶褐色土層に遺物の混入を見るだけであった。暗茶褐色土層上部を精査した所、室町後期に存在したと思われる建造物の遺構を、調査区東側を中心に検出した。これは、室町時代に当地に存在していたとされている二条殿に相当する可能性がある。また建造物廃絶直後掘られた、粘土採取跡と思われる土塙206は、建造物を大きく破壊する状態で検出した。建造物の西側に位置する井戸203(第37図)からは、石仏(図版第84)が検出され、室町時代後期のものと思われる土師器皿を供伴していた。



第35図 発掘区平面図(2)(暗茶褐色土層)

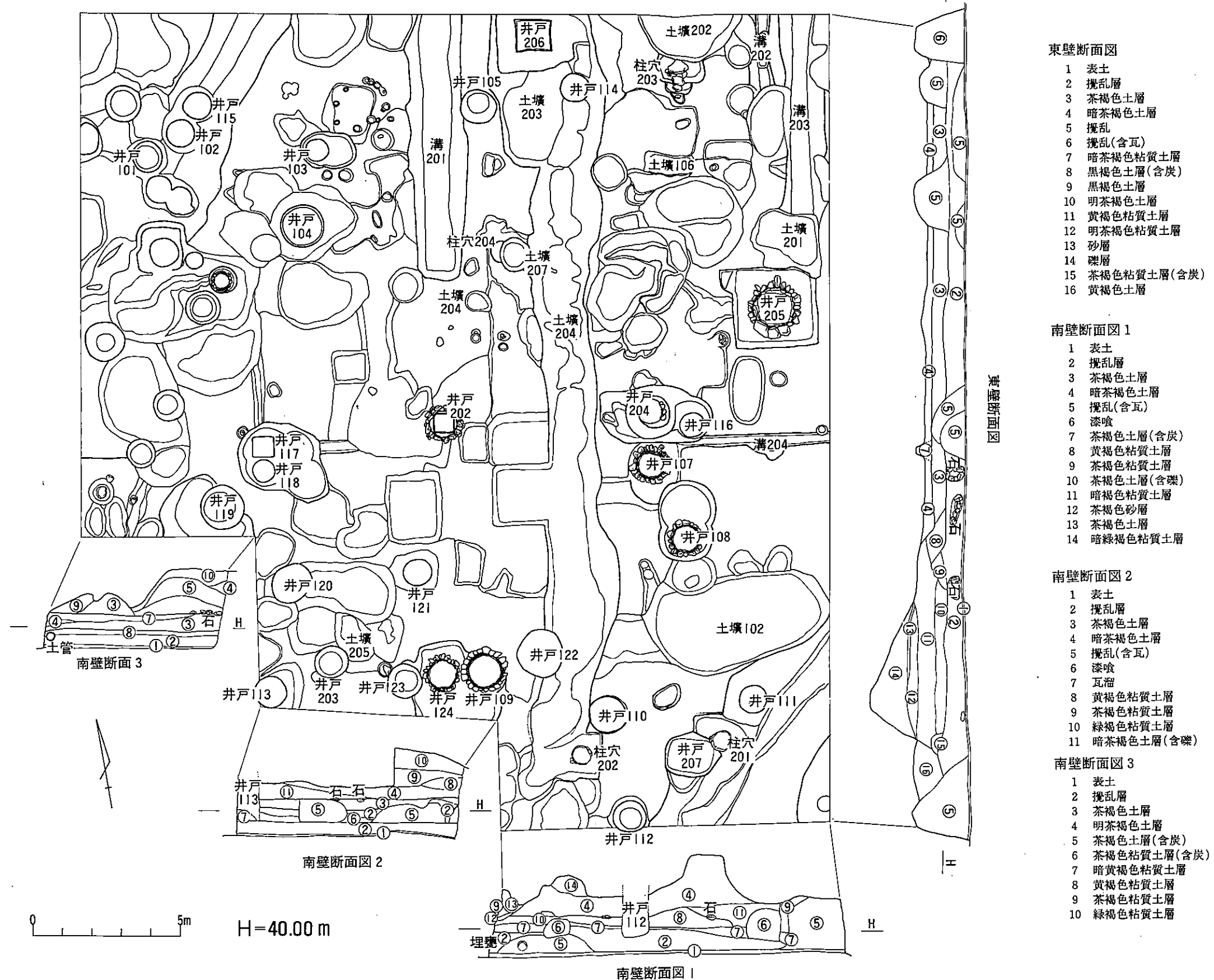


第36図 井戸203・202実測図

鎌倉時代の遺構として、井戸205を良好な状態で検出した。しかし、暗茶褐色土層内では、鎌倉時代に相当すると考えられる遺物は、ほとんど見られず、井戸205に関連する遺構・遺物は検出されなかった。

平安時代に相当する遺構は、井戸206・207であり、ともに11世紀に存在したものである(第35図)。暗茶褐色土層では、11~12世紀に相当する遺物を調査地全域でわずかに検出している。また当初

予想された三条坊門通りの北側溝は検出されず、調査地より南側に位置するものと思われる。発掘終了状態は、平安時代から現在まで続く、幾度もの掘り返しのために、地山面までおよぶ凹凸が著しく、遺構の位置づけは困難であった。当地の大規模な造成、破壊が行われたのは、室町時代後期の建造物建設期・廃絶期、京都銀座役所設置期、蛤御門の変における瓦溜めなどであり、平安時代から現在までたえることなく、人が住んでいたものと思われる。



第37图 発掘区平面図3・断面図(完掘状態)

第3章 遺構・遺物

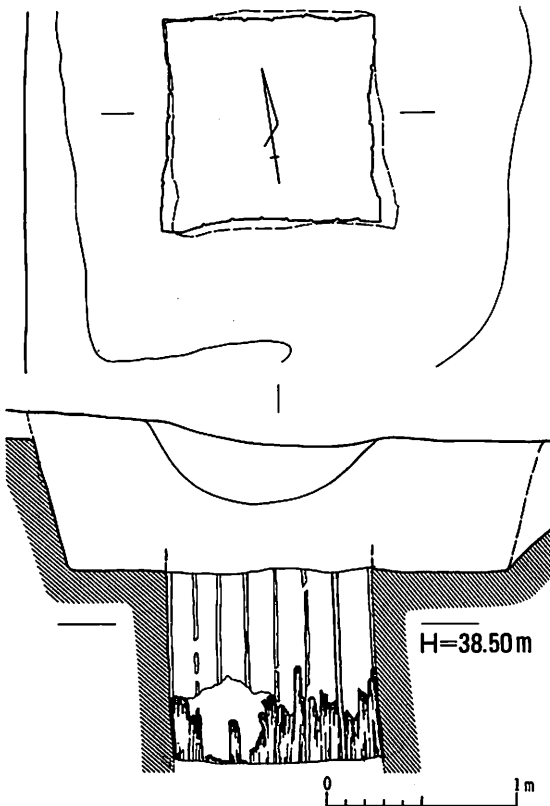
第1節 平安時代

1 井戸206 (第38・39図, 図版第66上, 第72)

地表下約130cmで、まず円形の土壇として検出している。さらに掘り進めることにより、直下で井戸206を検出した。遺物はほとんど上部の土壇内の検出であり、斜面に平行する堆積状態であった。井戸上部に水平に据えられていた遺物がその後陥没したものと思われる。

井戸内部は7～9枚の縦板で方形に組まれており、下部にわずかに木質が残っていた。木組は上部の土壇まで組まれていたものと思われる。井戸底部は砂層であり、存在が予想された横棧や曲物は検出されなかった。

瓦器(1) 内面のヘラ磨きはスキ間無く施されており、体部・底部をほぼ同時に磨いている。外面は口縁部に段を作る強いヨコナデが入り、この部分にはヘラ磨きは見られない。体部はおよそ上下3段に分ける幅広いヘラ削りが行なわれており、その後、円周を5分割するヘラ磨きがスキ間なく施されている。胎土は灰褐色を呈し、やや粗い。器面は十分に炭素が吸着されており、黒色を呈す。この瓦器は鈴木秀典氏による「中河内の編年」(『中世土器研究』第10号)のI-2に対応し、河内からの移入品と思われる。

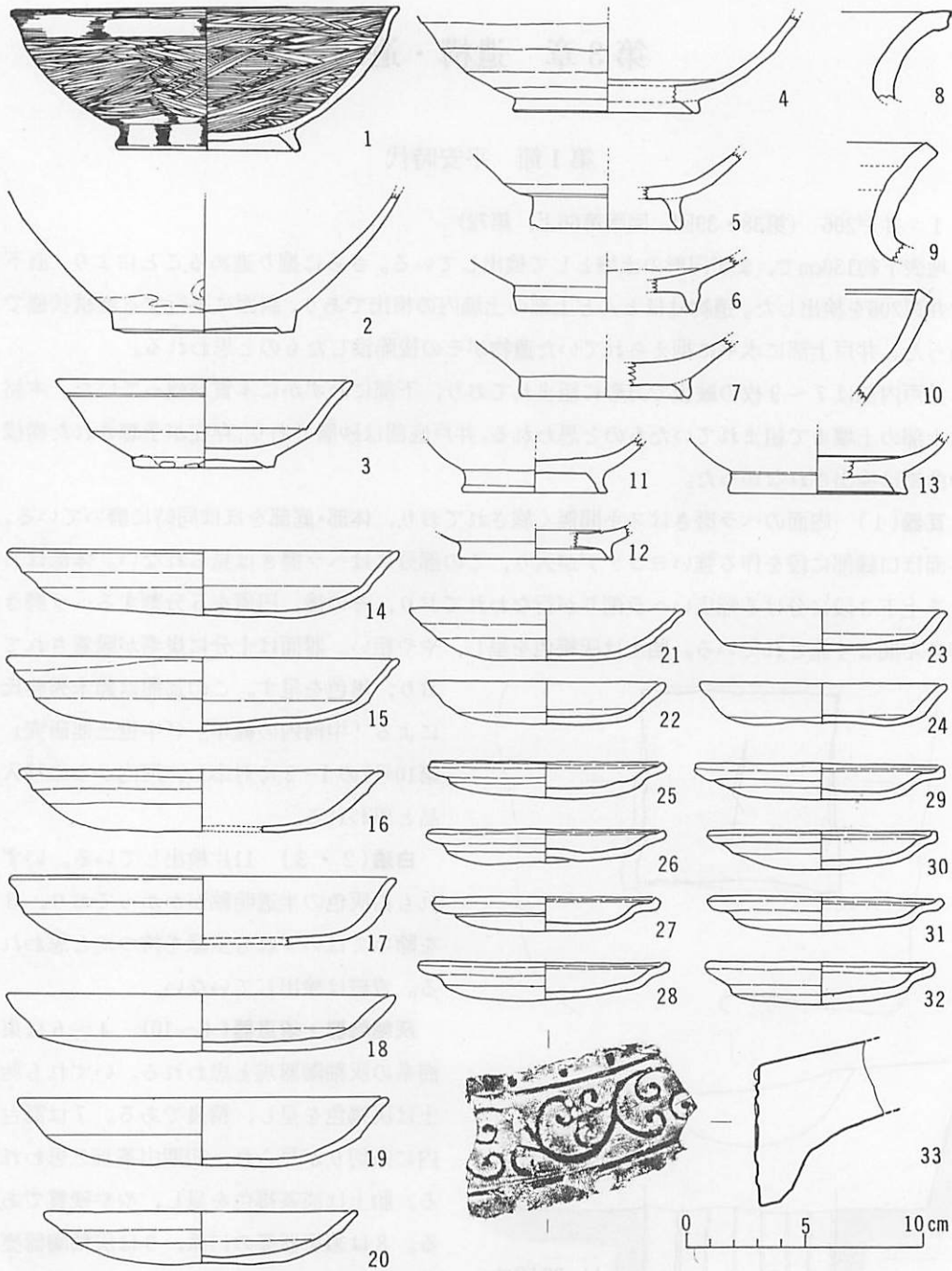


第38図 井戸206実測図

白磁(2・3) 11片検出している。いずれも白灰色の半透明釉がかかっており、3を除いてはいずれも玉縁を持つ壺と思われる。青磁は検出していない。

灰釉陶器・須恵器(4～10) 4～6は東海系の灰釉陶器壺と思われる。いずれも胎土は灰褐色を呈し、精良である。7は高台内に糸切りが見られ、初期山茶壺と思われる。胎土は淡茶褐色を呈し、やや硬質である。8は須恵器壺の口縁、9は灰釉陶器壺の口縁、10は須恵器鉢である。他に壺と思われる破片(数個体分)を検出している。表面格子目状叩き・裏面同心円状叩き、表面斜格子目状叩き・裏面ナデ、表面平行線状叩き・裏面

叩き・裏面ナデ、表面平行線状叩き・裏面



第39図 井戸206 直上土壌出土遺物実測図 1:瓦器 2・3:白磁 4~10:灰釉陶器・須恵器
11~13:緑釉陶器 14~24:土師器皿A₁タイプ 25~32:土師器皿Cタイプ 33:瓦

同心円状叩きナデ(灰釉)等である。

緑釉陶器(11~13) 11は暗灰褐色の硬質な胎土であり、濃緑色の釉がかかっている。高台内には糸切りが見られる。12は灰褐色~淡茶褐色の硬質な胎土であり、淡緑色の釉がかかる。東海系のものと思われる。13は暗灰褐色の硬質な胎土であり、濃緑色の釉がかかっている。高台には段を作っている。近江系と思われる。

土師器皿(A₁タイプ14~24, Cタイプ25~32) A₁タイプは口径16.5cm~10cmを測るものを検出している。端部はすべて外反する。口縁部は2段にヨコナデを施し引き上げるものが多く、他に1段で引き上げるものがある。胎土は、2段ナデのものは淡茶褐色を呈し軟質、1段のものは赤褐色を呈しやや硬質である。Cタイプは10cm級のみである。胎土は赤褐色~灰褐色を呈し砂分を含み軟質であり、A₁タイプ2段ナデの胎土に類似する。

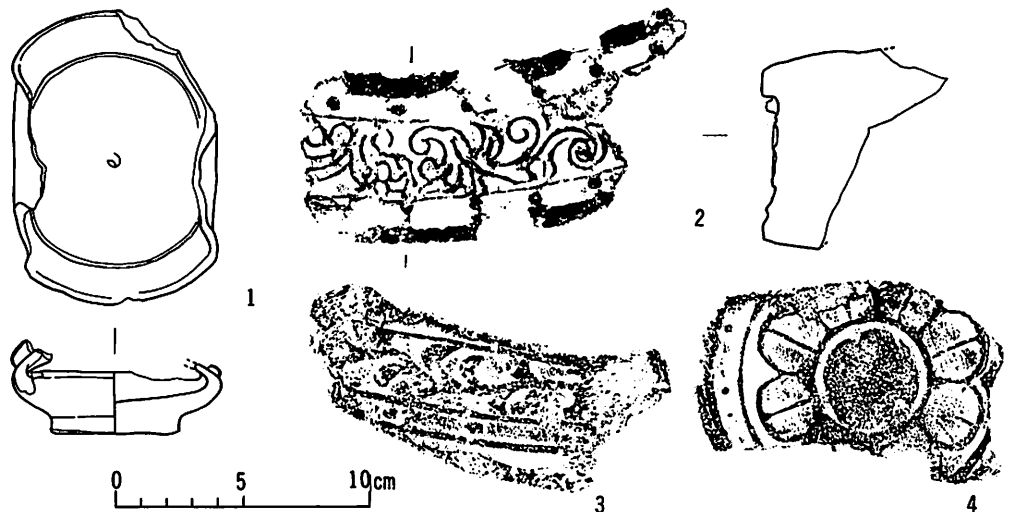
土師器皿は、平安京左京四条一坊のSE-8より出土した「寛治五年(1091)」の記銘のある練鉢に供伴する土師器皿に較べ一時期先行するものと思われる。

瓦(33) 右から左へ流れる唐草文であり、瓦当面より範の方が大きい。側面は円弧に垂直に切っており、顎は2段にヘラ削りされている。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。京都近郊の産と思われる。

井戸206は、11世紀中葉ごろに廃絶されたものと思われる。

2 平安時代の遺物(遺構外) (第40図)

緑釉耳皿(1) 地下室102内より出土しており、客土中に混っていたものと思われる。ロクロ成形されており、ヘラを使用した痕は見られない。高台裏面は糸切されている。器面には緑釉が施されていたものと思われるが、風化が著しく判然としない。胎土は淡茶褐色を呈し、きめ



第40図 緑釉耳皿・瓦実測図及び拓影

細かくやや軟質である。京都近郊の産、10～11世紀ごろと思われる。

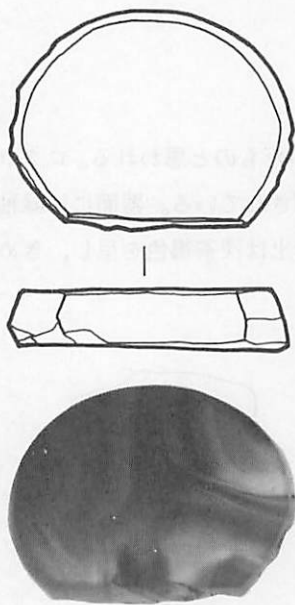
軒瓦(2～4) 室町後期～江戸初期の瓦溜めの中より後世の瓦と供に検出している。

2は、文様中心部が「C」の字を向い合せたようになっており、左右に複線の唐草文を配置している。文様右下には「小」の字が読める。胎土は灰褐色を呈し、砂分は多い、表面は黒褐色を呈する。京都市左京区上高野にある小野瓦窯の産、10世紀ごろのものと思われる。

3はやや太めの唐草文である。範は瓦当面より大きく、瓦当の曲線と合っていない。布目は瓦当面直前までおよんでいる。瓦当面にはハナレ砂を使用しており、砂が多く付着している。胎土は灰褐色を呈し、砂分をやや含んでいる。11世紀ごろのものと思われる。

4は八葉の単弁蓮華文であり彫りは浅い。中房は4ヶ所にくびれがある。珠文は「大・小・小」の順に並んでいるものと思われる。胎土は淡黄褐色を呈し砂分を含む。12世紀ごろのものと思われる。

石帯(第41図) 白濁した半透明の縞文様のある淡赤褐色の瑪瑙製の丸柄石帯である。幅3.7cm、天地2.8cm、厚さ7mmである。表面および側面は丁寧に研磨され光沢を帯びているが、裏面はスリガラス状で光沢は帯びていない。裏面に取付用の穴は穿たれていない。4・5位の官人が用いたものと考えられる。



第41図 石帯(実大)

A₃タイプ 大皿(口径約12cm)と小皿(口径約8.5cm)で構成されている。大皿の口縁部は直線的に立ち上り、内面立ち上り部に指による凹凸が見られる。内底面は、一方向ナデ、口縁部は、ヨコナデを施し、最後は上方に引き上げられている。調整の最終段階として、端部に面トリナデが施されている。

4は八葉の単弁蓮華文であり彫りは浅い。中房は4ヶ所にくびれがある。珠文は「大・小・小」の順に並んでいるものと思われる。胎土は淡黄褐色を呈し砂分を含む。12世紀ごろのものと思われる。

第2節 鎌倉時代

1 井戸205 (第42～44図, 図版第68・73・74)

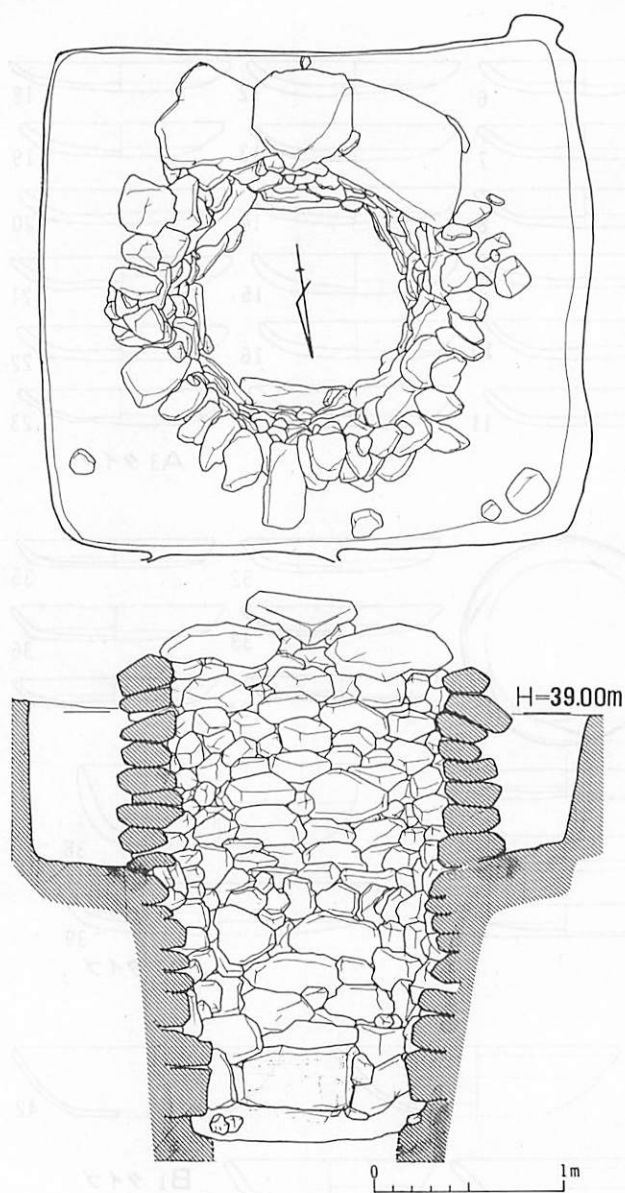
地表下約130cmで最上部の石組を検出している。最上部は50cmを測る大石が使われており、これが井戸存続時の最上段と思われる。石組はほとんど河原石で組まれているが、最下段は花崗岩質の切石(長辺約60cm)を向い合わせて組んでいる。

井戸内部は上部より約150cmまで小石を多く含む暗茶褐色土で埋められており、下層は黒褐色の粘質土であった。この層上部より多量の遺物を検出した。また最下部には、曲物又は木組の存在が予想されたが検出できなかった。

土師器皿(A₃タイプ1～23, A₂タイプ24～39, B₁タイプ40～45, Dタイプ50～54)

褐色系2セット(A₂タイプ, A₃タイプ), 白色系1セット(B₁タイプ)が出土しており、他に少量のDタイプと, A₂タイプの変種と考えられる皿を検出している。A₃タイプが土師器皿の約85%を占めている。

A₃タイプ 大皿(口径約12cm)と小皿(口径約8.5cm)で構成されている。大皿の口縁部は直線的に立ち上り、内面立ち上り部に指による凹凸が見られる。内底面は、一方向ナデ、口縁部は、ヨコナデを施し、最後は上方に引き上げられている。調整の最終段階として、端部に面トリナデが施されている。



第42図 井戸205実測図

や、中心部に近い所に残るものがあり、直接器形を作る要素にはなっていない。表面調整は、 A_3 タイプ小皿の調整に加え、口縁部のみのヨコナデが施されている。胎土は赤褐色～淡茶褐色を呈し、均質で、大皿ほど砂分を含まない。

38・39は、 A_2 タイプ大皿の変種と考えられるもので、淡茶褐色の、砂分をほとんど含まない精良な胎土であり、成形も歪が少なく、全体的にいい作りである。

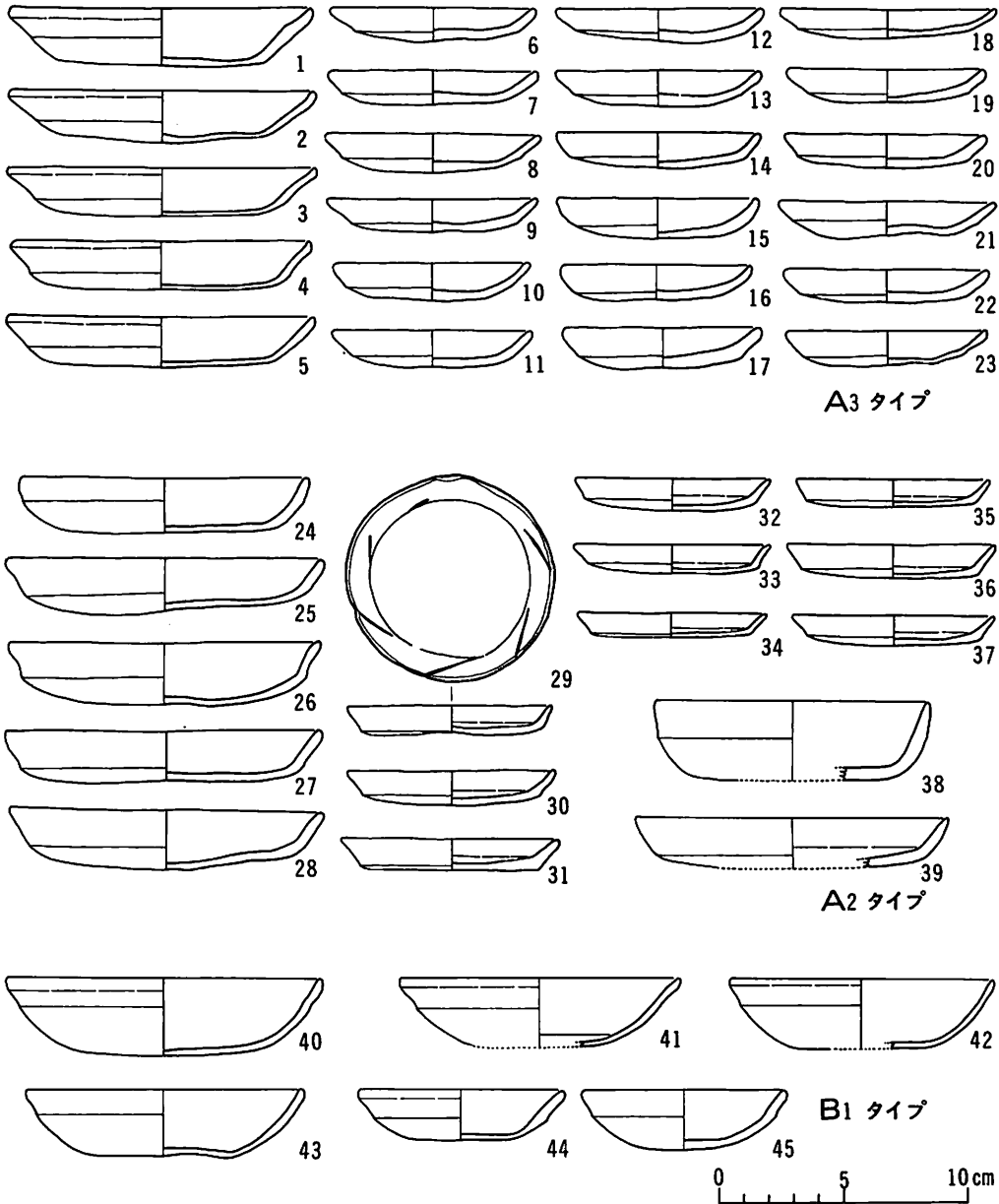
B_1 タイプ 灰白色の胎土を使用し、大(口径約13cm)・中(口径約11cm)・小(口径約8.5cm)の3種がある。器形は埴に近い。いずれも小片の状態であった。なお、へそ皿は伴出してない。

Dタイプ 出土数が少なく、7片検出したのみである。大別すると、大(口径約7.5cm)・小(口

小皿は、口縁部をゆるやかに引き上げる器形をとっており、内底面は一方向ナデ、さらに、口縁部よりかなり中心部に、前進するかたちでヨコナデ(「の」字状)が施されている。胎土は、大皿・小皿共、茶褐色を呈し、砂分をやや含む。

A_2 タイプ 大皿(口径約12.5cm)と小皿(口径約8cm)で構成されている。大皿は、口縁部がゆるやかに立ち上る器形をとる。内底面は一方向ナデ。口縁部のヨコナデは、中心部にかなり前進するかたちで施されている。ナデ調整の終りは、上方に引き上げられているが、端部まではおよぼず、途中で終るものが多い。胎土は砂分をかなり多く含む、茶褐色～赤褐色を呈す。

小皿は、 A_3 タイプ小皿に比べ薄手で、立ち上り部に角がつく。成形上の特長として、内面立ち上り部付近、接線方向に、長さ約1～2cmのヘラ状のミゾ痕が7～8ヶ所残っている。この痕跡は、外周に近い所に残るもの



第43図 井戸205出土遺物実測図(1)土師器皿

1~23: A₃タイプ 24~39: A₂タイプ 40~44: B₁タイプ

径約5cm)の2種があり、大は茶褐色～灰褐色を呈する褐色系の土を使用しており、小は白色系の土を使用している。

井戸205で検出した土師器皿は以上ですべてである。最も多量に検出したA₃タイプは、大皿がことごとく $\frac{1}{3}$ 以下の破片であり、小皿も完器はごくわずかである。これに対してA₂タイプは、出土数が少ないにもかかわらず、そのほとんどが完器に近い状態で出土している。なお、燈明痕のあるものは見られない。

瓦器(56~58) 3点検出して
いる。3点とも完器でありこの
他に瓦器のものと思われる破片
は、1点も検出していない。56
は鉢形で、高台を持たない。体
部は5弁の輪花状になっている
ものと思われるが、退化が進み、
わずかに痕跡を残す程度である。
内底面に菊花文、内面体部にレ
コード状のヘラ磨きがかなりの
間隔をあけて施されている。表
面は一樣に炭素が吸着されてお
り、黒色を呈する。57・58は、
砂分を含んだ比較的粗い胎土で、
表面調整は回転ナブのみ行われ
ており、ヘラ磨きは見られない。

炭素吸着も不十分で、一部が黒化しているにすぎない。

瓦質羽釜(47・49)・土鍋(46・48) それぞれ2点ずつ出土している。4点とも80%以上の残
存率を示し、46は完器である。井戸205で検出した羽釜・土鍋の破片と思われるものは、すべて
この4点の同一個体であり、他に破片は無い。46は、外面底部にわずかにススが付着している
がほぼ未使用の状態である。口縁一部が炭素吸着により黒化しているが、他は灰白色の胎土を
示す。47は外面に多くススが付着している。内面・口縁部は、炭素吸着により黒色を呈してい
る。48は外面にススの付着、内底面に炭化物の付着が多い。炭素吸着は、口縁部のみに見られ
る。49は48とほぼ同様の状態を示す。

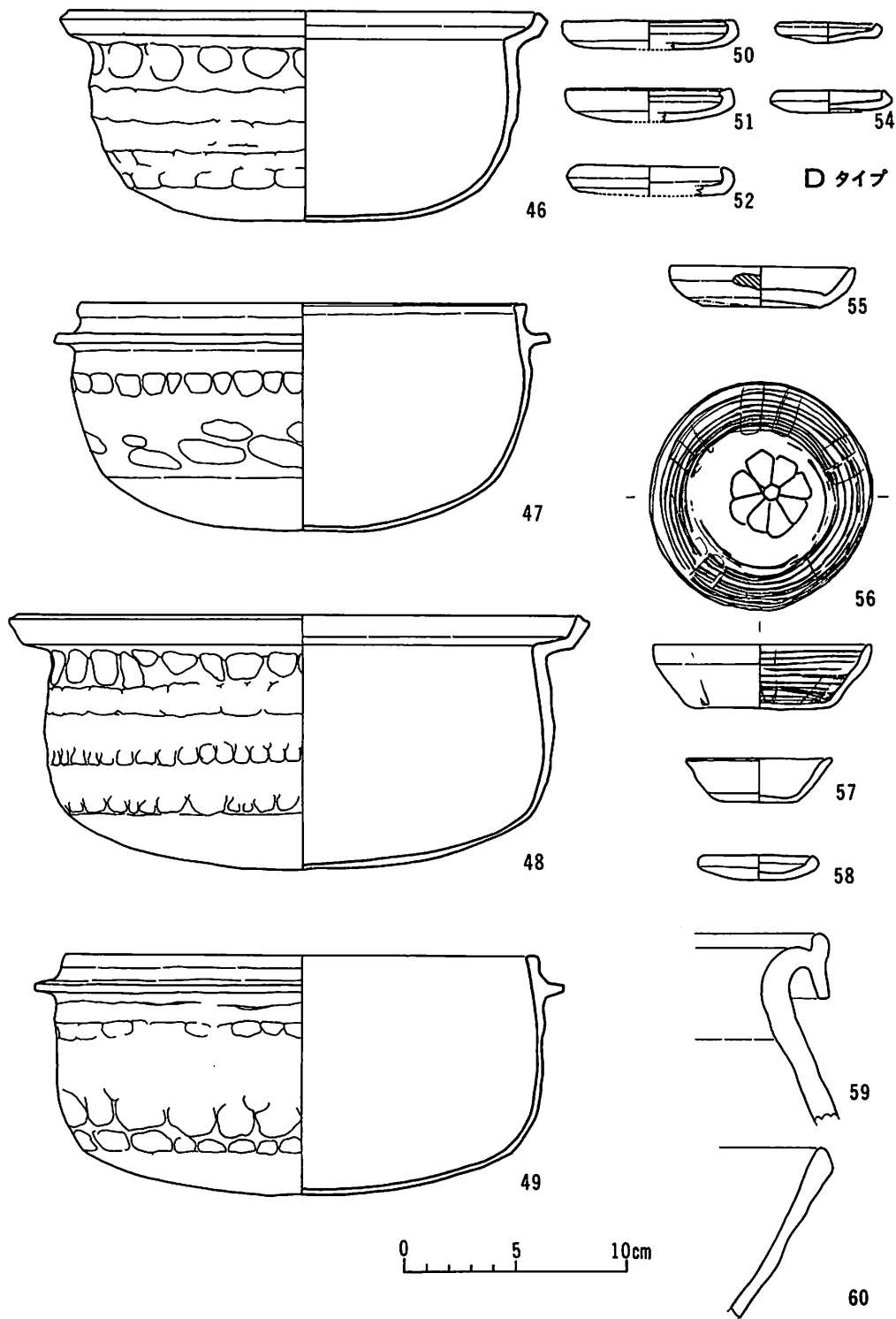
羽釜・土鍋は以上のように小型・大型器が、それぞれ一点ずつ出土している。作りの違いは、
口縁部にのみ見られると考えられ、なんらかのセット関係が認められる。

白磁皿(55) 外底面を除いて半透明の白灰色釉がかかっている。側面に、重ね焼による釉の
乱れが見られ、一部をヤスリで修正している。中国南部の産と思われる。

他には、常滑の大甕(推定口径50cm)(59)、東播系鉢(60)、青磁碗の破片が検出されたが、い
ずれも小片であり、井戸使用中に落下したものか、埋め戻しに使った土の中に混っていたもの
と思われる。以上が井戸205の出土遺物のすべてである。一般に井戸内で遺物が多量に検出され
る場合、ゴミ捨て場に使われたかと思われる雑多な様子を見せるのが多いのに対して、井戸205
では遺物の出土状況が、比較的整然としており、完器も多い所から、祭祀的な意味をもって一
括封入されたものと考えられる。羽釜・土鍋が出土しており、これらを蔵骨器と考え、井戸が
転じて墓として使用されたとすることもできる。ただし、骨などは検出していない。また、A₂

第1表 井戸205 遺物出土表 (数量は完器に換算)

		総重量(g)	個体重量(g)	数量(個)	備 考
土 師 器	A ₃ タイプ大	5,700	90	65	完器 0枚
	小	8,500	42	220	完器 13枚
	A ₂ タイプ大	1,000	100	10	完器 5枚
	小	800	32	24	完器 17枚
	B ₁ タイプ大			2	
	中			7	
	小			4	
	Dタイプ大			3	
	小			2	
瓦 器	碗	11	55	1	
		12	25	1	いずれも完器
	皿	13	16	1	
羽 釜 ・ 土 鍋	羽釜	2	390	1	
		4	570	1	
	土鍋	1	480	1	完 器
		3	750	1	
白 磁	皿	10	70	1	口縁1部欠損
そ の 他	常滑大甕, 備前甕, 片口, 土鉢 青磁 (いずれも小片)				



第44図 井戸205出土遺物実測図(2)

46~49: 羽釜・土鍋 50~54: 土師器皿Dタイプ 55: 白磁 56~58: 瓦器 59: 常滑大壺 60: 片口

タイプの土師器皿は、厄除けなどの意味を持って打ち割ったため、破片の状態を示していると考えられる。

井戸205は、土師器皿・瓦器等の様子より、13世紀後葉に廃絶されたものと思われる。また常滑大甕は、赤羽一郎氏による常滑窯の編年によれば、およそ1300年前後に設定されている。

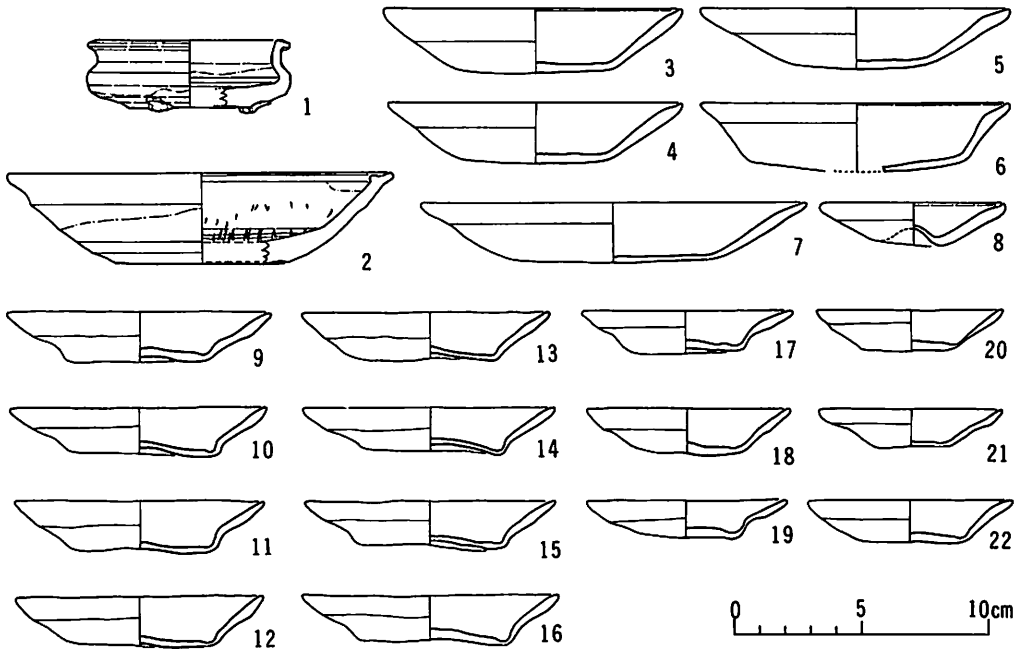
現在京都近郊で土師器皿の生産が行なわれていたとされている場所は、岩倉(幡枝・木野)、深草、嵯峨野(旧深草)であり、岩倉を除いては、その存在は文献でのみ知られているだけである。これらに各タイプの土師器皿を直接分り当てることは、無理であり、また1ヶ所で1タイプのみ生産していたとは限らず、土師器皿窯の検出がないかぎり明らかにはならないであろう。現在まで明らかに土師器皿窯と考えられる遺構は検出しておらず、各タイプの土師器皿がどの地で生産されていたかは判然としない。

第3節 室町時代

1 土塋207 (第45図, 図版第68下, 第75)

暗茶褐色土層で検出した円形の土塋墓である。上部から下部まで約90cmを測り、上部径130cm、底径80cmを測る。遺物は、上部より約30cmの所で集中的に出土した。ただし、西側上部は、柱穴204(やや時期が下ると思われる)により切られており、多少の遺物が混入している可能性がある。出土遺物は、土師器皿のA₃タイプが約85%(重量比)を占め、他にB₂タイプ、B₄タイプと、瀬戸系の香炉とおろし皿を検出している。この土塋の年代は、15世紀中葉頃と思われる。

瀬戸・美濃系陶器(1・2) 香炉は淡茶褐色の精良な粘土であり、貫入の多い淡緑色の灰釉



第45図 土塋207出土遺物実測図

がかけられている。おろし皿は、灰白色の精良な粘土であり、口縁部に黄褐色の灰釉がかけられている。外面底部は糸切りが見られる。

土師器皿(3~22) A₃タイプ(9~22)は、大皿(口径約10cm)、小皿(口径約7.5cm)がある。両者は小片では区別が付きにくい、ほぼ同量数検出していると思われる。器形は、歪が大きく、正円をなさない。表面調整は、内底面が一方向ナデ、口縁部のヨコナデは「の」字状に施されている。内面立ち上り部には強いナデによる凹部が残る。胎土は赤褐色~茶褐色を呈する。

B₂タイプ(3~6, 8)では中皿(口径約12cm)とへそ皿を検出している。中皿は、深手の器形をとり、器壁はやや厚手である。表面調整は内面底部を一方向ナデ、口縁のヨコナデは、内面底部にかなり前進して施されており、最後は反転し上方に引き上げられている。胎土は淡赤褐色を呈し、砂分を多く含んでいる。へそ皿は8の他、かなり退化したものが出土している。B₃タイプ大皿(7)は2点検出した。扁平な器形をとり、表面調整は中皿とほぼ同様であるが、口縁部のヨコナデは中皿ほど前進していない。胎土は淡茶褐色を呈し、砂分をやや含む。B₃タイプは、柱穴204からの混入品の可能性がある。

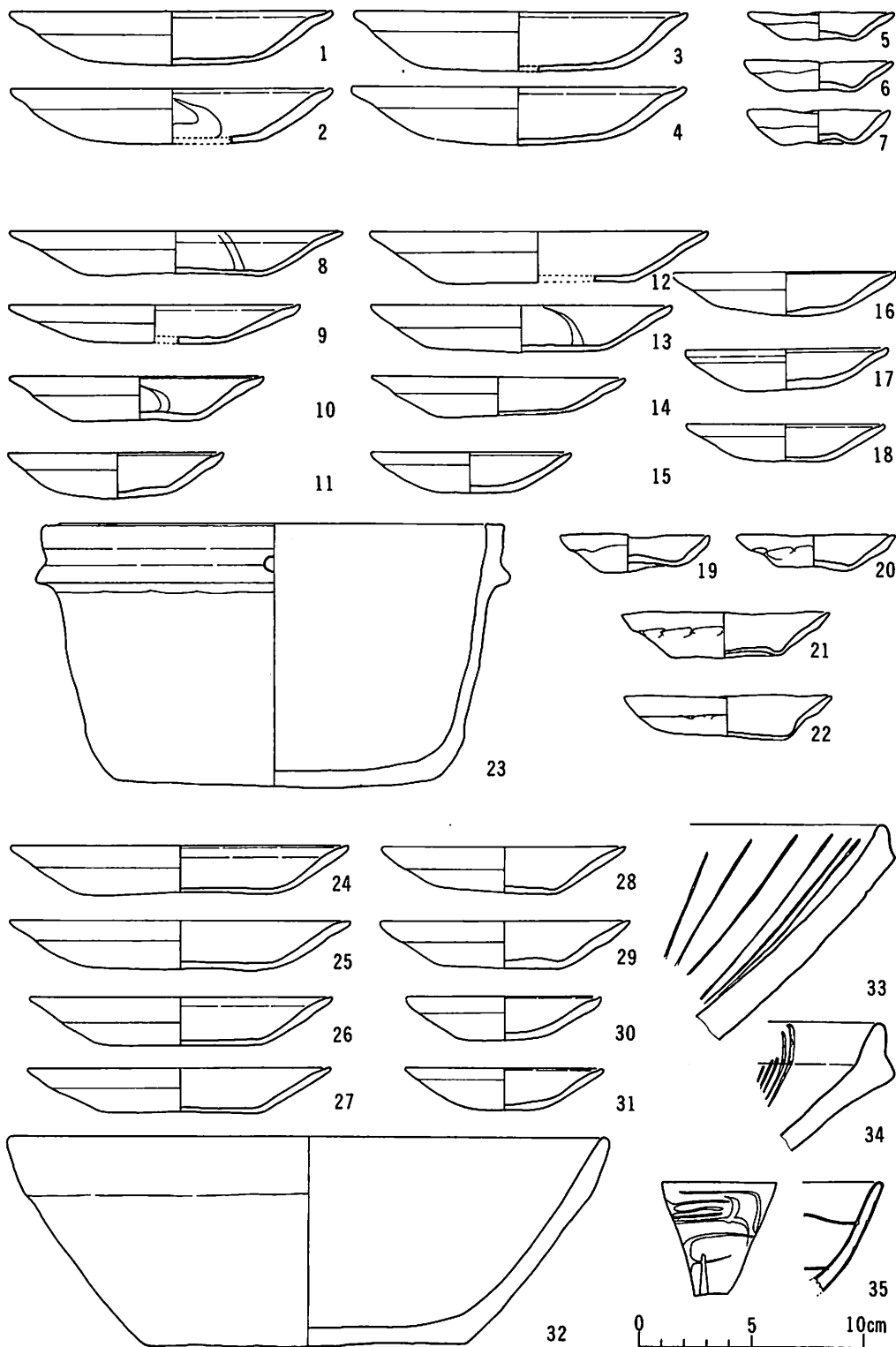
2 室町時代後期建造物 溝201・203・204 (第46図, 図版第71上, 第70下)
柱穴201~203 (第46図, 図版第69, 第70上)
井戸202 (第36図)

室町後期に存在したと思われる建造物を、調査区東側を中心に検出した。南北に走る溝201・203は、調査区の北部中央・東側で検出され、それぞれ16世紀前葉に相当すると思われる遺物を検出している。溝201は幅1.7m、深さ1.5mを測り、南端は調査地のおよそ $\frac{1}{3}$ で止まっている。北へは調査地をはずれ、さらに延びていたものと思われる。溝の壁面・底部は素掘りの状態であったが、掘り込まれた地山は黄褐色の粘土層であり、保水性は良好であったと思われる溝内の堆積であった。溝203は土壌201により南端部を切られており、上部は土壌103・攪乱等で削られていたのであるが、溝201に対応する形態をとっていたものと思われる。溝201・203の間では、柱穴203(方形〔一辺約160cm〕をなし、自然石の根石がある)が検出された。溝よりやや古い時期の遺物を検出している。

また、調査地南部においても、溝203と同様の柱穴(根石は花崗岩質の切石)を検出しており、同時期に存在したものと思われる。しかし、遺物の供伴はなく、確証はえられなかった。井戸202からは、溝201・203と同時期の遺物が検出されている。また、調査地中央を東西に走る溝204も上記の遺構群に対応するものかと思われる。

建造物は、三条坊門通に入口を持ち(柱穴201, 202)、調査地の北方(竜池小学校)あたりにかんりの規模の建物が存在していた可能性がある。

柱穴203(1~7) 土師器皿A₃タイプ(5~7)、B₃タイプ(1~4)のみ検出している。A₃タイプは検出量が少なく、詳細にはわからない。B₃タイプは、B₂タイプに比べ、扁平な器形をとり、口径約14.5cmを測るもののみ検出している。胎土は赤褐色を呈し、やや砂分を含む。柱穴



第46図 柱穴203(1~7)・溝203(8~23)・溝201(24~35)出土遺物実測図

203の土師器皿は、B₃タイプ初期形を示すものと思われる。ここでは、14.5cm級のみ検出されているが、これまで検出した他の遺跡の資料によると、9～16cmまでの口径を測るもので構成されているものと思われる。

溝203(8～23) 土師器皿A₃タイプとB₃タイプ・羽釜・備前焼の大甕を検出している。土師器皿A₃タイプ(19～22)は、土壇205と同様、2種の口径を測る(大皿口径約9cm, 小皿口径約7cm)が、さらに小型化している。胎土は茶褐色を呈し、砂分を含む。B₃タイプ(8～18)は柱穴203のB₃タイプに比べ、さらに浅くなっており、基本的に4種の口径を測り(約15.5cm, 13.5cm, 11.5cm, 9cm), 13.5cm級と9cm級が数量的に多く検出されている。胎土は灰褐色を呈し、砂分が少なく、柱穴203のB₃タイプに比べ精良である。内面立ち上り部に入るヨコナデの最後は、逆転して口縁部まで一気に引き上げられている。9cm級は、ほぼ中心より「の」字状にナデが入り、のちに中心部を軽くナデている。溝203の土師器皿は、山科本願寺焼土層より出土した土師器皿に類似する。羽釜(23)は、灰白色～茶褐色を呈す軟質の胎土であり、表面は黒色を呈す。また鏝より上の部分に穴があいている。

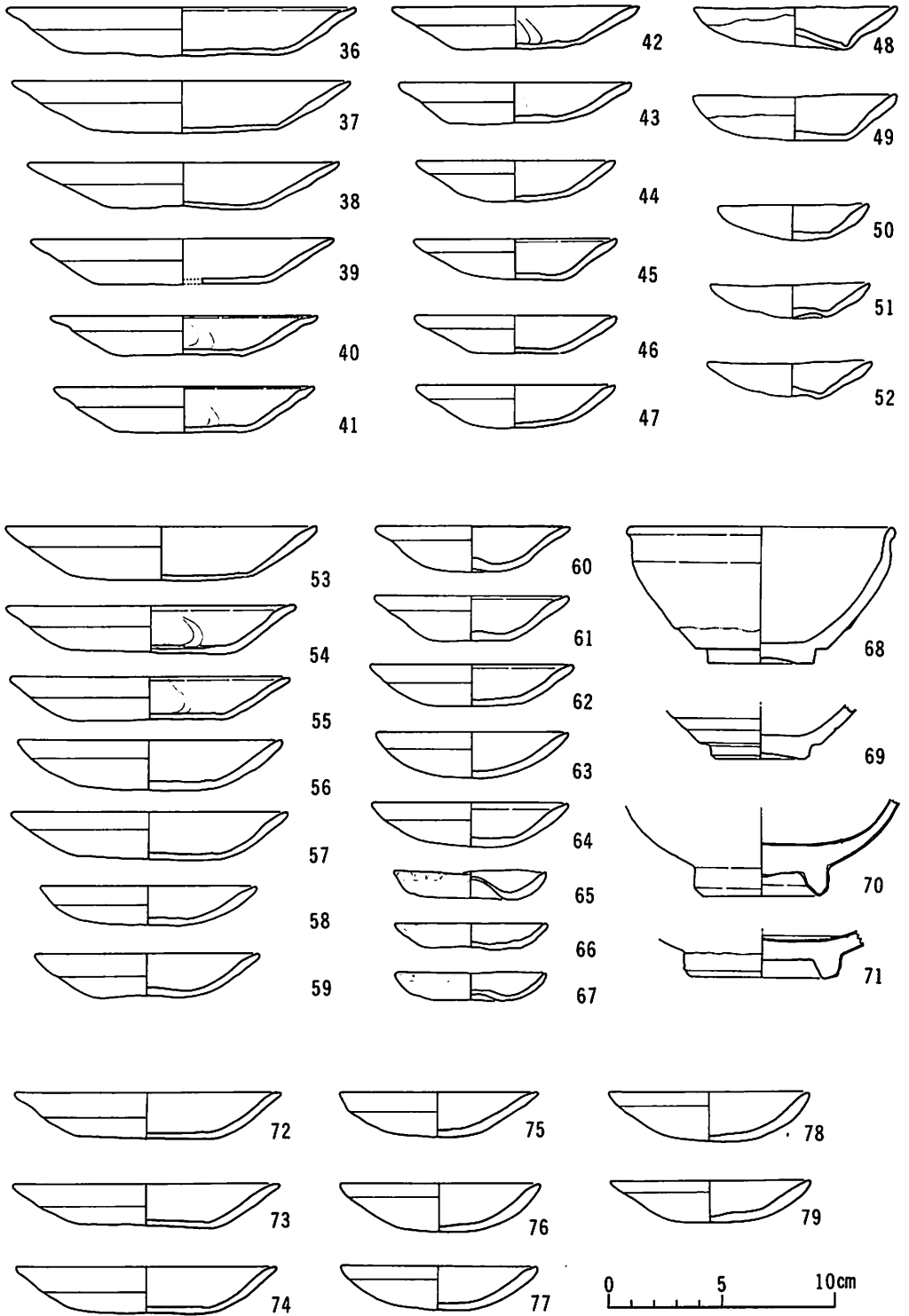
溝201(24～35) 土師器皿・青磁・摺鉢・甕・土製鉢・火鉢・瀬戸系陶器等を検出しており、時期的には溝203とほぼ同時期のものと思われる。土師器皿は、B₃タイプ(24～31)のみ検出している。構成は溝203と同様である。摺鉢は備前焼(34)と円波焼(33)がある。土製鉢(32)は茶褐色の軟質な胎土であり、表面はヘラ等で磨かれており、黒色を呈す。火鉢の一種とも思われる。

3 建造物廃絶以後の遺構 土壇206・204・203 (第47図, 図版第73・76)

土壇206(36～52) 壁土用の粘土を採取した痕と思われる溝状の土壇である(地山は黄褐色の粘土層)。埋め戻しの時に、一部がゴミ捨て場に使われたらしく、土師器皿等がまとまって出土している。土師器皿の構成は、基本的に溝203・201と同様である。ただし、土壇206ではEタイプが見られる。

土壇204(53～71) 土師器皿・青磁碗・天目茶碗・摺鉢・火鉢等を検出している。土師器皿は、B₄タイプ(53～64)と、手づくねのEタイプ(65～67)が出土しており、A₃タイプは見られない。B₄タイプの胎土は、溝201のB₃タイプに比べ茶色味を帯びるが、精良で後出の土壇101の土師器皿B₄タイプの胎土に共通する内面立ち上り部は、粘土を削り取ったため生じたと思われるわずかな溝があり、器形もB₃タイプに較べわずかに丸味を帯びている。口径規格は乱れが生じており、大型器は11.5～14cmの間で集約化が見られ、小型器も9cm弱と10cm弱の近接したグループを作っている。10cm弱の口径を測るものは、内面に径2.5～3cmの底部を持ち、9cm弱のものとは作法の違いを見せている。9cm弱の口径を測るものは、B₃タイプの最小器と同様、内面に「の」字状のナデ調整が行なわれ、中心部に軽く1回のナデが入っている。この土師器皿は、旧二条城成立期間中の石垣より検出した土師器皿に類似する。

美濃系の天目茶碗(68, 69)は、内反り高台を持ち、鬼板で化粧している。釉は茶褐色～黒褐色を呈す。青磁碗(70, 71)は、白濁した青白色の釉がかかる。70は灰褐色のやや砂分を含む胎



第47図 土壙206(36~52)・土壙204(53~71)・土壙203(72~79)出土遺物実測図

土であり、71は淡赤褐色の砂分を多く含む粗い胎土である。

土壌203(72~79) 土師器皿B₃タイプのみ検出している。土壌204で見られた土師器皿の口径規格の集約化が終了した状態を示すものと思われる。

第4節 江戸時代（初期京都銀座）

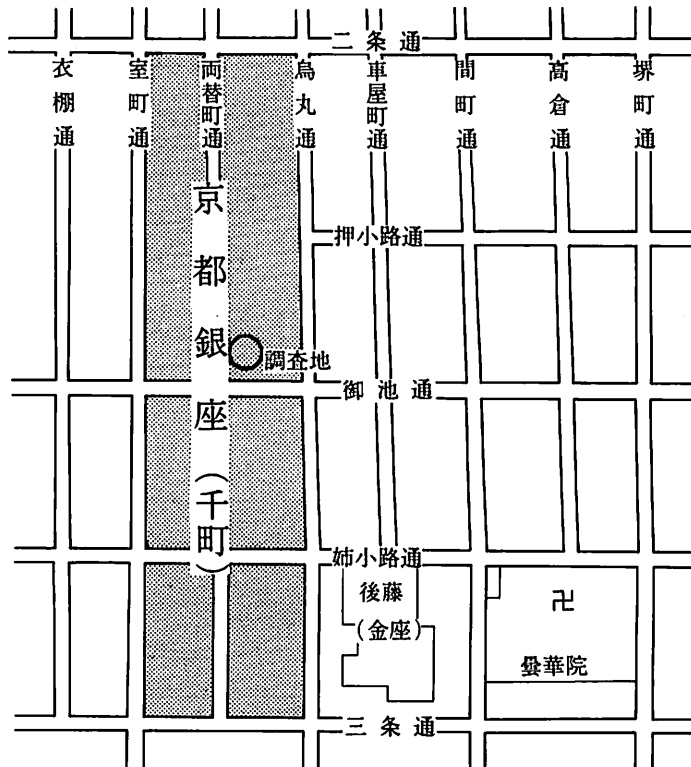
1 土壌101（第49~54図，図版第71下，第78~84）

茶褐色土層最下部で確認した10m²を越える土壌である。土壌内は黒褐色を呈し、遺物は非常に多い状態で、土器・陶磁器類と共に、炭・灰・魚貝類等を多く含んでいた。土壌101は、時期的に初期京都銀座関係の遺構に当り、厨房等からのゴミ捨て場かと思われる。銀座商人は当時一級の富豪であり、その生活がうかがわれる遺物も多く出土している。また土壌102からは、金箔の施された軒丸瓦・鬼瓦が検出されており、銀座商家の建物に使われたものと思われる。なお土壌101の上部遺物は、一部南方部に流れて黒褐色の薄い層を作っており、後世上面が削平されたものと思われる。出土遺物の約7割が土師器皿であり、室町末期の9割以上が土師器皿という状態に比べ、陶磁類がかなり多くなっている。しかし、18世紀に見られるような、陶磁類が土師器皿を圧倒するような状況には至っていない。

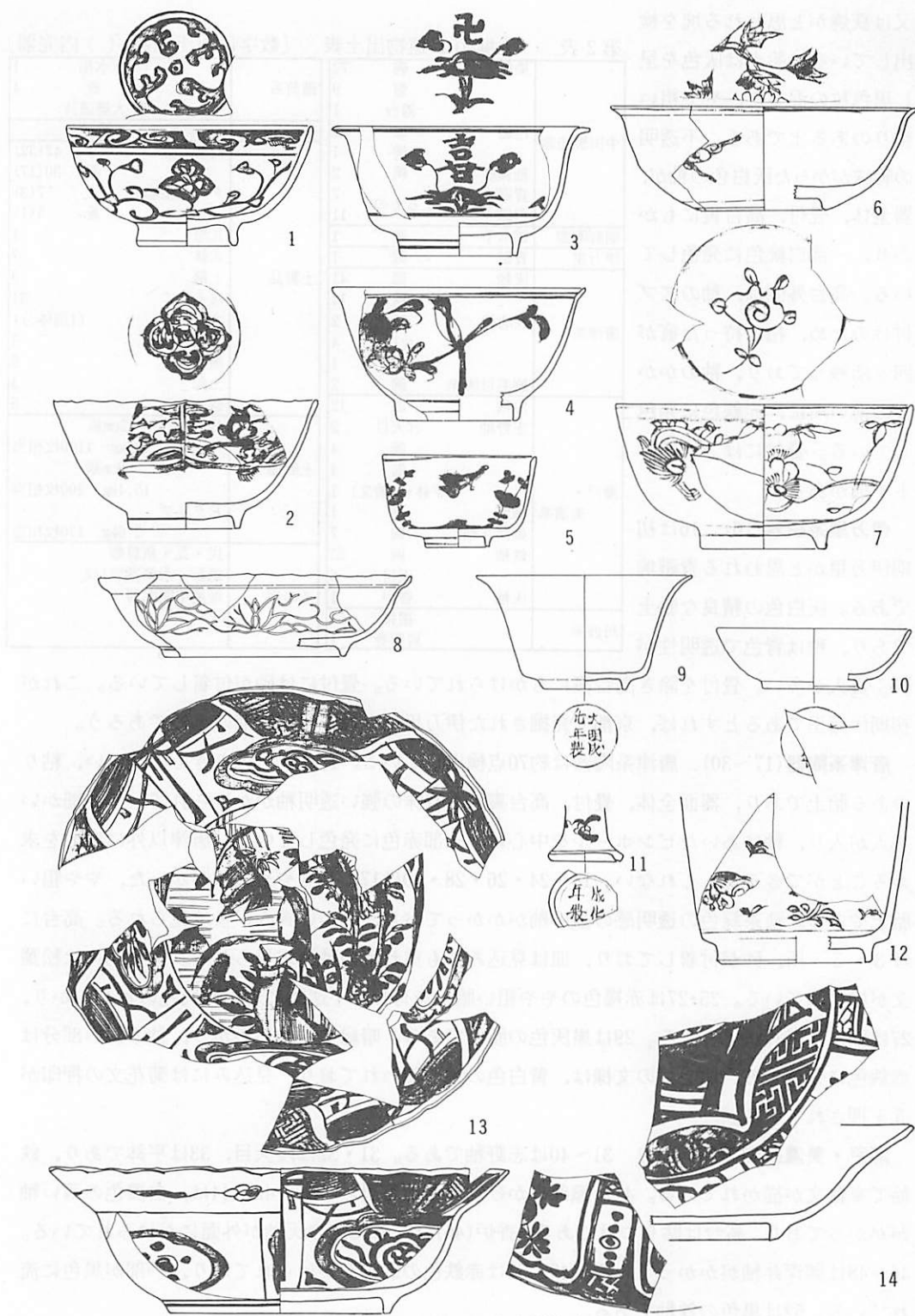
中国製磁器(1~14) 明

末と思われる中国製磁器は、約100点検出している。いずれも白色の磁胎に、染付がほどこされており、坵形を示すものが多い。高台畳付は砂が付着しているものがあり、また、すべてヤスリで修正されている。1・3は数個体検出している。2・6は8と同様、内面体部に型押しによる唐草文かと思われるスカシが不明確ながら入っている。12は花文の一部に釉裏紅が使われており、他にもう一片検出している。芙蓉手の染付は13・14の他に2点を検出している。

朝鮮系陶器(15) 朝鮮産



第48図 江戸初期の調査地付近



第49図 土壙101出土遺物(1)

又は灰焼かと思われる坩を検出している。胎土は灰色を呈し黒色粒の混った、やや粗い粘りのある土である。不透明の青味がかかった灰白色の釉が、器全体、畳付、高台裏にもかかり、一部白桃色に発色している。高台外側は、釉のズブ付けのため、指で持った痕が四ヶ所残っており、釉のかかりの薄い所は、赤鉄色に発色している。畳付には3ヶ所のトチ痕がある。

伊万里系磁器(16) 16は初期伊万里かと思われる青磁坩である。灰白色の精良な胎土であり、釉は青色で透明性が

強く貫入が多い。畳付を除き高台裏にもかけられている。畳付には砂が付着している。これが初期伊万里であるとするれば、京都で発掘された伊万里焼の最も早い時期のものであろう。

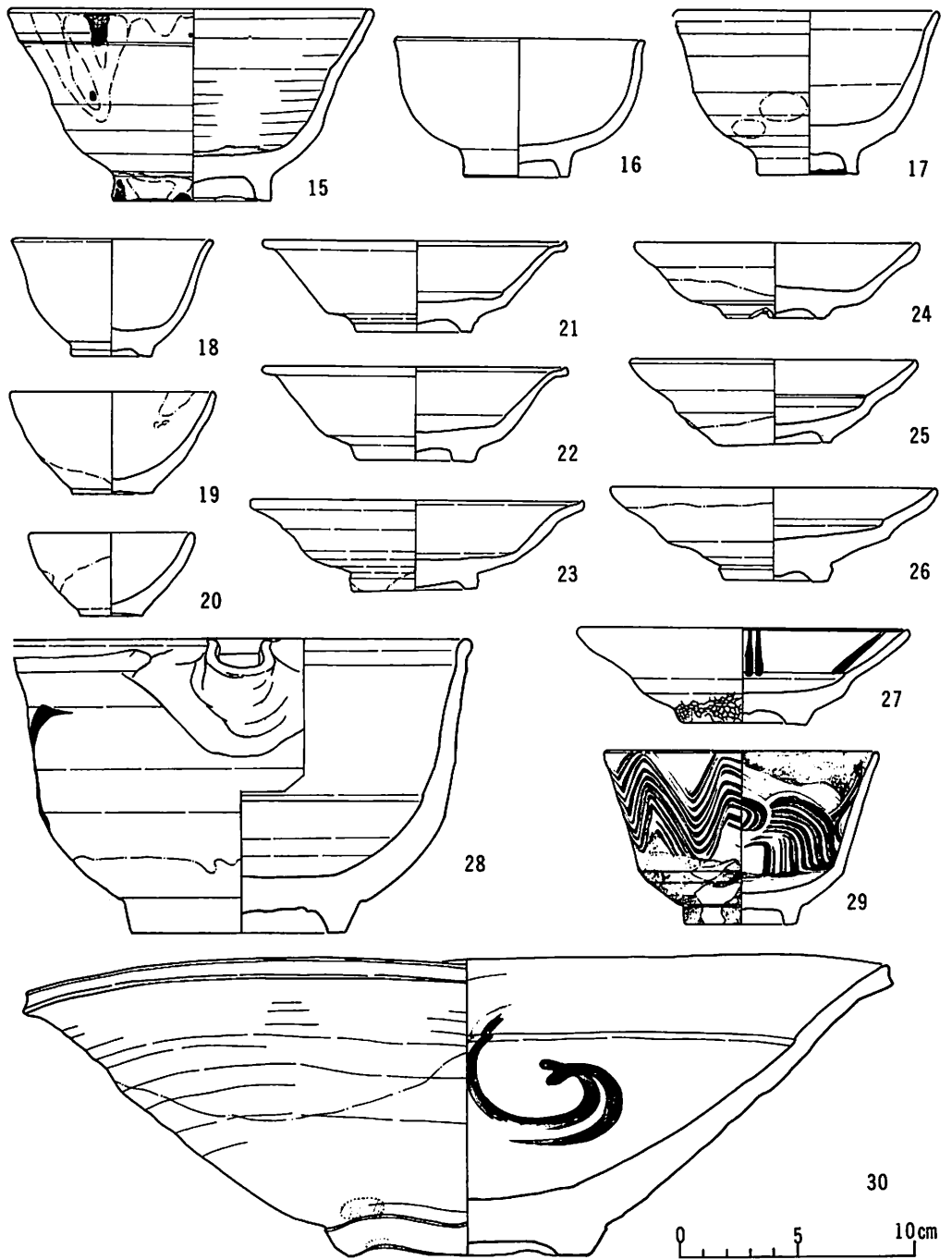
唐津系陶器(17~30) 唐津系陶器は約70点検出している。17は灰白色のきめの細かい、粘りのある胎土であり、器面全体、畳付、高台裏にも青味の強い透明釉がかけられている。細かい貫入が入り、釉にあいたピンホールを中心に、一部赤色に発色している。唐津以外に産地を求めることができるかもしれない。18~24・26・28・30は17よりもやや茶味がかかった、やや粗い胎土である。淡茶緑色の透明感の強い釉がかかっており、細かい貫入が多く見られる。高台には3~5ヶ所、砂が付着しており、皿は見込みにも重ね焼の砂痕が見られる。28・30には松葉文が描されている。25・27は赤褐色のやや粗い胎土を有し、不透明に近い緑灰色の釉がかかり、27は釉にちぢれが見られる。29は黒灰色の胎土である。暗緑色の釉がかかり、釉の薄い部分は赤鉄色に発色する。刷毛目の文様は、黄白色の釉が使われており、見込みには菊花文の押印が5ヶ押されている。

瀬戸・美濃系陶器(31~52) 31~40は志野釉である。31・32は段天目、33は平鉢であり、鉄絵で車輪文が描かれている。41は織部のかけ別け茶碗と思われる。42~44は、白濁色の薄い釉がかかっており、高台は貼りつけである。香炉(45)は淡茶褐色の灰釉が外面にかけられている。46~48は御深井釉がかかっている。49~51は赤鉄色の鉄釉がかけられており、一部が黒色に流れている。52は黒色の鉄釉である。

丹波系陶器(53~56) 摺鉢は約70片を検出している。多くは口縁部がやや肥厚し、内面に段

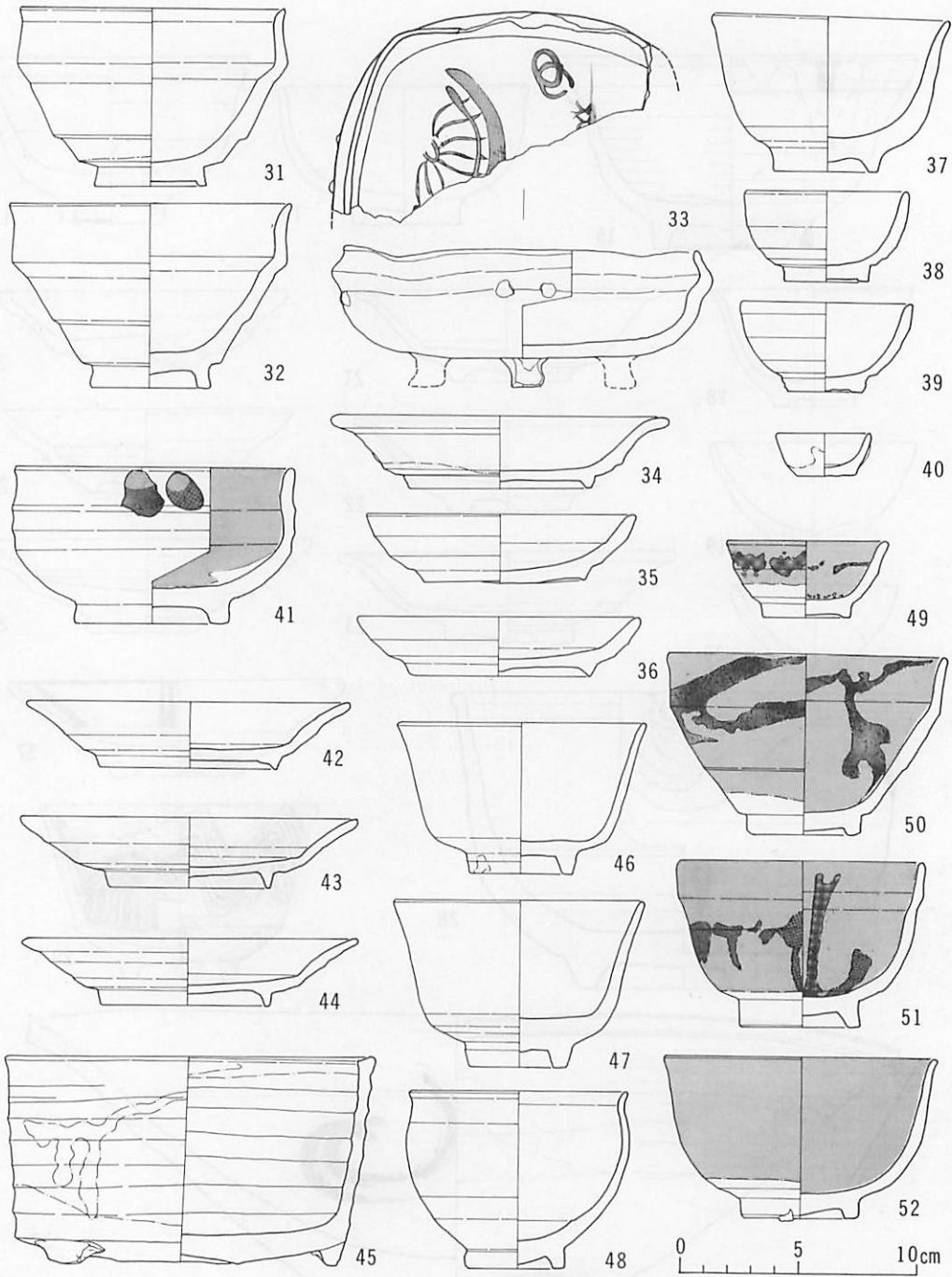
第2表 土壙 101 遺物出土表 [数字は出土点数, () 内完器]

中国製磁器	器名	数量	備前系					
			水指	壺				
朝鮮陶器	御本手	碗 1	常滑系	大壺破片				
	伊万里	青磁 碗 1		大壺破片				
	唐津系	灰釉		皿 41	土製品	筒型壺	身 42(32)	
		絵唐津		碗 14		蓋 30(17)		
				皿 2		ダルマ型壺	身 7(3)	
		刷毛目唐津		片口 4		蓋 5(1)	瓦燈	1
	大皿 1			火鉢		7		
	瀬戸・美濃系	白釉		皿 12		土師皿	土鍋	9
		志野釉		台天目 2			ぼうらく	31
		平鉢(車輪文)		碗 4			大壺破片	(1個体分)
皿 4			火消壺	3				
織部		碗 1	墨壺	6				
御深井釉		碗 7	土鈴	3				
鉄釉		碗 23	盤	5				
灰釉		天目 6	その他	Bタイプ 12cm級				
		香炉 1		116kg 1100枚相当				
丹波系		摺鉢 51	刷衝壺 1	9cm級				
				15.4kg 200枚相当				
			Eタイプ	2.6kg 170枚相当				
			炭・瓦・魚貝類					
			砥石 永楽通宝1枚					
			産地不明陶器					

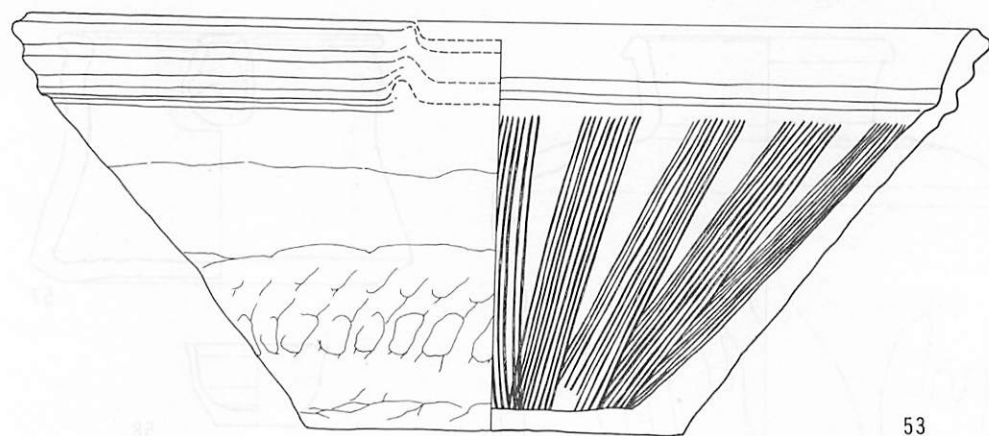


第50圖 土城101出土遺物(2)

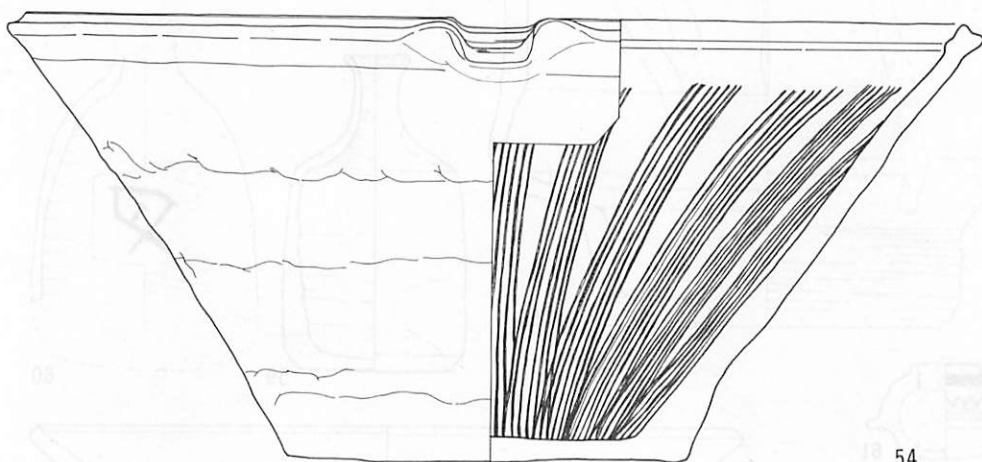
15: 朝鮮系 16: 伊万里系 17~30: 唐津系



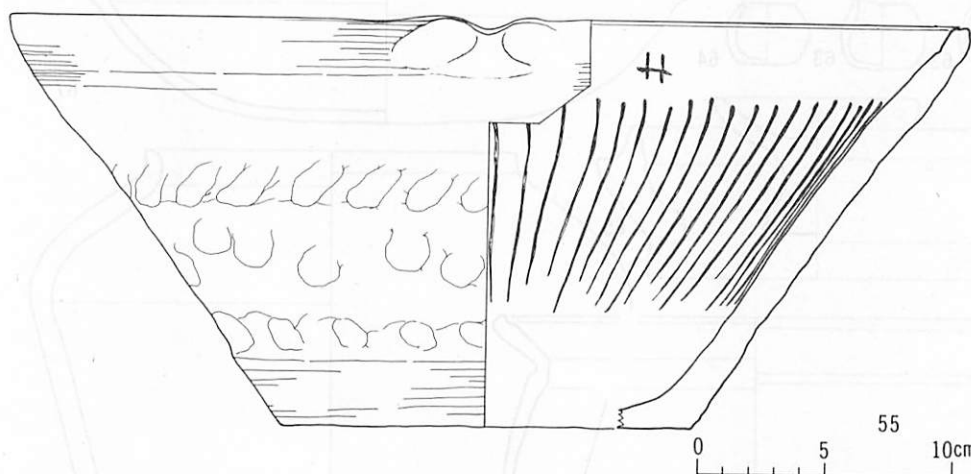
第51図 土壙101出土遺物(3)



53

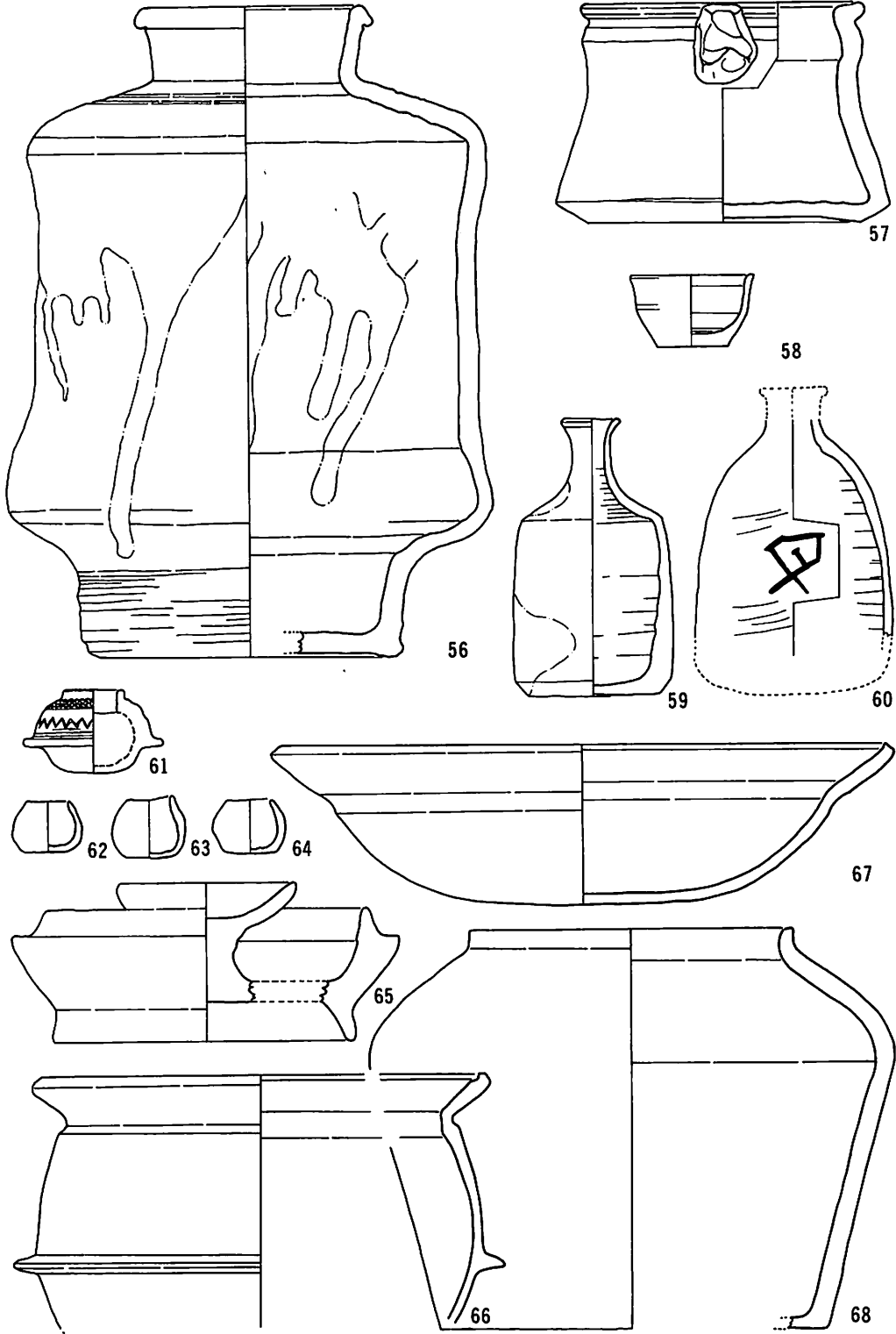


54



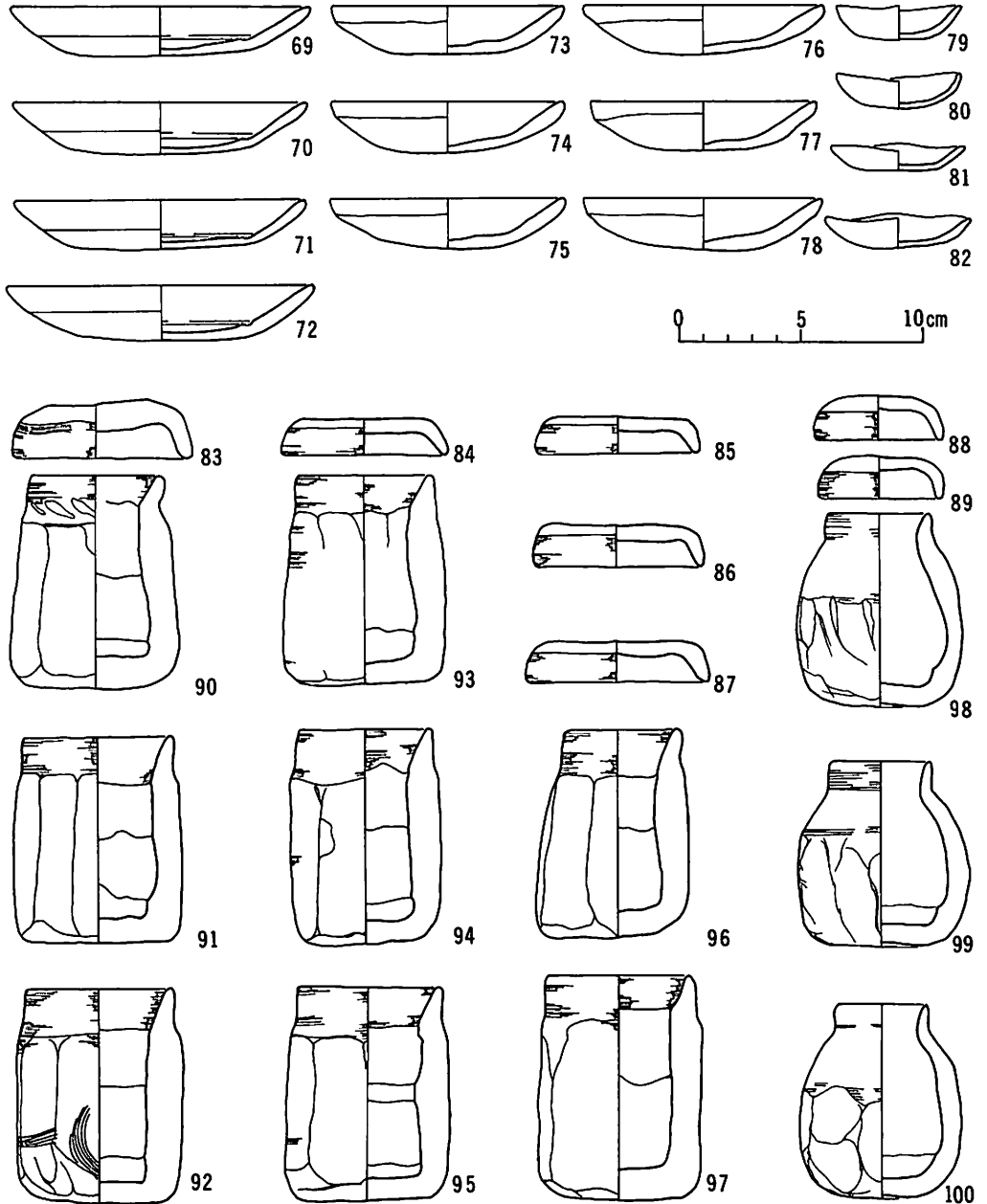
第52図 土壙101出土遺物(4)

(4) 土壙101出土遺物(4) 図52



第53圖 土城101出土遺物(5)

を持つ。丹波系と思われる。備前・信楽と思われるものは検出していない。53は備前のスリ鉢を似ねた口縁部を持つ。胎土は黒灰褐色で、細かい砂分を多く含んでいる。表面は赤褐色を呈し、黄緑色の自然釉がかかる。内底面は弧状にクシ描きしている。54は端部に蓋受け状の凹部が作られており、東海系をまねたものかと思われる。胎土は淡茶褐色～黒褐色を呈し、石英質の小石を多く含む。内底面は、十字と丸のクシ描きをしている。55は、1本クシ描きで、やや生



第54図 土城101出土遺物(6)

69～78：土師器皿B₄タイプ 79～82：土師器皿Eタイプ 83～100：塩壺

産時期の上るものと考えられる。胎土は淡赤褐色を呈し、やや軟質である。内底面は、かなりすりへっている。56は丹波の肩付壺と思われる。胎土は淡赤褐色を呈し、砂分は少ない。外面は赤鉄色に発色し、首から胴にかけて、黄褐色の釉が流れており、他所は淡黄色の釉がウロコ状に付いている。肩の部分には、2本の沈線が入る。

備前系陶器(57~60) 大甕・壺・水注等を検出している。点数は、甕の小片を除くと5点と少ない。57の胎土は暗灰褐色~赤褐色を呈し、表面は赤鉄色に発色している。一部に斑点状になった黄色の自然釉がかかっている。58は糸切りの部分の全面に砂が付着している。器面にはヒダスギが見られる。59・60は、灰褐色で黒色粒を持つ胎土であり、表面は59が赤鉄色、60は暗茶褐色に発色している。

土製品(61~68) 61~64は墨壺かと思われる。胎土は土師質である。61は上下を成形後、張合せている。65は照明器具の瓦燈である。胎土は赤褐色を呈し粗い。66の土鍋は9点、67のほうらくは約30点検出している。共に土師質で、きめ細かく均質な胎土を使用している。土師器皿B₄タイプの胎土に類似するほうらくは、内面の調整に、刷毛目のものと、ナデ調整のものがある。68は火消し壺と思われる。胎土は茶褐色を呈し、軟質で砂分を多く含む。表面は黒色を呈す。他に瓦質の火鉢と、須恵器としては軟質の胎土の大甕を破片として検出している。

土師器皿(B₄タイプ69~78, Eタイプ79~82) B₄タイプとEタイプを検出している。B₄タイプの出土量は、土壌101の全出土量の約7割を占め、大皿(口径約12.5cm)、小皿(口径約9.5cm)の構成となっている。

時期的に前後する他の遺跡では、さらに大径(約15cm)を検出しているのであるが、土壌101においては、出土量が多いにもかかわらず、上記の2種に限られている。大皿は内面に竹ペラによるミゾが入り、最後はミゾのほぼ同じ幅で引き上げられている。土壌203のB₄タイプに比べ、立ち上り部の張りが少なく、ゆるやかに湾曲している。「うつけ」・「ほへ」による成形が定着した様子を示しているものと思われる。内底面は一方向ナデ、口縁部はヨコナデが施されている。小皿は、内面中心から「の」字状にナデ調整が行なわれており、中心部は粘土溜りを取るようなカキ取り痕がある。胎土は、大皿・小皿共、淡赤褐色を呈し、砂分が少なく精良である。また、両方に燈明痕が見られる。Eタイプは6cm弱の口径を測るもののみ検出している。器形の歪みは大きく、表面調整は、内面に一方向のナデのみ見られる。胎土はB₄タイプに比べ、やや砂分が多い。B₄タイプ・Eタイプ共、最近まで木野まで作られていた「かわらけ」の作法に準ずるものと思われる。また、出土した土師器皿(B₄タイプ大皿)の中に、金泥が施されたものがある。金泥は内外全面に塗られており、およそ土師器皿のイメージからほど遠い。これは、茶席など趣向の場に登場したものと思われる。

壺(83~100) 筒型とダルマ型の2種類検出している。83~87・90~97は、筒形の身・蓋として対応するものである。身は外面が不明確な多角形をなし、内面は粗い布目痕が残る。表面調整は、外面体部~内面口縁部にヨコナデが施されている。胎土は、二次焼成をうけ、赤褐色に発色し、砂分を多く含んでいる。88・89, 98~100はダルマ形の身・蓋として対応するもので

ある。作りは比較的ていねいであり、外面上半部～内面下半部までヨコナデが施されている。胎土は淡赤褐色を呈し、砂分が少なく精良である。土師器皿B₄タイプの胎土に類似する。

土壌101の存続期は、上限を銀座役所が置かれた慶長13年(1608)と考えられ、下限は寛永年間(1624～44)頃と思われる。また土壌の使用期間は、多量に検出した土師器皿・塩壺に時期幅がほとんど見い出せず、かなり短い期間を設定することができると思われ、長くとも四半世紀内にはおさまるものと考えられる。

土壌101では配膳用の陶磁類の他、茶席に使われたと思われるものを検出している。朝鮮系陶器(15)を始めとして、志野・鉄釉の天目茶碗、織部茶碗、備前水注、金泥の施された土師器皿等がそれに当り、銀座商人として茶をたしなんでいたものと思われる。また多数の中国製磁器、志野平鉢等の高価なものや、初期伊万里等の希少なものもあり、銀座商人の財力・権力を示すものと思われる。建物の遺構は小規模なもの3基を検出したのみであるが、土壌102から検出した金箔瓦などの様子より、かなり豪壮な建物が立っていたことが十分予想できる。

付論 土師器皿(Bタイプ系)の器形、規格の変化と製作技術について

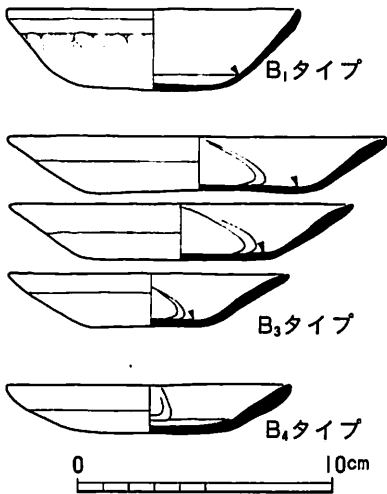
13世紀～18世紀に位置するBタイプ系(白色系)土師器皿の器形及び規格の変化を、製作技術面からとらえてみる。

土師器皿の製作法は単に、「手づくね」とされるだけで、具体的な製作法は明らかではない。また土師器皿は、Aタイプ系(褐色系)、Bタイプ系(白色系)¹⁾に分類され、成形上の違いは大きい。この両タイプを区別しないと製作法の解明は煩雑になってしまう。Aタイプ系、Bタイプ系の分類が明確になり、Bタイプ系一連の編年ができ²⁾、器形の変化を順次追うことにより、製作技術を想定することができるようになった。

1 京都岩倉木野の土師器皿

京都市左京区岩倉木野においては最近まで昔ながらの製作法で土師器皿が作られていた。現在も神社境内に窯一基が現存する(図版第85上)。(昔は各屋敷内に置かれ、家内工業的な生産が行なわれていた。)旧来、木野は土師器皿の生産集団によりできた村である³⁾。

ここで作られていた土師器皿はB₁タイプとEタイプ⁴⁾に分類でき、それぞれ最終型と言うことができる。木野の土器生産については、戦前、島田貞彦氏が詳細な観察を行い報告しており⁵⁾、使われる主な成形道具に「うつけ」〔図版第85下、木製の円板(現存するものは、直径13.3cmと20.5cm、厚さ2.0cm)で主に粘土を薄く延ばしながら器形を整えるための道具)と「ほへ」(麻布、巾17cm、長さ55cmぐらいのものを折りたたんで使う。時に竹を軸にする。口縁・内面の成形・調整に使う)がある。



第55図 Bタイプ系土師器皿の器形変化
「へそ皿」・B_{3,4}タイプの最小器は除く

2 瓦器碗の製作

瓦器碗については近年、川越俊一・井上和人氏が実験をふまえて、内型による成形法を提唱している⁶⁾。瓦器碗は土師器皿とは明確に区別されるが、B₁タイプでは、碗形の器形、外面の調整に共通点を見ることができる。

前記2例の製作法から、B₁タイプを内型成形とした場合、Bタイプ系土師器皿は、内型成形法から始まり、「うつけ」を使う成形法へと変化していったものと想定することができる。この場合「うつけ」は、内型が変化したものにとらえられる。(現在「うつけ」は器壁を薄く延ばすことが主で、器形・口径の決定要素にはなっていない。)この変化をB₁→B₄タイプの器



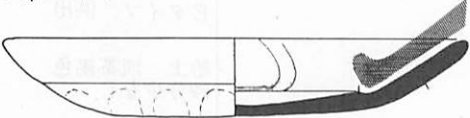
形・規格の変化に照合させ、製作法を想定してみる。

B₁・B₂タイプ

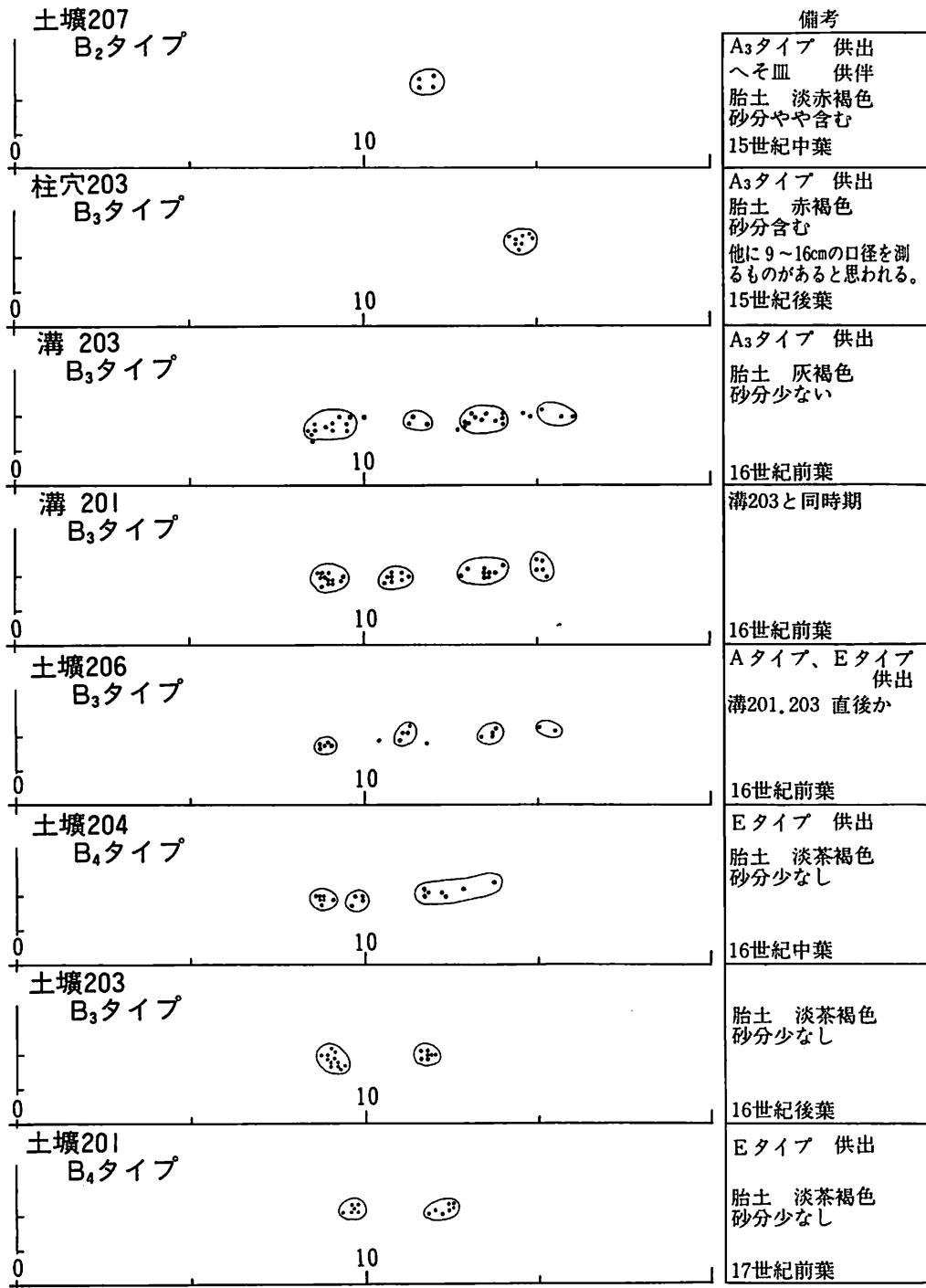
B_{1,2}タイプは、川越俊一・井上和人氏の提唱する、内型による瓦器埴の成形技法に近い方法をとっていたと考えられる。胎土はAタイプ系(褐色系)に較べきわめて精良で、十分な水簸が行なわれていたものと思われる。焼成後の胎土は灰白色を呈しているが、これは鉄分が褐色系に較べ約 $\frac{1}{2}$ しか含まれていないことによる⁷⁾。

ある程度薄く引き延ばした粘土を内型に軽く張り付け、体部中央を連続的に押し、形を整える。口縁を切りそろえ、型からはずした後、内面、口縁部にナデ調整を施す。

内型を使用した場合、器形は型によりほぼ決定してしまう。B₁タイプは、へそ皿を共伴する前では3種類の大きさのものを見るが⁸⁾、以後はほぼ口径11.5cmを測るもののみとなっている。器形もほぼ一定しており、成形も良好である。器厚は薄い。外面底部周辺には細かいヒビが見られる。以上は内型成形の特徴と言える。また問題となるのは内型から粘土をいかに剥がすかである。器面には、砂・灰等の剝離剤を使用した痕は見られない。川越俊一・井上和人氏は、実験の結果より、素焼の型を使用することにより、素焼地の吸湿性を利用し、容易に型から剥がすことができるとしている。しかし土師器皿の場合「うつげ」は内型が変化したものと仮定しており、「うつげ」が木製である所から、木製の型を考えたい。土離れは、型を常に十分濡し

<p>B₂タイプ</p>  <p>ナデ上げを作るナデ</p> <p>土壙207</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 12cm級のみ。小型器はへそ皿に共通する。 ◦ へそ皿を供伴する。A₃タイプが多量に供出する。 ◦ 器形は深形であり、器壁は厚い。 ◦ ナデ上げ痕は一般に弱く口縁全面を引き上げるものが多いが、底部に近いナデが最も強く、引き上げも強い。 ◦ 外面未調整部は、口縁・底部とも連続的に軽い凹部が見られる。
<p>B₃タイプ</p>  <p>ナデ上げを作るナデ</p> <p>溝203</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 9 cm級、11.5cm級、13.5cm級、15.5cm級がある。 ◦ へそ皿、A₃タイプ、Eタイプが少量供出する。 ◦ 器形は浅形であり、器壁は薄い。 ◦ 立ち上り部に独立したナデが施されており、ナデ上げ痕は強く残る。 ◦ 外面未調整部は、口縁・底部とも連続的に軽い凹部が見られる。
<p>B₄タイプ (ほへ)</p>  <p>(ほへ)</p> <p>土壙101</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 12cm級、9 cm級、(他に15cm級がある。) ◦ Eタイプが供出する。 ◦ 器形は浅形であり、器壁は厚い、B₃タイプに較べ立ち上り部のほり出しが少なく成形ナデの省略が見られる。 ◦ 外面未調整部は口縁・底部とも連続的に軽い凹部が見られる。

第56図 室町後期の土師器皿



第57図 土師器皿Bタイプ系口径/器高図表〔タテ：器高 ヨコ：口径(cm)〕

ておき、粘土の硬さを適切にし、手早い作業を行うことにより問題はない。型からはずしたばかりはまだ柔かく、この状態で内面・外面のナデ調整を行う。

B₃タイプ

ここで内型成形から「うつげ」成形へ変化したものと思われる。ここでの「うつげ」は内型が使用法の変化から、粘土を薄く延ばし円形を作ることに重点が移って出来たものとする。

粘土を「うつげ」で円形に薄く延ばし、ある程度の器形を作る。さらに口縁を「ほへ」で引き上げる。

B_{1,2}タイプとB₃タイプでは器形・器規の変化は大きい。主なものを述べると、多様な大きさの皿があり、4～5種類の規格があって、浅型の器形、口縁部の作りが各大きさの皿に共通する、である。

B₄タイプ

B₄タイプでは内面立ち上り部に、段又は溝を作る。これは最近まで木野で作られていた土師器皿とほぼ同形である。現存する、「うつげ」には「寛文十庚戌年 九月吉祥日」の記名があり、寛文十年(1670)には現在と同様の道具が使われていたことがわかる。(現存するものは寄進物で未使用品。)

今、木野においてこの皿の製作を見ることができなかったが、島田貞彦氏の観察によると、粘土塊を臂の関節に軽くうちつけ、ほぼ皿形の器形を作る。これを「うつげ」の一端にあてがい薄く大きく延ばす。この時、「うつげ」の一端は時々水に浸して土器の密着を防ぐ。器面を凹ますのは指先の動作による。最後に「ほへ」で軽くおさえ回転し成形する。「大重」⁹⁾は「ほへ」の中に竹を入れて回転するために竹の先端で一線を描く。

となっている。B₄タイプが現われる16世紀後葉からは、基本的な作り方は現在とほぼ同様であったと考えられる。B₄タイプは、内面に溝を作っているのが特徴である。

3 製作法の変化と器形、規格の変化

全体的な器形の変化を追うと

- ① 深物(堦形)〔B_{1,2}タイプ〕→浅形(皿形)〔B_{3,4}タイプ〕
- ② 1種類の規格〔B_{1,2}タイプ〕¹⁰⁾→多くの規格〔B₃タイプ〕→2種類の規格〔B₄タイプ〕
- ③ 薄い器壁〔B_{1,2,3}タイプ〕→やや厚い器壁、加えてやや粗雑になる〔B₄タイプ〕

である。

土師器皿は、単一器種・大量生産が基本である。供給側からは、生産性の向上以外には、器形・規格の変化理由は少ないものと考えられる。同じ時期の褐色系(A₃タイプ)で見ると基本的な作りはほとんど変化しておらず、縮小化・粗雑化が¹⁰⁾、生産性の向上のためと見ることができ。Bタイプ系は、A₃タイプに見られるような著しい粗雑化はほとんど見ることができない。このことは、Aタイプ系は、容易に器形を整えられる有用な道具を持ちえず、Bタイプ系においてはこれを持ちえていたと考えこれが内型または「うつげ」と言うことになる。Bタイプ系

はこの道具の使用法、型態を変化されることにより、品質を保持し、生産性を上げていったものと思われる。内型成形から「うつげ」成形への変化からは、直接生産性の向上を説明することはできないが、作業内容を具体的に解析できれば説明はつくものと思われる。

製作法の変化の副産物的なものとして、浅形への器形変化を上げられる。これは前に述べたように「うつげ」は粘土を延ばし形を整えることが主目的であり、器形を凹ますためには手の動き、さらに「ほへ」が必要であり、深形の器形を作るのが困難であったためと考えられる。逆に内型成形の場合は器形保有のためある程度深形であることが要求される。つまり深形から浅形への器形変化は専ら供給側の内因的な要素によるものと考えられる。

さらに副産物的なものとして、規格の多様化が上げられる。内型成形では、使用する型により、その形をほぼ決定してしまうのに対して、「うつげ」は口径の決定要素をはずれているため任意の大きさのものが作れるようになったためと考えられる。第55図に見られるように、B₃タイプは、各大きさの皿に共通して口縁の引き起こしが直線的で、幅・角度・造形がほぼ同じであり、口径の違いは平らな底面径での違いに現われている。このことは、口縁の引き起こしが独立した工程で行なわれていることを示し、B₃タイプにおける、「ほへ」による整形を想定できる。またB₃タイプでは口径が20cmを超えるものも検出されており、「うつげ」成形の任意性を示している。

B₄タイプでは主たる皿の規格は2種類となるが、これは需要面などの外因的な要因が考えられる。B₄タイプは16世紀後葉からに位置づけられるが、この時期ごろから、国産陶器、輸入磁器の大量な検出が見られるようになってくる。土師器皿の検出量自体は18世紀前葉まで非常に多いのであるが、その使用法および使囲範囲¹²⁾は明らかに変化したものと思われ、一般的な使用法ではいわゆる粗末なものとして扱われるようになったのであろう。

製作法では、口縁引き上げの簡略化がはかられている。「ほへ」の中に竹を入れ軸とし先端で溝を掘ることにより、口縁の引き起こしを容易にしている。この技法を用いた場合、ある程度の器厚の増加はまぬがれないし、外面では口縁の立ち上りはゆるやかなカーブを描くことになる。

主たる規格は2種類であるが、現在残る木野の土師器皿や、文献等を見ると、かなり多くの種類の皿が作られており、「うつげ」成形の特長を残している。

再び、Aタイプ系との比較にもどってみると、この時期A₃タイプは一途に粗雑化、縮小化がはかられているのであるが、同時に大・小2種のみ規格は連綿と守り、16世紀に消滅するまで続いているのに対して、Bタイプ系は3種類の規格から始まり、碗・へそ皿、4種以上の規格、2種の規格、と常にセット関係・規格が変化してきている。Bタイプ系は土師器皿の歴史から見ると新参物といえ、A₂あるいはA₃タイプなど褐色系からの派生としてはとらえにくい¹³⁾。Bタイプ系をAタイプ系と同じ土師器皿、あるいは「かわらけ」の範疇に入れてよいものかまず疑問が生ずるが、遺構からの検出状況や使用法の仮定においては問題はないと思う。Aタイプ

系の土師器皿は伝統的な生産をかたくなに守り続け、Bタイプ系は、そのつど、内因外的な要因によって変化してきたと考えられる。土師器皿については祭祀的な要素を多分に含む所があるが、これを直接、器形・規格に結びつけるのは困難である。

内型成形を設定した場合、瓦器坑生産からの技術導入を考えることができるが、説明できるだけの資料はなく、また多くの疑問も生ずる。内型の料質については、瓦器坑では素焼型を設定しているのであるが、土師器皿では「うつげ」の関係から木製とした。しかし木野において、直径10cm、高さ2cmを測る、平たいまんじょう型の意味不明の素焼品を見ている。これには一部に半円形の切り欠きがある。粘土をこれに回転しながら押しつけ、切り欠き部を利用して外したとも見ることができる。しかしこの口径を示す皿は、「うつげ」で成形しており、用途は不明である。

現在まで土師器皿を焼成したとされる明確な遺構は検出されていない。今後これらの窯跡等が発掘されることにより、製作法等が判明されてゆくことと思われる。 (横田洋三)

註

- 1) 横田洋三 「出土土師皿編年試案」(『平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五条三坊十五町』京都, 昭和56年)。
横田洋三 「土師器皿の分類と編年」(『平安京跡研究調査報告第11輯 平安京左京四条三坊十三町』京都, 昭和59年)。
- 2) 註1)に同じ。
- 3) この生産集団は、もともと京都嵯峨野深草里(八軒)におり、応仁年間(1394~1427)に幡枝に移住し、さらに元亀年間(1570~1572)に今の地に移ったとされている。
- 4) 註1)に同じ。
- 5) 島田貞彦 「山城幡枝の土器」(『考古学雑誌』第24巻第6号所収, 東京, 昭和21年)。
- 6) 川越俊一・井上和人 「瓦器坑製作技術の復原」(『考古学雑誌』第67巻第2号所収, 東京, 昭和56年)。
- 7) 名古屋工業技術試験所の河島達郎氏に依頼し放射化分析で調べた。試料はA₃タイプとB₁タイプ。
- 8) ヘそ皿を供伴する以前のB₁タイプについては、器形・調整法に疑問が残る所があり、今回の型成形の仮定からは一応除外する。
- 9) 口径10cm前後を測る皿。
- 10) ヘそ皿供伴以前を除く。またヘそ皿を共伴する時期においても、小皿の違う口径を示すものがある。さらにB₂タイプではこの傾向は強く、B₂タイプへの過渡期的な様子を示している。またここではヘそ皿は除いて考えている。
- 11) 土師器皿は、一般に、円形を作り整えるために端部に多くの手法を見ることができる。またこの手法の変化が時代変化を追う手がかりにもなる。ここでの工程を省略すると生産性は上がるが、直接粗雑化に繋がる。これは、他のロクロ成形等の土器には見られない土師器皿特有のものと言える。
- 12) 土師器皿は器として考えられる用途すべてに使われていたと考えられる。また浄器として祭祀にも用いられる。奥田直栄 「土器三題」(『世界陶磁全集』月報No.6~8, 東京, 昭和53年)。
- 13) B₁タイプの最初期形はA₂タイプに類似した器形をとり、そこからの派生ととるむきもある。

第3部 平安京左京三条三坊十一町の調査

第1章 発掘調査の経過

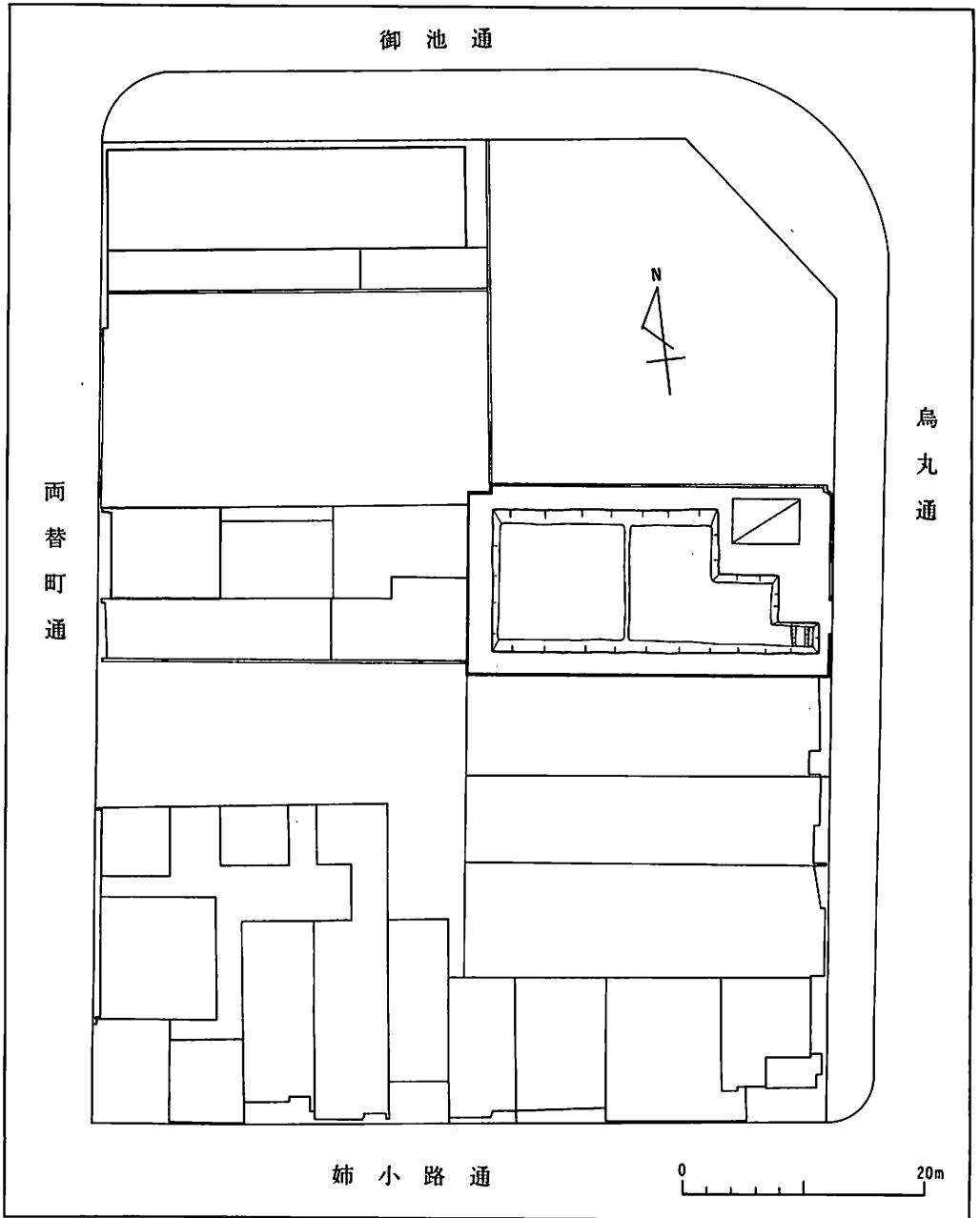
明治生命保険相互会社は京都市中京区烏丸通姉小路上ル旧二条営業所の建物を取り壊し、その跡地の発掘調査を平安博物館に依頼された。この地は平安京の条坊からみると左京三条三坊十一町にあたり、北は後鳥羽上皇の院の御所である押小路殿、南は後白河法皇の院の御所の三条西殿にはさまれた、平安時代後期における枢要の地で、高階為清(讃岐守、佐渡守などを歴任)の邸宅の営まれた可能性も考えられる。また周辺の過去における発掘調査の成果からみて、烏丸小路の西側溝の発見される可能性が多いと考えられた(第一図参照)。

調査は角田文衛館長の指揮のもとで寺島孝一(平安京調査本部・当時)を調査主任、佐々木英夫(同)を調査員として、昭和55年11月26日から昭和56年1月13日までの1ヶ月半に涉って実施された。

調査補助員としては、芝野康之、小関徹、岡佳子、石川喜代江、奥西美子氏らの学生諸氏の手をわずらわし、作業員には、橋本庄次氏を中心とする向日町在住の方々に参加を得た。

調査地は東西23m、南北12mと東西に長く、また、周辺に対する危険防止のため四周に2mの法をつけたため、実際の調査面積は約300m²であった。ただし、烏丸通に面する一画については、平安京烏丸小路の側溝検出の可能性が強いため、幅2mのトレンチを設定した(第58図)。

周辺の調査の経験から、表土下1m強は江戸末期～明治以降の盛土であることが推定されたため、この部分については重機による掘削を行い、以下を手掘りによって調査した。また廃土の都合上、調査区を東西に分け、当初西側部分(W区)を調査し、終了後東側部分(E区)の調査を実施した。



第 58 図 発掘調査地トレンチ位置図

第2章 遺構と遺物

今回発掘調査を行なった範囲は決して広いものではなかったが、その中で検出し得た遺構は京都という地がもつ歴史性を反映してかなりの数にのぼった。そのうち主だったものは以下の通りである(第59図)。

溝 溝は2本を検出している。1本は南北に走るもので検出した範囲は狭いが、さらに南北に延びると考えられた(溝1)。今一つの溝は東西に走るもので全容は不明である(溝2)。いずれも一括性の高い遺物を検出した。前者は平安時代中期、後者は鎌倉時代のものである。また溝1は烏丸小路の西側側溝と推定されるもので、平安京の条坊復元上注目すべき遺構である。

井戸 11基の井戸を検出している。これらの井戸は年代から見てかなりの幅がみられる。今回はその中で平安時代から江戸時代までのもの7基(井戸2～4・7・9～11)について報告を進めていきたい。

以上の遺構を検出した烏丸通の西、姉小路通りの北の一画は文献的にみた場合、みるべき史料をみい出すことができない。今当地に該当すると思われる事項をみとみると、

- ①長暦二年(1038)10月11日 子代小路、三条坊門辺の小屋四十余戸焼亡 (『春記』)
- ②応保元年(1161)7月8日 三条坊門南、烏丸西、備中守為清宅焼亡 (『山槐記』)
- ③承元元年(1207)4月5日 五条坊門室町より出火、三条坊門町辺まで焼亡 (『明月記』)
- ④建保六年(1218)4月21日 三条油小路より出火し、百七十余町が焼亡 (『仁和寺日次記』)
- ⑤建長元年(1249)3月21日 押小路室町より出火し八条辺までに及ぶ大火 (『岡屋関日記』)
- ⑥文安四年(1447)1月3日 姉小路烏丸焼亡 (『師郷記』)

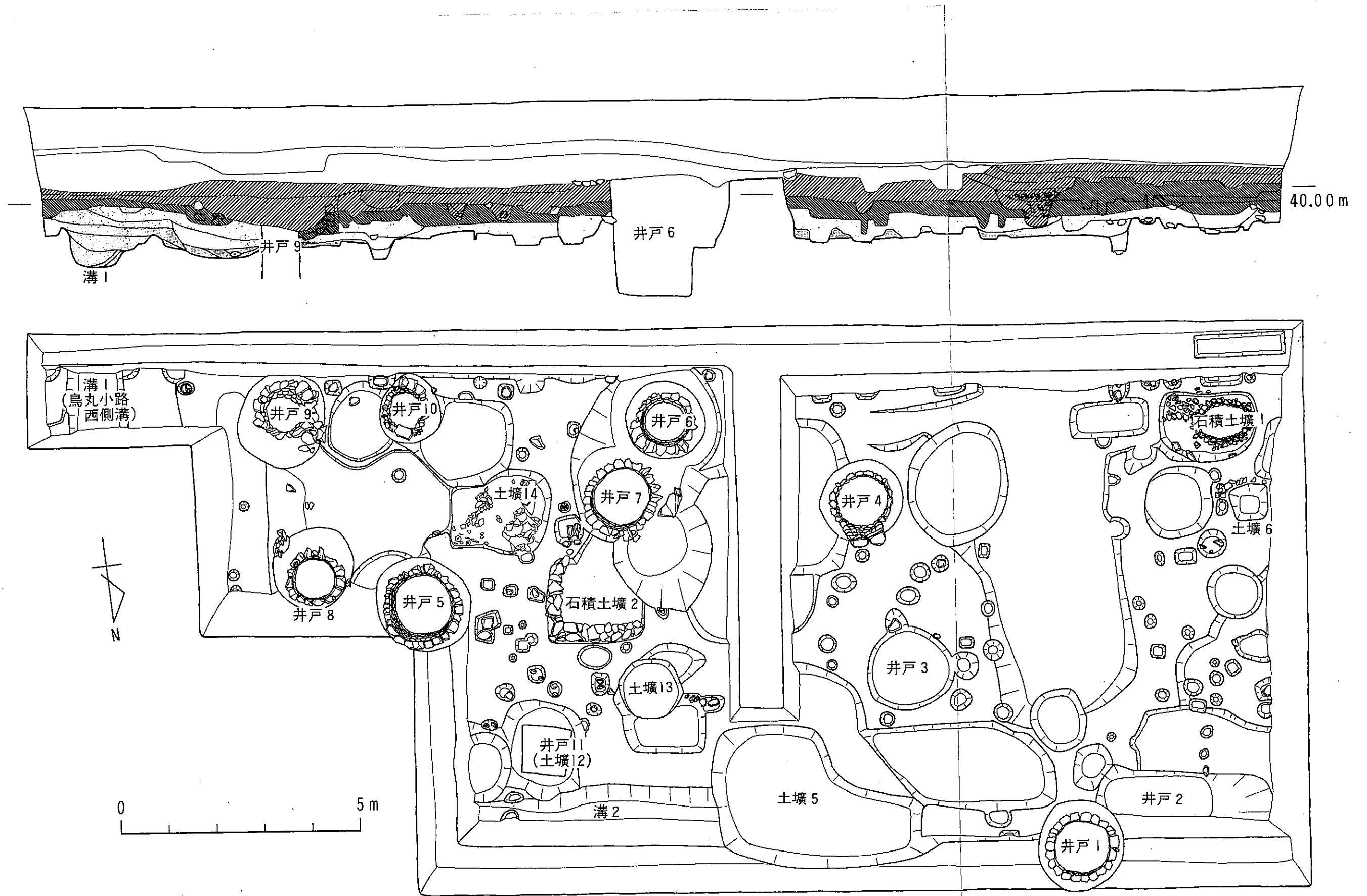
ここにあげたのはほんの一部で火災の記事ばかりである。京都の場合、史料の量は多いが実体のつかめるものは少ない。その中で特に有名でもない地点では火災の記事はそれなりに有効なものであろう。しかし、発掘を行なっても火災の痕跡が層位的に残っていることはまれである。このあたりに京都における発掘調査による考古学的史料と文献史料の結びつけのむずかしさがあると言えよう。

第1節 溝

1 溝1(第60・61図、図版第87・95上)

溝1はE区東南部を南北2.5mの幅で東に拡張した部分の現地表面下約2.7m～3mのところで検出されたものである。確認できた溝の全長は約1.2m、幅1.1～1.2mを計ることができ、深さは溝の側壁をよく残している東側の上面から約85cmを計ることができる。

今回検出した部分のごく狭い範囲で、烏丸通りに近く危険なため拡張して調査を行なうことは断念しなければならなかった。溝の上部は後世の攪乱によって破壊されているものの、底部



第59図 調査地平面実測図、断面図
 (断面図スクリーントーン部分は、下から平安時代・鎌倉
 一室町時代・室町~桃山時代・江戸時代前期)

は比較的良好な状態で残存していた。この残存状況からみて、敷地内では北端から南端まで溝が残されている可能性は頗る高いと思われる。

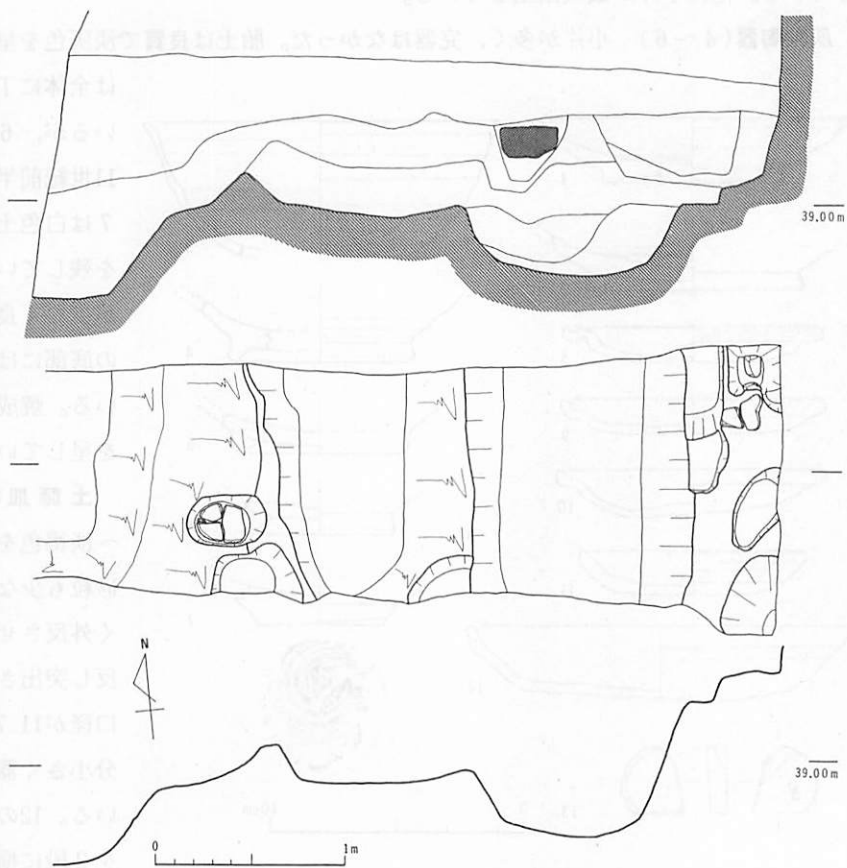
溝は地山(暗黄灰色粘質土)を掘り込んで構築された素掘りの溝である。西側の側壁は後世の攪乱によって半分程度まで破壊されている。東側の側壁は北端部でピットや土壌によって破壊をうけ、また南端でも20cm前後の河原石が詰った径1.2m前後の土壌が溝上部全体にかかり、これによって破損していた。そのためかろうじて中ほど約60cm程度が残ったにすぎない。

溝を埋めていたのは堅くしまった灰褐色土で、土師皿の細片や炭化物・焼土等の細片を多量に含んでいる。溝底部には溝使用時の堆積と思われる暗灰色の粘質土の痕跡も若干みられたが、ほとんどは灰褐色粘質土によって埋められていた。この堆積は南北両壁の断面においてもわずかに痕跡を残すにすぎず、いずれも後世の土壌やピットによって攪乱され明瞭な断面を得ることはできなかった。

溝の東側壁上部には厚さ約20cm程度の暗褐色粘質土が堆積していた。この粘質土は堅くしまっており、若干の土師皿片や炭化物の小片が含まれていた。今回検出された溝1はこの土層

を掘り込んで構築されているものである。このことから溝1が平安京造営当初の時期まで遡ると考えるには無理があるが、埋土中から出土した遺物の年代からみて平安時代中期以降に使用されていた溝であることは動かないであろう。

この溝は調査地の東側を南北に走る烏丸通りとほぼ



第60図 溝1実測図、断面図

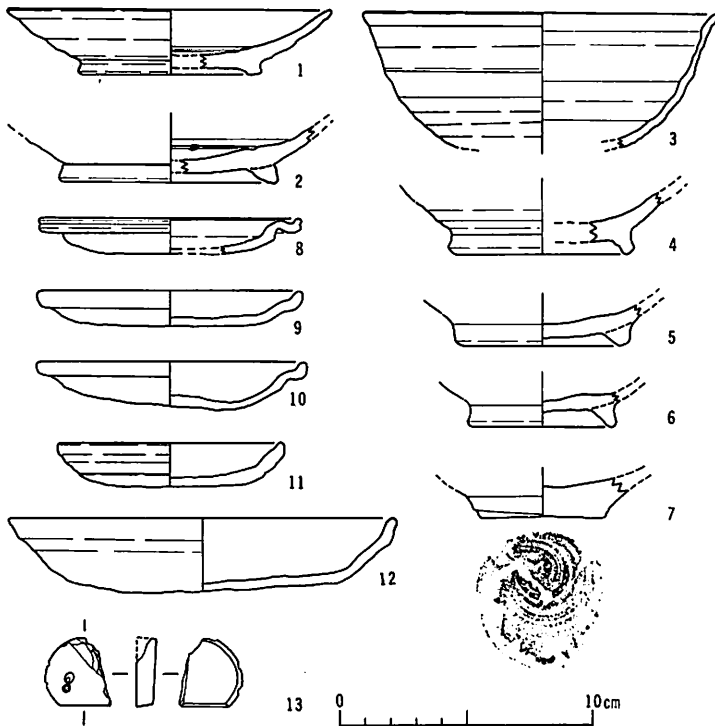
平行に走っている。昭和44年平安博物館が行なった三条通の北、烏丸通の西側の三条西殿跡第1次調査で烏丸小路の西側側溝が検出されており、今回検出した溝も三条西殿の烏丸小路西側側溝の延長線上に位置している。このことから溝1を烏丸小路西側側溝とすることに問題はないと思われる。

溝の西側は後世の攪乱によって破壊されているが、溝の中心より約1.8~2m西に長径40cm、短径28cm前後のピット21が検出されている。ピットの深さは上端から90cm前後で、底部には上面を平らにした石が据えられている。このことから溝1に伴なう西側の築地塀等の建築物を想定することも可能であろう。

埋土中から出土した遺物(第61図、図版95上)はいずれも破片ばかりで、出土量も少なかった。

緑釉陶器(1・2) 1が京都産と考えられる皿片である。暗灰色の胎土に薄く釉がかかり濃緑色を呈している。見込みにはシツタ痕と思われる幅1mmの沈線が入っている。2は赤色の胎土に厚く釉がかかった皿片で、高台は貼り付けている。高台の断面は三角形を呈している。見込みには1と同じく沈線が巡り、トチ目痕を残している。色調は火災によって変質し、黒色に近い濃緑色を呈している。3は須恵器碗片で胎土に長石等の粒を多く含んでおり、黒灰色を呈している。他に小片が数点出土している。

灰釉陶器(4~6) 小片が多く、完器はなかった。胎土は良質で淡灰色を呈している。整形



は全体に丁寧に行なわれているが、6は粗雑である。

11世紀前半のものである。

7は白色土器で高台部のみを残している。胎土は砂粒が少なく良質である。平底の底部には糸切痕を残している。焼成は良好で乳白色を呈している。

土師皿(8~12) 褐色~淡褐色を呈し、胎土には砂粒も少ない。口縁部は強く外反させ端部を内に折り反し突出させている。11は口径が11.7mmと前者より幾分小さく器壁は厚くなっている。12の大皿は口縁部下を2段に横ナデしている。

丸柄石帯(13) 緑灰色の

第61図 溝1出土遺物実測図

半透明な石を使用し、裏面には裏から裏へ穿孔した着装用の孔をもっている。この石帯片は溝の西側の地山直上より出土したもので、溝1と併行する時期のものと思われる。

2 溝2 (第62・63図, 図版第88-4, 第10-下, 第11)

溝2はE区北部の北壁際で検出されたものである。東西に走るこの溝は、トレンチ北壁によって溝の北側肩を検出できず溝と断定するには問題も残るが、底部が北に向って若干立ち上りかけており一応溝として報告しておく。北側の確認は壁面を構成する土層がもろく、危険を去けるため拡張することは断念した。

検出した溝の全長は約5m、深さは約50cmである。溝は地山層に掘り込まれているが、上部は後世の攪乱によってかなり破損している他、部分的に溝中から底部に達するピットや土壌によって破損をうけている。溝の西側は土壌5によって完全に破壊され、土壌5より西にはその痕跡はみられなかった。東側は土壌12や近世末期の瓦溜によって破損をうけている。そのため北壁の断面にも土壌やピットが重なり、溝としての断面をえることは出きなかった。

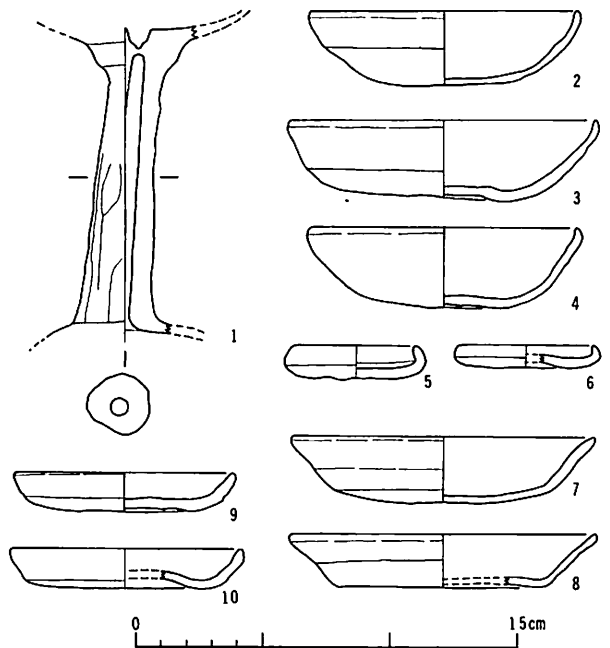
この溝の底部からは一括性の高い瓦類が多数出土した。これらの瓦は溝2が埋没する時期と密接にかかわるものと考えられ、瓦の年代からみて13世紀の時期を与えることができる。この溝の性格や構築年代については、明らかにすることができなかった。

溝2から出土した遺物は瓦類が中心で、土器類は量的に少なかった。

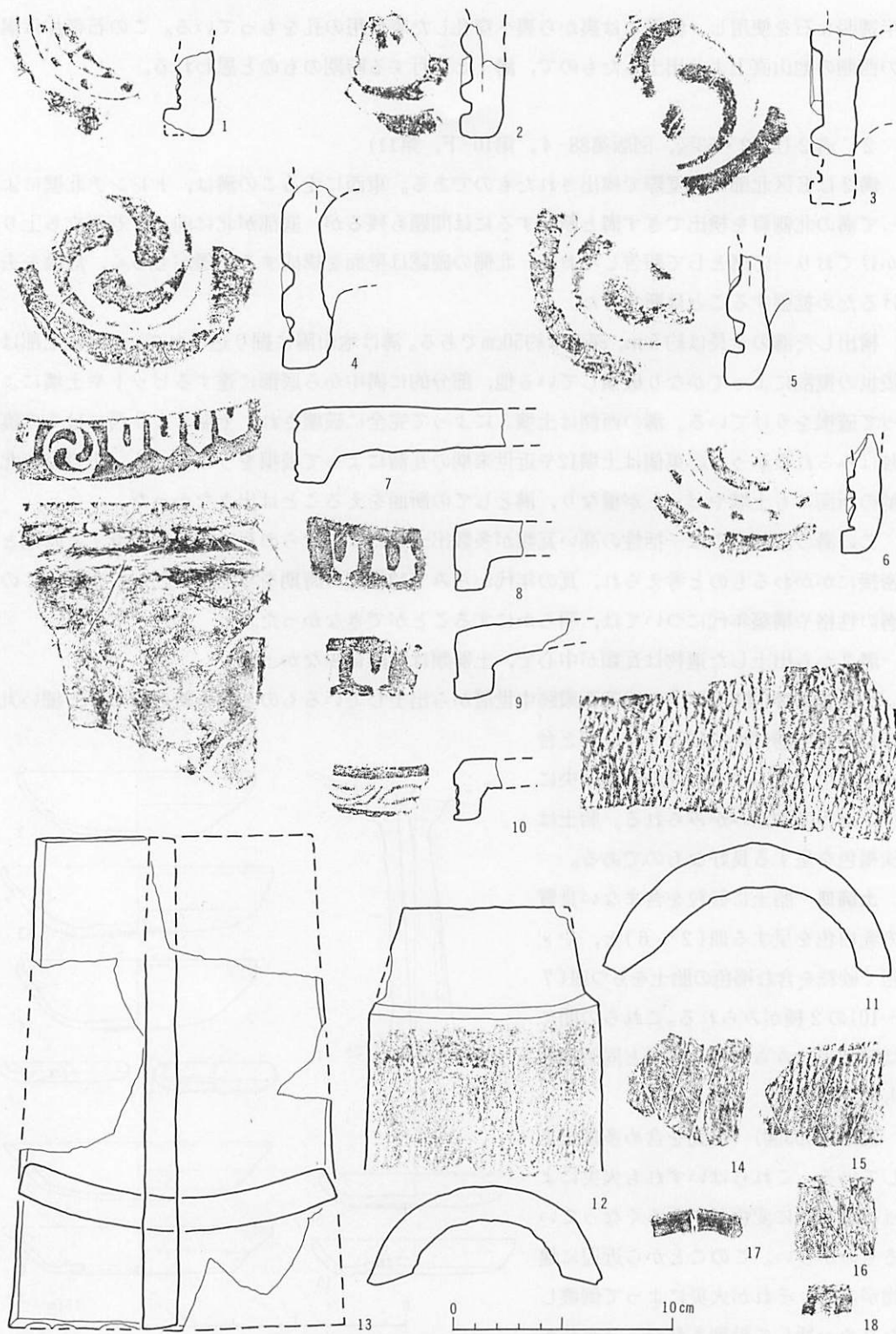
土師質高坏(第62図1) 三条西殿跡中世層から出土しているものと同系統のもの²⁾で、細い丸棒に粘土を巻付けて脚を作り、坏と台を貼り付けたもので、坏の内面中央に径1cm程度の窪みがみられる。胎土は淡褐色を呈する良好なものである。

土師皿 胎土に砂粒を含まない良質の乳白色を呈する皿(2~6)と、やゝ粗く砂粒を含む褐色の胎土をもつ皿(7~10)の2種がみられる。これらの中には時間差はみられず、瓦類と同時期のものである。

瓦類(第63図) 軒瓦を含め多数出土している。これらはいずれも火災によって赤褐色に変色し、もろくなっているものが多い。このことから近辺に建物があり、それが火災によって倒壊したため一括して投棄されたことがわかる。これらの瓦類にはあまり大きなも



第62図 溝2出土遺物実測図(1)



第63图 溝2出土遺物実測図(2)

のはなく、小振りのものが主流を占めている。これらの小振りの瓦は屋根全体を葺くというのではなく、椽皮葺等の屋根の棟に使用されたものか、築地等に使用されたものかであろう。この瓦が遭遇した火災がいつのものであるのか厳密に確定することは出来ないが、13世紀という段階でみると、建長元年3月に押小路室町より出火した大火があげられる。

軒丸瓦は複弁六葉蓮華文の小片(1)を除いて三巴文(2~6)である。巴文には左巻(2・3)と右巻(4~6)がみられ、3と同範のものは他に4点出土している。6は珠文帯をもつもので、2点のみである。これらの胎土は砂粒を含み粗く、瓦当背面はナデによって整形され、瓦当下端部は篋削りが施されている。

軒平瓦では7がよく残存している。中央に三巴文を置き左右に剣頭文を配したもので、剣頭は片側4個を確認できる。互当の形成は折り曲げによっており、瓦当面上部は篋削りが施され、各端面・側面にも篋削りが施されている。平瓦凸面には「×」印が篋書されているが、叩き痕はみられない。7と同じ造瓦法をもつものは剣頭文(8・9)2点と唐草文(10)1点がみられる。

丸・平瓦は軒瓦に伴うものであるが、11の丸瓦は凸面に縄目叩き痕を明瞭に残し、いずれの軒丸瓦よりも大きくなるものである。また、丸瓦凸面玉縁側に「」(「×」の篋記号をもつものや条線の篋記号をもつものも多数みられる。丸瓦凸面はいずれも縄目叩き痕が残されている。

平瓦は15の規格のものが主流を占めているが、破片の中にはさらに大きいものも若干みうけられる。平瓦の両面には布目痕や叩き痕を残すものはなく、両面に糸切り痕を明瞭に残すものが多く、また砂粒の付着しているものも多くみうけられる。

第2節 井戸

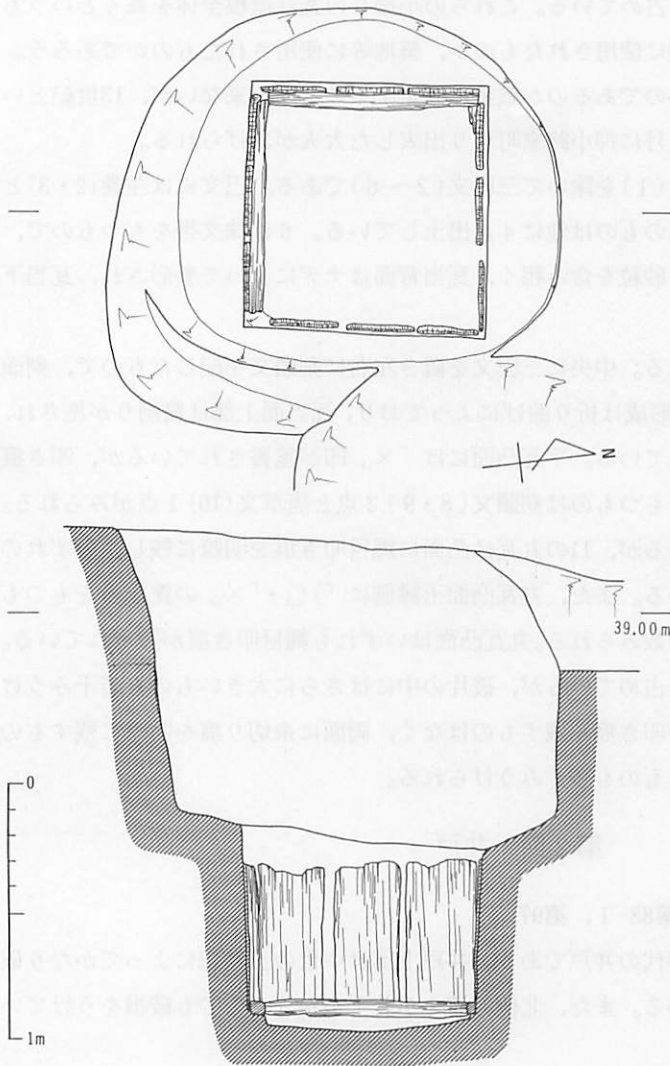
1 井戸11(第64・65図, 図版第88-1, 第97)

E区東北部で検出された平安時代の井戸である。井戸上部は中世の土壌12によってかなり破損し、当初のものは失なわれている。また、北側も溝2が若干かかりそこでも破損をうけている。

この井戸は当初土壌12として調査を進めていたが、井戸11の掘り方が土壌によって破壊されていたこと、埋土に多量の水分が含まれていたことから土壌と井戸との境目が明瞭でなく、厳密な識別はできなかった。

井戸の構造は約1.6mを1辺とする隅丸方形の掘り方をもち、1辺0.9m~1mの方形の井筒を構築している。井戸の底部は砂礫層に達し、平坦に整地されていて、曲物等の埋設は全くみられなかったが、径20cm前後の河原石が底部中央に3個置かれていた。

井筒は底部に1辺6~8cmの角材を横に組み、その背面に幅約30cm、厚み0.8~1cmの板材を縦に並べて側壁としている。板材は1辺に3枚使用されていた。板材の全長は上部が欠失しているために不明であるが現存長は約60cmである。井筒の四隅には横材と同じような角材が立てられていた痕跡が認められていた。また横材も現存しているのは底部の南と西の2本だけである。



第64図 井戸11実測図

埋土は土壌12を除いて暗灰色粘質土であるが、井筒の底部付近は、青灰色粘質土が堆積し、水分を多く含んでいた。暗灰色粘質土層からは多くの遺物が出土し、また底部からは径20cmの曲物を2個検出した。2個とも底部を残すのみで、原形をとどめていなかった。

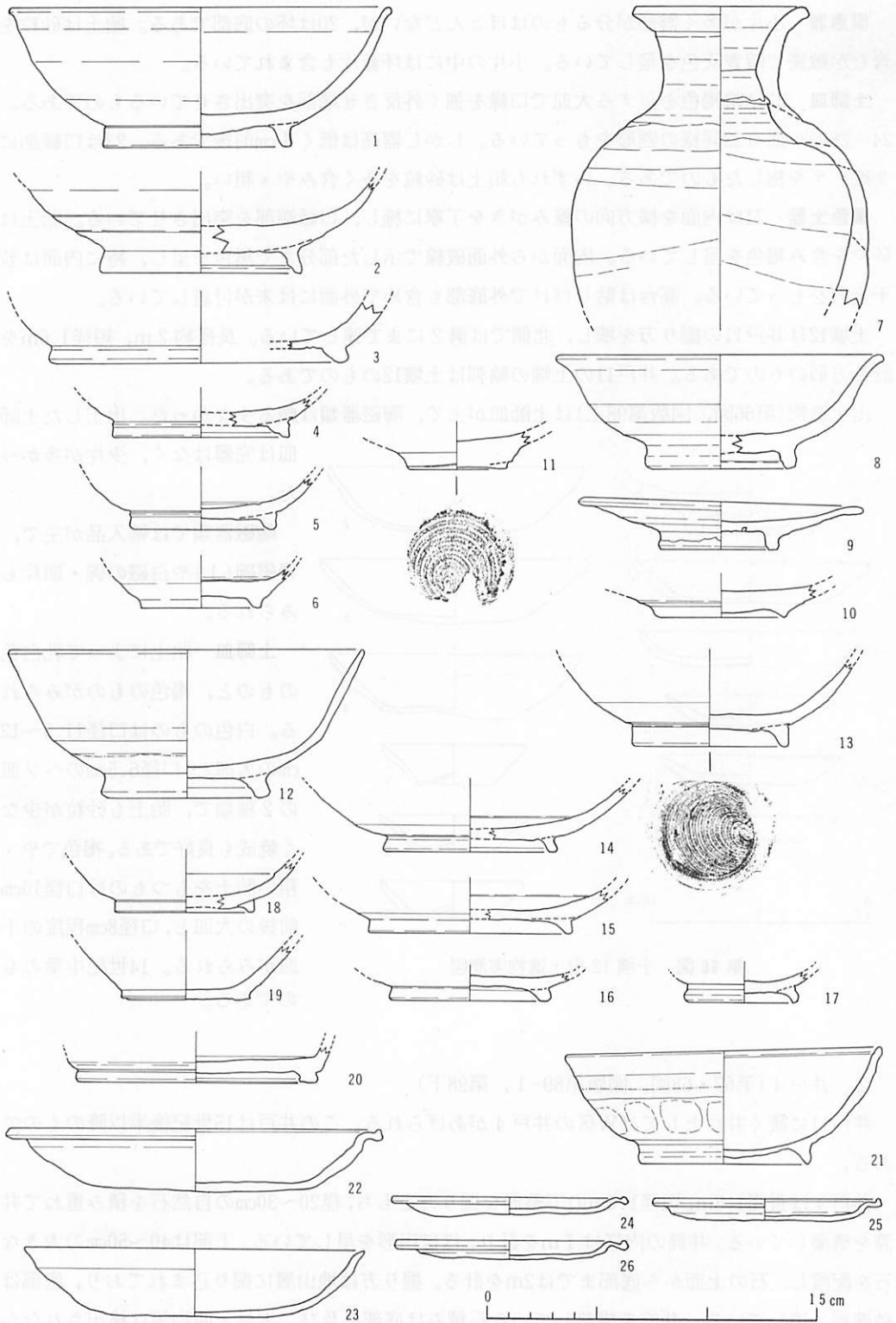
出土遺物は非常に豊富で、緑釉陶器(第64図1～6)白色土器(7～11)、灰釉陶器(12～19)、須恵器(20)、黒色土器(21)、土師皿(22～26)等が出土している。

緑釉陶器 高台を貼り付けるものが多くみられるようである。1はほぼ完器の塊で、口縁は外反させて外側にナデている。胎土は淡灰色を呈し、若干砂粒を含むが良質である。釉は薄い緑色を呈している。高台は角型の断面をもち貼り付けている。2・4・5の3

点は近江系のもので貼り付け高台の断面は三角形に近く、外底部には糸切り痕を残している。胎土は良質で赤褐色を呈している。釉は濃緑色を呈している。3・6は須恵器を思わせる良好な焼成をもち、胎土は砂粒も少なく緻密で暗灰色を呈している。釉は濃緑色を呈している。

白色土器 淡白色を呈する良質の胎土と焼成をもつものである。7の壺は粘土紐巻上げで体部を作り、口頸部を接合して全体を轆轤整形している。8の碗は器壁が厚く体部に稜を付けている。高台は削り出している。9の皿も高台を削り出している。11は溝1で出土したものと同じ平底に糸切り痕を残す高台で、同じ器形になるものであろう。

灰釉陶器 碗皿類で、いずれも貼り付けの高台をもっているが、19のみ平底である。外底部には13のように糸切り痕を残すものもみられる。12は全体の半分程度を残しており、底部から1/3のところ稜を付け、その少し下まで釉がみられる。



第 65 図 井戸 11 出土遺物実測図

須恵器 小片が多く器形が分るものはほとんどないが、20は坏の底部である。胎土は砂粒を含むが緻密で暗青灰色を呈している。小片の中には坏蓋片も含まれている。

土師皿 22は暗褐色を呈する大皿で口縁を強く外反させ端部を突出させているものである。24～26の小皿も22同様の器形をもっている。しかし器高は低く1cm前後である。23は口縁部に2度ナデを施したものである。いずれも胎土は砂粒を多く含みや>粗い。

黒色土器 21は内面を横方向の篋みがきを丁寧に施し、口縁端部を突出させている。胎土は砂粒を含み褐色を呈している。内面から外面破線で示した部分まで黒色を呈し、特に内面は若干光沢をもっている。高台は貼り付けで外底部も含めて外面には朱が付着している。

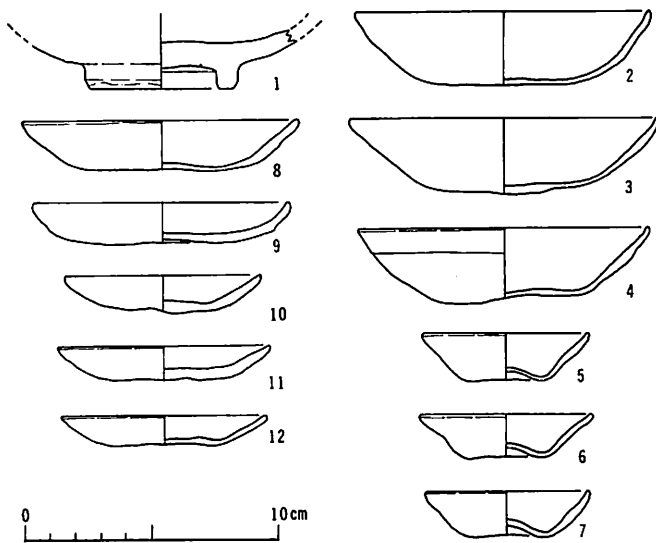
土壇12は井戸11の掘り方を壊し、北側では溝2にまで達している。長径約2m、短径1.6mを計る方形のものである。井戸11の上端の輪郭は土壇12のものである。

出土遺物(第66図、図版第98上)は土師皿が主で、陶磁器類は頗る少なかった。出土した土師

皿は完器はなく、少片が多かった。

陶磁器類では輸入品が主で、青磁碗(1)や白磁の碗・皿片もみられる。

土師皿 胎土によって乳白色のもの、褐色のものがみられる。白色のものは口径11.5～12cmの大皿と、口径6.5cmのヘソ皿の2種類で、胎土も砂粒が少なく焼成も良好である。褐色でや>粗い胎土をもつものは口径10cm前後の大皿と、口径8cm程度の小皿がみられる。14世紀中葉のものである。



第66図 土壇12出土遺物実測図

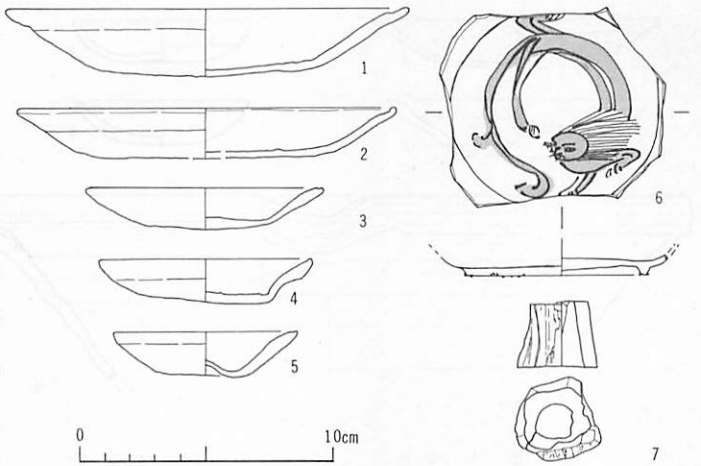
2 井戸4 (第67・68図、図版第89-1、第98下)

井戸11に続く井戸としてはW区の井戸4があげられる。この井戸は15世紀後半以降のものである。

井戸4は長径1.8m、短径1.6mの不整形な掘り方をもち、径20～30cmの自然石を積み重ねて井筒を構築している。井筒の内径は1mを計り、ほぼ円形を呈している。上部は40～50cmの大きな石を配置し、石の上面から底部までは2mを計る。掘り方は地山層に掘り込まれており、底部は砂礫層に達している。井筒を構築している石積みは底部に及び、木材・曲物等は検出されなかった。

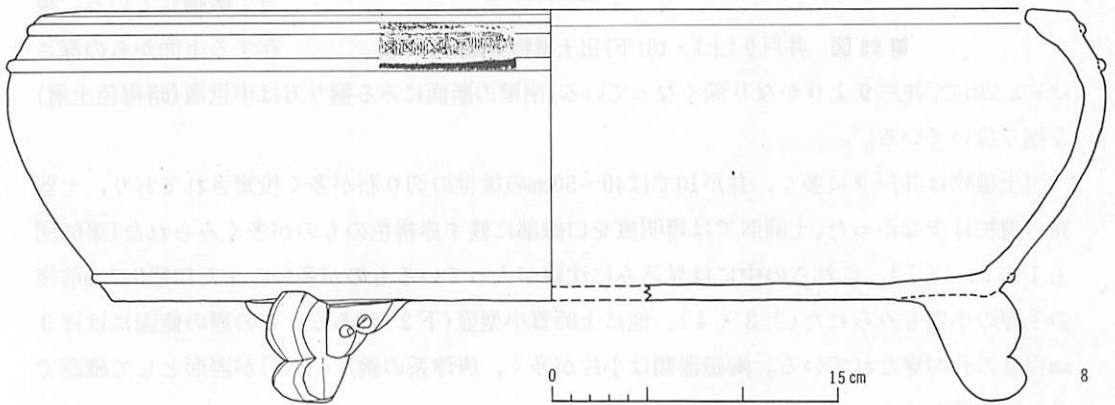
石積は埋没時に南半分が井筒内に崩れており、その上に炭化した木材や焼土等を多量に含んだ黒色土が約1mの厚みで堆積していた。

出土した遺物の量はさして多くなく、土師皿では白色の良質な胎土をもつ口径16cmの大皿(第67図1・2)が2点と、褐色で砂粒を含むやゝ粗い胎土をもつ土師皿(3・4)数点の他、白色の良質なへそ皿(5)が若干みられるのみである。陶磁器類では青磁の小片が数点みられた他、砂高声台をもつ明代の染付獅子文皿片(6)が検出されている。土製品では火鉢(第68図)が破片で数点出土し、丸形の他に角形のものもみられる。いずれも側面上部に唐草文等の文様帯をもっている。その他に獣骨の上下を



第67図 井戸4出土遺物実測図(1)

切断し、加工したものがみられる(第67図7)が、使用目的等は不明である。

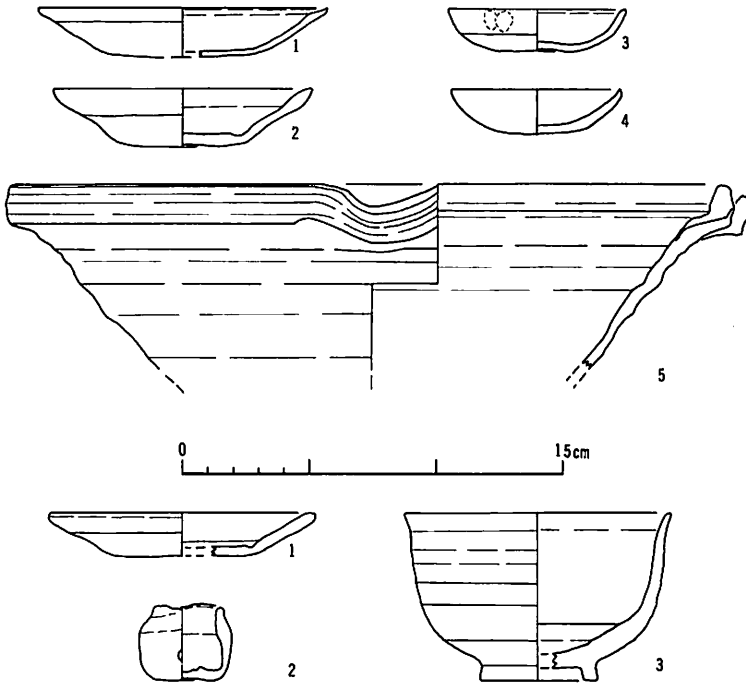


第68図 井戸4出土遺物実測図(2)

3 井戸9・10(第69図, 図版第89-2・3, 第99上中)

E区南東部南壁際に東西に並んでいる井戸である。両者とも自然石を積み重ねた井筒をもつもので、井戸4と基本的な構造は類似している。

西側の井戸9は長径1.3m, 短径1.1mの不整形な掘り方をもっている。北側は後世の攪乱によって破壊され、石組にも乱れがみられる。井筒上部には40~50cmの大きな石を配しているが、下部は20cm前後の河原石を積み重ねて構築されている。底部は砂礫層に達し、木杵・曲物等は見られなかった。井戸の上部は後世の攪乱によって破損し、現存している上面は井戸10と同一



第69図 井戸9(上)・10(下)出土遺物実測図

は約2.2mで、井戸9よりかなり深くなっている。南壁の断面にみる掘り方は中世層(暗褐色土層)を掘り抜いている。

出土遺物は井戸9に多く、井戸10では40~50cmの後世の切り石が多く投棄されており、土器類の遺物は少なかった。土師皿では燈明痕を口縁部に残す赤褐色のものが多くみられた(第69図上1・2, 下1)。これらの中には見込みに沈線が入っているものが多い。また口径6.7cm前後の手握の小皿もみられた(上3・4)。他に土師質小型壺(下2)がある。この壺の側面には径3mm程度の孔が穿たれている。陶磁器類は小片が多く、唐津系の碗片(下3)が器形として確認できたのみである。

井戸9から出土した須恵質の片口鉢は口縁端部を上に出させているもので、口縁外面は黒色に変質している。胎土は砂粒を含み粗暗灰色を呈している。他の遺物と時間差が認められ、埋土中に混入したものと考えられる。全体としては15世紀末~16世紀初のものである。

4 井戸3(第70図, 図版第89-4, 第99下)

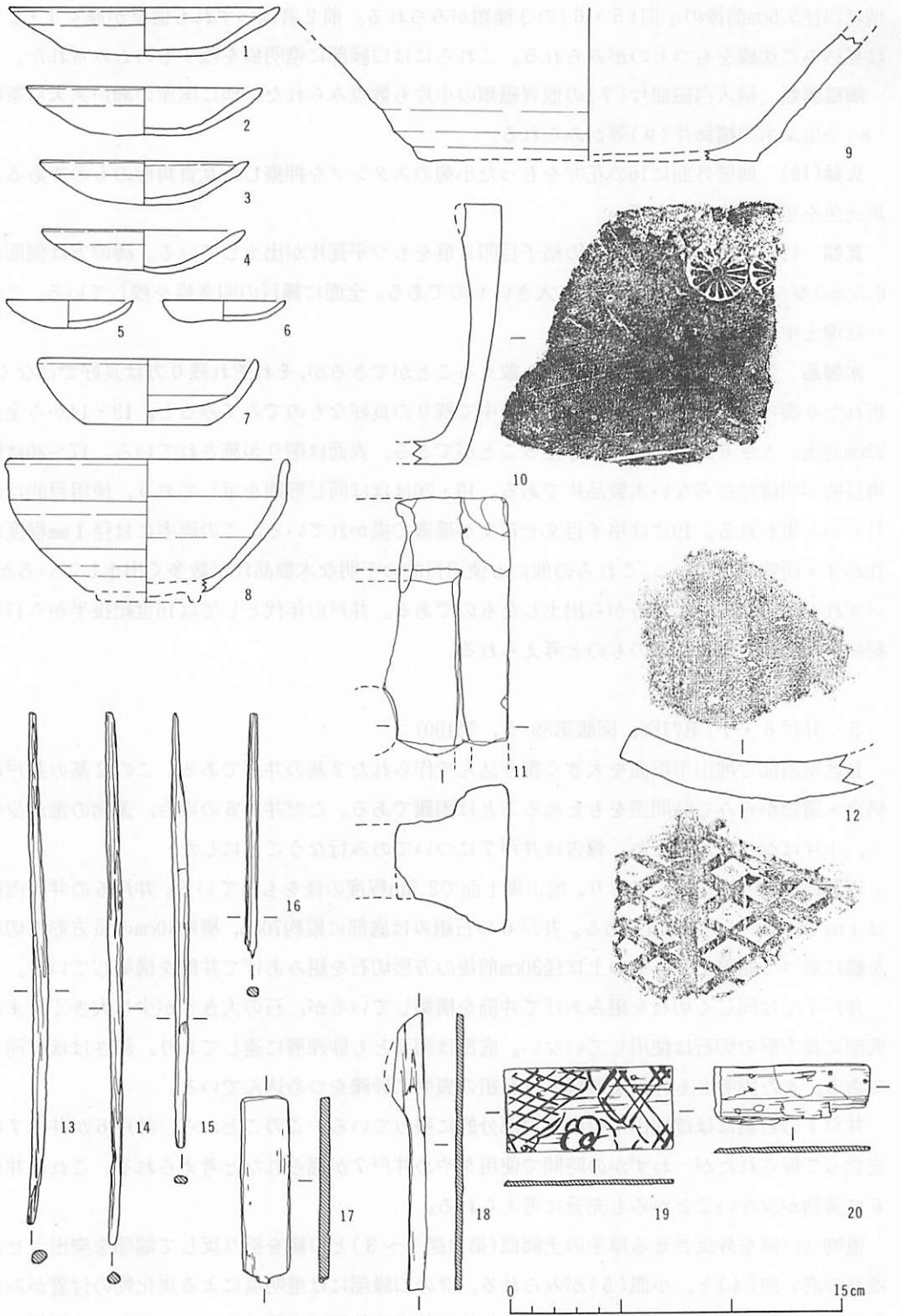
W区で検出された地山層に掘り込まれた素掘りの井戸である。井戸4と同一レベルから掘り込まれており、径1.8m前後の円形で側壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底部は砂礫層に達し平坦に整地されている。上面から深さ約2mを計る。

出土遺物は豊富である。

土師皿 口径12cm前後のもの(第70図1・2)と、口径9cm前後の碗様になるもの(3・4)の

レベルである。この面からの深さは約1.7mを計る。

東の井戸10は径2mの掘り方をもっているが、井筒は南に片寄って構築されている。井筒を形成している石は30~40cmの自然石が用いられ、その石積みが底部に達している。やはり木杵等は見られなかった。これも井戸9同様上部が破壊され、北側も後世の攪乱によって破損している。現存する上面からの深さは



第70图 井戸3出土遺物実測図

他に口径5.5cm前後の小皿(5・6)の3種類がみられる。前2者はいずれも器壁が厚く1・2では見込みに沈線をもつものがみられる。これらには口縁部に燈明痕を残すものもみられた。

陶磁器類 輸入白磁皿片(7)の他青磁類の小片も数点みられた。他に国産の瀬戸系天目茶碗(8)や信楽系の搦鉢片(9)等がみられる。

火鉢(10) 側壁外面に16の花弁をもった小菊のスタンプを押捺した瓦質角形のものである。黒灰色を呈し胎土はやゝ粗い。

瓦類 11の中窪孔あき磚と12の格子目叩き痕をもつ平瓦片が出土している。磚の方は側面が6.5cmの厚みをもっており、かなり大きいものである。全面に縄目の叩き痕を残している。これらは埋土中に混入したものである。

木製品 箸(13~16)は約30本前後を数えることができるが、それぞれ残り方は良好ではなく、折れたり裂けたりしたものが多し。その中で残りの良好なものでみると、13・14から全長23cm前後、太さ6mm前後の数値を得ることができる。表面は削りが施されている。17~20は使用目的が明確にならない木製品片である。19・20はほぼ同じ形態を呈しており、使用目的は同じものと思われる。19には格子目文と花文が墨書で描かれている。この両者には径1mm程度の孔が4ヶ所穿たれている。これらの他にも使用目的の不明な木製品片が数多く出土しているが、いずれも底部に近いところから出土したものである。井戸の年代としては16世紀後半から17世紀にかかる江戸時代初期のものと考えられる。

5 井戸6・7(第71図, 図版第89-5, 第100)

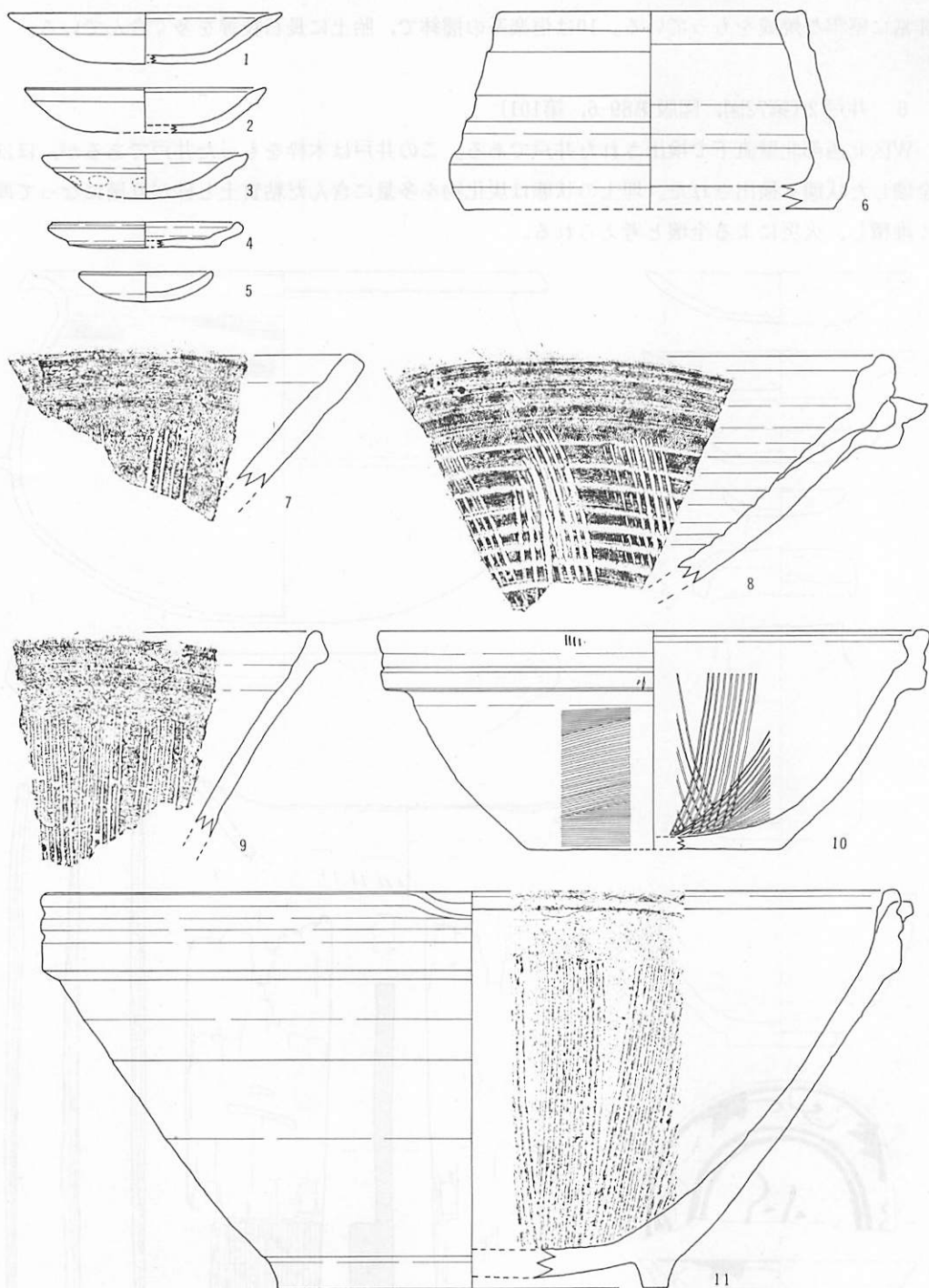
E区南西部で地山平坦面を大きく掘り込んで作られた2基の井戸である。この2基の井戸は構造・遺物からみて時間差をもとめることは困難である。ただ井戸6の場合、遺物の量が少なく、小片ばかりであるため、報告は井戸7についてのみ行なうことにした。

両者の掘り方は重複しており、地山層上面で2.5m程度の径をもっている。井戸6の井筒内径は1mで、井戸7は1.2mである。井戸6の石組は底部に縦約70cm、横約40cmの長方形の切石を縦に並べて側壁とし、その上に径30cm前後の方形切石を組みあげて井筒を構築している。

井戸7では同じく切石を組みあげて井筒を構築しているが、石の大きさが少し大きく、また底部に長方形の切石は使用していない。底部は両者とも砂礫層に達しており、深さはほぼ同じである。また両者とも井筒を形成する石組の裏側に砂礫をつめ込んでいる。

井戸7の石組はほぼ地山平坦面まで部分的に残っている。このことから、井戸6が井戸7に先立って掘られたが、わずかの時間で使用をやめ井戸7が掘られたと考えられる。これは井戸6に遺物が少ないことから充分に考えられる。

遺物は口縁を外反させる厚手の土師皿(第71図1~3)と口縁を折り反して端部を突出させた器高の底皿(4)と、小皿(5)がみられる。3の口縁部には燈明痕による炭化物の付着がみられる。その他の遺物は6の備前系の水差し片の他は搦鉢類が多数を占める。これらの搦鉢はいずれも破片で、7・9は丹波系、8・10は外面が光沢のある暗褐色を呈する備前系のもので、



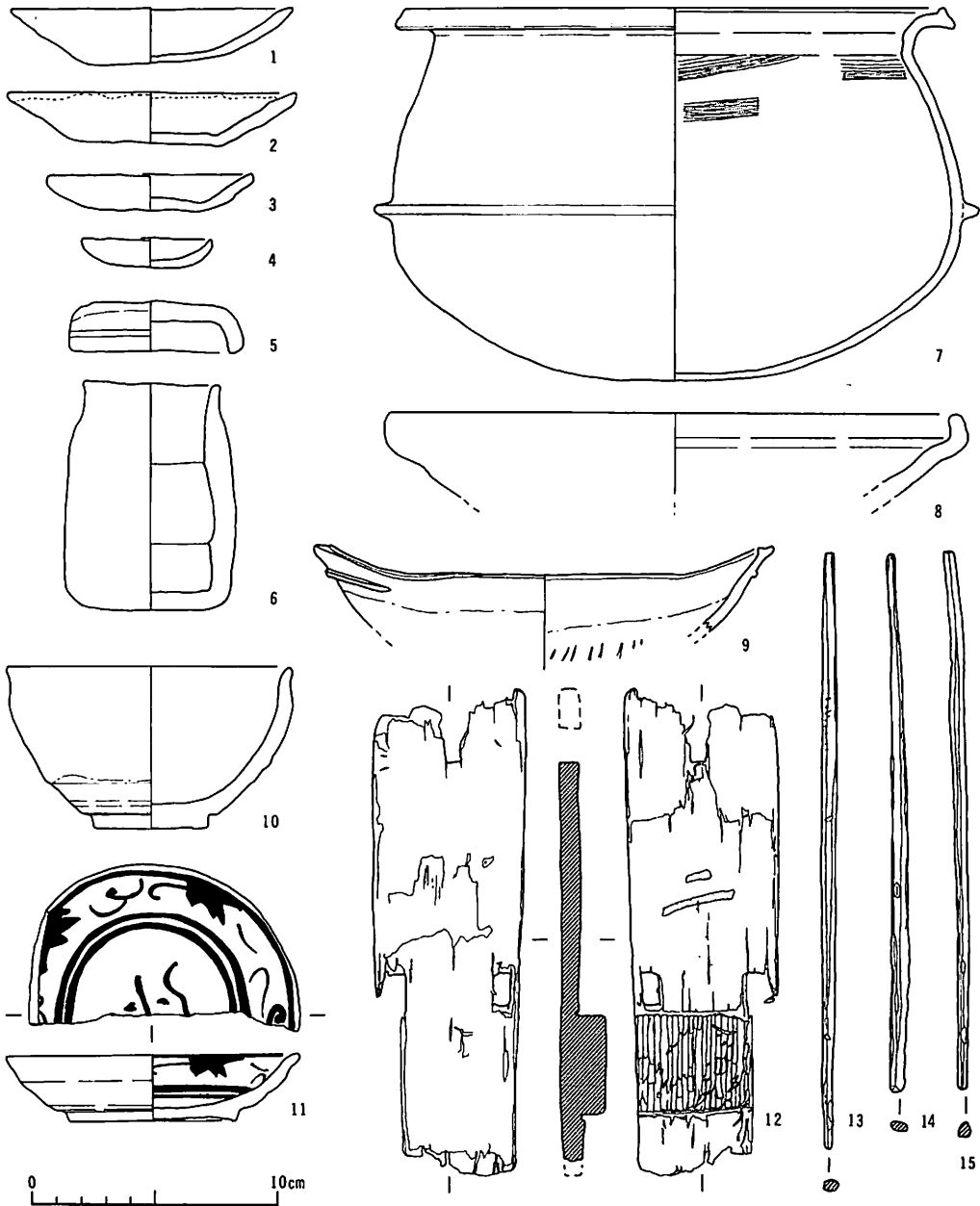
0 15 cm

第71图 井戸6・7出土遺物実測図

非常に堅牢な焼成をもっている。10は信楽系の擂鉢で、胎土に長石粒等を多く含んでいる。

6 井戸2 (第72図, 図版第89-6, 第101)

W区北西部北壁直下で検出された井戸である。この井戸は木枠をもった井戸であるが、ほぼ全壊した状態で検出された。埋土の状態は炭化物を多量に含んだ粘質土と砂が互層になって厚く堆積し、火災による全壊と考えられる。



第72図 井戸2出土遺物実測図

底部は砂礫層に達しており、完掘後も水がわいていた。北側はもろい炭の堆積と、上層部の砂礫層のため危険が大きく拡張しなかった。北壁の断面でみる限り、掘り方も破壊されていた。

出土した遺物は近世陶磁器片をはじめ多彩なものであった。

土師皿(第15図1~4) 井戸7で出土したものと同一のもので、2の口縁部には明瞭な燈明痕が残されている。また、塩壺も少数ではあるが出土している(5・6)。

羽釜(7) 井戸の底部に近い炭層から出土したものである。器壁は薄く、焼成は良好である。鐺の位置は中世のものに比してかなり下で、底部に近いところについている。底部には炭化物の付着が著しい。

陶磁器類 8の青磁盤片や、瀬戸系の鉢片(9)、美濃系天目茶碗(10)、唐津系草文皿等が出土しており、他にもかなりの破片が出土している。16世紀末~17世紀のものである。

木製品 下駄(12)が出土している。この下駄は幅6.7cm前後とやや狭く、長さは19.8cmで女性用かと思われる。下駄の裏には「二」の文字が墨書されている。また、箸も多く出土しており、15本前後が確認できた(13~15)。井戸3出土の箸とほぼ同じ整形法、大きさである。

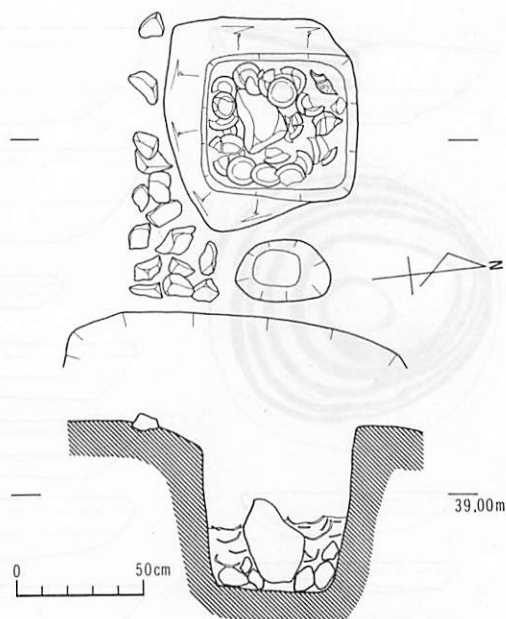
第3節 土壌

1 土壌6 (第73・74図, 図版第90上, 第102上)

土壌6はW区の西南部西壁直下で検出された1辺60cm前後の方形土壌である。土壌は地山層に掘り込まれており、底部までの深さは70cmを計る。土壌上部は南側の部分でやや広がりを見せているが、底部から55cmのところからはほぼ垂直に掘り込まれている。北側は上からほぼ垂直に掘り込まれている。底部は平坦で、10cm前後の河原石が敷きつめられ、その上に40cm前後の自然石が据えられている。

遺物の検出状況は掘り方上面から土師皿の小片を多く含んでいたが、30cm程度掘り進んだ段階で中央に据えられた石の頭部が露出し、周囲に多数の完器を含む土師皿が出土した。これらは折り重なるようにして底部にまで及んでいた。その出土の状況は上部に褐色の胎土をもつ土師皿が多く、底部に白色の胎土をもつ土師皿が多くみられた。他にこの土壌からは1点だけ丸瓦玉縁の破片を出土し、瓦器碗の完器も1点だけ出土している。

土師皿 出土した遺物は土師皿がほとんどで、一括性の高いものである。白色で良質の胎土をもつ土師皿では、口径によって3つの



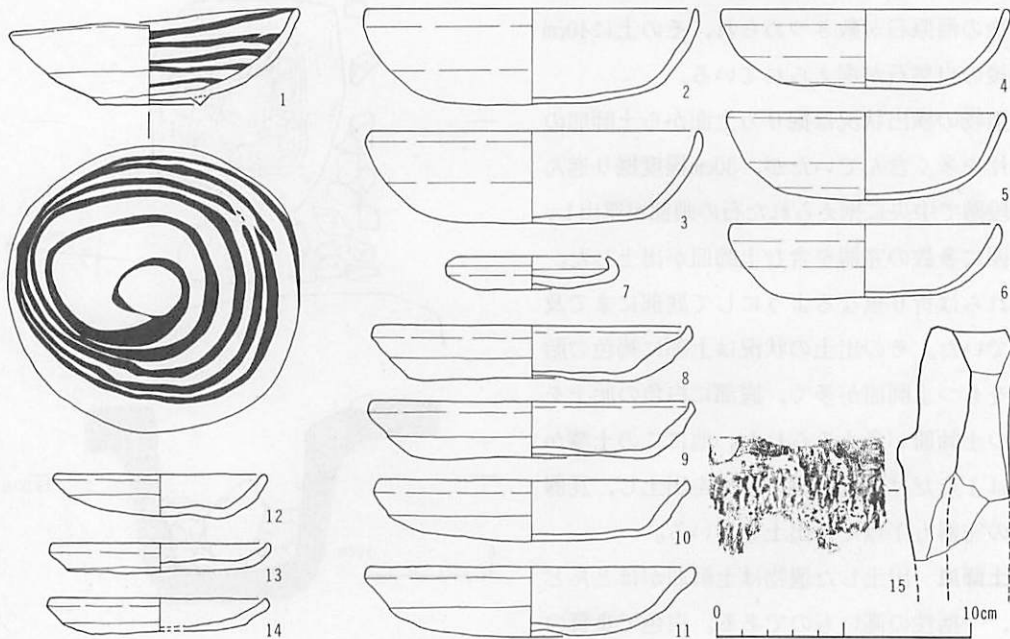
第73図 土壌6実測図

タイプがみられる。1つは口径13.2~12.7cmの大皿(第74図2・3)と、口径10.8cm前後の中型のもの(4~6)があり、他に口径5.9cmの小皿(7)がみられる。この土師皿は7を除いて堦に近い形態をもっているが内底面は広く体部は内側へ湾曲し、口縁端部に折り線がみられる。いずれも内部は滑らかに仕上がり、外面も丁寧に仕上げられている。器壁は2~3mmと薄い。出土点数は大きいものが図示した2点のみで、中型のものが5点である。小皿は器壁が厚く器高も1.3cmと底いが整形は丁寧である。

白色の土師皿が比較的少なかったのに対して褐色を呈し、砂粒を含む粗い胎土をもつ土師皿は口径12.4cm前後の大皿(8~11)と口径8.3cm前後の小皿(12~14)の2タイプがみられる。土師皿は底部が平坦で広く、立ち上り部で角をつけて口縁部をつまみ上げている。器高は2.3cm前後で口縁端部を突出させているものもみられる(8・9)。外面の整形は雑で器壁の厚みも一定していない。この形態は小皿においても同様である。器高は1.5cm前後である。大皿の口径：器高の比率が5.2：1となり、小皿では5.5：1である。これからみれば、形態の類似とともに口径と器高もほぼ同じ比率で作られていたといえる。出土点数は大皿が約29点、小皿が約19点である。完器またはそれに近いもの数では大皿が17点、小皿が3点と、小皿の方が極度に少なくなっている。

瓦器堦(1) 外底部に小さな三角形の高台を貼り付けたもので、器形が否んでいる。内面はレコードの溝状にヘラミがきが行なわれている。外面は押えによる整形が行なわれ雑である。胎土は砂粒を若干含んでいるが良質で黒灰色を呈している。

丸瓦(15) ほぼ石の頭部と同じ高さで出土したもので、瓦器堦・土師皿を除いた遺物はこれ

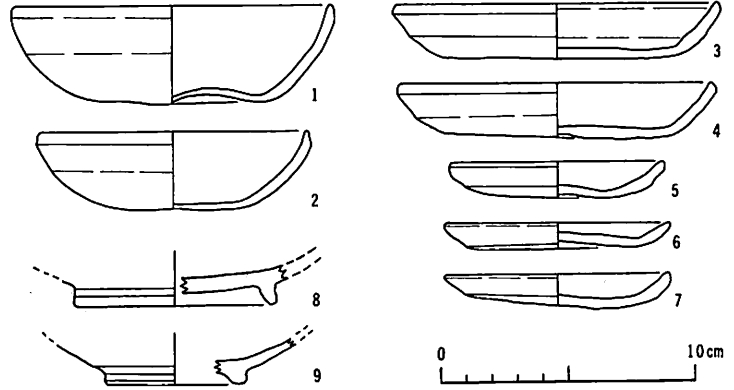


第74図 土壙6出土遺物実測図

1点のみである。丸瓦凸面に縄目叩き痕を残している。

2 土壌13 (第75図, 図版第90下, 第102下)

E区の北西部にあって地山平坦面を掘り込んで作られた径1.2mの円形土壌である。土壌上面からの深さは約70cmで、土壌の側壁はほぼ垂直に掘り込まれている。さらに底部は中央に向ってわずかに下るがほぼ平坦である。土壌の北側は若干時期の異なる隅丸方形の土壌によって破損をうけ側壁上



第75図 土壌13出土遺物実測図

部は欠失している。両者の時間差は出土遺物からみて半世紀以内である。

遺物の出土状況は暗褐色を呈する埋土中から土師皿の小片が多数検出されたが、底部に近づくにしたがって、しだいに完器に近いものが増加した。底部には厚さ10cm前後の炭の堆積がみられ、この層からは完器も出土した。さらに炭の堆積を取り除くと底部平坦面に土師皿が貼り付くようにして検出された。

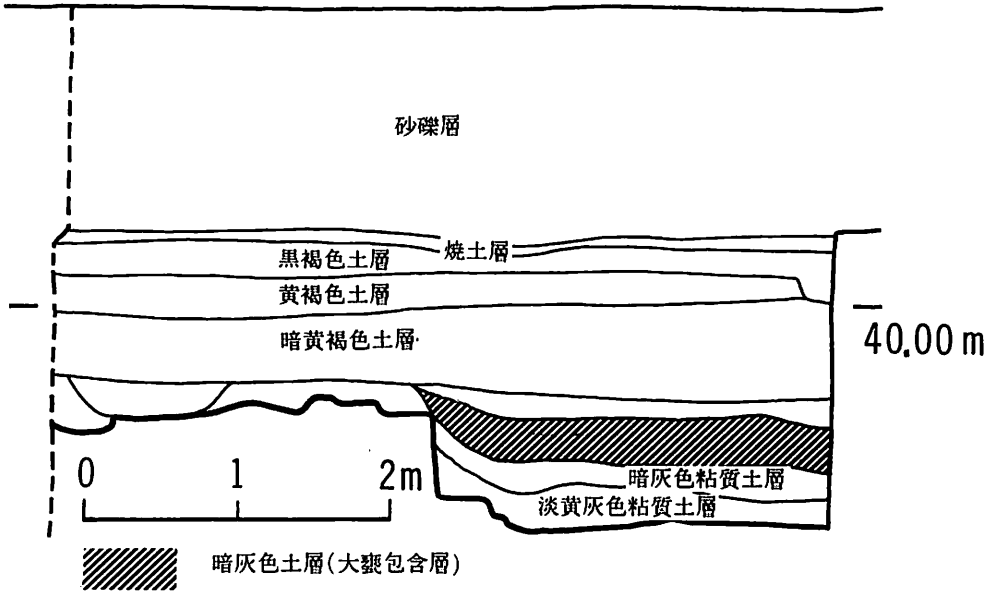
出土した遺物の主流は圧倒的に土師皿類で、埋土中からは灰釉陶器片(8・9)を数点検出したが、これらは土壌埋没の段階で混入したものであろう。

土師皿 白色の胎土をもつ口径10.5~12.5cm前後の大皿(1・2)、褐色の胎土をもつ口径12.5cm前後の大皿(3・4)、口径8~8.5cm前後の小皿(5~7)の3種類がみられる。全体として小片が多く、量的な把握は困難であるが、白色系の大皿で10~15点前後、褐色系の大皿では約20点程度であるのに対して、褐色系の小皿は圧倒的に多い。これらの土師皿類の形態的な特徴は、土壌12のすぐ北側を走る溝2や、W区の土壌6とほぼ平行するもので、時期的にみて同じとして差支えない。

3 土壌5 (第76~81図, 図版第91, 第103, 第104, 第105上, 第106下, 第107上)

W区とE区の境目北端部で検出された土壌である。現地表面から土壌検出面までは約2.7mで、中世の暗黄灰色土層に掘り込まれている。上面は長径約4.5m、短径約3mの不整形な隅丸方形を呈している。底部は地山層を掘り込み、上面とは異なる不整形な形を呈している。深さは検出面より1m前後で、畔下の最深部では1.3mに達している。

土壌5の上部には近世の石敷遺構の東部礫層がみられ、礫層の下部で土壌5が包含していた備前焼の大甕片を検出した。大甕検出面より少し掘り下げたところで大甕片の散布範囲を確認



第76図 土坑5W区北壁断面実測図

し、その段階で南北約2 m、東西約2.7mの隅丸方形の土坑南西部を検出した。この段階で土坑の北側は北壁より北に広がり、東側も畔より東に広がることを確認した。

土坑5から出土した大甕片は遺物用コンテナー60箱以上に達した。

土坑の埋土は中間に暗灰色土層を挟み、上層(暗灰色土層)と下層(淡黄灰色粘質土)の3層にわかれており(第76図)、上層には備前焼の大甕片が多量に含まれていた。下層には大甕片は全くみられず、土師皿類の出土が著しかった。断面確認後北側を確認するために北側に拡張し、北限を確認してW区での作業を終了した。その段階で南北約3 mの数値を得た。

E区での調査は当初畔を残して行っていたが、大甕片の散布がE区東地部の畔下付近に集中するため、散布範囲を確認した後、その範囲で畔を取り除いた。その結果東西約4.5mの数値を得ることができたが、畔下にあった近世の土坑によって上面東北部は破損し全容は確認できなかった。E区でも約50箱の遺物用コンテナーを消化して大甕片を取りあげた。下層からはW区同様に多数の土師皿を検出した。その一部は底部に貼り付くようにして出土し、完器もみられた。

備前焼甕 出土した遺物は備前焼の大甕が主流を占め、量的にも遺物用コンテナー100箱以上に及ぶ膨大なものである。総点数は約20～22点前後を数えている。計測可能なものは第3表にまとめた。その中で全体を復元できたものは8点である。

これらの大甕は平均値でみると口縁径54.3cm、底部径43.3cm、器高84.3cm、胴部径76.6cmとかなり大きいもので、第77図1は器高最大の90.0cmに達している。これらは粘土紐巻上げによって形成されているが、内外面ともに叩き締の痕跡は全く残っていない。体部外面は篋削りが行なわれ、その後刷毛状のもので調整されていて、口縁部を除いて全面にその痕跡がみられる。

第3表 土壙5・14出土大甕計測表

挿図	図版	出土地	口縁径	底部径	器高	胴部径	備考
77-1	103-1	土壙5	53.0	40.4	90.0	77.0	
-2	-2	〃	53.4	40.6	82.0	77.8	底部内側に「×」のヘラ記号
78-3	104-3	〃	48.6	39.4	86.6	72.0	
-4	-4	〃	52.6	45.6	85.0	79.4	
	-6	〃	54.0	46.0	83.0	79.0	
	-7	〃	56.0	42.0	83.5	76.5	
	105上-8	〃	54.0	46.0	83.0	77.0	
79-5	-11	〃	53.2				
-6		〃	53.2				
-7		〃	55.2				
-8		〃	58.6				口縁内側に「×」のヘラ記号
-9	-9	〃	55.4				
-10	-10	〃	55.2				
-11		〃	65.6				
80-12		〃		47.4			
-13	-12	〃		48.0			
-14	-13	〃		44.0			
		〃	46.5	44.3	81.0	76.2	
82-1	105下-1	土壙14	54.0	38.0	85.0	74.4	
-2	-2	〃		41.0		77.6	
平均値			54.3	43.3	84.3	76.6	

刷毛状痕の方向は上から肩のあたりまでは斜めに施され、肩より底部にかけて縦方向に施されている。内面は全体に横方向の刷毛状痕を残しているが、底部付近では縦方向に施されている。内底面には痕跡はみられない。

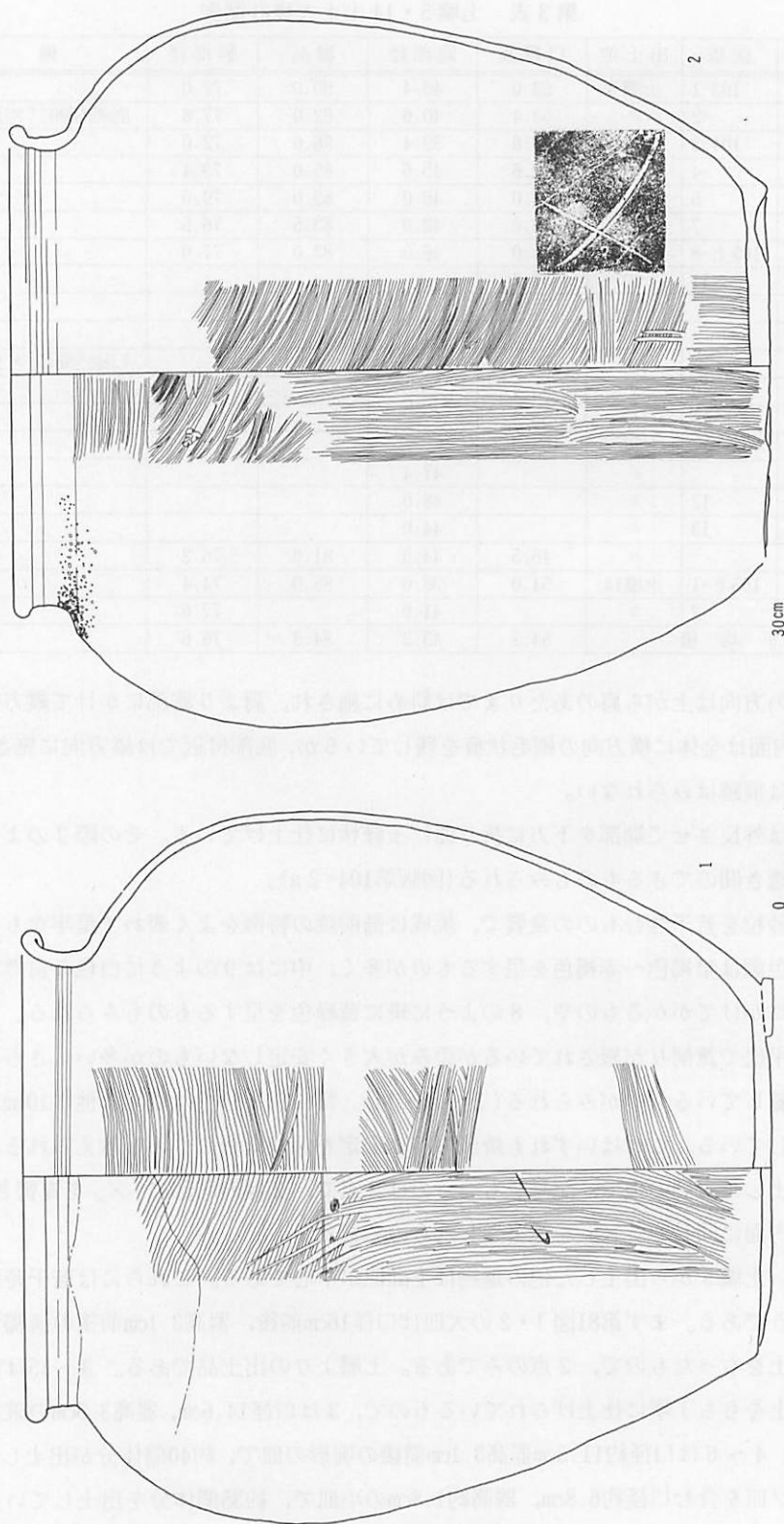
口縁部は外反させて端部を下方に折り曲げ玉縁状に仕上げている。その際2のように折り曲た部分に透き間のできるものもみられる(図版第104-2a)。

胎土は砂粒を若干含むものの良質で、焼成は備前焼の特徴をよく表わす堅牢なものに仕上がっている。色調は暗褐色～赤褐色を呈するものが多く、中には9のように白色の自然釉が口縁下部から肩にかけてかかるものや、8のように斑に黄緑色を呈するものもみられる。

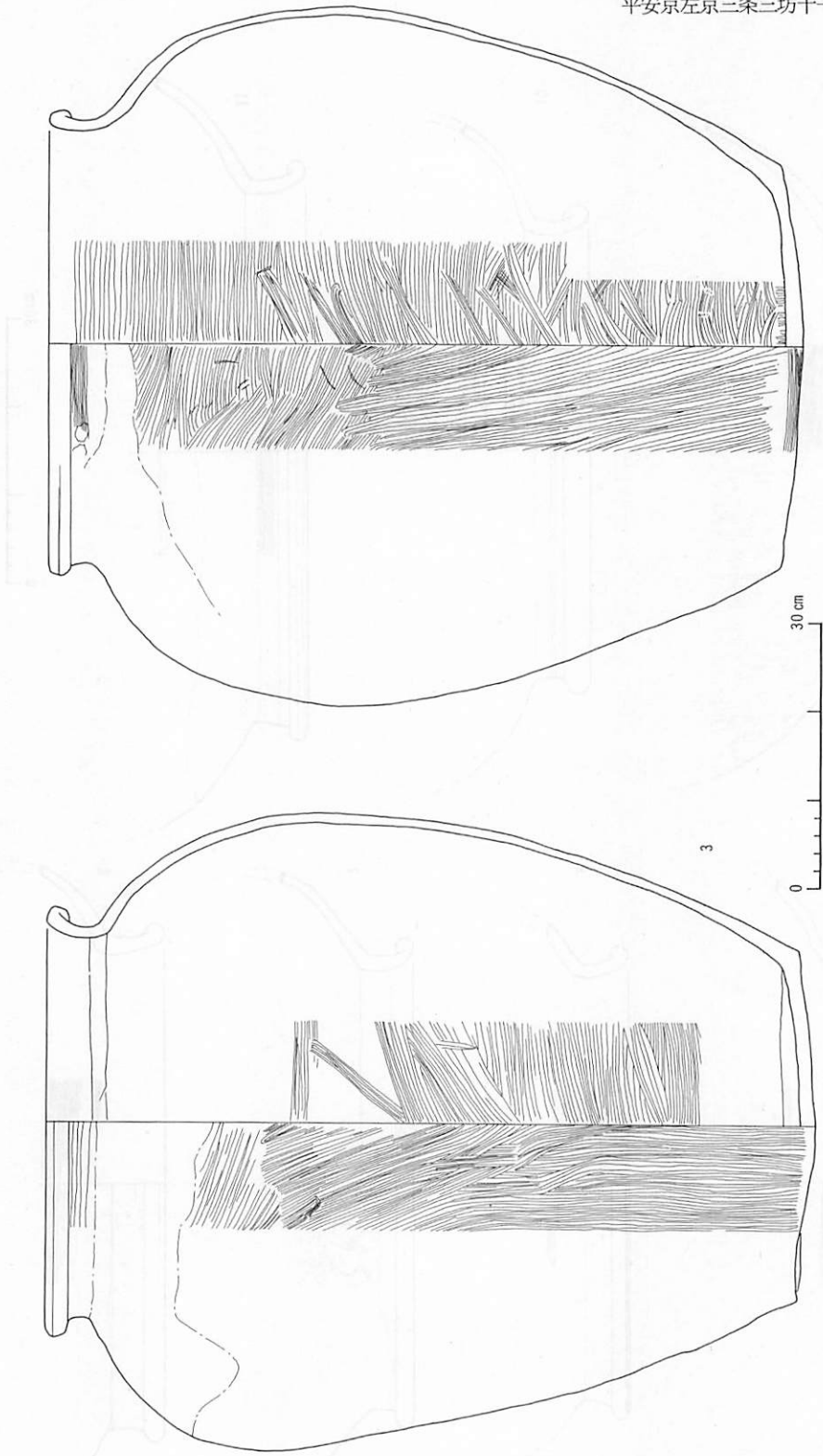
底部は平底で篋削りが施されているが歪みが大きく安定しないものが多い。さらに甕片が底部端に付着しているのがみられる(1・13・14)。特に13・14では甕片の他に10cm前後の粘土塊が付着している。これはいずれも焼成の時の安定を保つためのものと考えられる。

今回出土した大甕の中で、記号をもつものは2点で、2は内底部に「×」を篋書きしたもの、10は縁部内面に同じく「×」を篋書きしたものである。

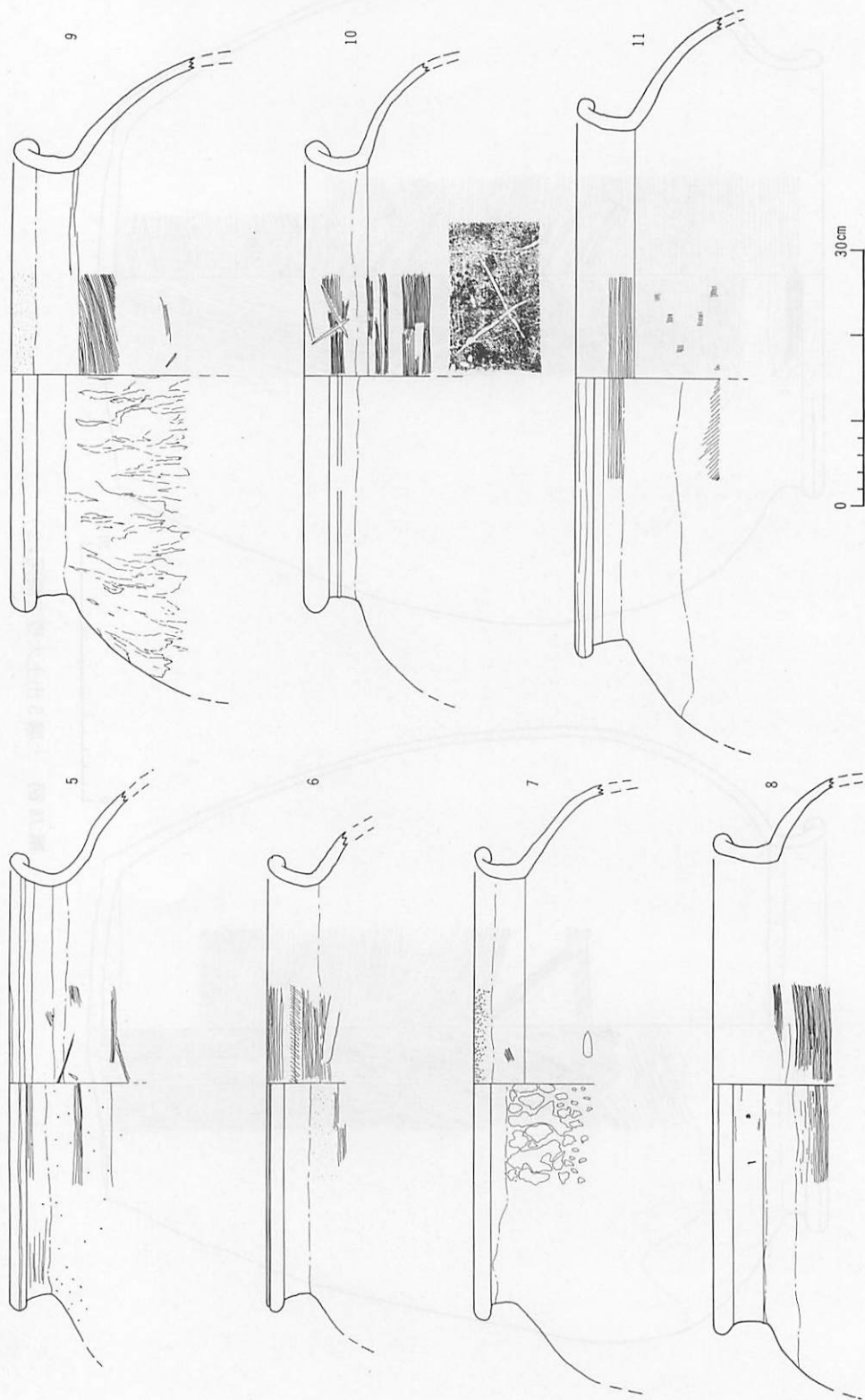
土師皿 土壙5から出土した他の遺物は土師皿が中心である。これらには若干時間差が認められるようである。まず第81図1・2の大皿は口径16cm前後、器高3.1cm前後の淡褐色を呈する良質の胎土をもったもので、2点のみである。上層よりの出土品である。3～15は白色を呈し良質の胎土をもち丁寧に仕上げられているもので、3は口径14.6cm、器高3.5cmの破片で1点のみである。4～6は口径約11.3cm器高3.1cm前後の坩形の皿で、約40個体分が出土している。7～15はヘソ皿を含む口径約6.8cm、器高約1.8cmの小皿で、約35個体分を出土している。16～24



第77図 土壙5出土大甕実測図(1)



第78图 土壙5出土大甕美瀬图(2)



第79図 土境5出土大甕美瀬図(3)

は褐色を呈し砂粒を含みや、粗い胎土をもつ。16～18は口径10.6～12.0cm、器高1.25～2.9cmの大皿で約95個体分を出土している。19～24は口径約7.8cm、器高約1.4cmの小皿で、約95個体分を出土している。

これらの土師皿は下層中より出土した一括性の高いものである。中層には土師皿はみられず、中層を間にして上層と下層の間には若干時間差が認められるようである。下層の土師皿は14世紀初頭ごろと考えられる。

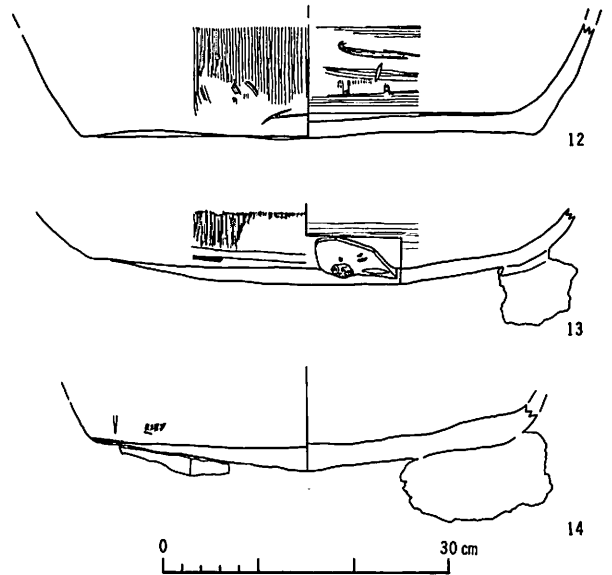
その他の遺物は上層中層から出土したものである。

青磁碗(26) 釉は高台部に及んでい
るが高台底部は露胎を呈し、高台内面も一部に釉がみられる他は露胎である。

白磁(27～29) 27には高台外面に釉がかかっているが内側は削りによる露胎を呈している。29は高台外面から内面の $\frac{1}{3}$ のところまで釉がかかっているが底部は削りによる露胎を呈している。

播鉢(25) 播磨産の須恵質播鉢である。口縁端部は垂下し、片口をもつものであろう。口縁外面は黒色に変質し、胎土は砂粒が多く粗い。内面は使用痕が著しい。

灰釉陶器(30) 口縁部に輪花を配している。口縁端から内側へ約半分下ったところと、外面の口縁端から $\frac{2}{3}$ のところまで灰釉がかかっている。色調は部分的に白色化しているが、全体には灰色を呈している。

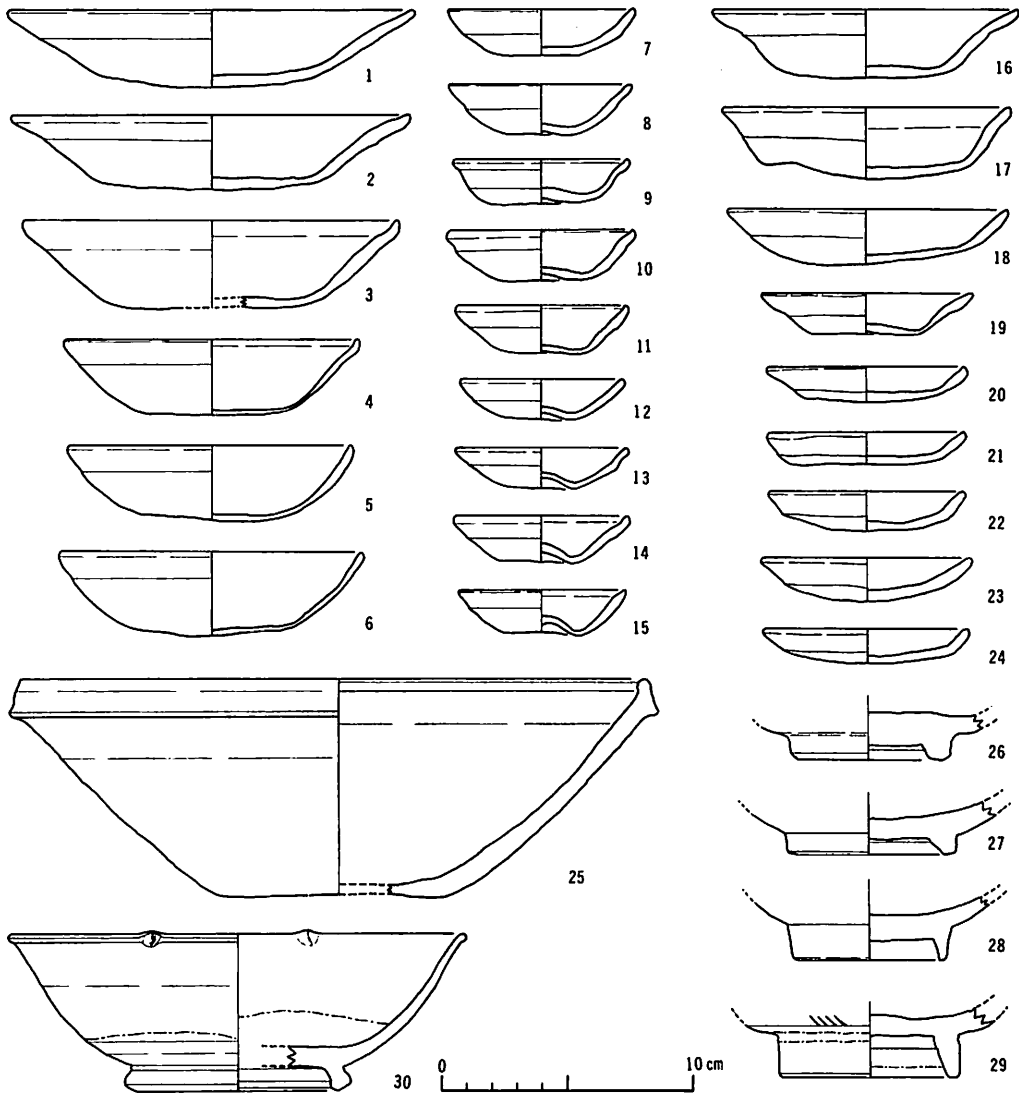


第80図 土塋5出土大甕実測図(4)

4 土塋14 (第82・83図, 図版第7, 第105下, 第106上)

E区の中央部で検出されたもので、地山平坦面に掘り込まれた不整形な土塋であるが、全体としては方形を呈している。土塋の残存状況は決して良好といえるものではなく、西側と北側では地山平坦面からほぼ垂直に掘り込まれた側壁を残しているが、東側と南側では円形の土塋や近世の攪乱によって破壊されている。土塋の底部は西側で地山平坦面から約50cmを計るが、東に向かってしだいに傾斜し、底部東端部では約80～90cmに達している。この土塋からは第82図1・2の備前焼の大甕を2点出土しており、土塋5との関連で注目すべき土塋である。

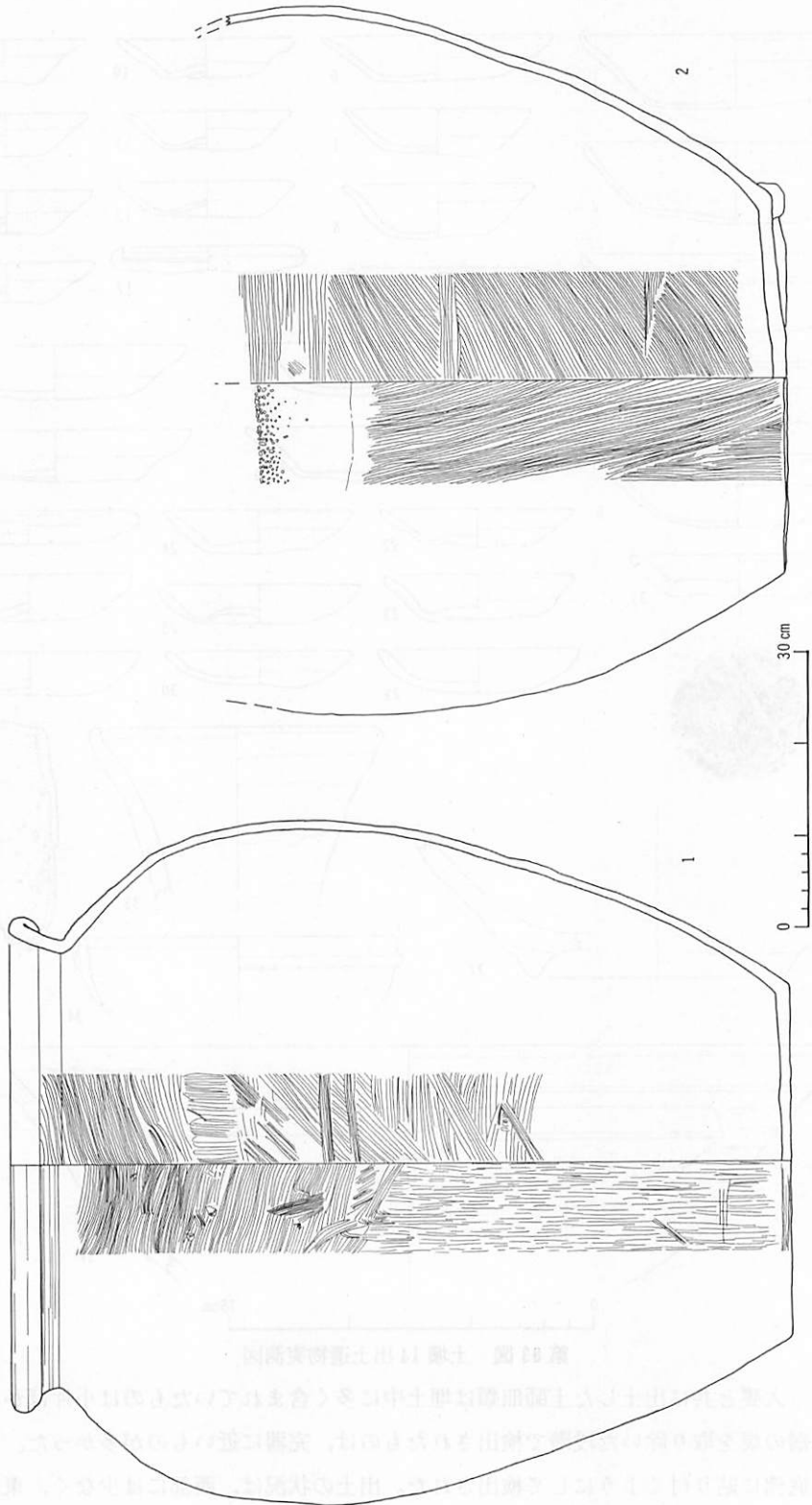
土塋の埋土中には炭の堆積が著しく、厚さ10～15cmの層が2層になって堆積していた。炭の上層からは遺物はあまり検出できなかったが、下層からは土師皿類の小片を多数検出し、炭の層を取り除いたところからは大甕を検出した。大甕の検出状況は、土塋の底部に貼り付いたよ



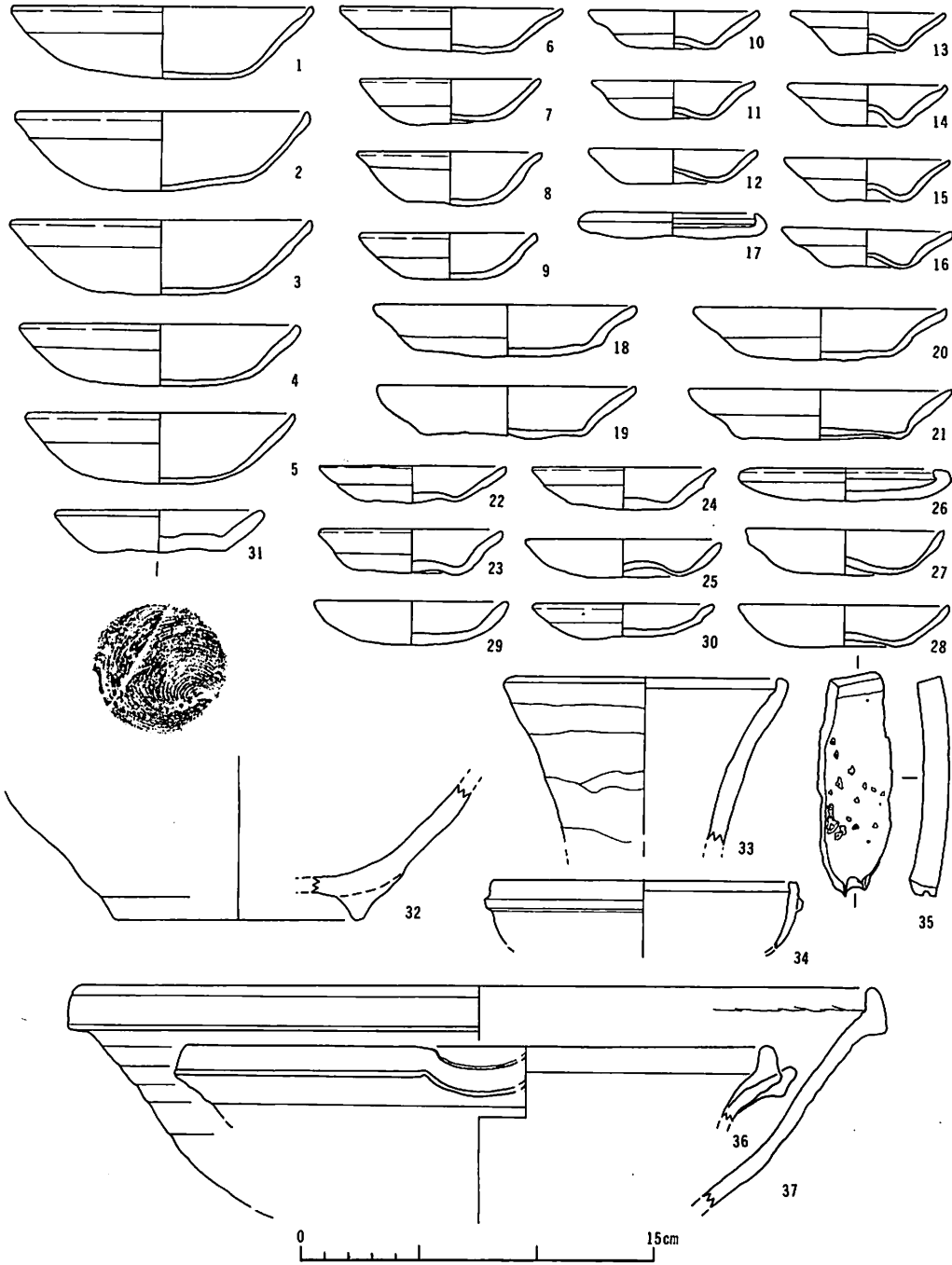
第81図 土壌5出土遺物実測図

うに多数の破片がちらばり、折り重なっていた。2点の位置関係は1が西側の高い部分で、2は少し離れて東端部に散乱していた。

備前焼甕 複元された大甕は1で器高82.6cm、口径54cm、胴径73.8cmを計り、土壌5のものと同様である。口縁は端部を折り反して玉縁状に仕上げ、口頸部外面には横ナデが施されている。胎部は内外両面共に叩き目痕等は完全に消され、外面には篋削りの痕跡を残しており、刷毛状のものによる整形の痕跡を内外面に顕著に残している。これらはすべて土壌5の大甕と同じである。色調は褐色～暗褐色で、内面も同じ色調を呈している。2もほぼ同じであるが胴径が少し広がり約78cmになっている。底部には陶片を付着させ安定を保っているようである。これら2点は土壌5の大甕とほぼ同時期で、同じ時に投棄された可能性が強いものである。



第82図 土壺 14 出土大甕実測図



第 83 図 土塚 14 出土遺物実測図

土師皿 大甕と共に出土した土師皿類は埋土中に多く含まれていたものは小片ばかりであったが、下層の炭を取り除いた段階で検出されたものは、完器に近いものが多かった。これらは大甕同様底部に貼り付くようにして検出された。出土の状況は、西部には少なく、東端部に顕著にみられた。その他、土師皿類以外の遺物は概ね埋土中より出土したものである。

出土した土師器皿類の中で、白色の良好な胎土をもつものは口径11.5~12.8cmの大皿(第83図1~5)と、口径7.5~9.5cmの小皿(6~9)、さらに6.5~7.2cmのヘソ皿(10~16)の他口径8cmの小皿(17)がみられる。また褐色のやゝ砂粒の多い胎土をもつものは、口径11cm前後の大皿(18~21)と、口径8cm前後の小皿(22~25)があり、17の白色の小皿と同じ形態をもつ小皿(26)がみられるが、これは数点のみである。その他に、砂粒を含み灰色を呈する胎土をもち焼成も甘い口径8.5~9cmの小皿(27・28)等がみられる。これらの年代からみて14世紀のものと考えられる。

土師皿の他に、土師皿と類似した形態をもつ小皿で、焼成は良好で須恵器を思わせる硬さをもっているのがみられる(31)。この外底部は平坦で糸切り痕が明瞭に残り、轆轤で整形されたものである。器壁は厚く、胎土には砂粒が多く含まれて灰色を呈している。他に1点同じものが出土している。

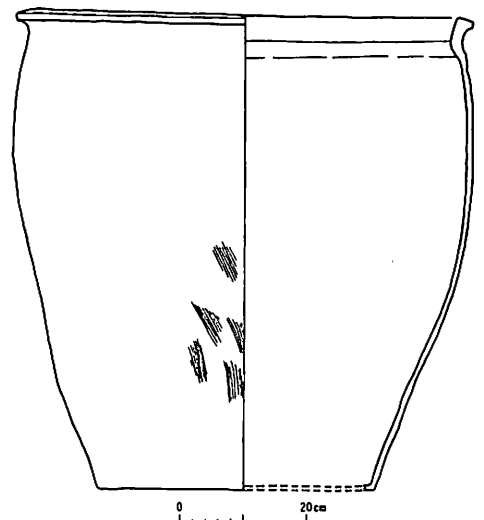
他に32は貼り付け高台の壺片で内面に灰釉がかかっている。36・37の須恵質片口鉢は口縁外面が黒色を呈している。胎土は砂粒が混入し粗いが内面は使用痕によって滑らかである。土師製品では33の塩壺片と焼成のいきとどいたミニチュアの羽釜片が出土している。また2次加工を施した石鍋片も1点出土している。

5 石積土塼1 (第84・85図, 図版第94-1, 第107下)

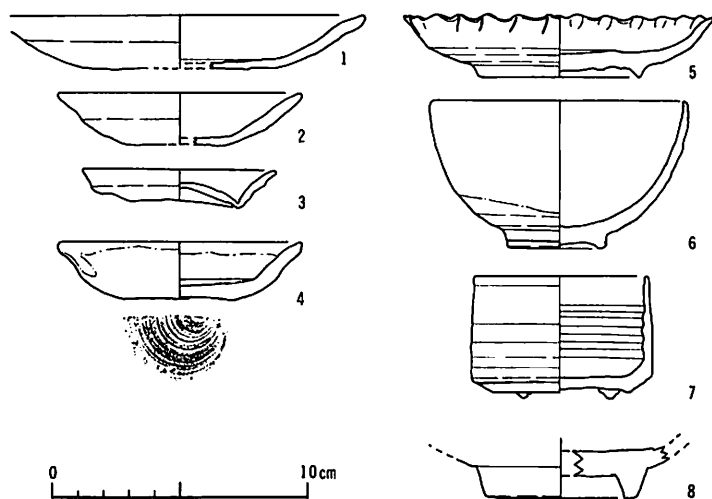
W区南西隅で検出されたもので10~20cmの河原石を積み上げて作られた土塼である。現地表面から土塼上面までは2.7m下る。土塼は2段になっており、長径約2.1m, 短径約1.4mの不整形な楕円状の掘り方をもつ土塼の中に西に片寄って長径1.1m, 短径0.7mの石積土塼が掘り込まれている。上段の土塼は地山を掘り込んで作られており、深さは約40cmである。周囲の側壁はほぼ垂直に落され、底部は平坦に整地され部分的に10~20cmの河原石が敷きつめられている。下段の土塼は平坦な底部西寄りに作られた10~20cmの河原石を密に積みあげたもので、平坦面からの深さは約50cmである。

遺物の出土状況は主に下段の土塼からのもので、第84図の大型の瓦質大甕が出土している。この大甕は石積土塼の中に折り重なって入っており、各破片は大きい。恐らく土塼中に据えられていたものであろう。この大甕は体部から口縁にかけてほとんど復元するだけの破片点数をもっていたが、底部は全くみあたらなかった。使用目的を考える上で重要な手懸りになるものであろう。他の遺物は埋土中より出土したもので、数量は多くなく、陶磁器類が多かった。

土師皿類の出土は少なく、褐色を呈し砂粒の



第84図 石積土塼1出土遺物実測図(1)



第85図 石積土塋1出土遺物実測図(2)

5の皿は内底部に釉をかけず径4cmの円形で素地が露出している。暗茶褐色を呈している。7の外底部には糸切り痕を残し、口縁部に灰釉を厚くかけている。

少ない胎土をもつ口径14.4cm前後の大皿(第85図1)のように口縁部を外反させたものや、3のように底部が内側へ大きく内湾するものがみられた。陶磁器類では4の輸入白磁片などの小片が若干認められたにすぎない。陶器類では唐津系の皿・碗(5・6)がみられる他、瀬戸系の向付け(7)や小皿(8)も出土している。

第4節 その他の遺構・遺物

1 ピット群 (図版第94-3~5)

京都市内で発掘を行なった場合、一般に数多くのピットを検出するが、その中には明らかに柱穴と思われるものもみられる。しかし、多くは単独で検出したり、発掘面積に規制されまとまった関連性をもつものは数少ないのが実情である。今回の調査においても多くのピットが検出されているが、多くは意味不明のものである。ただE区南壁に沿って並ぶ底部に上面を平らにした石を据えたピットは相互に関連するものであろう。

このピット群には南壁直下で平行して走る落込みが関連しているものと考えられる(3)。この落込みは北側に走る溝2と平行しているもので、両者の距離は落込みの北端から溝2の南端まで約8.5mを計る。今の距離を単純に平安京造営尺⁹⁾をあてはめて計算すると1間=1.794mで、4.5~5間の間に納まる距離である。現状で南部の落込みを溝と考えるにはいささか躊躇するが、両者の間に広がる地山平坦面を考慮し、平坦面上にもいくつかの石を据えたピット(4)が検出されていることから、建築遺構を想定することもあながち無理ではあるまい。

2 土塋・その他(第90図, 図版第93, 第94-2)

その他の土塋には石組を行なった方形のものが2点と、素掘りで円形の浅いもの等が検出された。これらのうち石組土塋2(図版第94-2)はE区北西部で検出されたもので土塋13の北端にかかる部分に南北75cm, 東西1.15mの長方形に20~30cmの石を巡らせたもので底部まで32cmを計る。土塋内には近世の染付皿片や燈時痕を残す土師皿小片が数点出土したのみである。底部は

土壙13を破壊していた方形土壙の上面を若干掘り込んでいた。

石組土壙3はE区中央部で検出された地山平坦面を掘り込んだ方形の土壙である(図版第93)。大きさは南北1.9m、東西2.1mの長方形で地山平坦面から底部までは約54cmを計る。周囲に積まれた石は30cm前後の自然石で3段程度に積み上げている。石を取り除いた側壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦に整地されている。土壙を埋設していた埋土は黒色に近い暗褐色土で遺物の混入は極く少量であった。近世初期の遺構である。

近世層の段階で検出された土壙として土壙3がある。この土壙はW区中央部で現地表面下2.4m前後のところで検出されたもので、径1.1mのほぼ円形の土壙である。底部はそれほど深くはなく15cm程度で、中央に向って傾斜している。埋土は炭化物が全体に広がり、この炭層中より漆器片(図版第118-3)や、櫛(1・2)等を出土している。

W区北部の北壁直下には地表面下2.5mのところで10~15cmの礫を敷つめた敷石遺構が検出された。この敷石は幅1.7~1m程度でW区の西端から東端にまで及んでいた。この石敷の西端部では下層から井戸2が検出されている。石敷を取り除いた直下は全面に炭を含む焼き土層が薄く堆積していた。

W区中央部では近世上層を取り除いた段階で、現地表面下1.8mのところで漆喰をつきかためて造られた池の跡を検出した。池は「く」字形に造られ東端部は方形の土壙にかかっている。長さは4.2mで幅は最大で2.2mを計る。漆喰の厚みは部分によって異なるが平均10cm前後である。

3 軒瓦類

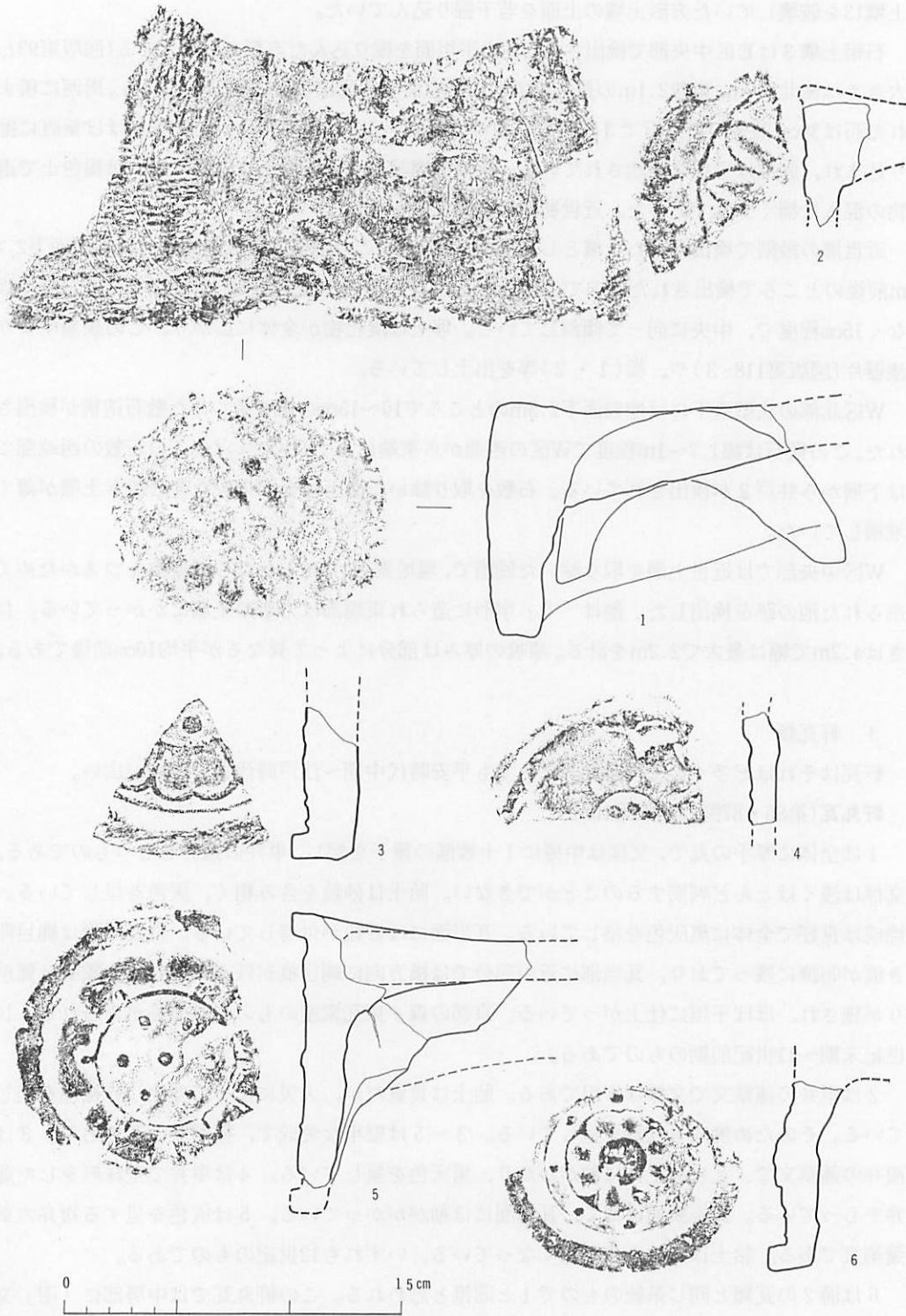
軒瓦はそれほど多くなく、時期的にみても平安時代中期~江戸時代までと幅が広い。

軒丸瓦(第86・87図、図版第108)

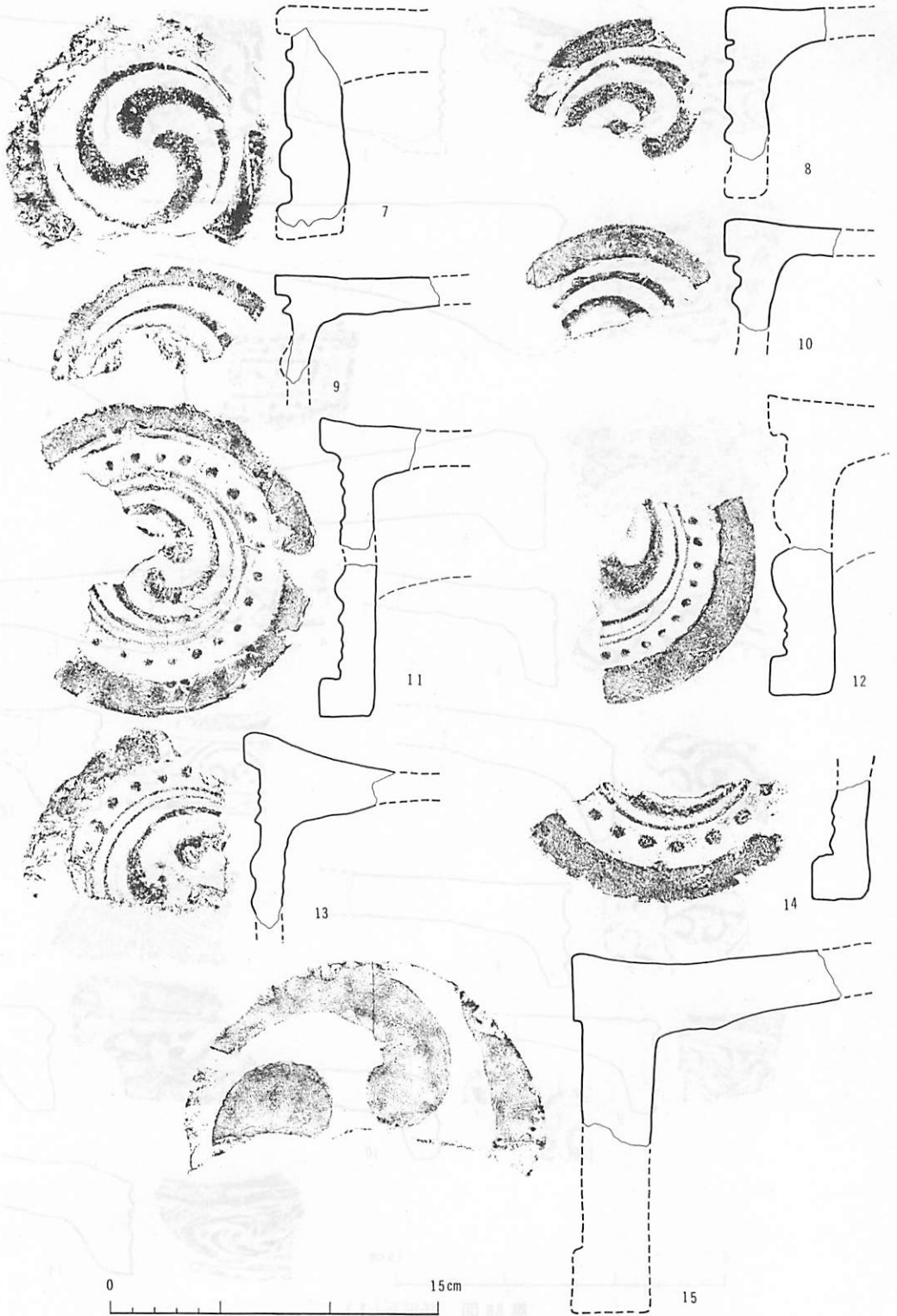
1は全体に厚手の瓦で、文様は中房に1十数個の蓮子を配し、単弁の蓮弁をもつものである。文様は浅くほとんど判別することができない。胎土は砂粒を含み粗く、灰色を呈している。焼成は良好で全体に黒灰色を呈している。瓦当面には砂粒が付着している。丸瓦凸面は縄目叩き痕が明瞭に残っており、瓦当部に近い部分では横方向に縄目痕が残されている。顎部は篋削りが施され、ほぼ平坦に仕上がっている。京都の森ヶ東瓦窯産のものに類似品がみられる。10世紀末期~11世紀前期のものである。

2は単弁の蓮華文で文様は平坦である。胎土は良質だが、火災によって変色し赤褐色を呈している。そのため焼成も軟質を呈している。3~5は堅牢な焼成で、播磨産の瓦である。3は複弁の蓮華文で、瓦当面全体に釉がかかり、黒灰色を呈している。4は単弁で宝珠形をした蓮弁をもっている。瓦当断面は薄く、瓦当面には釉がかかっている。5は灰色を呈する複弁六葉蓮華文である。胎土は砂粒を含み粗くなっている。いずれも12世紀のものである。

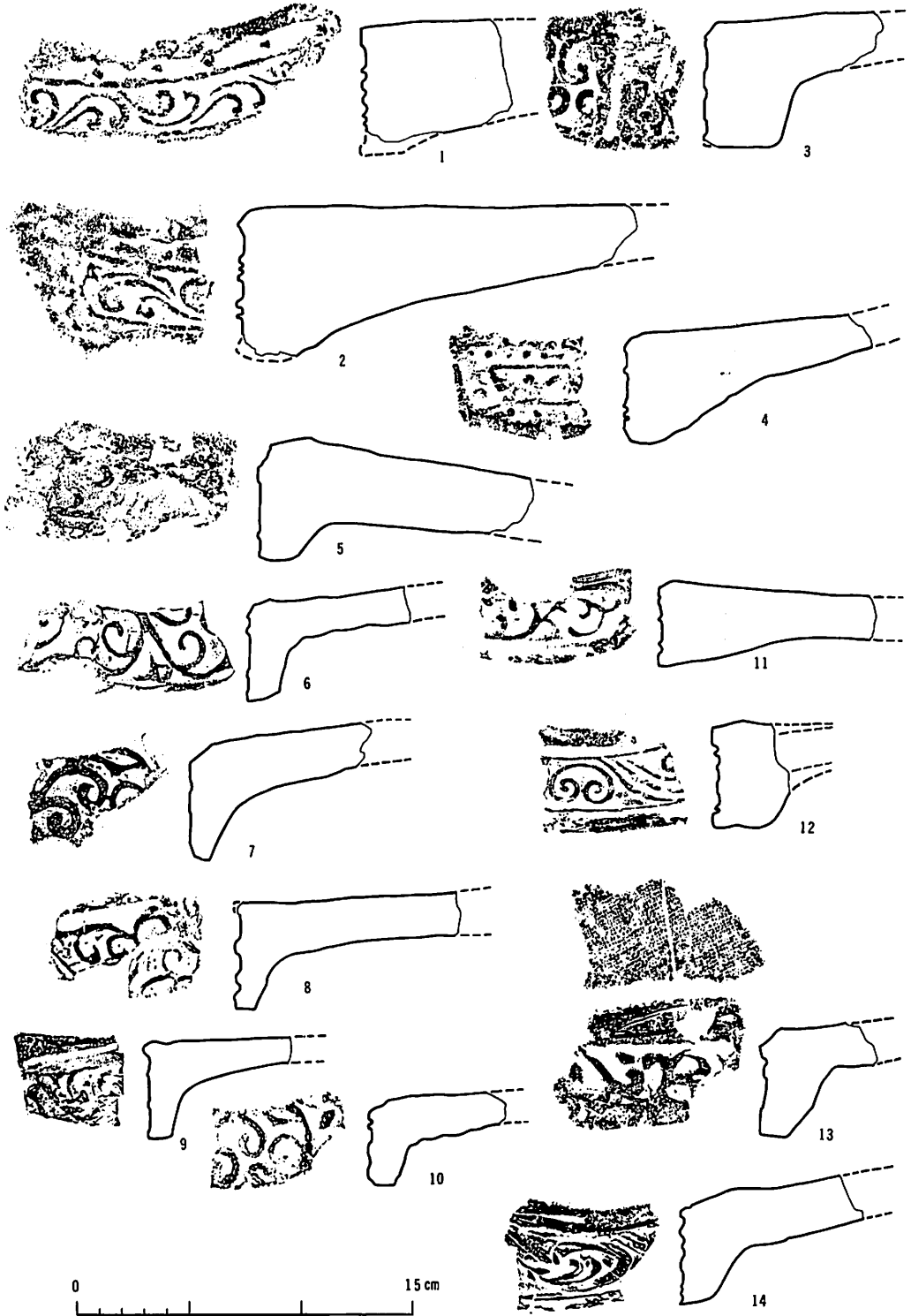
6は溝2の瓦類と同じ系統のもので1と同範と思われる。この軒丸瓦では中房部に「卍」文をもつものが一般的であるが、本資料では不明瞭で判然としない。胎土は砂粒を含み粗いが焼成は良好である。色調は溝2と同様で火災によって赤褐色を呈している。この時期の平瓦・丸



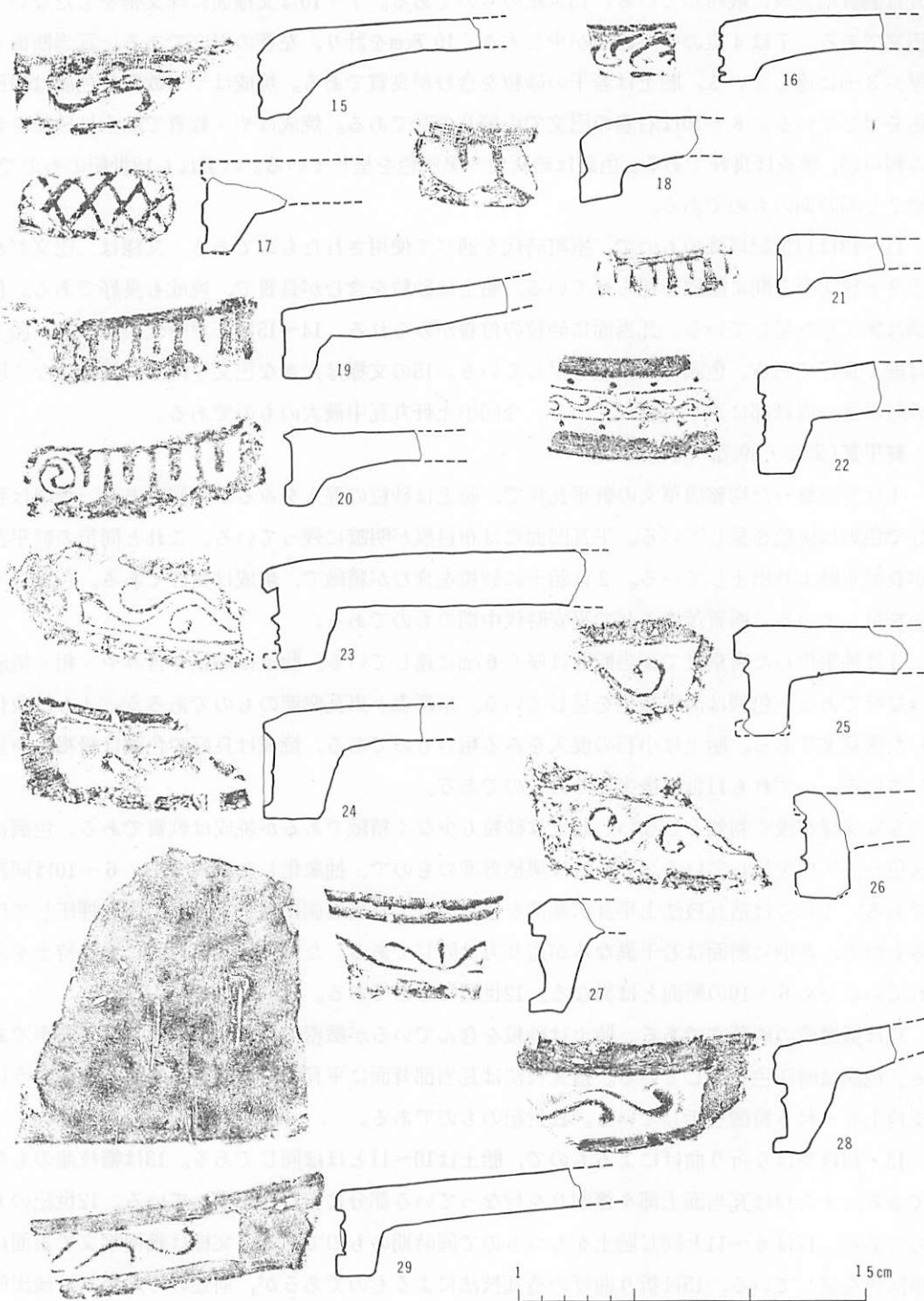
第 86 図 軒丸瓦(1)



第 87 図 軒丸瓦 (2)



第88図 軒平瓦(1)



第 89 図 軒平瓦(2)

瓦は調査地全域に散布している。13世紀のものである。7～10は文様面に珠文帯をもたない三巴文である。7は4点の中で直径が少し大きく10.8cmを計り、左巻の巴文である。瓦当断面も厚く3cmに達している。胎土は若干の砂粒を含むが良質である。焼成はやゝ軟質で色調は黒灰色を呈している。8～10は右巻の巴文で小振りの瓦である。焼成はやゝ軟質で胎土は砂粒を含み粗いが、焼成は良好である。色調は暗灰色～黒灰色を呈している。いずれも13世紀のもので、溝2と同時期のものである。

11～13は14世紀以降のもので、室町時代を通じて使用されたものである。文様は三巴文だが巴文と珠文帯の間に圈線を巡らせている。胎土は砂粒を含むが良質で、焼成も良好である。色調は黒灰色を呈している。瓦当面に砂粒の付着がみられる。14～15は江戸時代のもので、胎土は細く良好である。色調は黒灰色を呈している。15の文様は大きな巴文を配し、周縁はなく巴の尾が瓦当周縁部に達して切れている。今回出土軒丸瓦中最大のものである。

軒平瓦(第88・89図, 図版第109)

1は形の整った均整唐草文の軒平瓦片で、胎土は砂粒の混入をみるが良質である。焼成は良好で色調は灰色を呈している。平瓦凹面には布目痕が明瞭に残っている。これと同範の軒平瓦が長岡京跡より出土している。2は胎土に砂粒を含むが精緻で、焼成は良好である。色調は灰色を呈している。西賀茂産の瓦で平安時代中期のものである。

3は抽象化した唐草文で瓦当断面は厚く6cmに達している。胎土は砂粒を含みやゝ粗く焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈している。京都森ヶ東瓦窯産のものであろう。4も抽象化した唐草文である。胎土は小石の混入をみる粗いものである。焼成は良好で色調は暗褐色を呈している。いずれも11世紀後半ごろのものである。

5は文様が浅く判然としない。胎土は砂粒も少なく精緻であるが焼成は軟質である。色調は灰色～淡灰色を呈している。6～11は栗栖野産のもので、抽象化した唐草文で、6～10は同範である。これらは造瓦技法上平瓦広端部を折り曲げて瓦当面側に粘土を入れて範を押圧して作るもので、各個に断面は若干異なるが造り方は同じである。ただ11は瓦当背面にも支持土を入れているため6～10の断面とは異なる。12世紀のものである。

12は播磨産の唐草文である。胎土は砂粒を含んでいるが緻密である。焼成は良好で堅牢である。色調は暗灰色を呈している。造瓦技法は瓦当部背面に平瓦を付け接合部を包み込むように支持土を入れる特徴を示している。12世紀のものである。

13・14はやはり折り曲げによるもので、胎土は10～11とほぼ同じである。13は幡枝産のものである。また14は瓦当面上部を篋削りを行なっている部分に布目痕を残している。12世紀のものである。17は6～11と同じ胎土をもつもので同時期のものである。文様は幾何学文で表面は黒灰色を呈している。15は折り曲げの造瓦技法によるものであるが、前述のものよりは後出的である。平瓦凹面の布目痕が瓦当面にまで及んでおり、折り曲げた平瓦に範を押圧したものである。12世紀の後半のものである。

16・18・20は同じ造瓦技法で15に続くものである。胎土は砂粒が多く粗い。焼成は16が良好

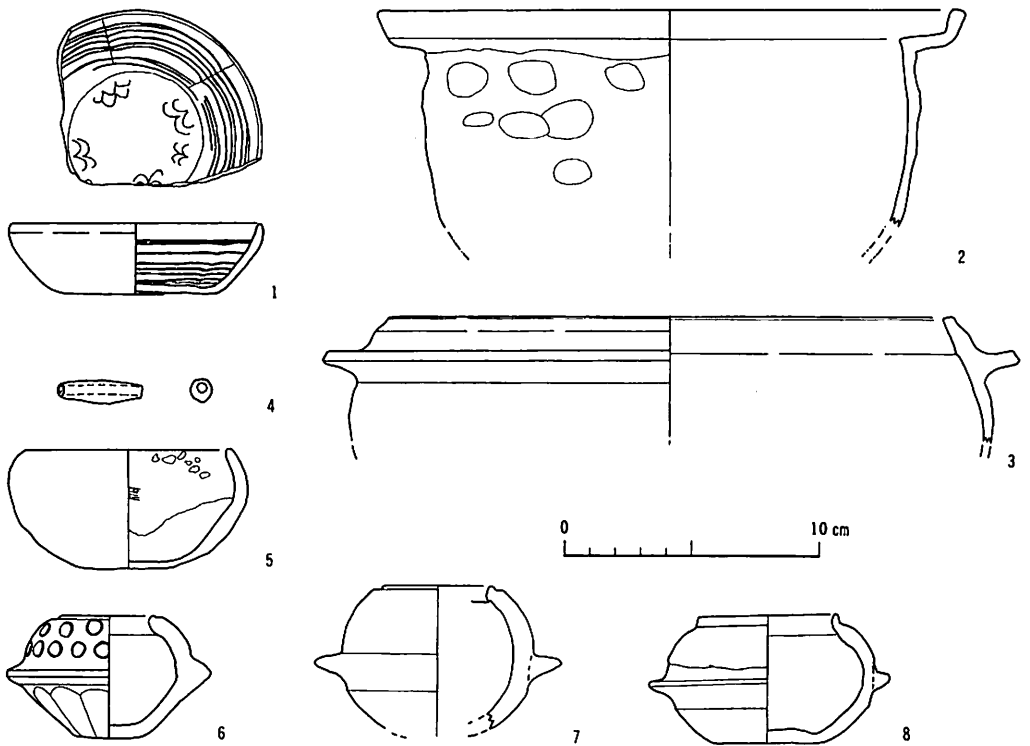
で暗灰色を呈する。また18は軟質に仕上り、暗色を呈している。21の剣頭文は瓦当面の厚みが薄く、整形も丁寧である。胎土は砂粒を含むが精緻で黒灰色を呈している。19の剣頭文は赤褐色を呈し、粗い胎土をもっている。20は中央部に巴文を置き左右に剣頭文を配している。胎土は砂粒を含み黒灰色を呈している。溝2に対応するもので12世紀後半から13世紀のものである。22は胎土・焼成共に良好な唐草文軒瓦でナデと篋削りによって仕上がられている。12世紀後半から13世紀のものである。

23~26は鎌倉時代後半から室町時代にかけてのもので、唐草文が簡素になっている。胎土は砂粒を含み粗い。色調は淡褐色~黒灰色を呈している。27~29は江戸時代の瓦で、胎土は良好で仕上も丁寧である。

4 土器類(第90図, 図版第110上)

1は瓦器碗片で内壁に輪花を5つ程度配している。輪花は外面から篋状のもので押して隆起させて形成している。内壁には横方向の篋みがきの痕跡が口縁部まで及んでいる。見込みには2つ山状の暗文を2つづつ1組にして6ヶ所ほど配されている。口径は10.1cm, 器高は2.8cmである。胎土は砂粒を含まない良質のもので、焼成はやや軟質である。表面は黒色を呈している。

2の土鍋は口径23.2cmで内壁には刷毛目状の調整痕が認められる。外面は炭化物が付着し黒



第90図 土器類実測図

色を呈している。胎土は良質で焼成も良好である。3の羽釜片は口径22.0cmで外面は黒色を呈している。口縁部は2段にナデ調整が行なわれ、内部に傾斜している。内壁は横方向刷毛目痕が残されている。焼成はやゝ軟質で胎土は砂粒を多く含んでいる。

4は長さ3.3cm、幅0.8cmの葉巻形土師質の土錘である。色調は褐色を呈している。孔径は0.3cmを計る。W区北部の石敷遺構中より出土したものである。5は土師質の小型埴で口径8.1cm、器高4.7cmである。黒灰色～灰色を呈し、焼成は軟質である。内外面は剝離がみられもろくなっている。

6～8は瓦質に近い小型の羽釜である。6は口径3.6cm、器高4.8cmでもっとも瓦質に近いものである。上半部外面には径4mmの円形の文様が上下2列に等間隔で配されている。また下半分は等間隔に縦方向に篋削りが丁寧に行われている。胎土は砂粒を含み焼成は良好で色調は銀化した黒灰色を呈している。7・8は外面をみがき上げ黒色を呈している。焼成はやゝ軟質である。7は口径4.2cm、器高5.1cmである。8は口径5.3cm、器高5.1cmである。胎土は良質である。

9は瓦質の香炉で口径15cm、器高10cmである。底部には3つの足を付け、外面には8弁の花文のスタンプを押している。

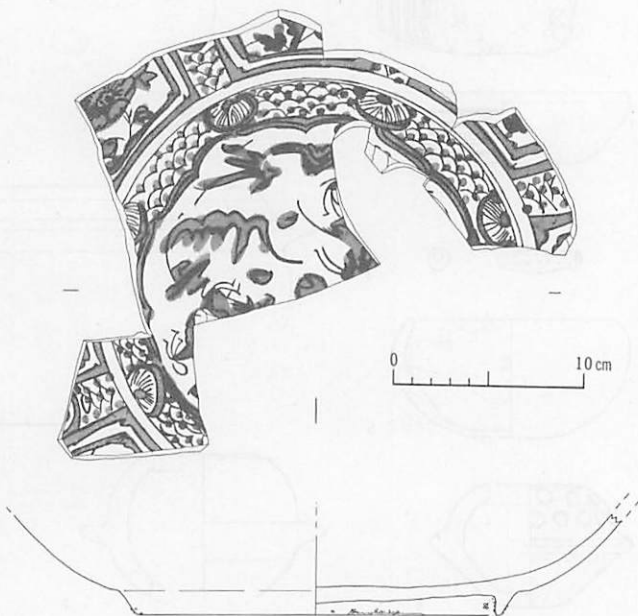
5 陶磁器類

陶磁器類は輸入磁器類と国産陶磁器類がみられ、特に国産のものは量の多さと共に多彩な様相を呈している。ほとんどが近世の攪乱層よりの出土である。

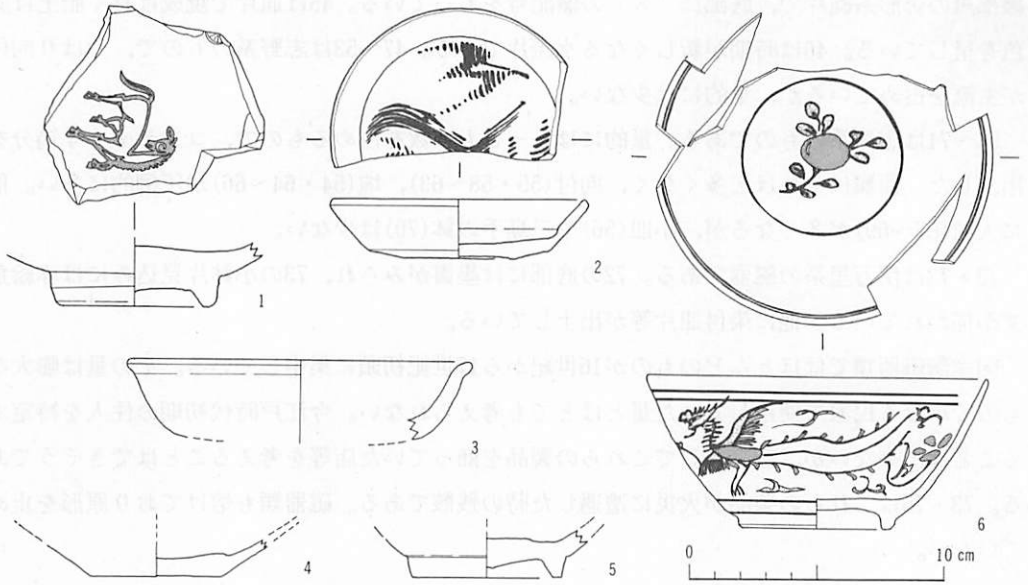
(1) 輸入磁器(第91・92図, 図版第110下, 第111)

青磁は1の印華馬文をもつ碗片, 6の刻花蓮花文をもつ碗片が多く出土し, 2の見込に櫛目文をもつ皿片や8の碗片のものは数点のみである。また3の盤片も数少ない。7は青磁の托片である。口径径6.6cmを計り外反させた口縁部に径0.4cmの孔を3ヶ所もっている。また胴部には高座間型の透かしが4ヶ所あけられている。この他に同形でやゝ小さい口径径6cmのものが1点みられる。

白磁は4・5・15である。4は



第91図 輸入磁器実測図(1)



第92図 輸入磁器実測図(2)

見込み周囲に沈線をもつ小皿で、5は見込み周囲に幅0.8cmの露胎部をもっている。15は牡丹印花文小皿片で砂高台をもつ福建徳化窯系のものである。

10～14は染付である。10は芙蓉手草花文大皿片で明末のものである。中央に草花が描かれ、口縁には牡丹文が認められる。11は同じく芙蓉手山水文皿片で10よりはやゝ小振りである。12・13は景德鎮窯系の類品で、見込みに葉文を描き、外面には口縁付近に波頭文を配し、芭蕉葉を描いている。楽字皿の胎土は陶器を思わせる焼成に仕上がっている。14は見込みに玉取獅子文を描いた小皿片で、外面は唐草文を描いている。

16は呉須赤絵写鳳凰唐文碗片で国産の写しである。京都で製作されたものか。

(2)国産陶磁器(図版第112～117)

国産の陶磁器類は量的にかなりの数にのぼっている。そのほとんどは近世のものである。

1～16は瀬戸系の陶器類で、1～8は室町時代に入る古手のものである。これらは器種も多く、皿・碗類の他、向付(2)や搦鉢(5)、おろし皿(13)、茶入(9・12・14)等がみられる他、坏(15・16)もみられる。17～22は瀬戸・美濃系の天目茶碗で、他に遺物用コンテナー2箱分の破片が出土している。これらは22の他若干を除いてすべて近世初期のものである。23～26の鉄釉小皿や同じ27の盃も同時期のものである。28～33は美濃系のもので、同じ器形のはみられないが、数は多い。

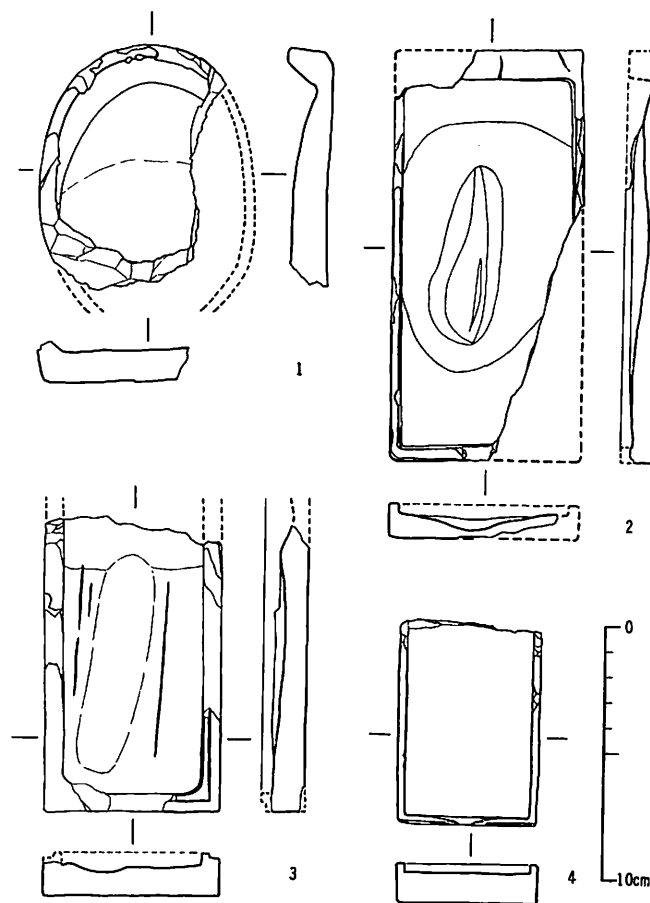
34～46は織部焼のもので分銅形向付(34)や傘形向付(35)をはじめ鳴海手の向付(38)等織部焼の初期の特徴をもつものが多い。器種は向付が中心で40も八角の筒形の向付である。41・42は

織部黒の杓形茶碗片で、底部に「×」の窯記号をもっている。45は皿片で焼成は良く胎土は灰色を呈している。46は時期が新しくなる水差片である。47～53は志野系のもので、やはり向付が主流を占めているが、量的には少ない。

54～71は唐津系のものである。量的にはもっとも多数を占めるもので、コンテナー4箱分を出土した。器類はそれほど多くなく、向付(55・58～63)、壺(54・64～66)が圧倒的に多い。他に大皿(67～69)が多くなるが、小皿(56)や三島手の鉢(70)は少ない。

72・73は伊万里系の磁器である。72の底部には墨書がみられ、73の小鉢片見込みには赤絵魚文が描かれている。他に染付皿片等が出土している。

国産陶磁器類ではほとんどのものが16世紀から17世紀初頭に集中している。その量は膨大なもので単なる民家で使用していた量とはとても考えられない。今江戸時代初期の住人を特定することは出来ないが、商売としてこれらの製品を商っていた店等を考えることはできそうである。73・75はこれらの製品が火災に遭遇した時の残骸である。磁器類も熔けており原形を止めていない。



第93図 石製品実測図

6 石製品 (第93図, 図版第118中)

石製品としてあげられるのは石製の硯だけである。1は黒灰色を呈する粘板岩製の小型楕円形の硯である。陸の後半分は破損して全容はつかめないが、整形の仕方はいいねいで、底部もほぼ平坦に仕上がっている。側壁上面もわずかに湾曲させて滑かに仕上がっている。陸から海にかけては使用痕によって滑かになっている。2～4は砂岩製のもので、2・3の2点は陸地の中央に砥石として使用したために生じた深い窪みがみられる。両者は底部にもその痕跡をとどめている。3は側壁に段をつけ、硯面の角を丸く削り出している。この他の石製品は、石鍋を2次加工した小片が3点ほどみられ

るのみである。

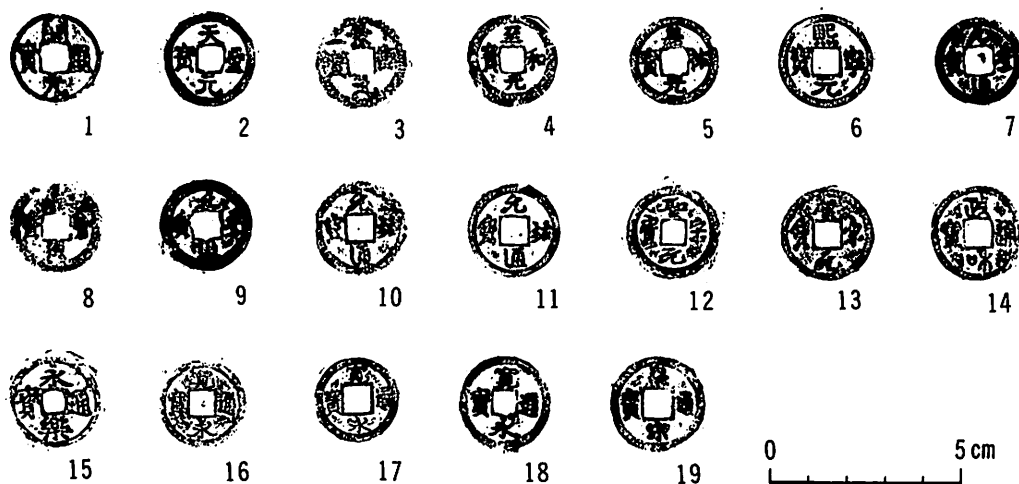
7 錢貨(第94図, 図版第118下)

錢貨は中国錢と日本錢とがある。これらは遺構を特定できるものは少なく、12の「聖宋元宝」のみがE区のピット14から出土したことを確認したにすぎない。

近世黒灰色土層——景德元宝(3), 永楽通宝(15), 寛永通宝(16~18), □宋通宝(19)

近世黄褐色土層——至和元宝(4), 熙寧元宝(6), 元祐通宝(11), 政和通宝(14)

暗褐色土層 —— 開元通宝(1), 天聖元宝(2), 嘉祐元宝(5), 元豊通宝(7~9), 元祐通宝(10), 聖宋元宝(13)



第94図 古錢拓影

第3章 姉小路烏丸の地と大甕について

今回土壌5・14両者から出土した大甕はあまり類例のないものである。この大甕はすでによく知られている『一遍聖絵』(1299年成立)に描かれた備前福岡の市に商品として登場している(第95図)。ここに描かれた大甕はあくまで絵画史料であって、編年資料とはなりえないが、13世紀末~14世紀初頭にかけて備前焼の大甕が交易の対象となっていたことは知れる。

今回出土した多量の大甕は、従来の備前焼研究による編年では第III期に入るものである⁴⁾。この時期の実年代は間壁忠彦氏によると鎌倉時代後半から南北朝にかけてといわれている⁵⁾。

ここで調査地を含む姉小路・烏丸の地を文献の上でみてみると、鎌倉時代の初め建保3年(1215)に次のような文書がみられる。

奉渡 地壹處事

合貳戸主余貳拾陸丈者

東西染丈 南北拾捌丈

在左京姉小路以北、烏丸以西、姉小路面、右件地元者卿二位家領也、而被相傳大炊御門烏丸地畢、今彼地内貳戸主余貳拾陸丈、所奉渡七条院女房治部卿殿御壺祢也、於本券者有類地之間不令相副、仍為後日證據、立新券之状如件

建保三年十月十八日 在判⁶⁾

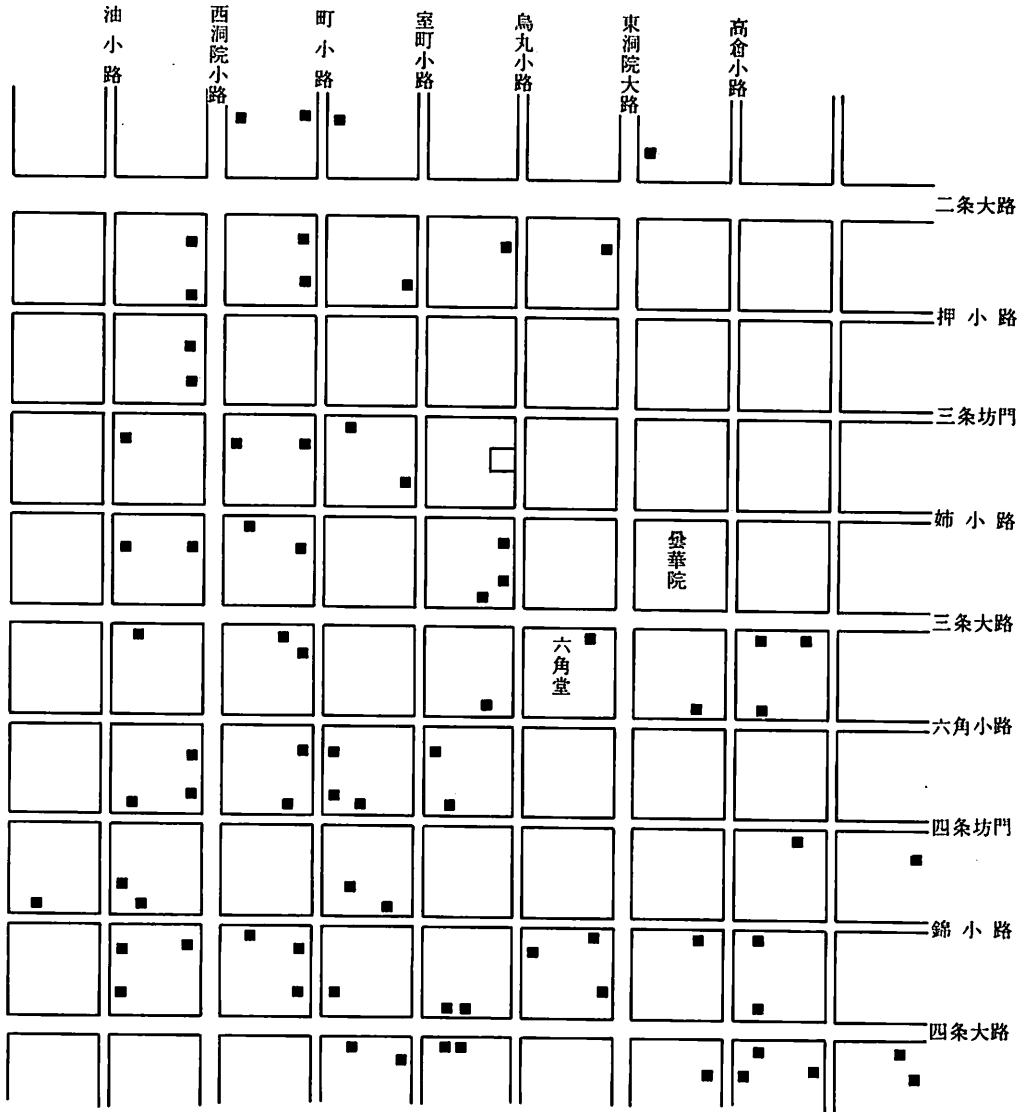
この左京姉小路の北、烏丸小路の西と表示される地は姉小路に面する東西7丈、南北18丈の長方形の土地である。これを鯨尺(1尺=0.378m)で換算してみると東西26.46m、南地68.04m

となる。この数値を現在の区画に合せると、調査地は敷地の北側に入ることになる。さらに平安京造営尺(1尺=0.299m)⁷⁾で換算してみると東西20.93m、南地53.82mとなり、この場合でも北端部にかかっている。

問題は当時の姉



第95図 備前福岡の市



第 96 図 応永三二・三三年酒屋分布図

小路が果して現在と同じかどうかというところだが、まずそう大きなずれはないものと思う。

ところが、この姉小路に面するというだけでは、果して姉小路の東端か中程か不明確である。そこで同じ土地がその後どのように変遷していくのかをみると、建保四年(1216)に譲状⁹⁾がみられる。そこには「姉小^(路)□北西」と表示されており、姉小路の北側でその中の西寄りの地と解釈できる。

同地は寛喜四年(1232)に沽却⁹⁾され、正和元年(1312)⁹⁾、延文三年(1358)¹⁰⁾に譲与されて最終的に貞治六年(1367)に日吉社に寄進されている¹¹⁾。寛喜四年に沽去された時の副状に「あねかこうちからすまろのちのうちにしのより」とみえていて、角地ではなく西側の地であることが明

確にされている。

次に同じ姉小路烏丸の地点表示をもつ売券が今一つみられる。

放券 敷地事

合登所者口東西拾貳丈，奥南北拾捌丈，但，比内口登丈，奥拾丈者，与相

在左京姉小路以北，烏丸以西，姉小路面，右件地者，明教并性蓮相傳私領也，而依有直要用，限直錢佰柒拾伍貫文，相副手繼相傳之證文拾通，所沽却□尼圓心地，未来永々，更不可有他妨者也，若有違乱出来事者，相共可沙汰明之状如件

弘安九年七月廿六日

明教(花押影)

性蓮(花押影¹³⁾)

この地は奥行は前述のものと同じ18丈で，東西は12丈と広く，鯨尺では45.36m，造営尺では35.88mとなる。この地も貞治六年(1369)に祇園社に寄進されている¹⁴⁾。その時の寄進状に，

在姉小路烏丸西角北角地事

いう記載がみえ，この東西12丈・南北18丈の地が角地を占めていたことがわかり，その西隣りに前述した土地が並ぶことがわかる。そして，少なくともこの時期までは間口は姉小路に向って明けられていたことがわかる。

今回出土した大甕はまさにこの売券・譲状の残されていた時期に該当するものであるが，京都の場合にはかならずしも土地の所有者と，地上に居住する人との関係は一致するとは限らず，地子銭を納めてさえいれば所有者が移動しても居住者には変更のないのが通例である。

そこで，これだけ大量の大甕を必要とするものは何かという点からみると，まず水・油の類いのものが考えられる。その中で，一例として酒屋についてみると，少し時期は新しくなるが，応永三二・三三年(1425・1426)の酒屋の分布を示す史料があるので中京の一面を限って図示してみた(第96図¹⁵⁾)。

この分布図でみる限り調査地に該当する酒屋はみられないが，その近辺にはかなりの酒屋はかなり古くから存在しており，仁和元年(1240)閏10月17日に造酒司が東西両京の酒屋に対して一字別酒一升宛の上分を徴することを出願している¹⁶⁾ことからみて，13世紀中期ごろには相当数の酒屋が存在していたことが推定できる。

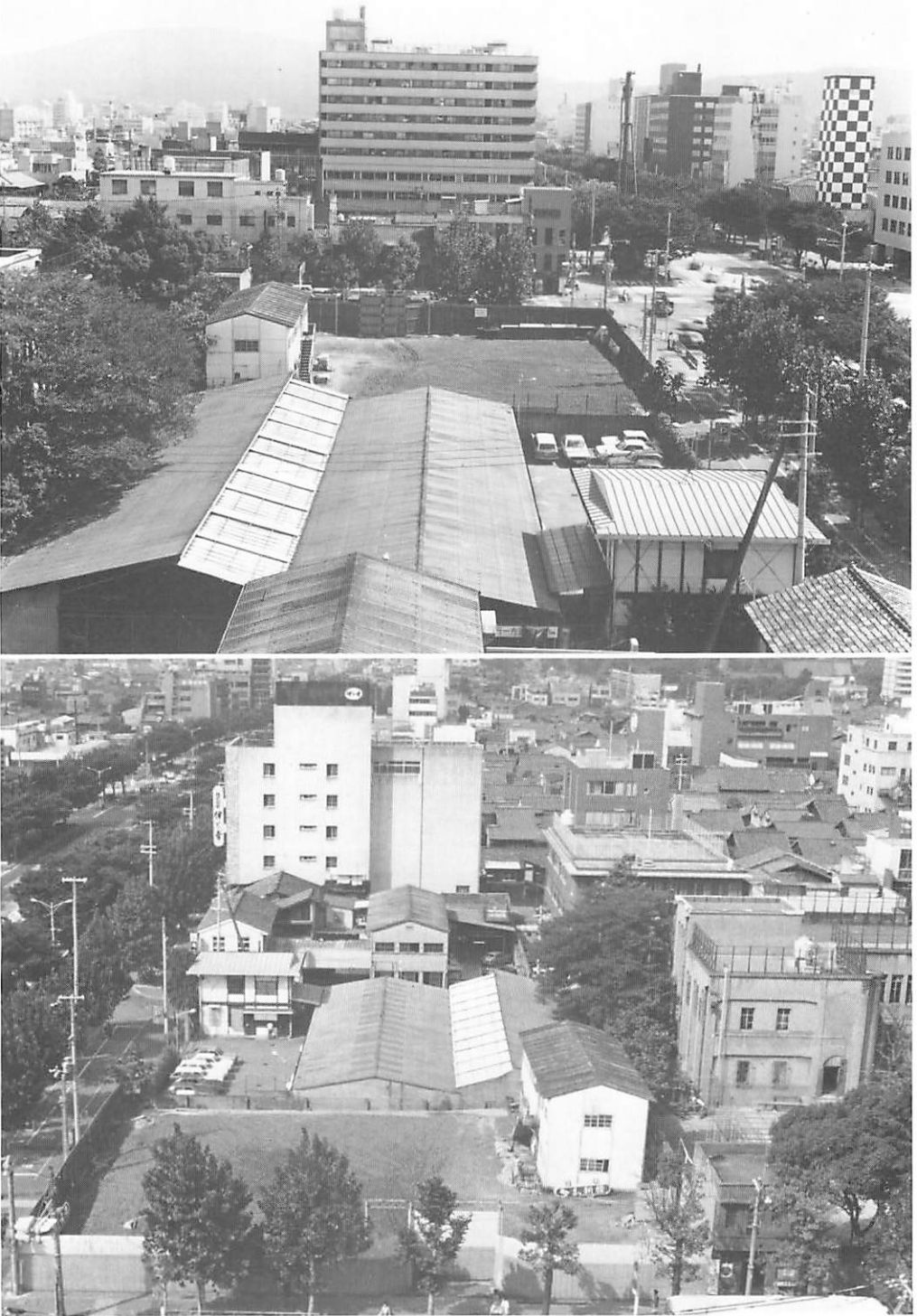
今回出土した大甕が酒屋に使用されたものかどうか断定はできないが，調査地に酒屋をはじめ大甕を必要とする業種に対してそれを供給する業種の居住者がいたことはあながち無理な推測ではないだろう。そしてこれらの大甕は南北朝の動乱を乗り越えず，火災等によって破壊され，投棄されたのではないだろうか。

註

- 1) 白石太一・伊藤玄三・近藤喬一「平安京三条西殿跡発掘調査報告」(『平安博物館研究紀要』第3輯，京都，昭和46年)。
- 2) 註1)に同じ。三条西殿跡で出土しているのは，南北トレンチ中世層からで，今回のものと同様に坏内面中央に窪みがみられる。
- 3) 佐々木英夫「平安京造営尺寸法の有効数字について」(『古代文化』第233号掲載，京都，昭和53年)。
- 4) 間壁忠彦・間壁霞子「備前焼研究ノート」(『倉

- 敷考古館研究集報」第1・2・5号掲載、倉敷、昭和41・42・45年)。
- 5) 間壁氏は「備前焼研究ノート」(3)においてIII期の時代は「本格的に備前焼としての量産が行われ出した時期であり、鎌倉の後半期に主体があるであろう」と説明されているが、「備前」(『世界陶磁全集』第3巻所収、東京、昭和53年)では「第III期の年代が、鎌倉時代の後半から南北朝に至るころ」と推測されると説明されている。今回出土のものは南北朝に入ってからのもと考えている。
- 6) 『京都大学所蔵文書』(『鎌倉遺文』2188号)。
- 7) 註6)と同じ
- 8) 『八坂神社文書』(『鎌倉遺文』2219号)。
- 9) 『祇園社記』(続録第五)所収。
- 10) 『祇園社記』(第二十五)所収。
- 11) 同上。
- 12) 同上。
- 13) 『押小路文書見聞筆記』(四十八)(『鎌倉遺文』15949号)。
- 14) 『祇園社記』(第二十五)所収。
- 15) 『酒屋交名』(『北野天満宮史料—古文書—』所収六二号文書)。
- 16) 『平戸記』仁治元年閏十月十七日条。

圖 版

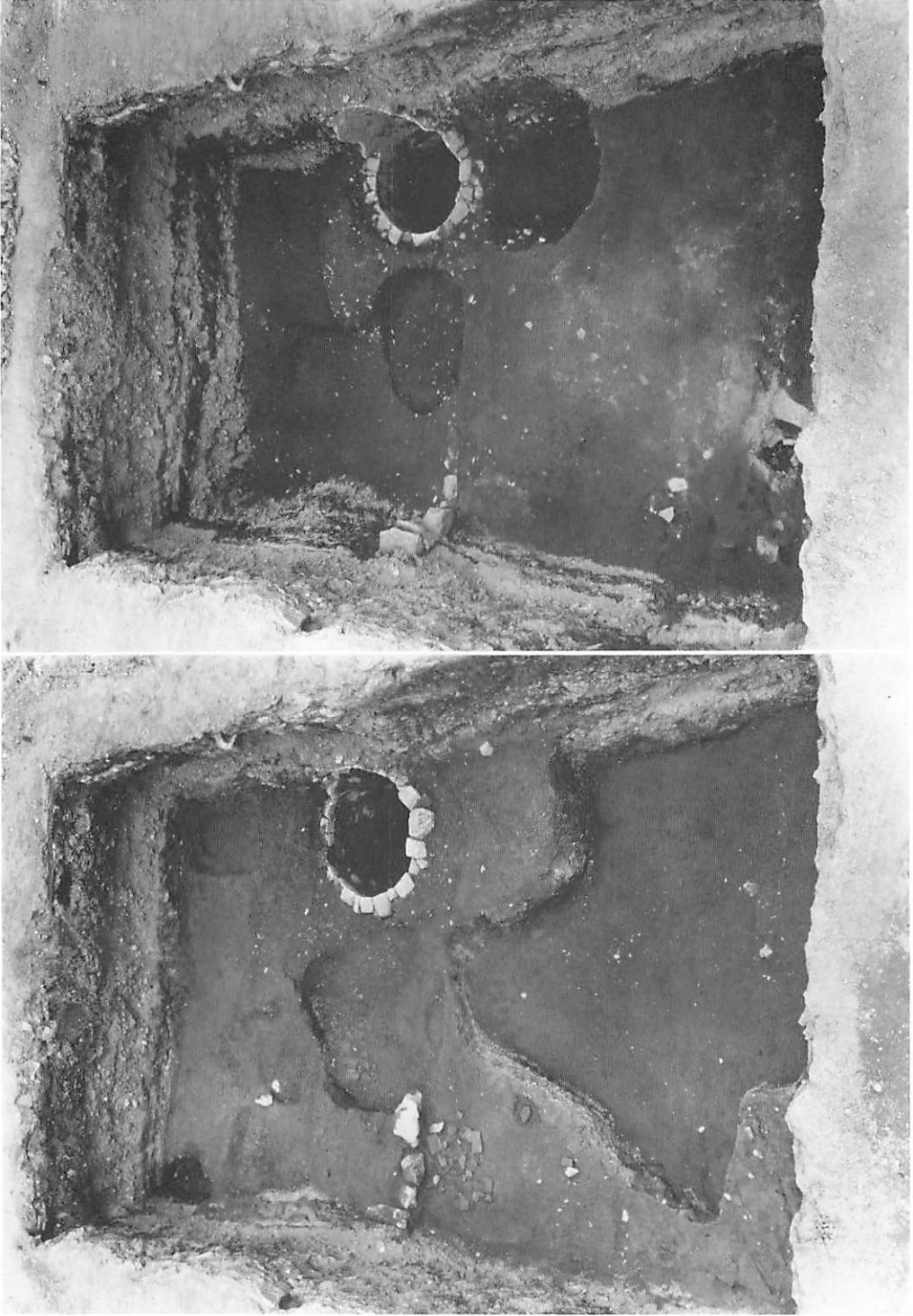


調査地遠景 上：西から 下：東から

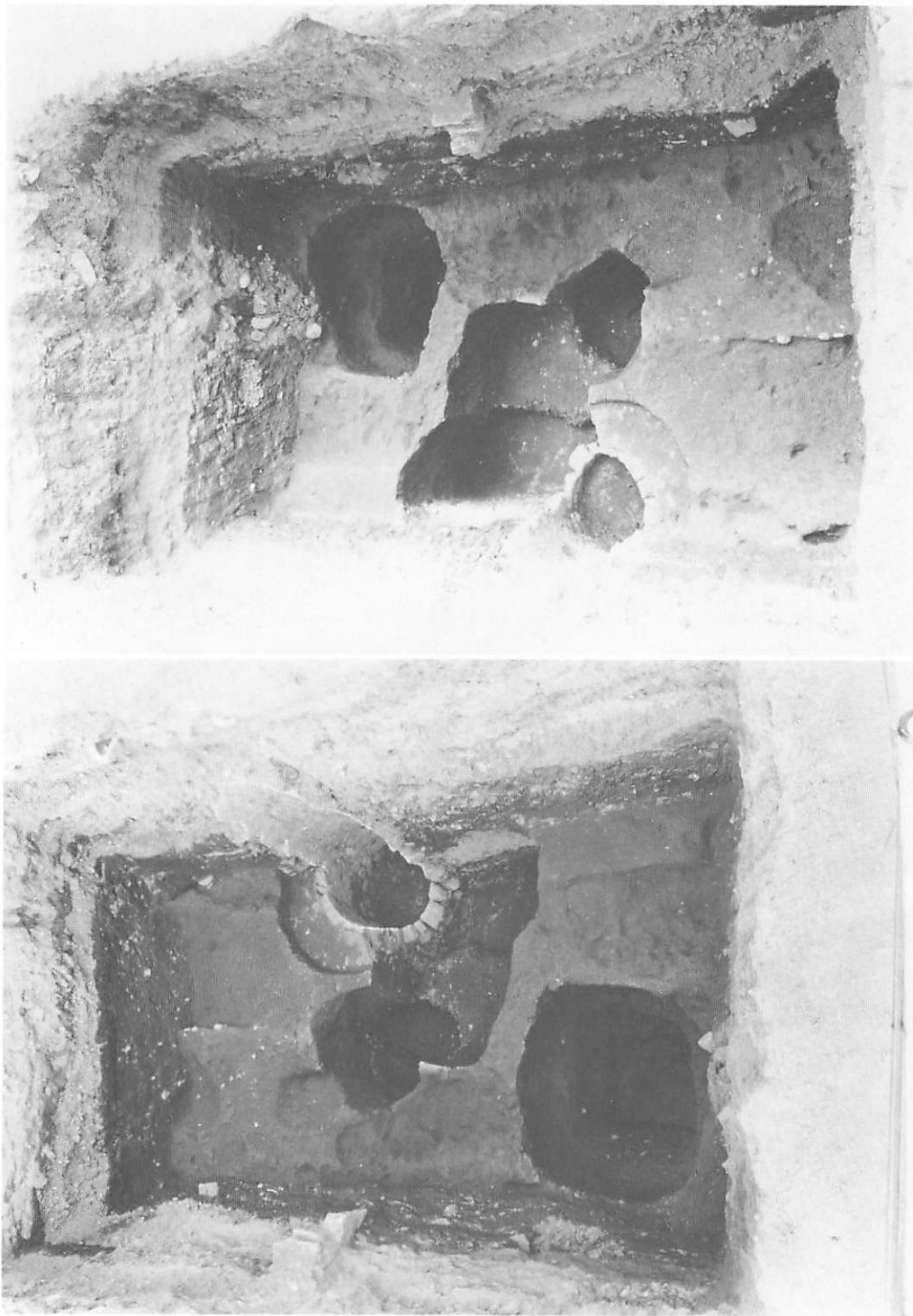
図版第2



上：I地区発掘前近景(西から) 下：I地区第1文化面全景(南から)



左：I地区第2文化面全景 右：同第3文化面全景(南から)



I 地区完掘後全景 左：南から 右：北から



上：I地区鍛冶場跡 下：同完掘狀況

図版第 6



上：I地区礫土壇1（北から） 下：I地区礫土壇2（北から）

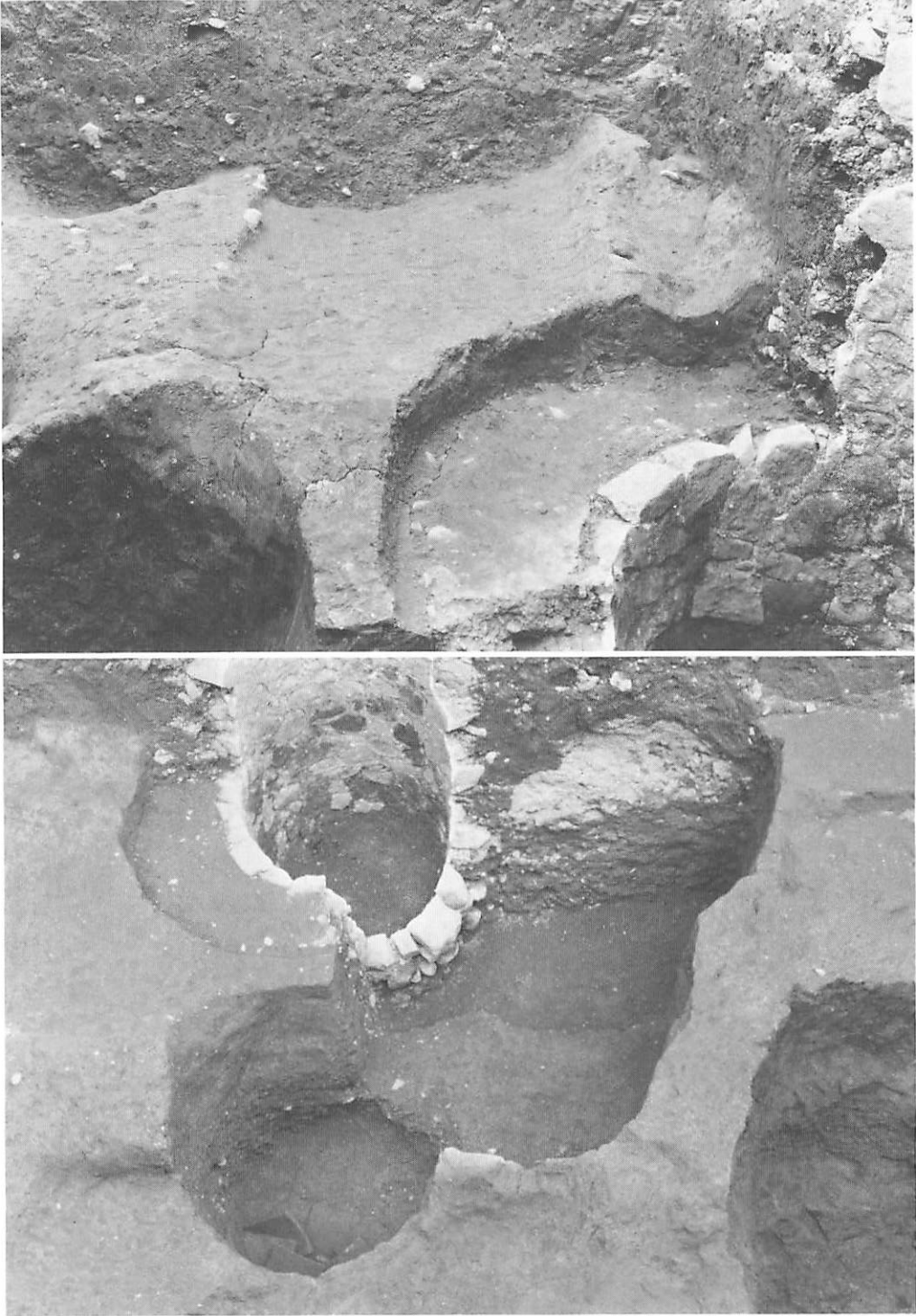


I地区井戸1 上：完掘状況(西から) 下：埋没状況(西から)

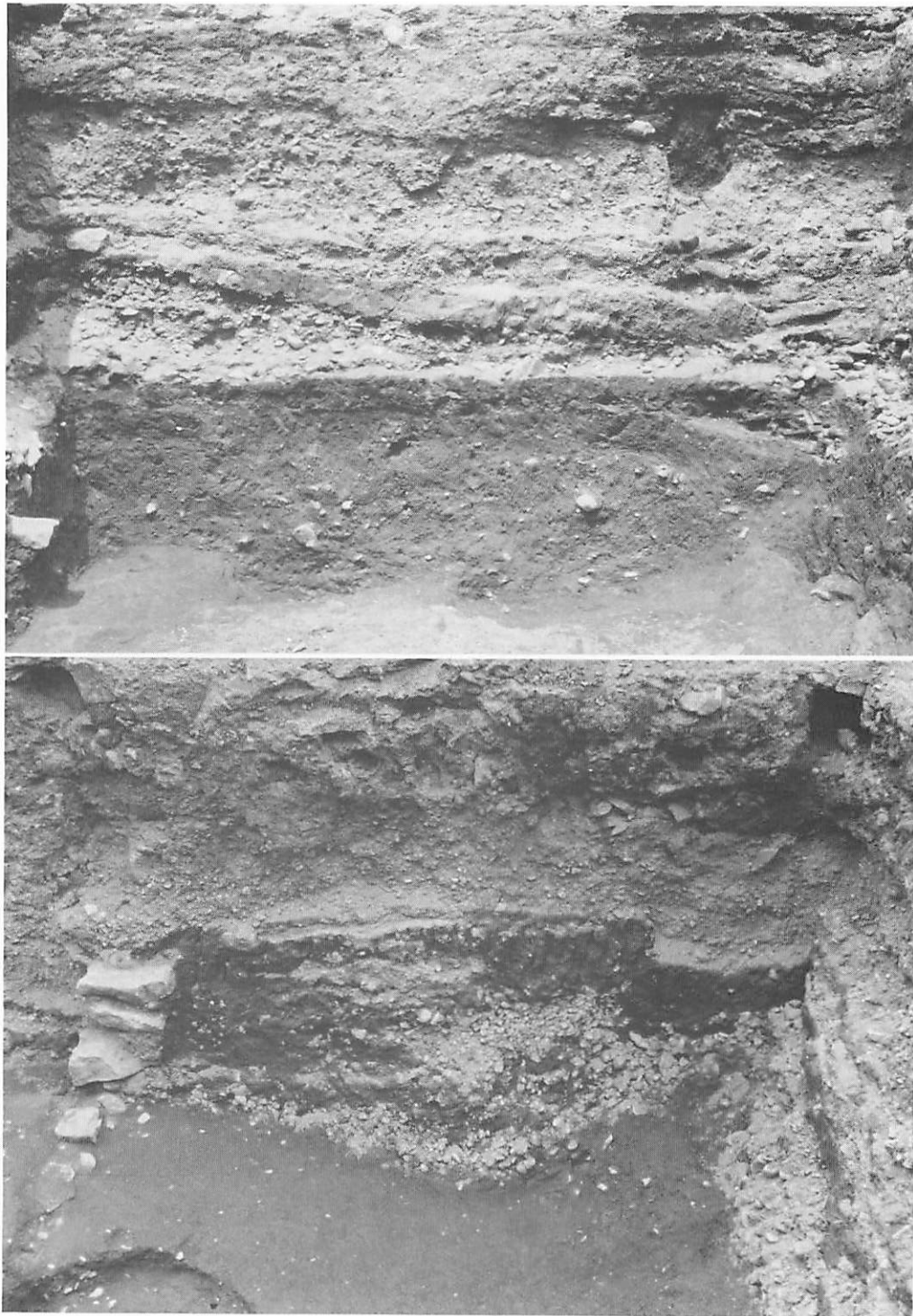
図版第8



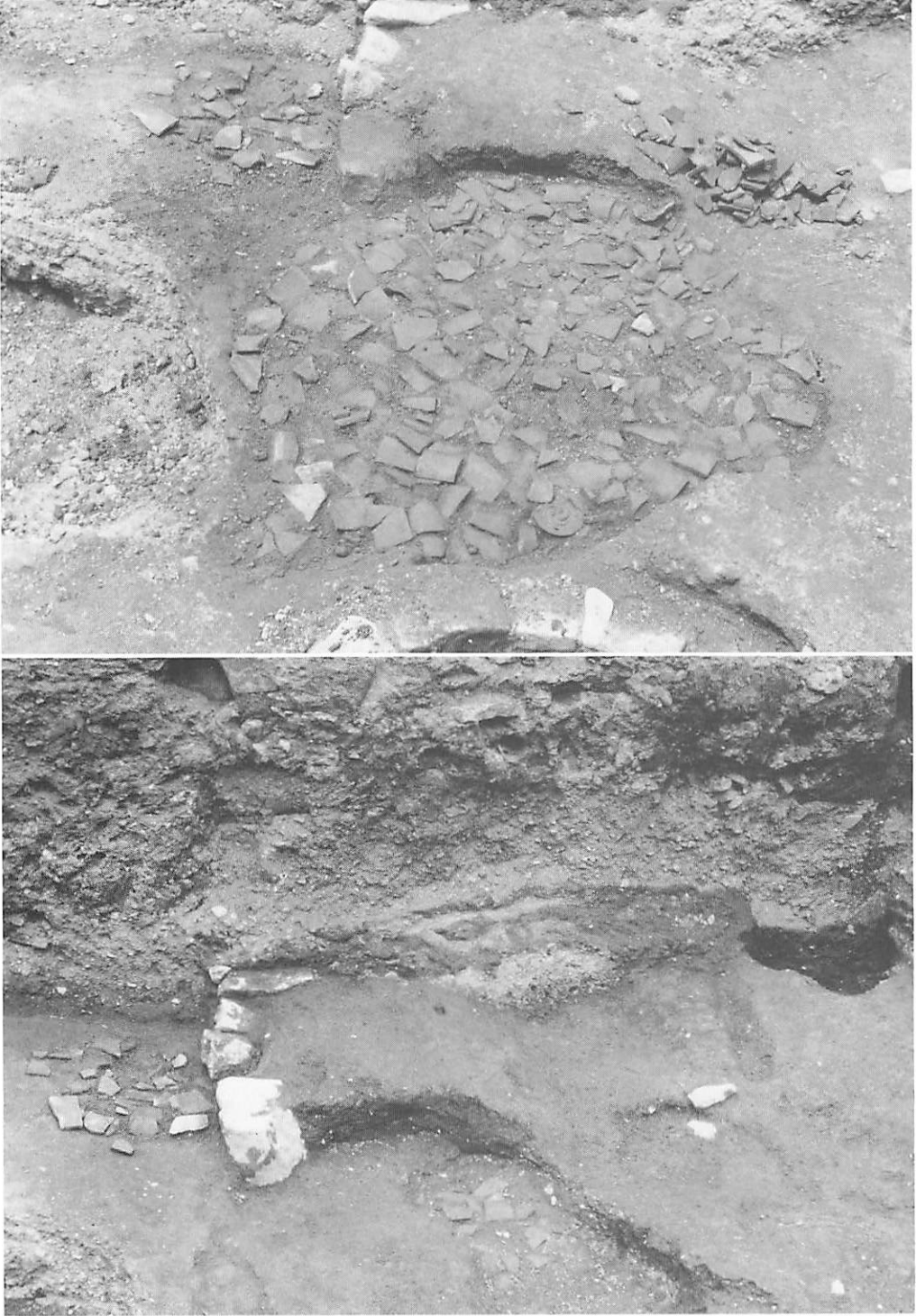
上：I地区井戸 下：同土師質皿出土状況(東から)



上：I地区溝1近景(南から) 下：井戸2・4・5近景(西から)



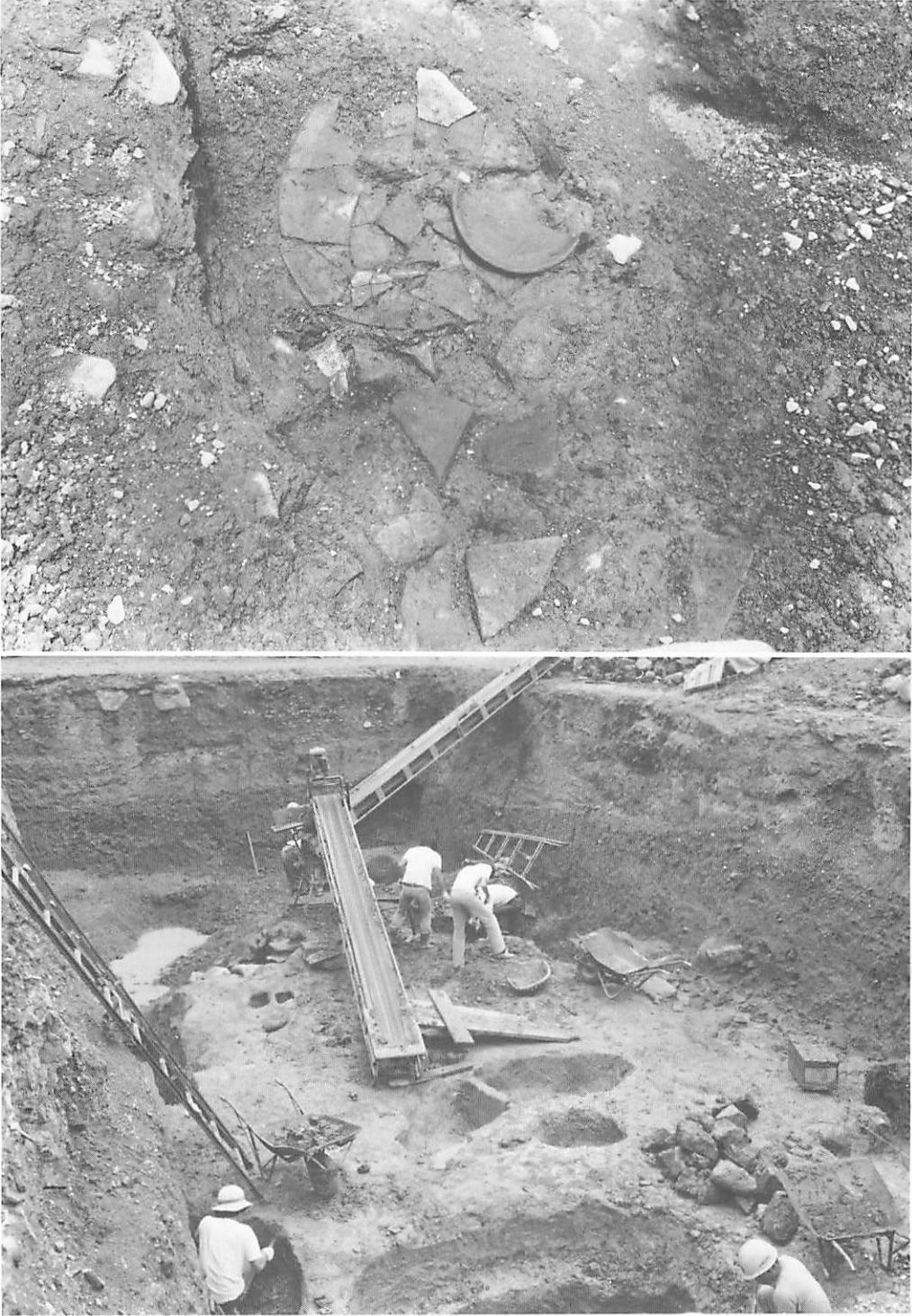
上：I地区北壁断面(南から) 下：I地区石積み遺構裏込め断面(東から)



上：I地区井戸2瓦埋没状況(東から) 下：I地区石積み状況(東から)



上：塩壺出土状況(南から) 下：軒丸瓦出土状況(南から)

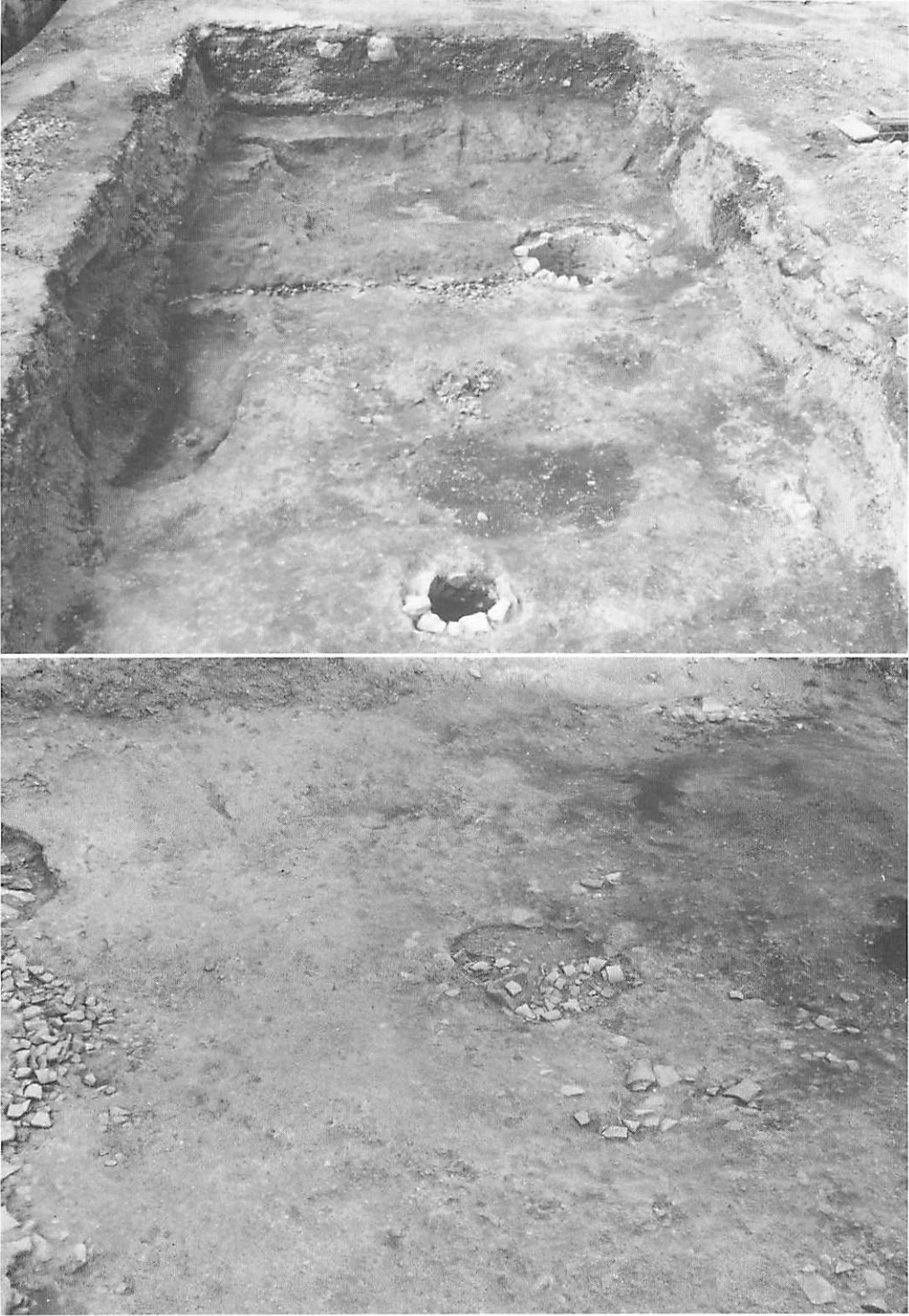


上：土師質鍋出土状況(南から) 下：発掘作業風景

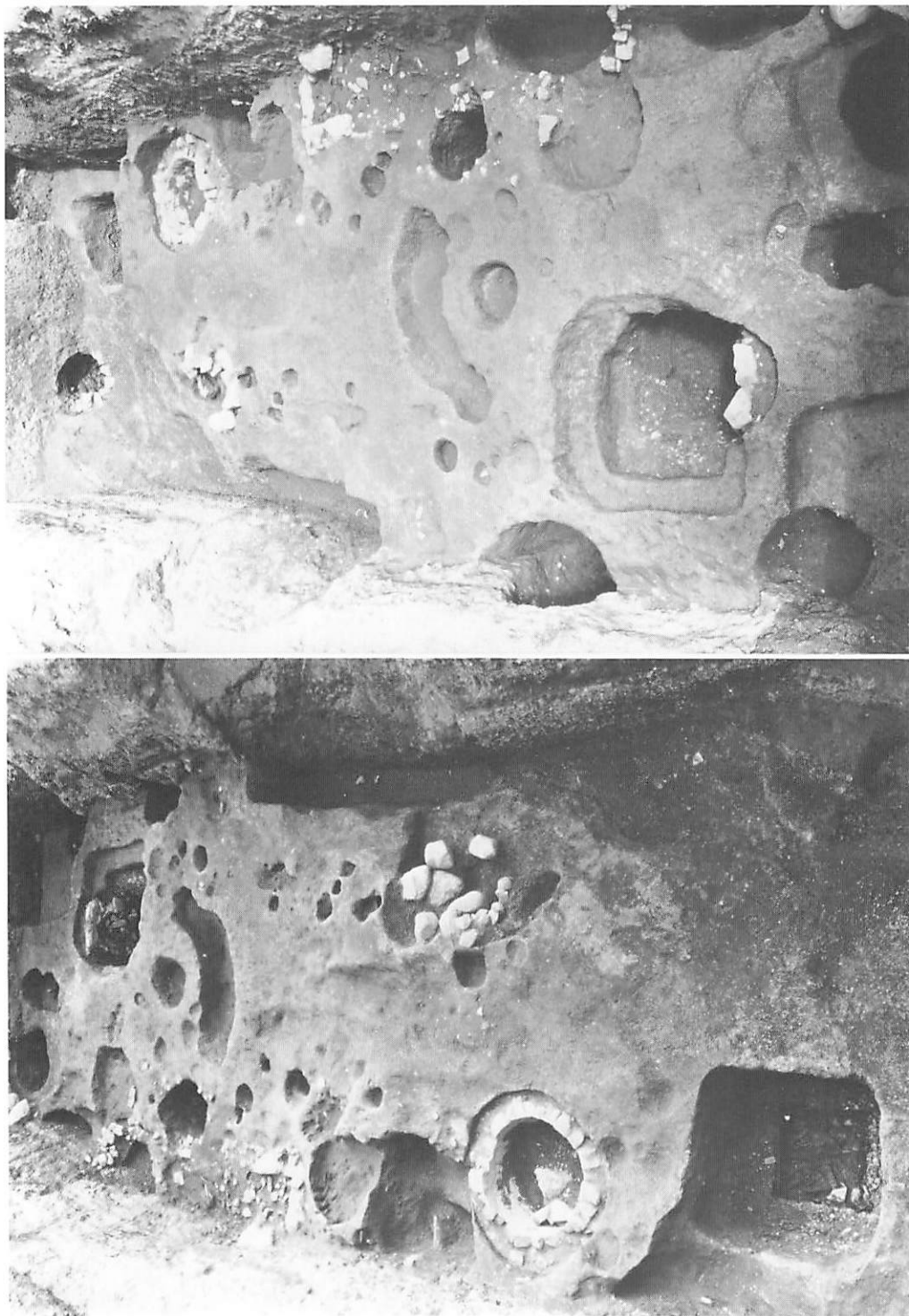
図版第14



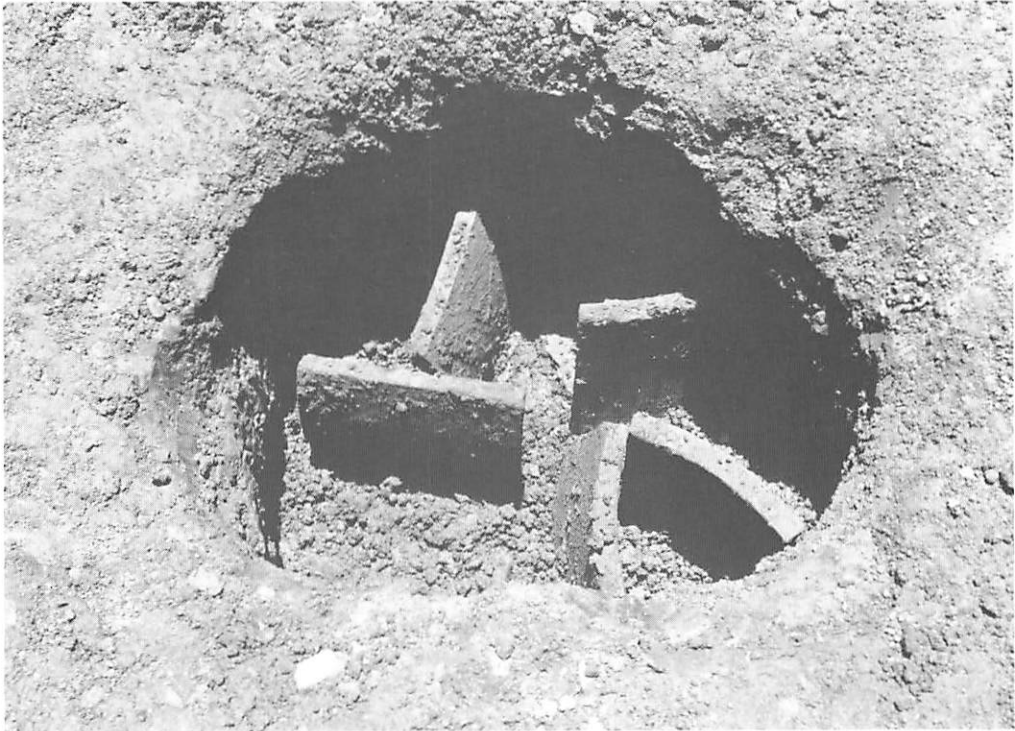
上：II地区発掘前全景(北から) 下：II地区第1文化面全景(北から)



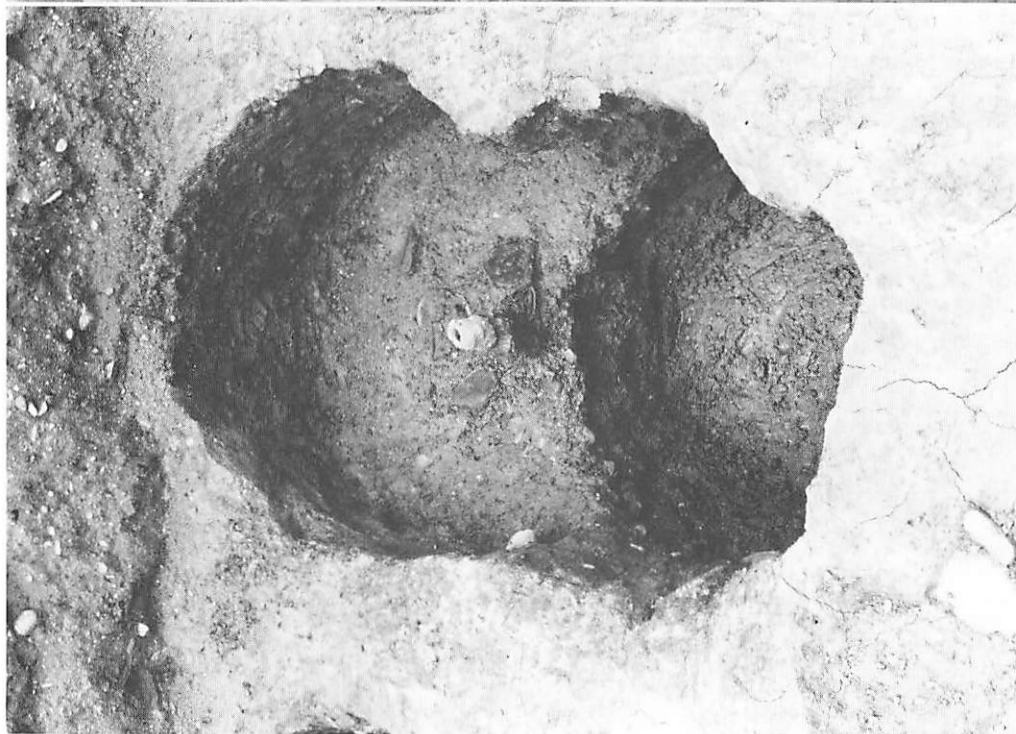
上：Ⅱ地区第1文化面全景(南から) 下：Ⅱ地区第1文化面鍛冶場跡(西から)



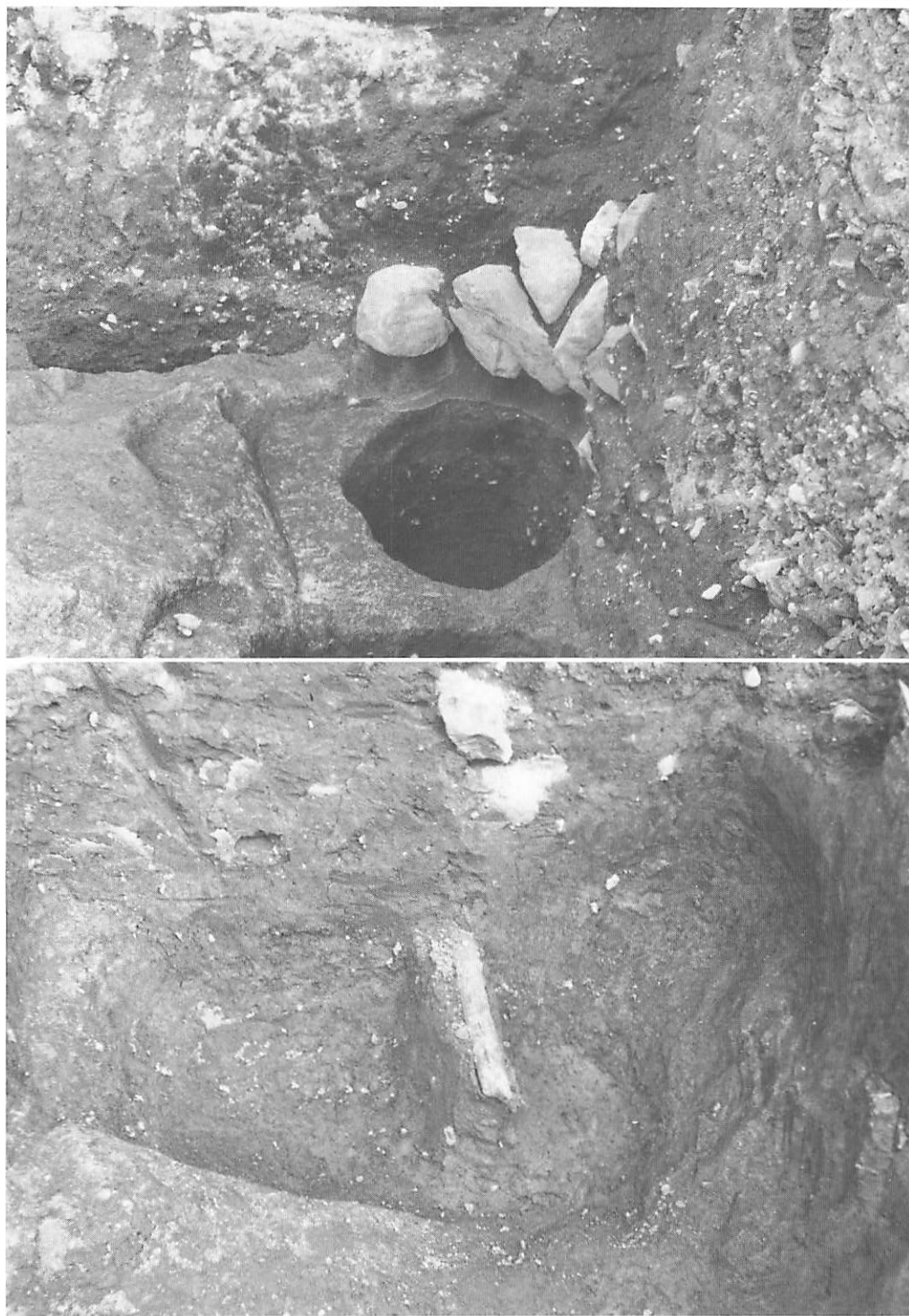
左：Ⅱ地区完掘状況(北から) 右：Ⅱ地区完掘状況(南から)



上：Ⅱ地区東壁際石組み遺構(西から) 下：Ⅱ地区土壇10(北から)



左：Ⅱ地区井戸5（北から） 右：Ⅱ地区暗渠（西から）



上：II地区石階段と井戸8（西から） 下：II地区土壇1（西から）

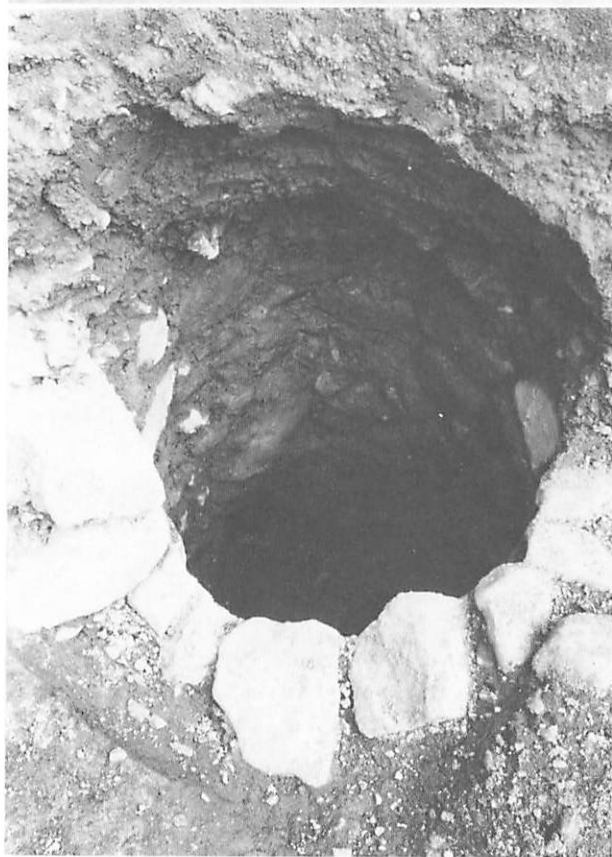


上：II地区集石遺構(西から) 下：II地区土壙8(西南から)

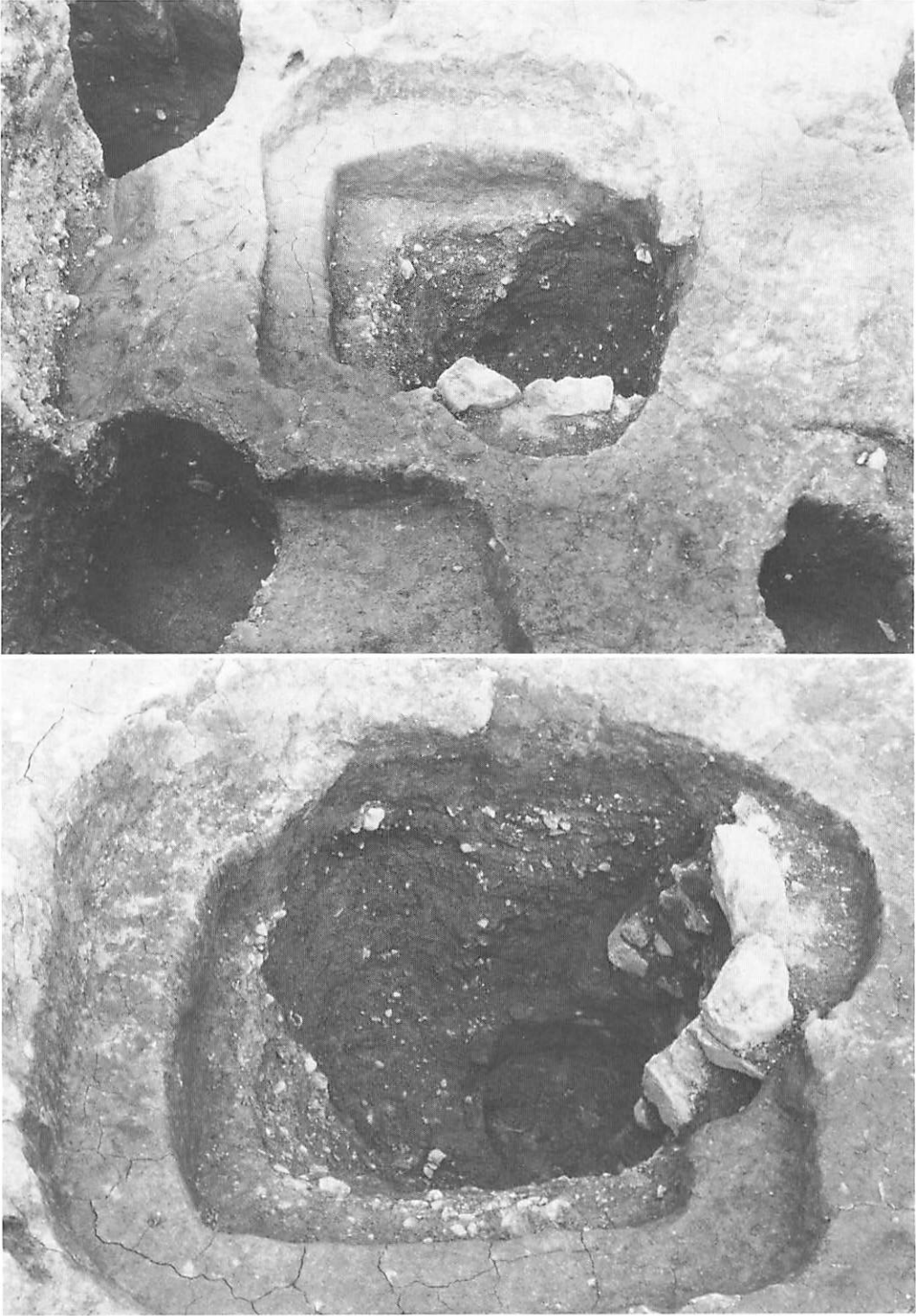


上：II地区土壙6（西から） 下：II地区土壙4（西から）

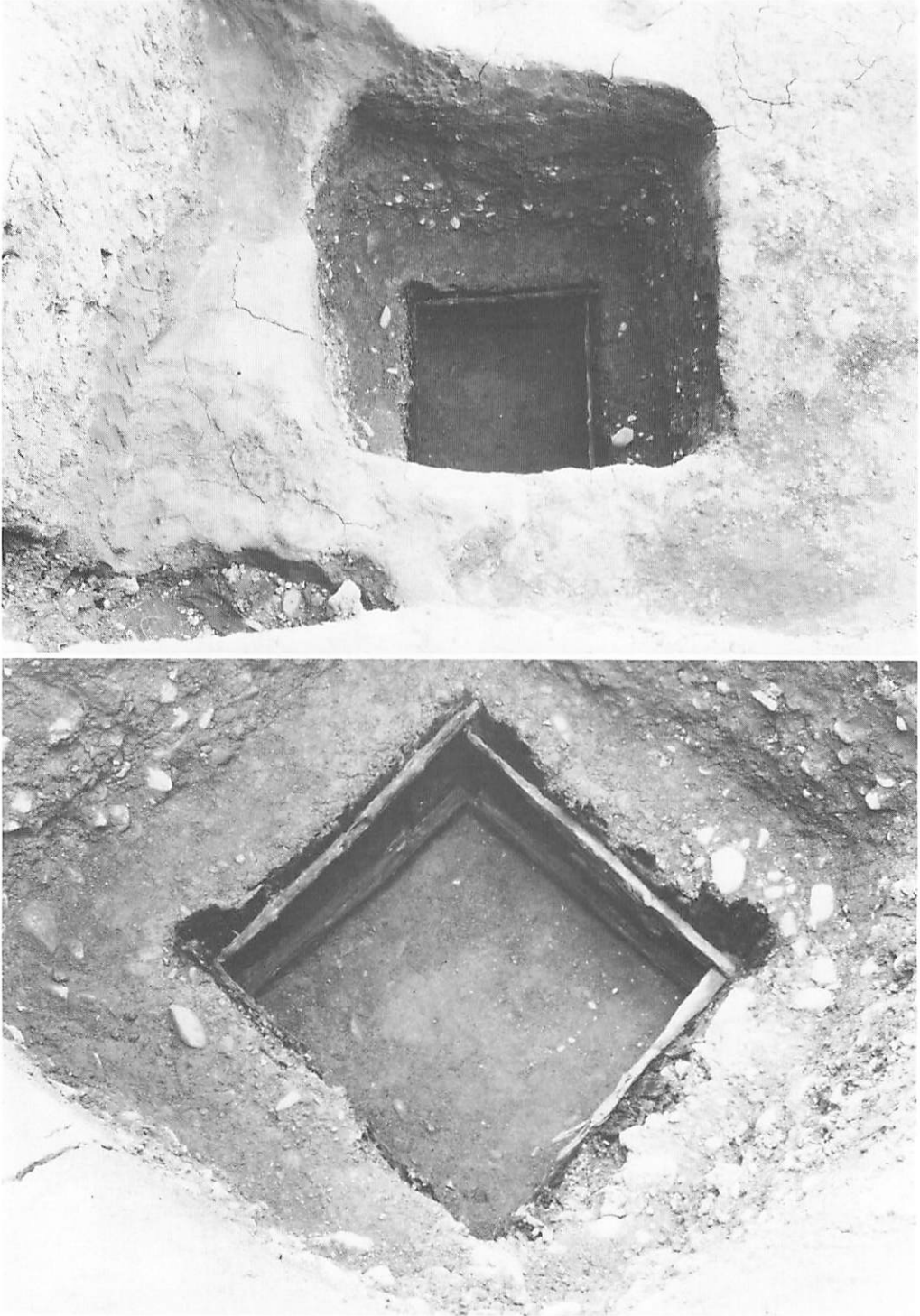
図版第22



上：Ⅱ地区井戸4(東から) 下：Ⅱ地区井戸3(南から)



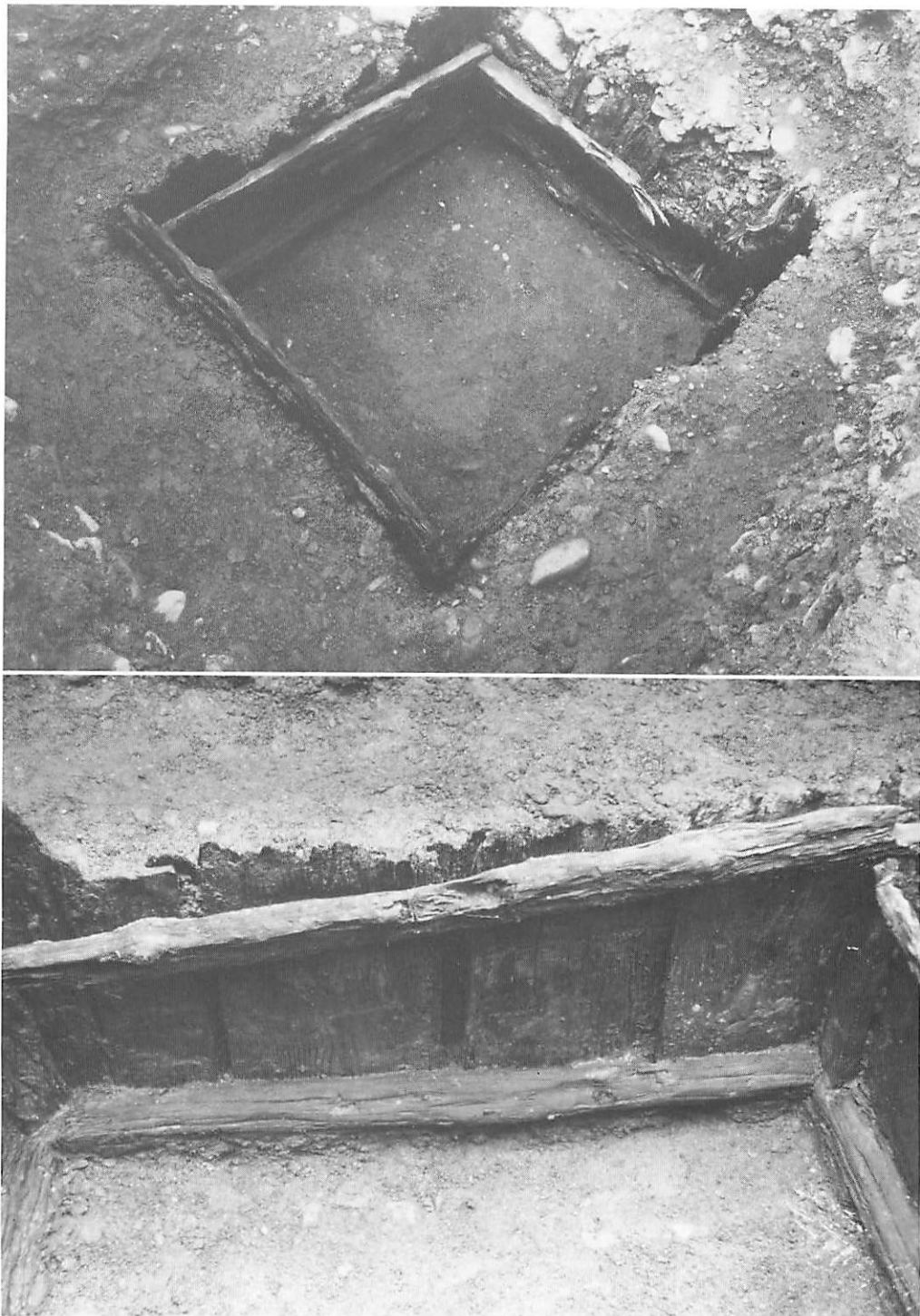
II地区井戸2と井戸6 上：南から 下：西から



上：Ⅱ地区井戸1 全景(北から) 下：同近景(北東から)



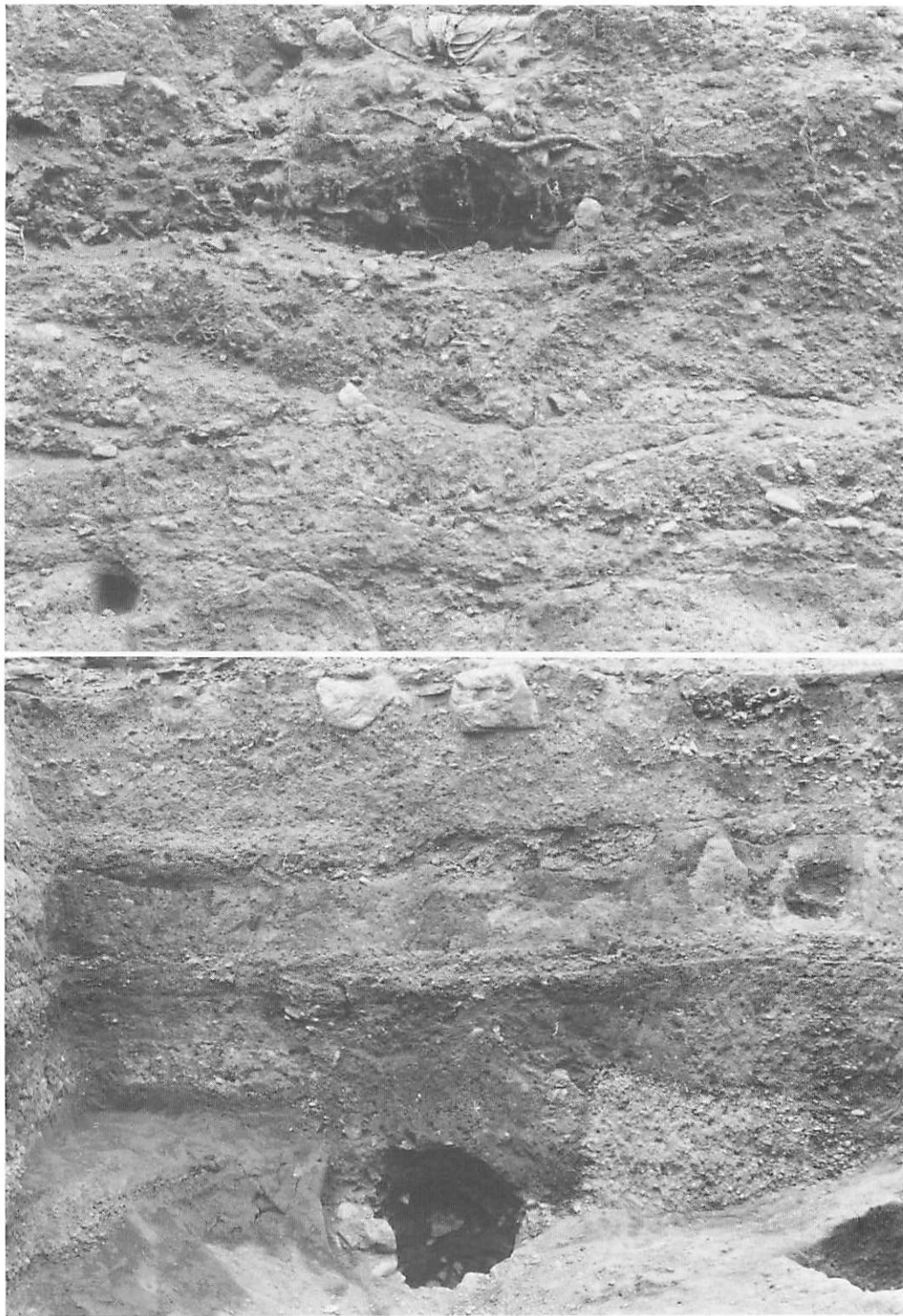
上：Ⅱ地区井戸1 木柩埋没状況(北から) 下：同遺物出土状況(北から)



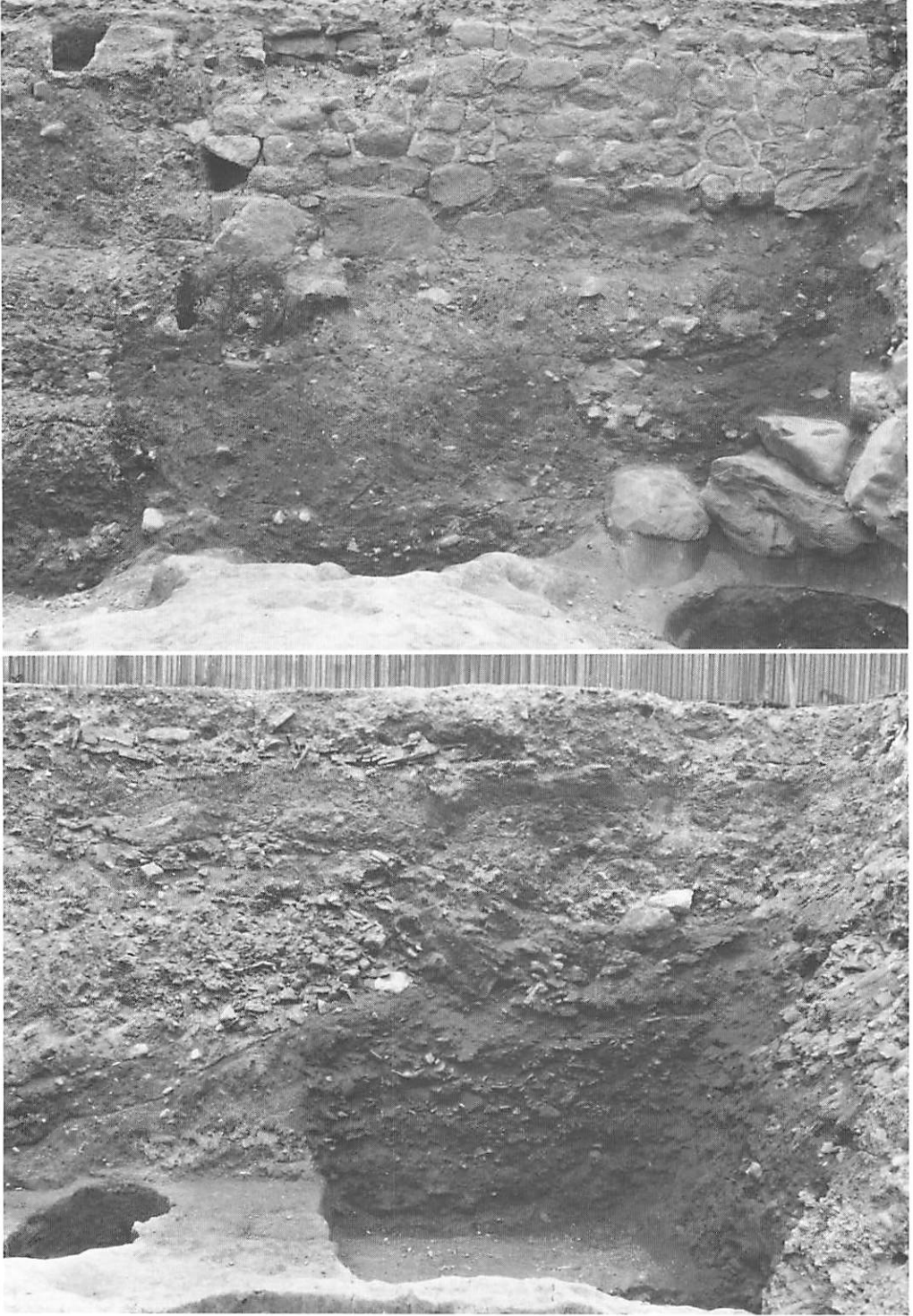
上：II地区井戸1完掘状況(北東から) 下：同南壁木枠検出状況(北から)



II地区井戸1 上右：木柱南西隅細部(北東から) 上左：木柱北西隅細部(南東から)
下：木柱西隅細部(南東から)



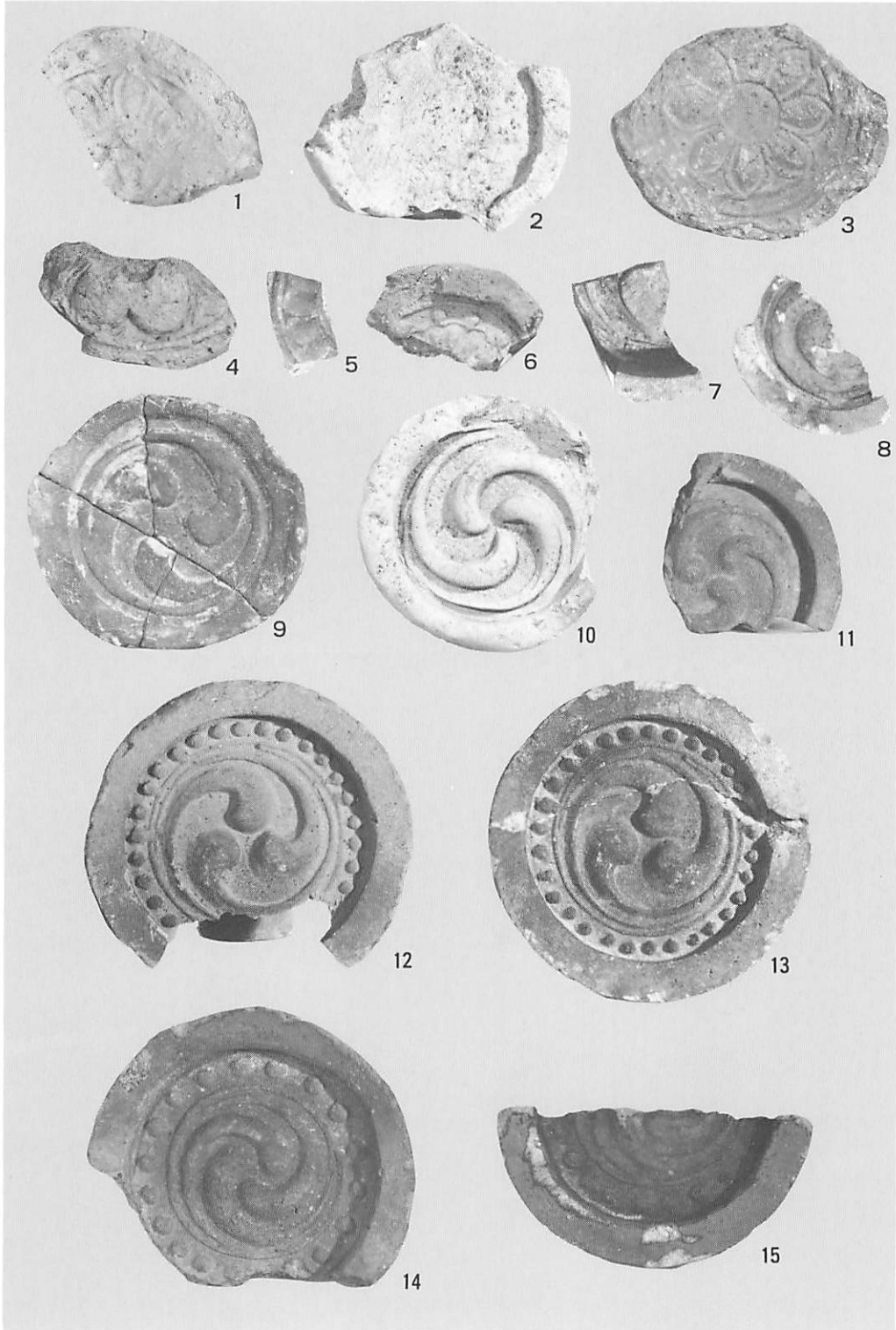
上：Ⅱ地区東壁断面(西から) 下：Ⅱ地区北壁断面(南から)



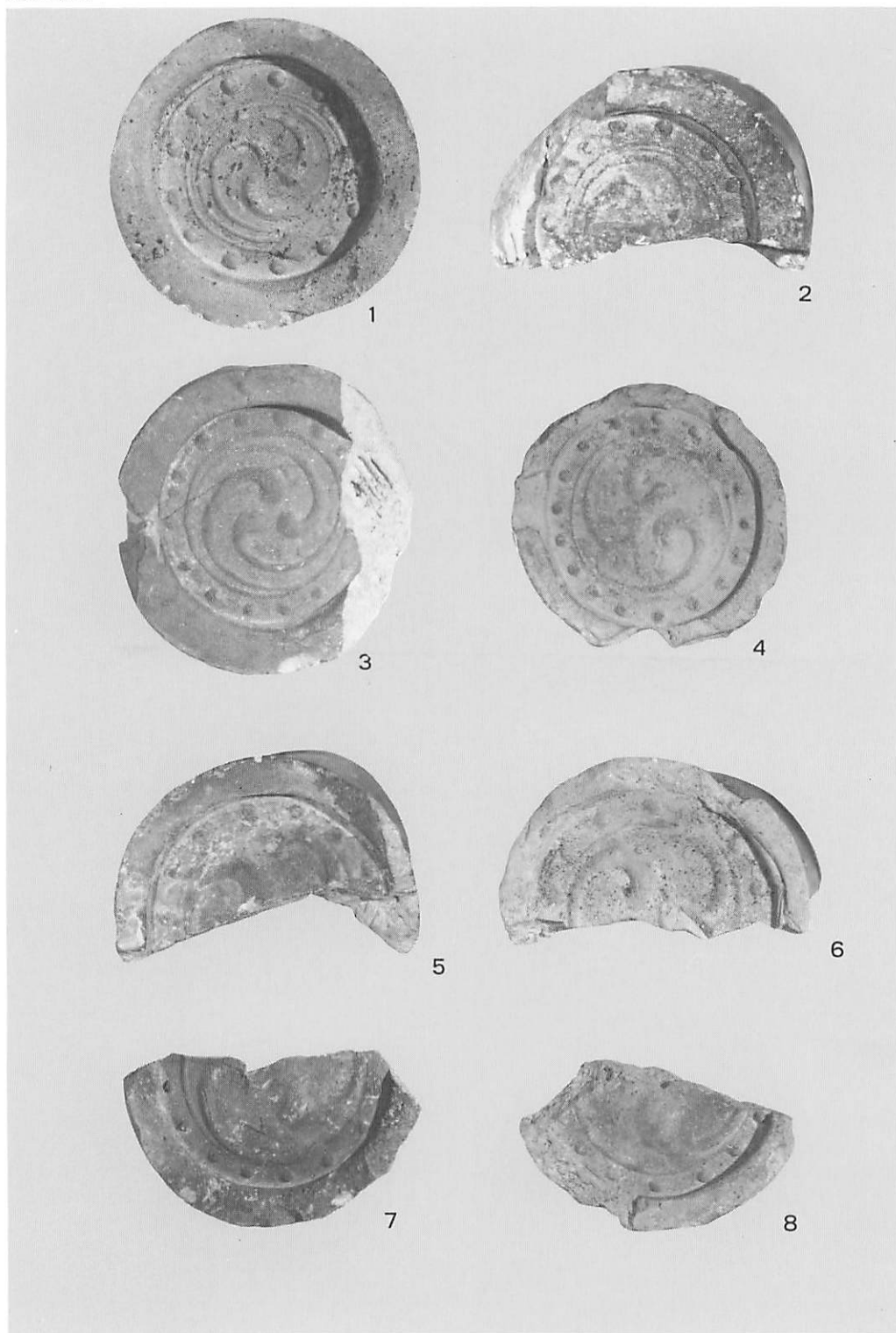
上：Ⅱ地区東壁断面と石垣(西から) 下：Ⅱ地区南壁断面(北から)



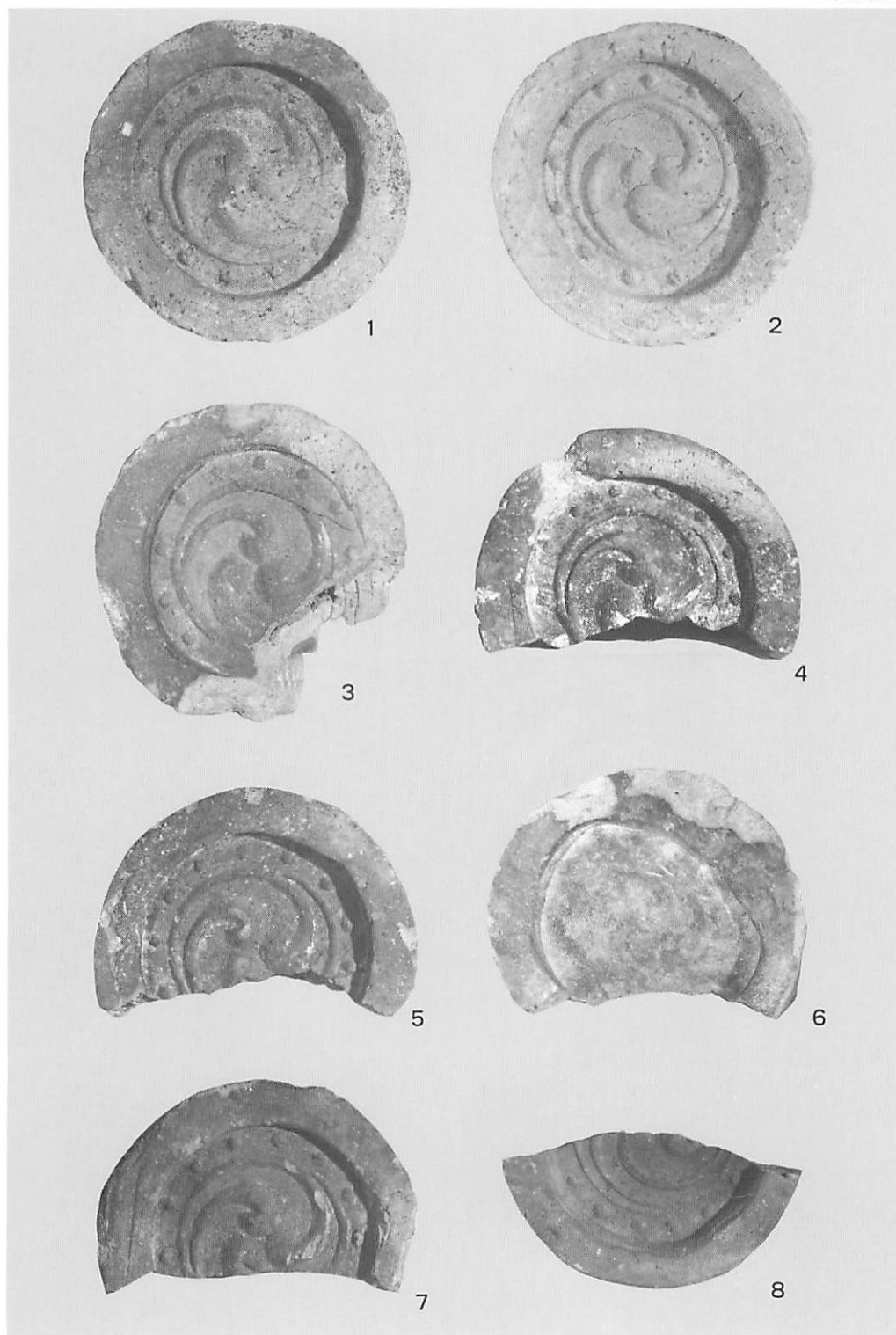
上：II地区埋戻し完了状況 下：調査地付近に建立された各石碑



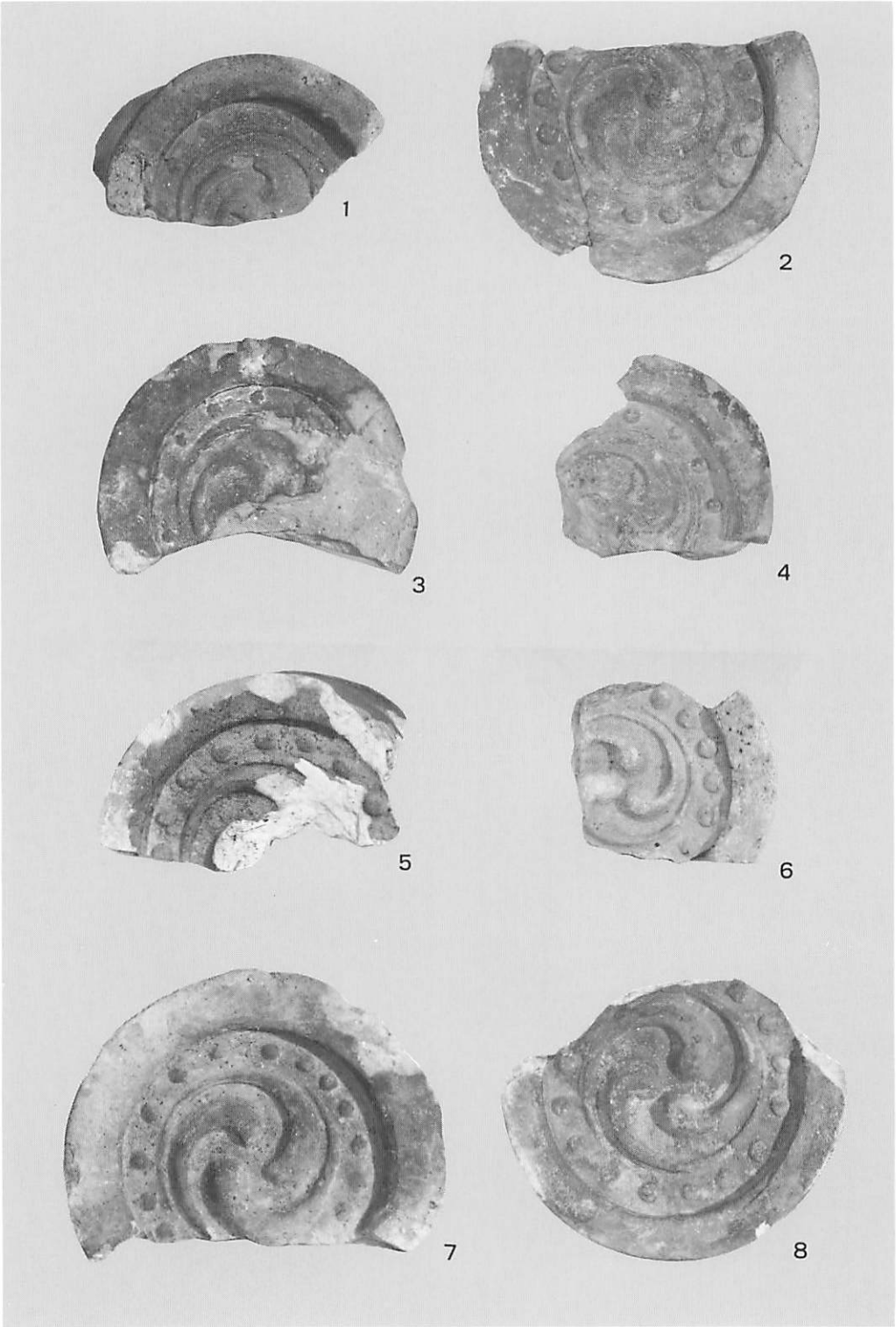
出土軒丸瓦 (1)



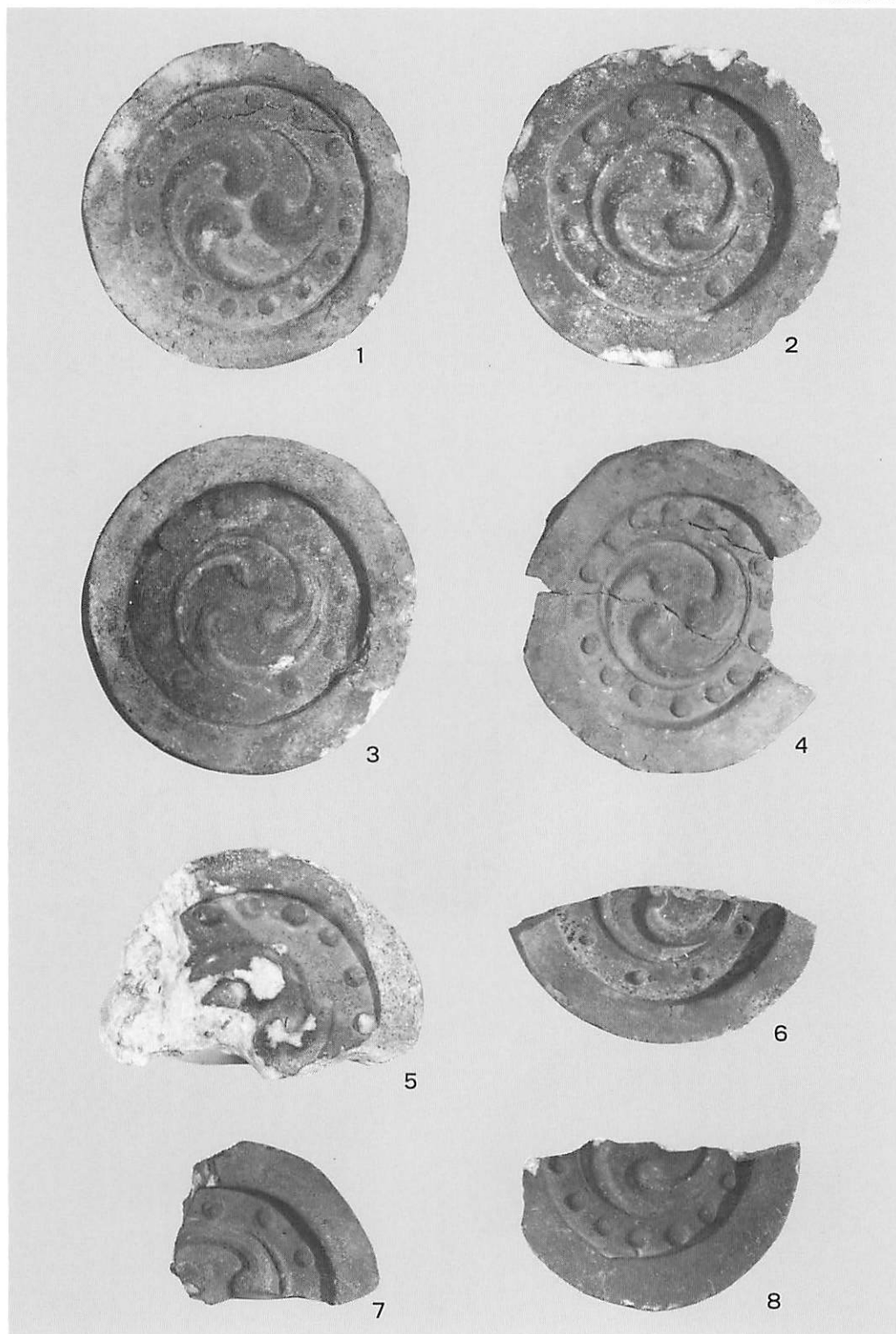
出土軒瓦瓦 (2)



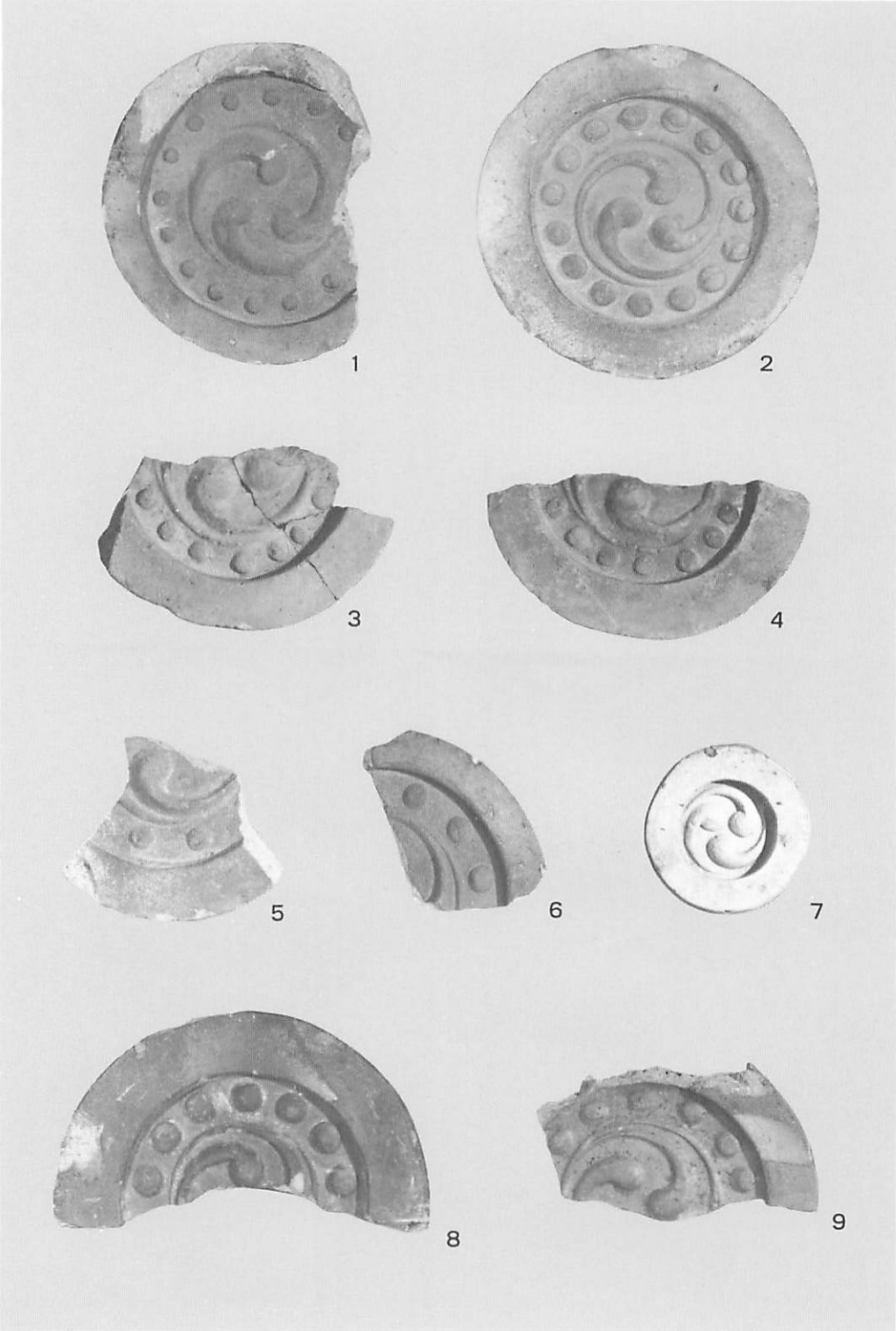
出土軒丸瓦 (3)



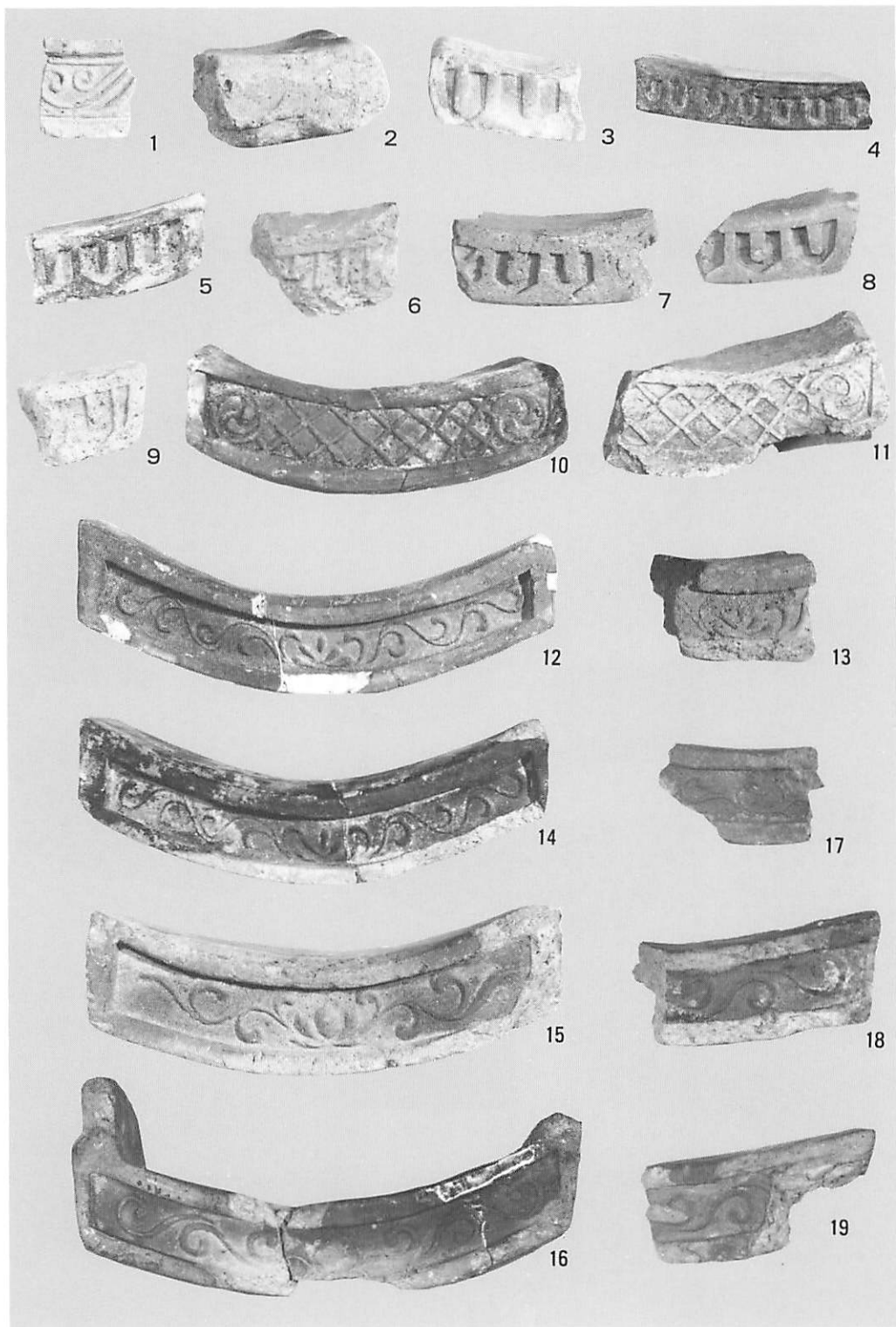
出土軒九瓦 (4)



出土軒九瓦 (5)



出土軒丸瓦 (6)



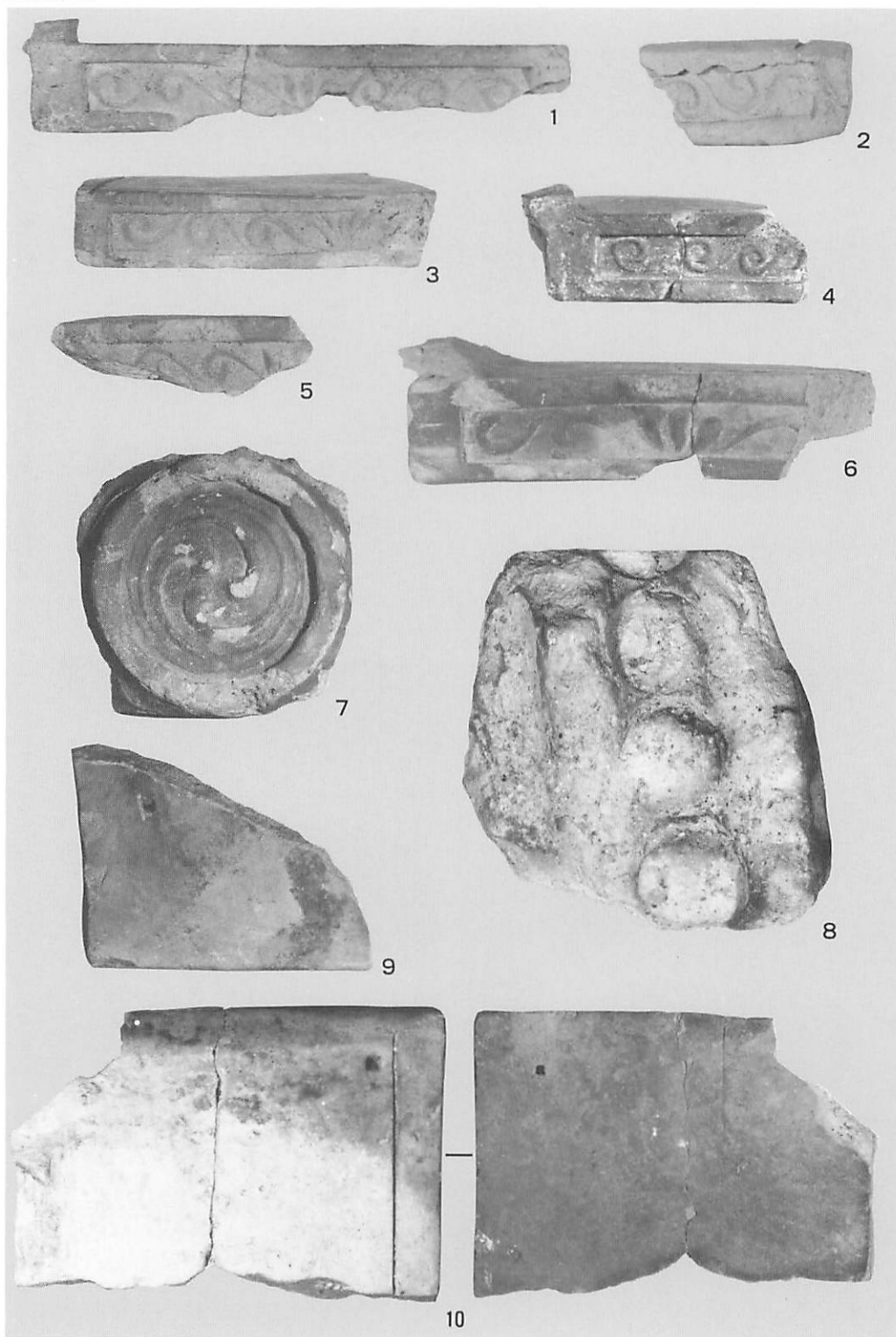
出土軒平瓦 (1)



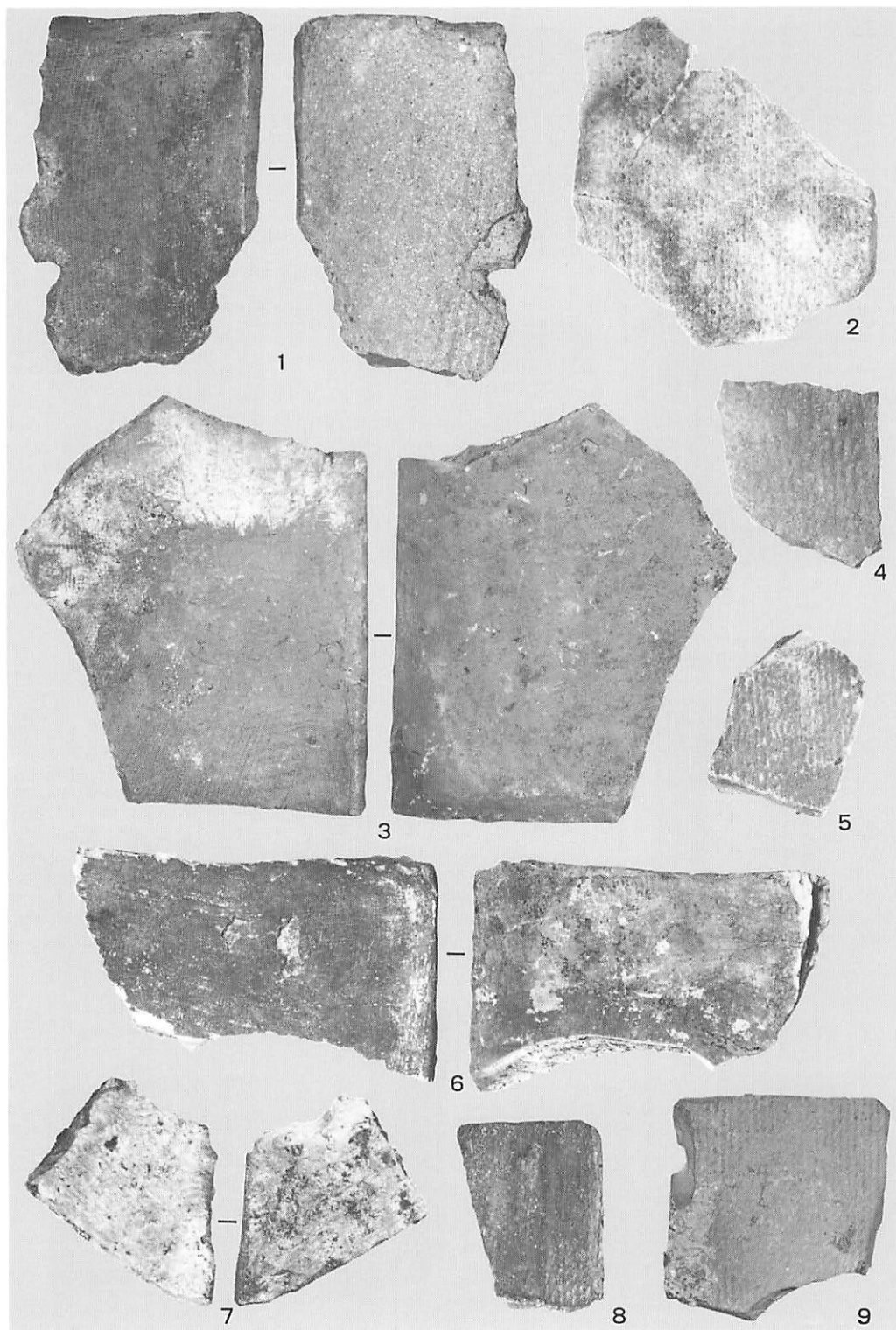
出土軒平瓦 (2)



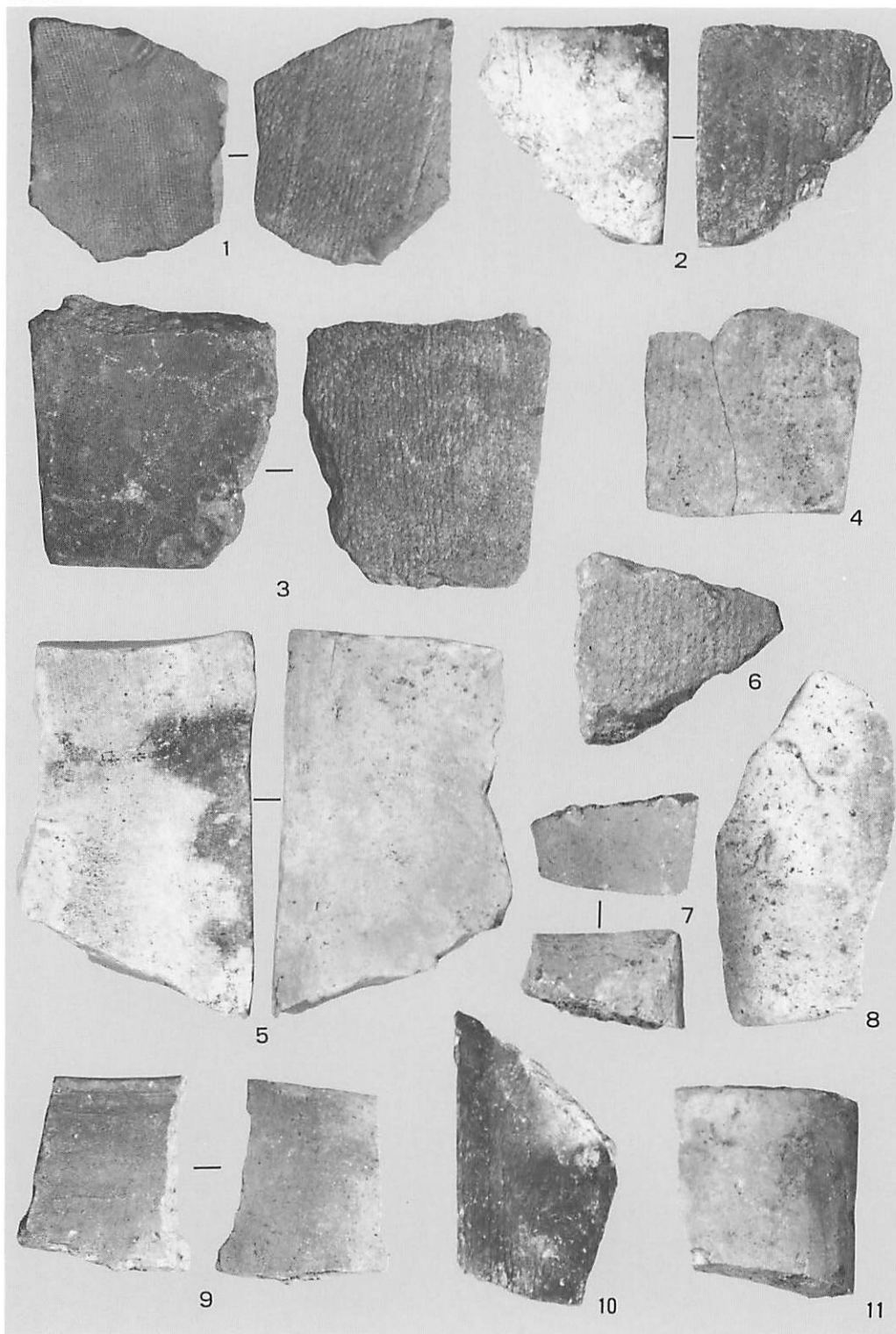
出土軒平瓦 (3)



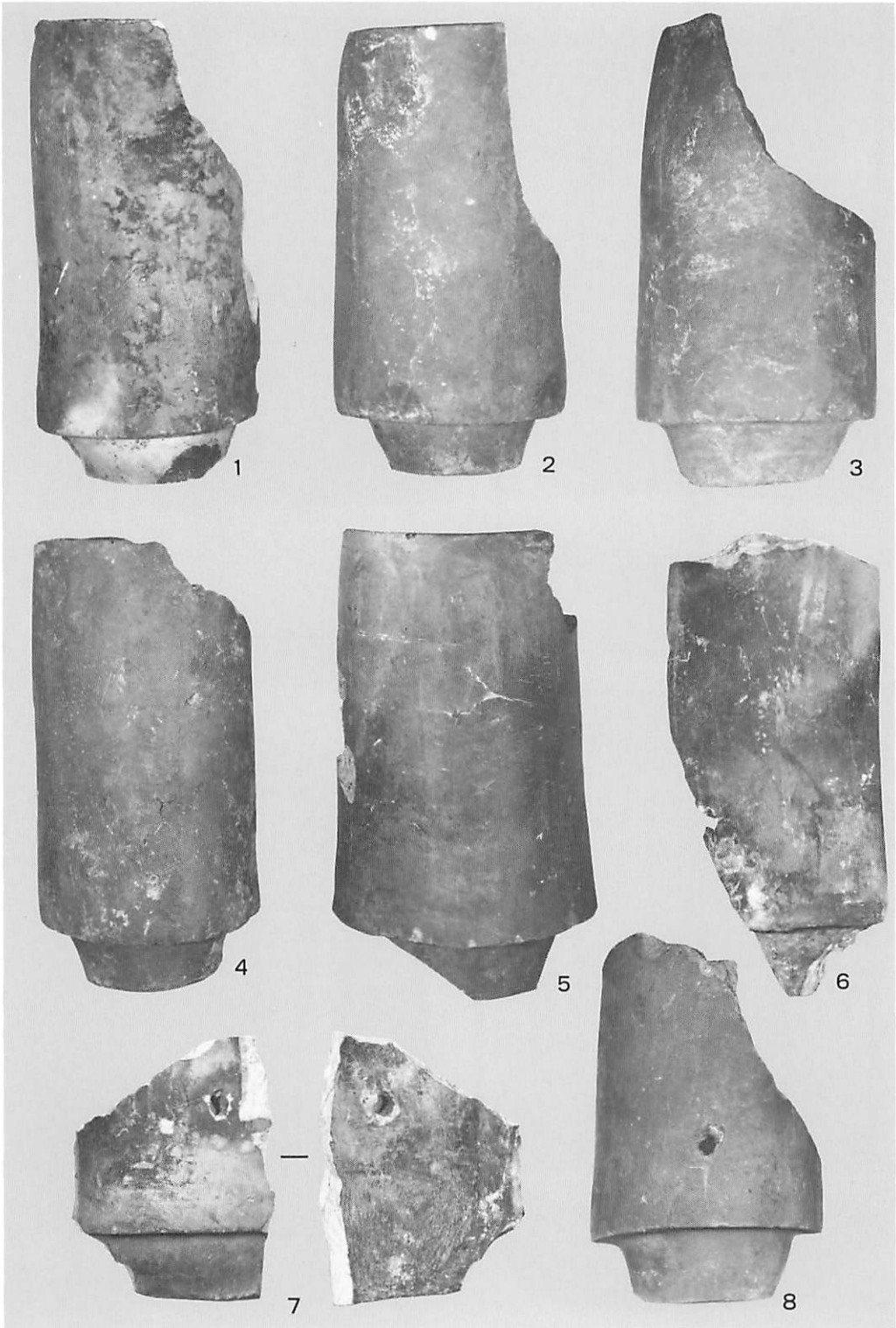
出土瓦類



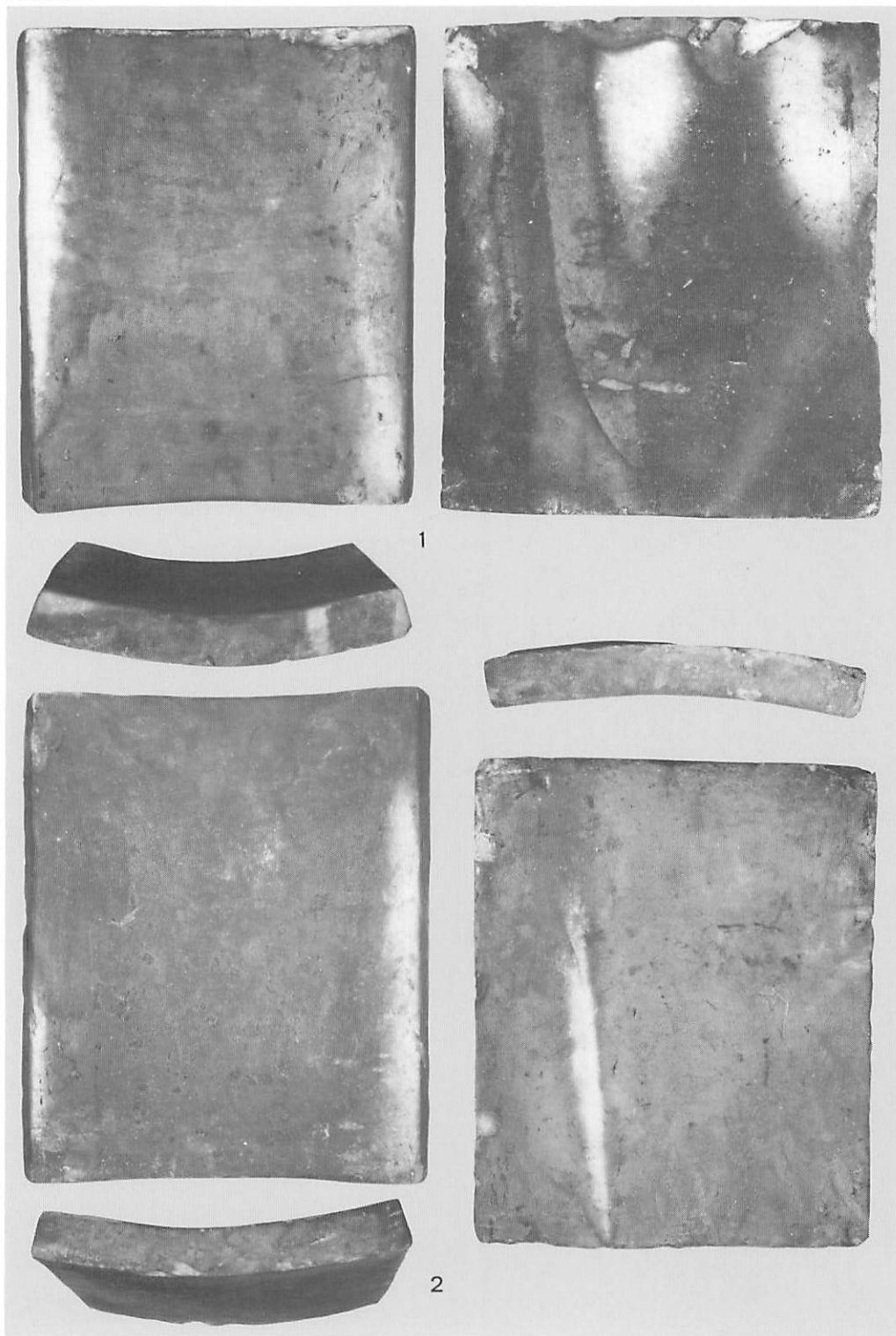
出土平瓦類



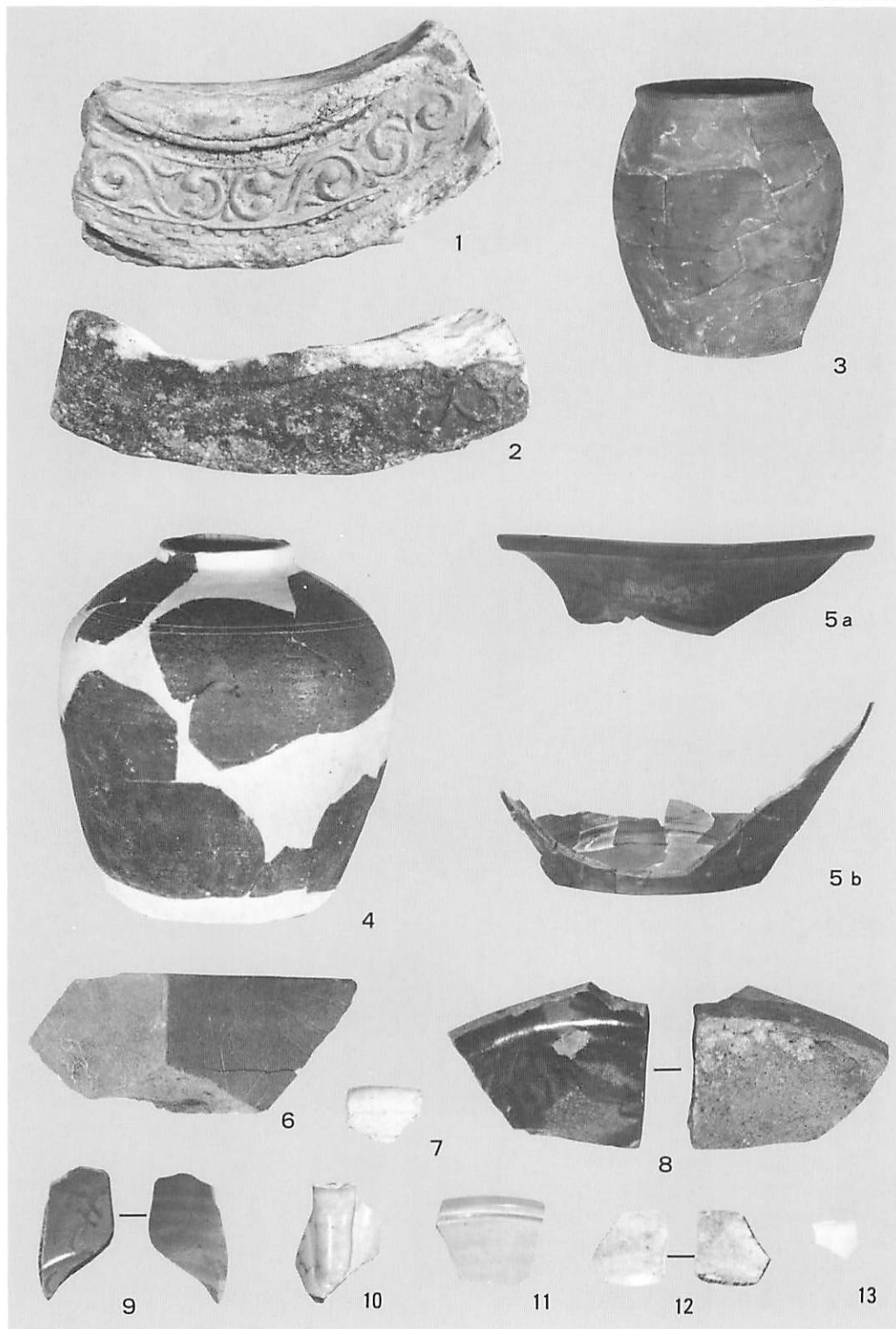
出土平瓦類及び丸瓦類



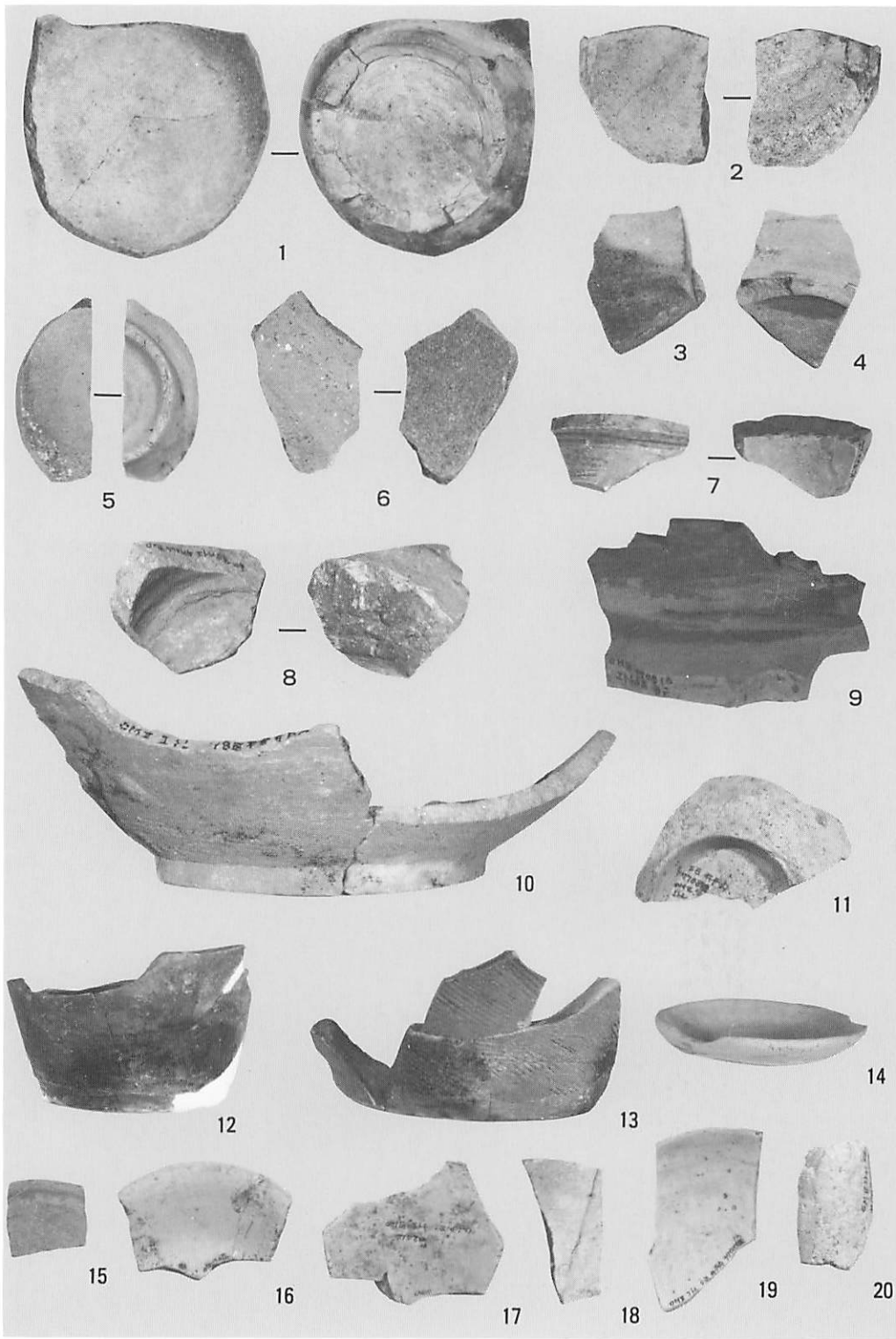
出土瓦類



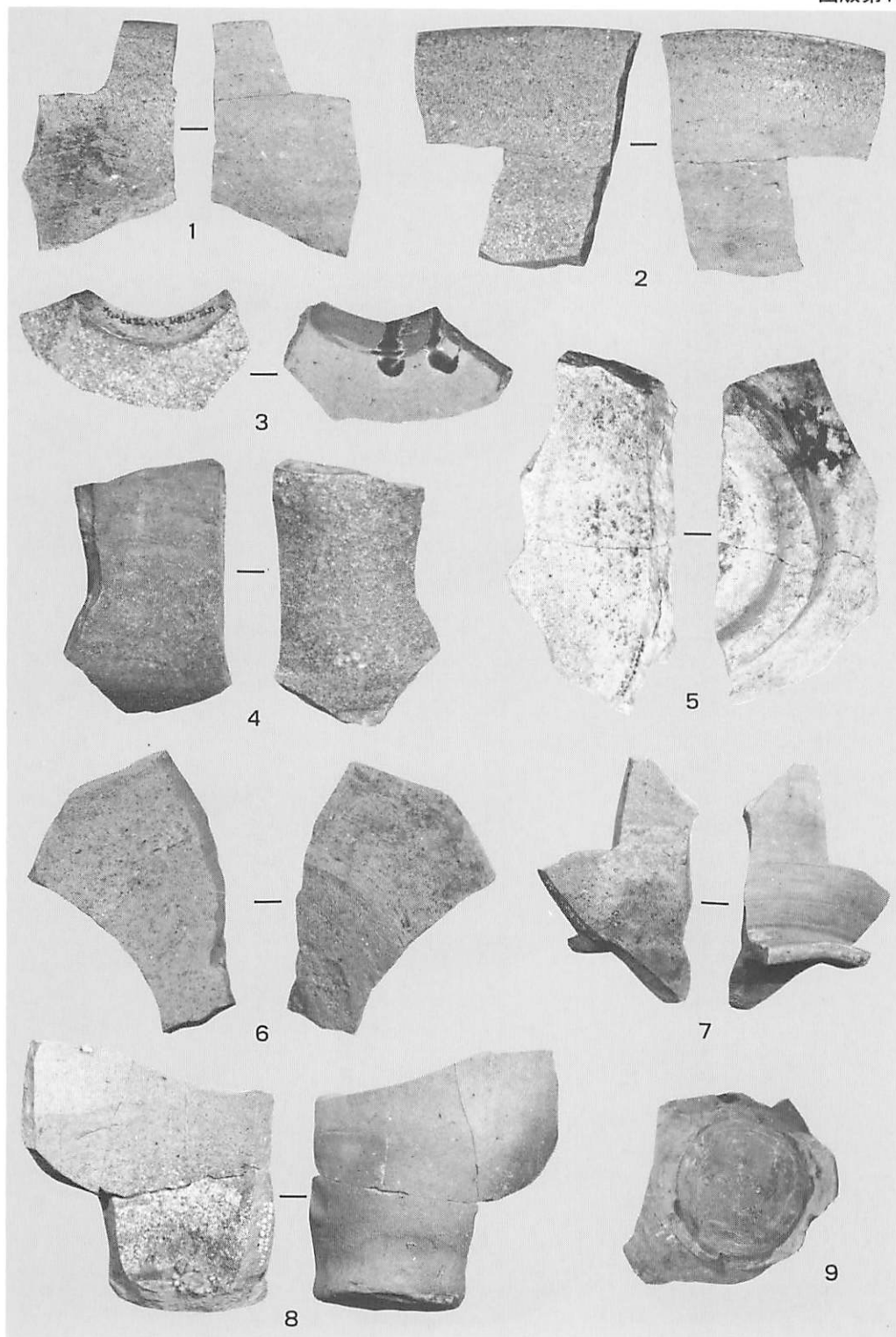
瓦製埴



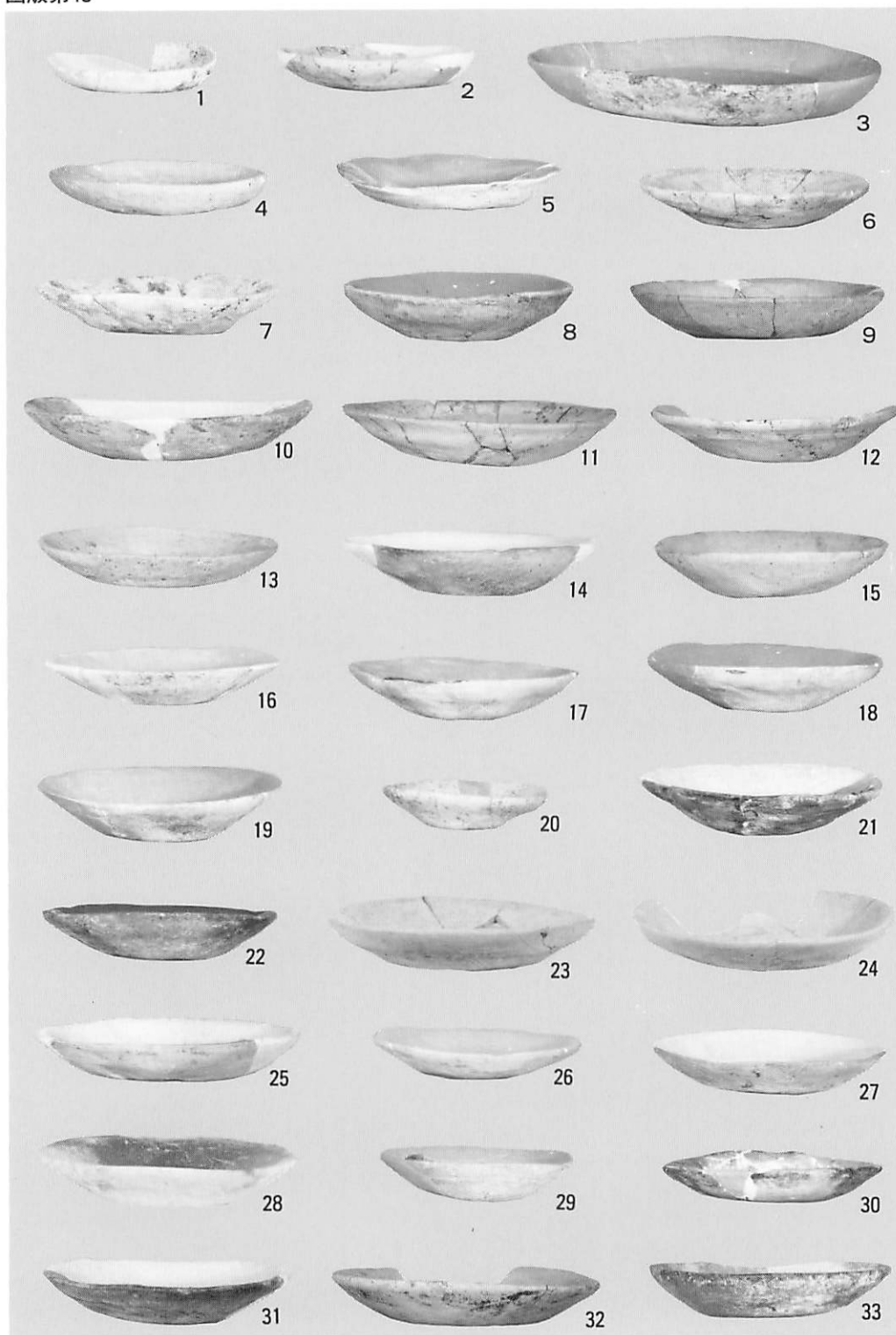
I地区井戸1出土遺物 (1)



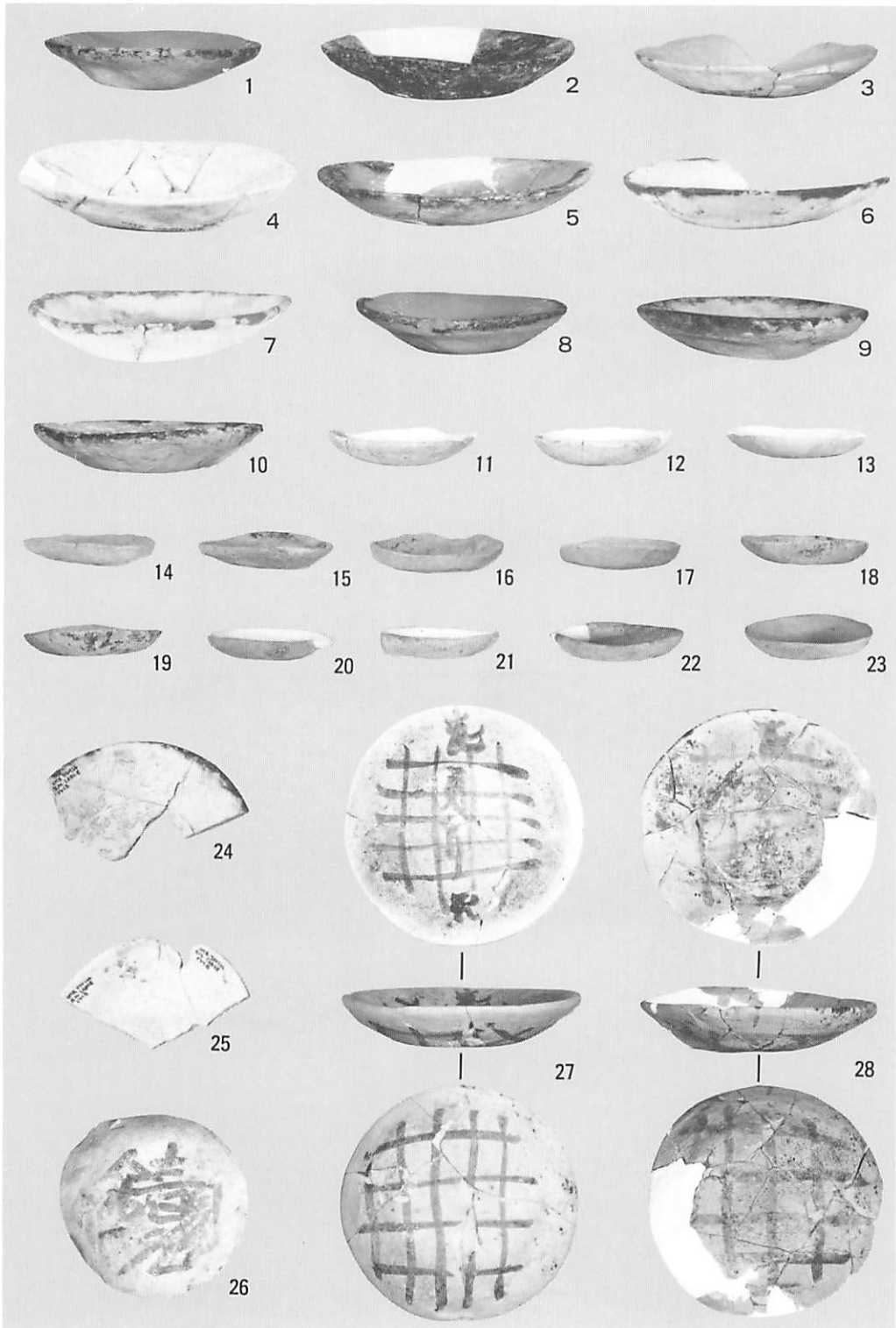
I地区井戸1出土遺物 (2)



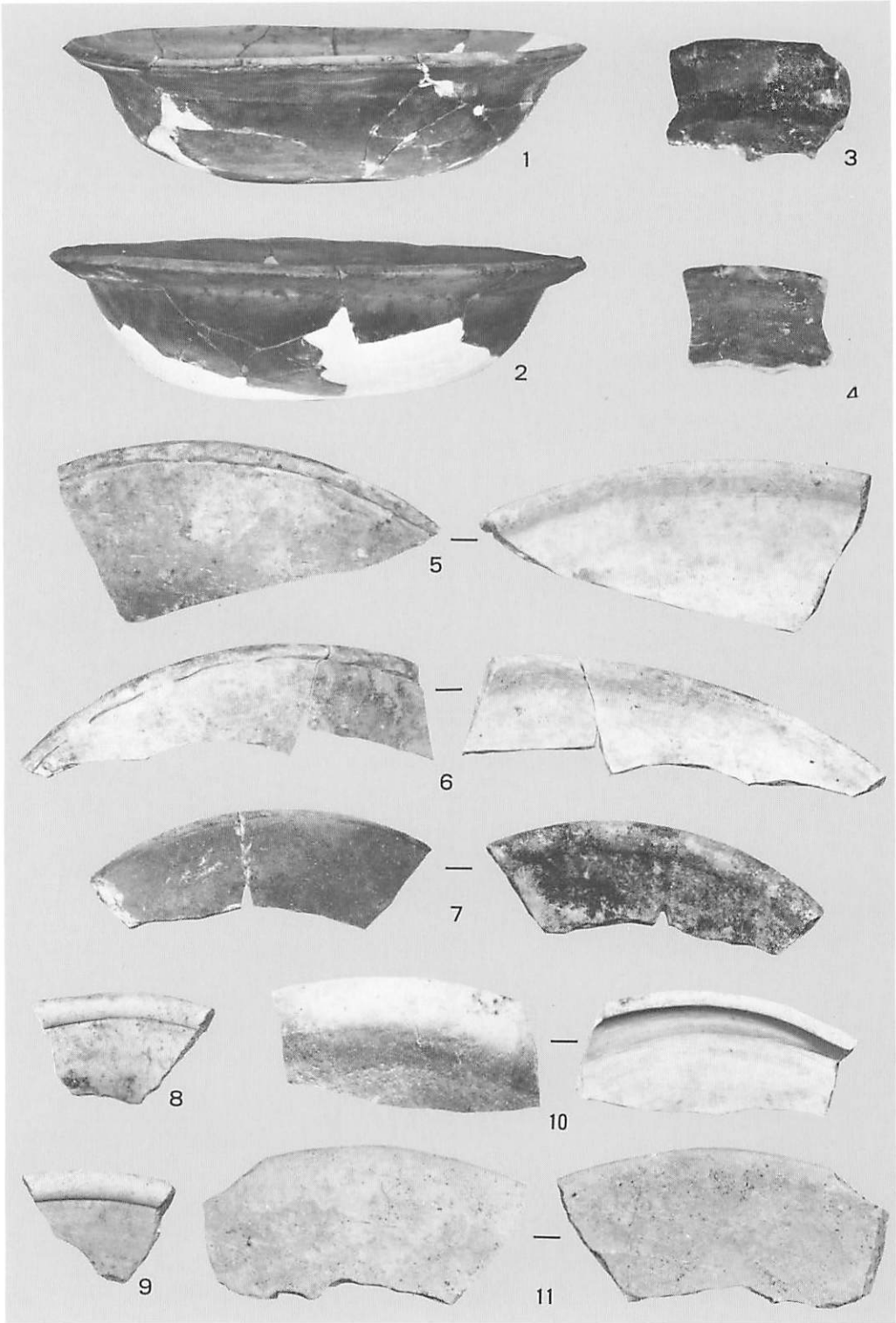
I地区井戸1出土遺物 (3)



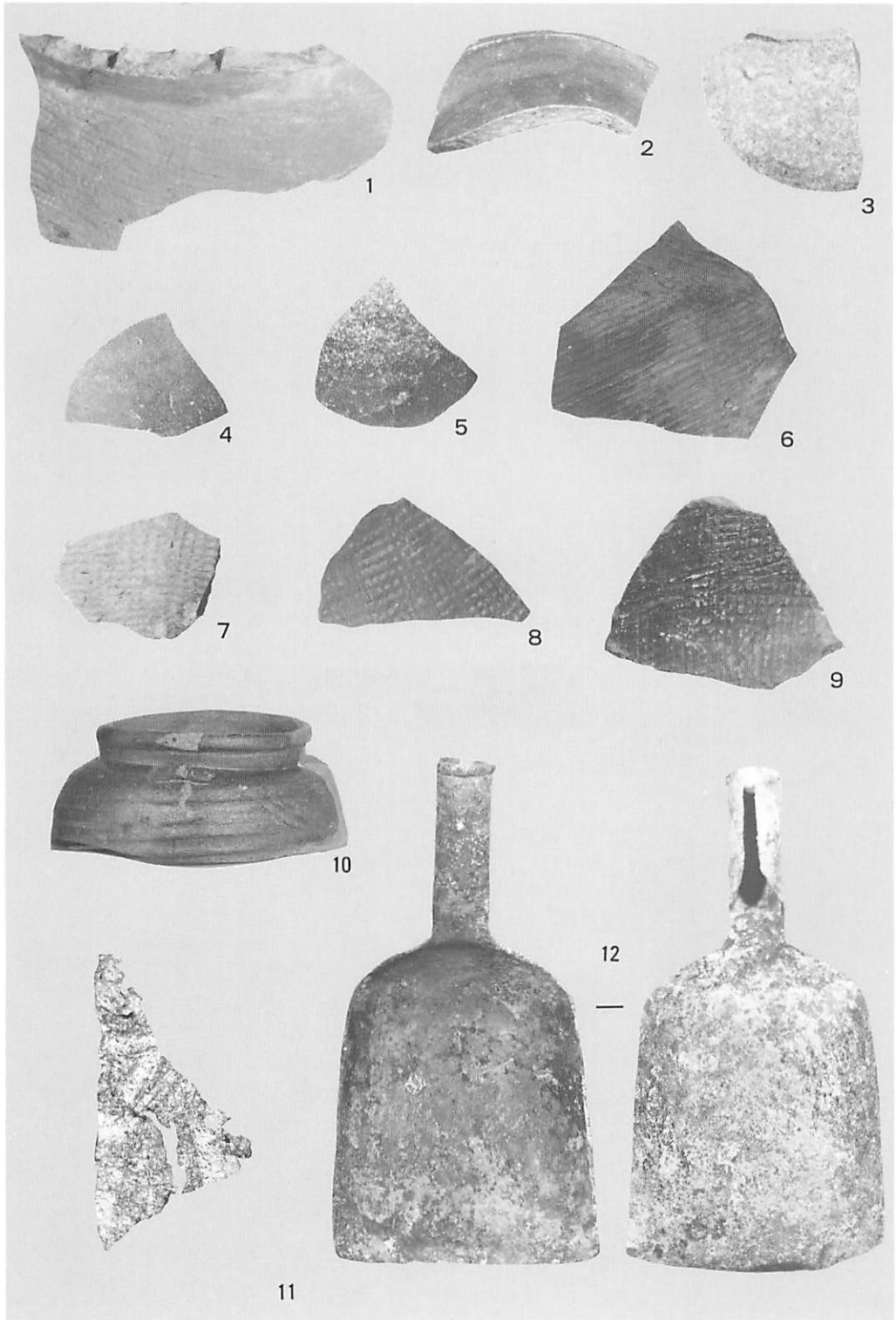
土師質皿類 (1)



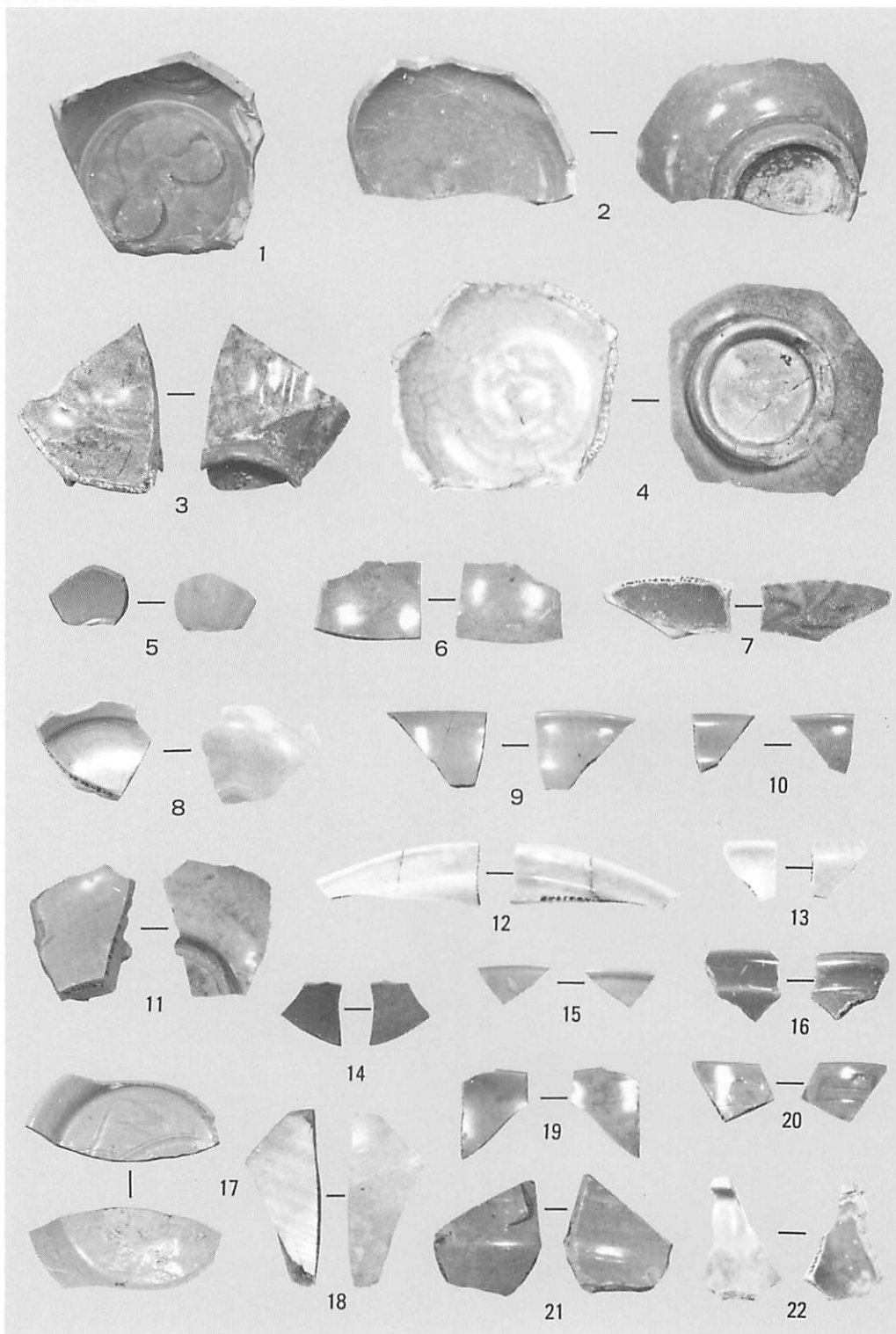
土師質皿類 (2)



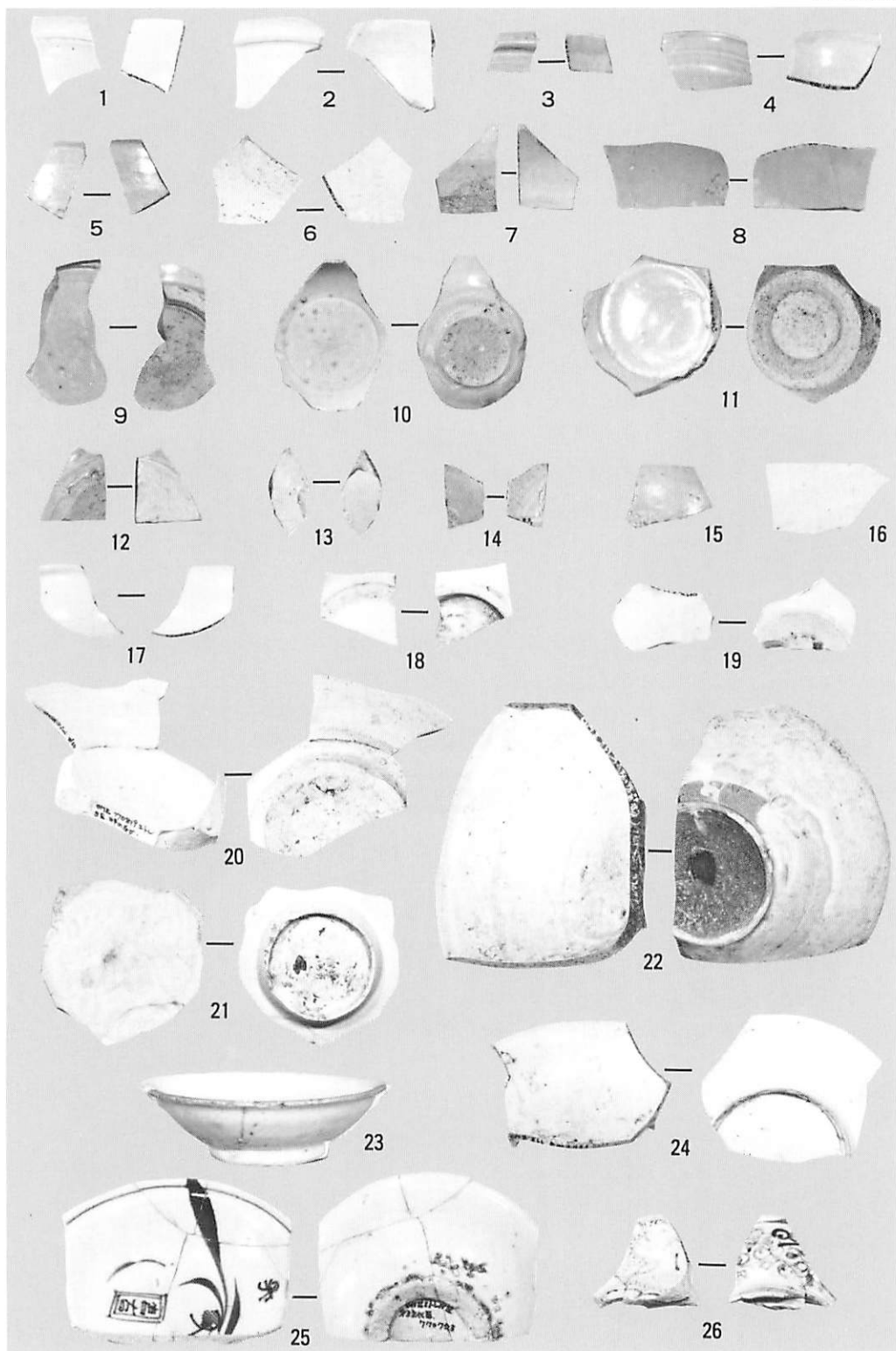
土師質土器類



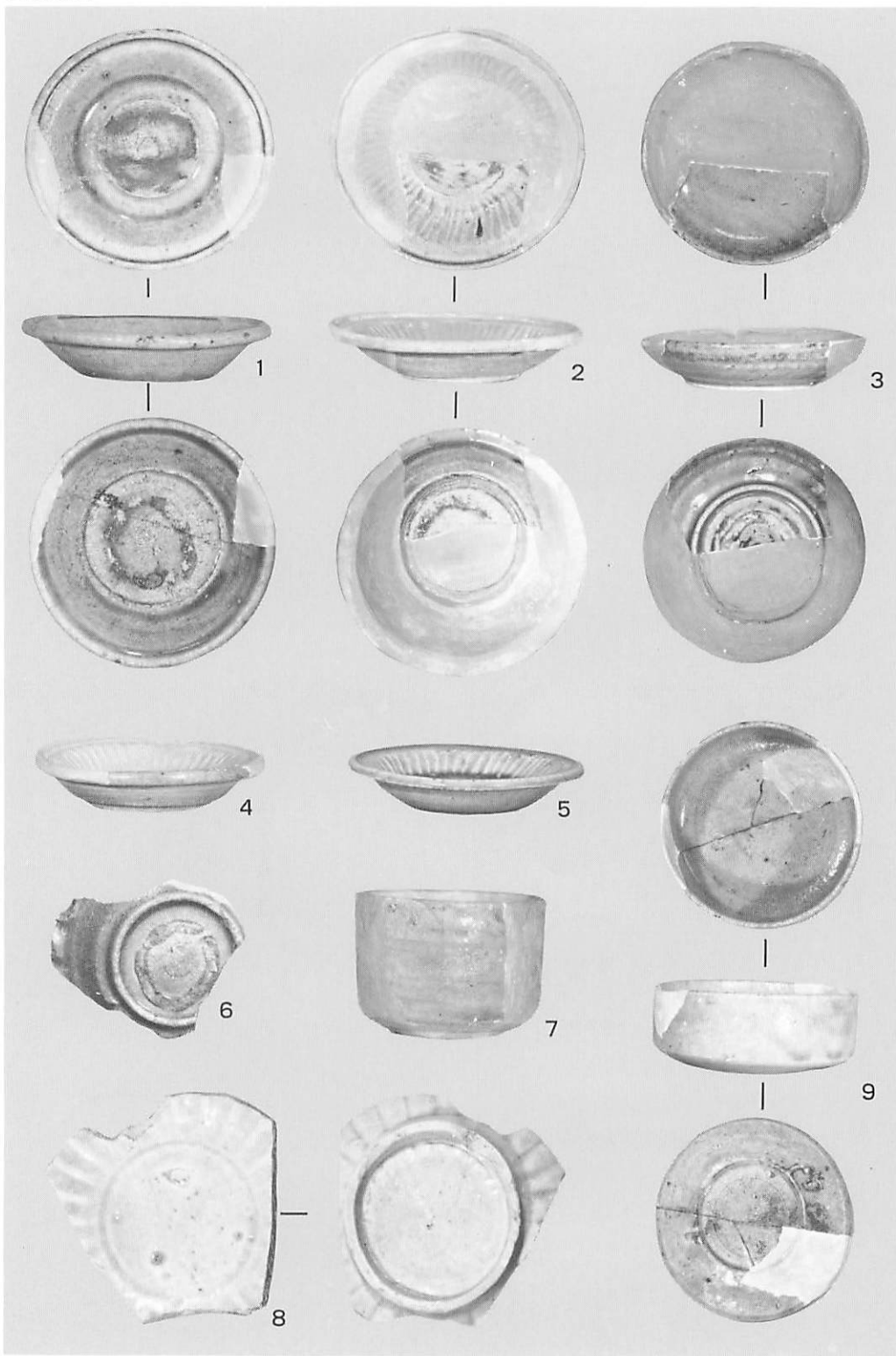
須恵器(1~9)・陶器(10)・銀箔片(11)



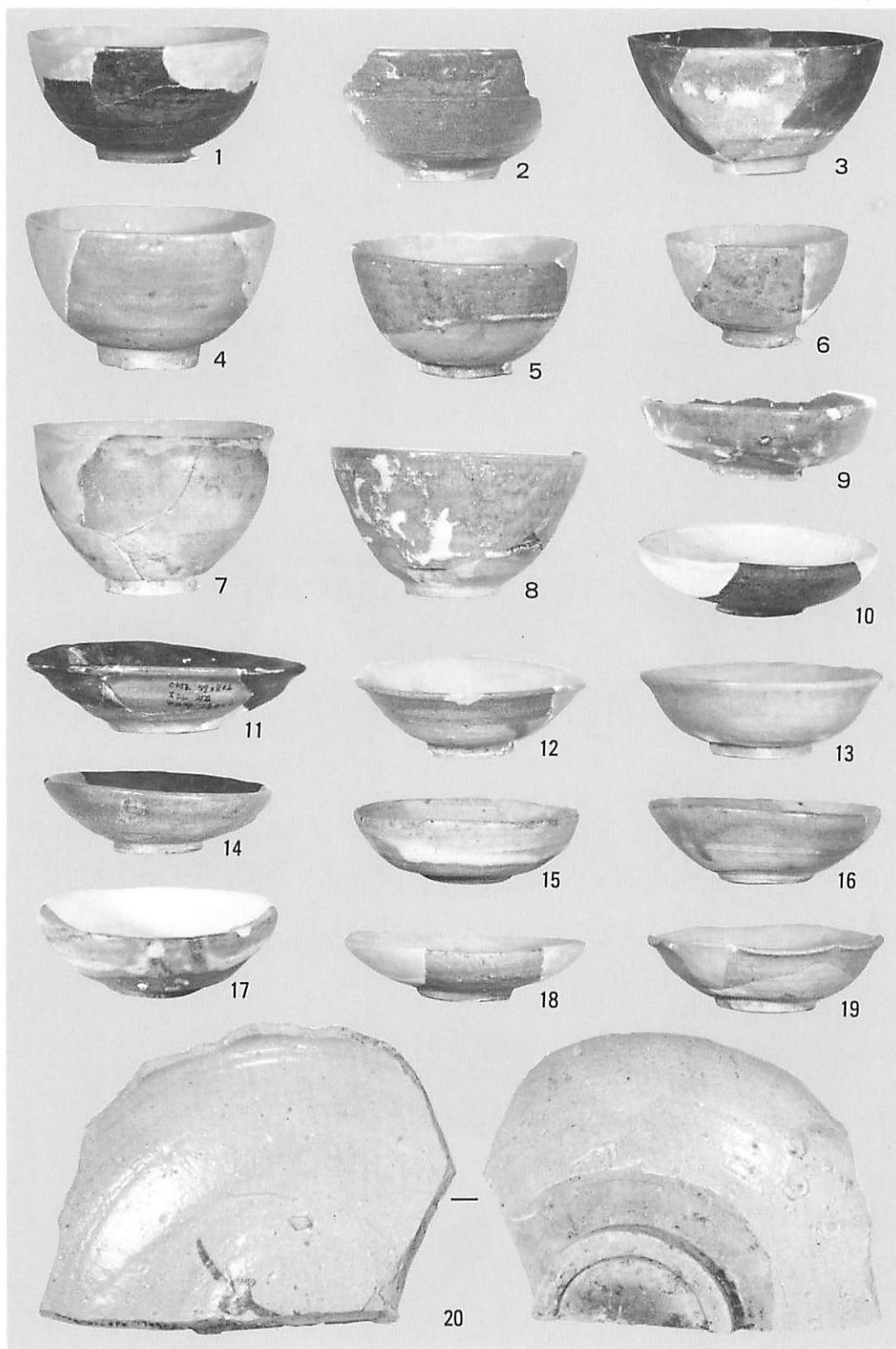
中国製磁器 (1)



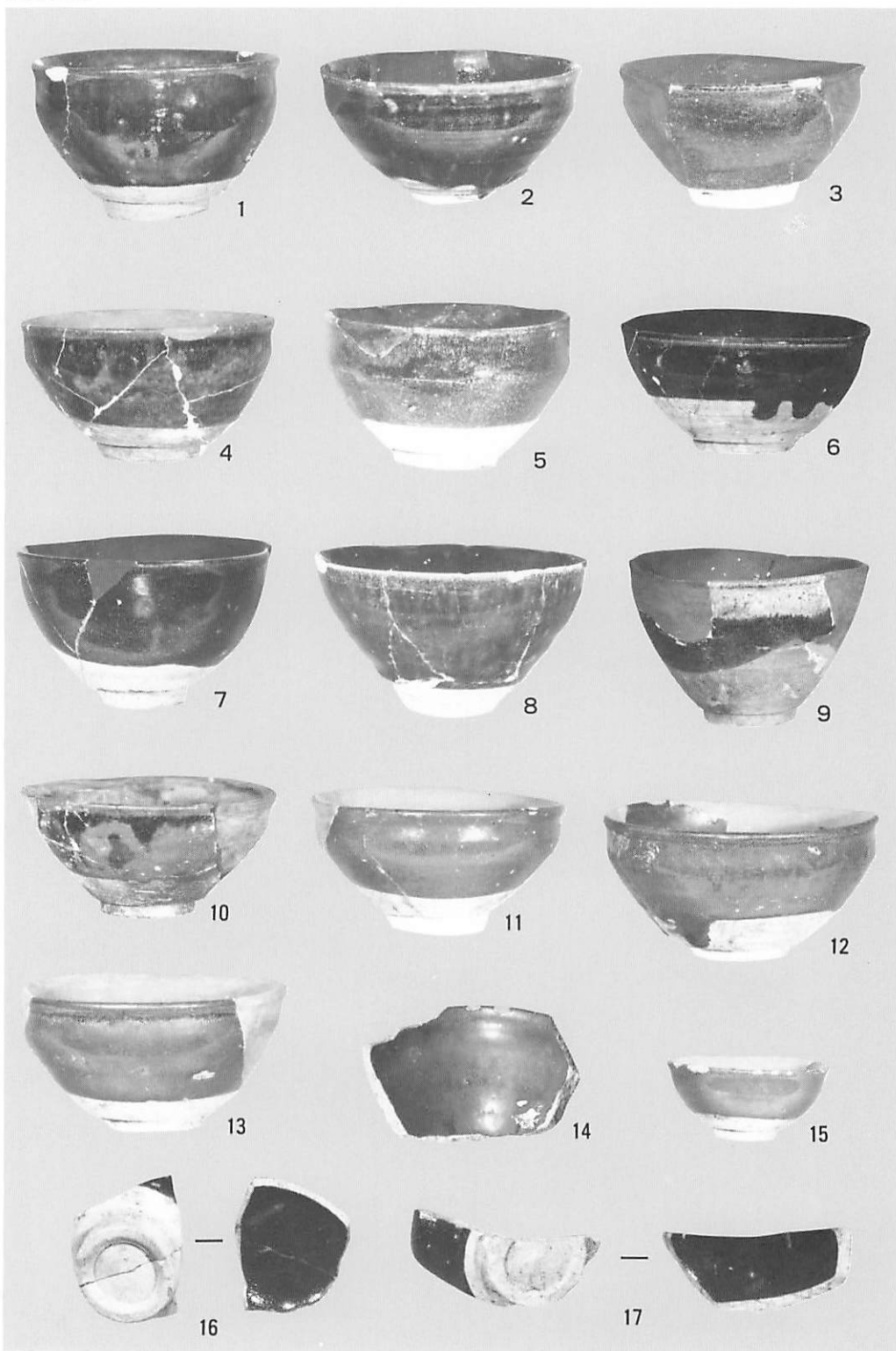
中国製磁器 (2)

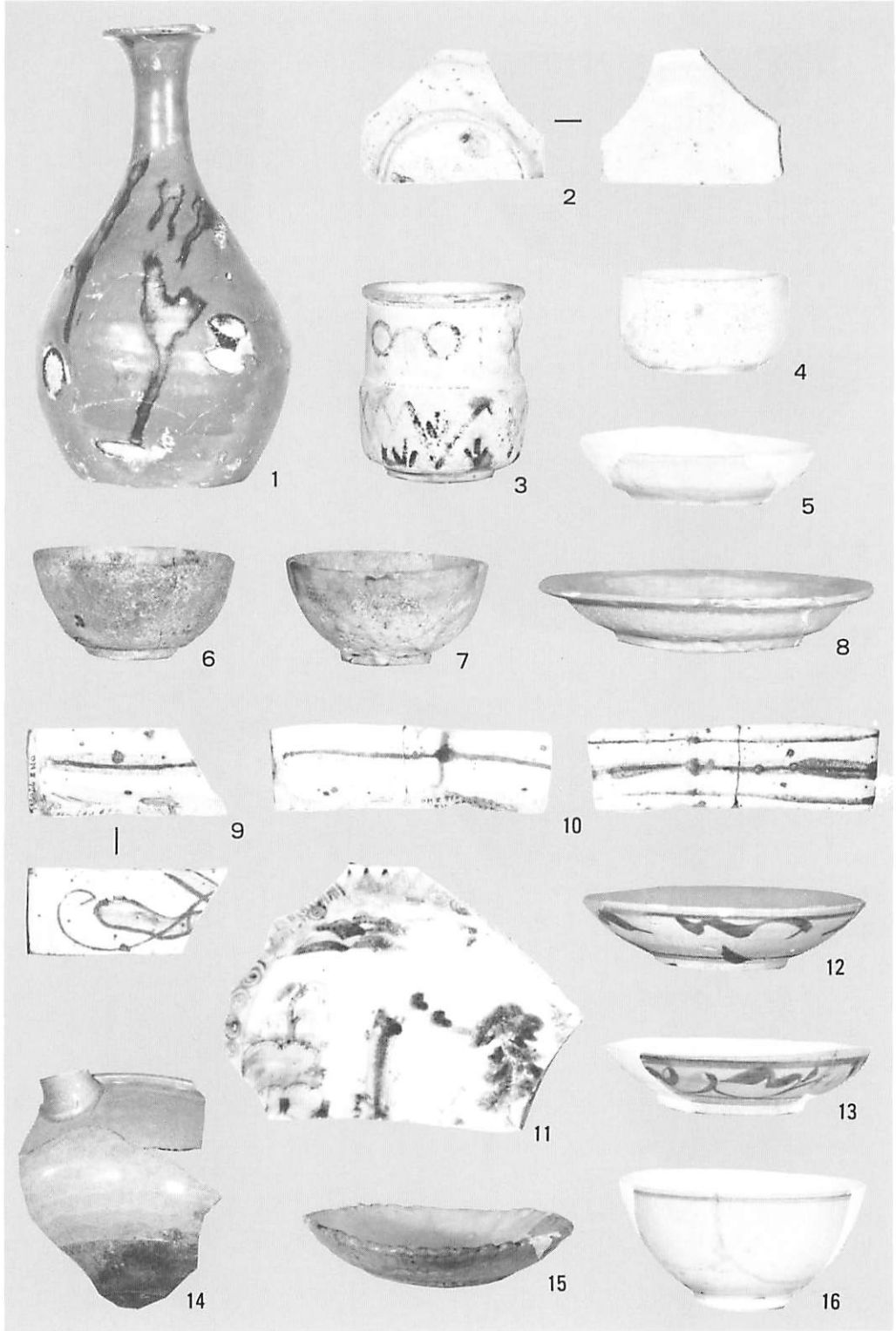


瀬戸系陶器

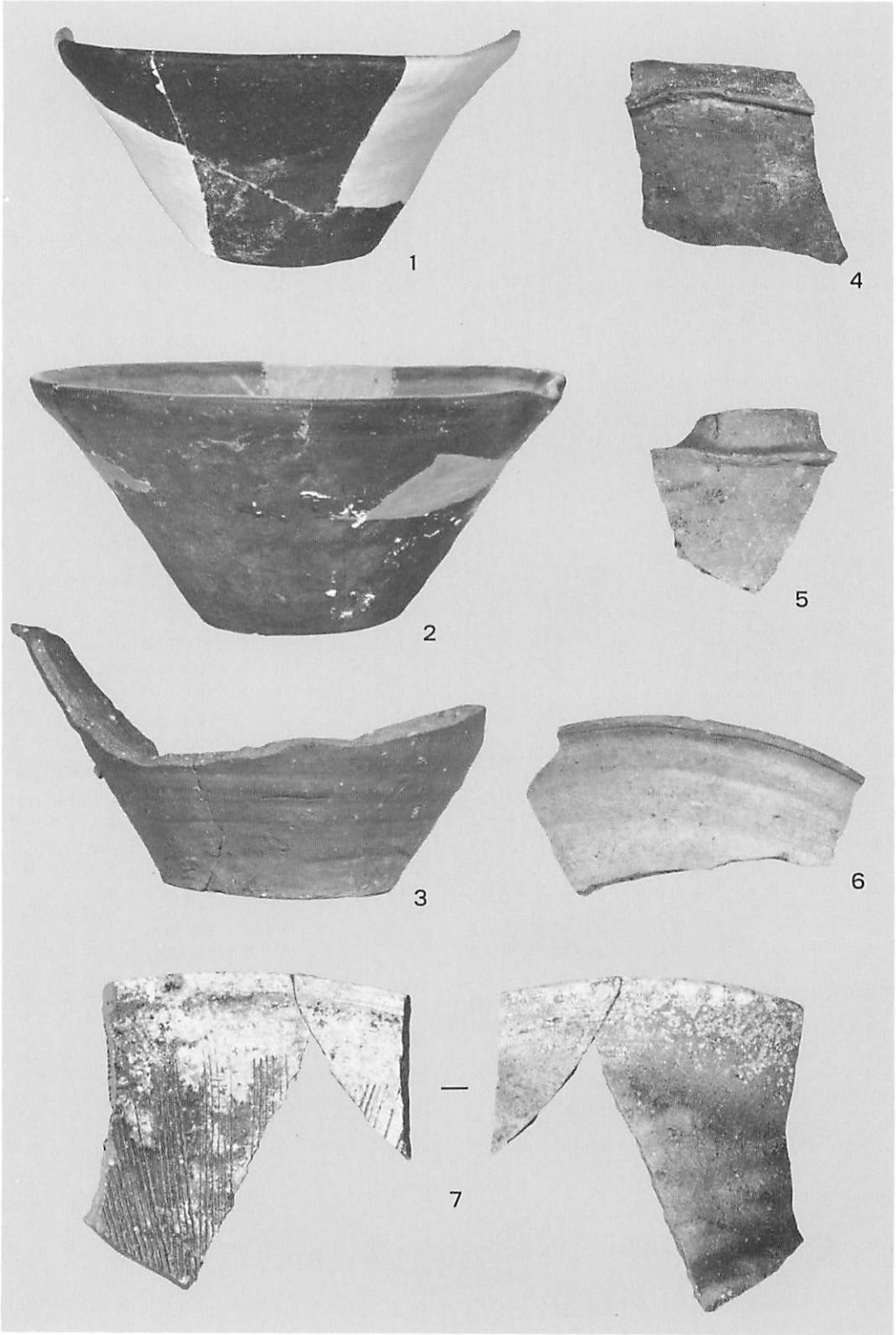


唐津系陶器

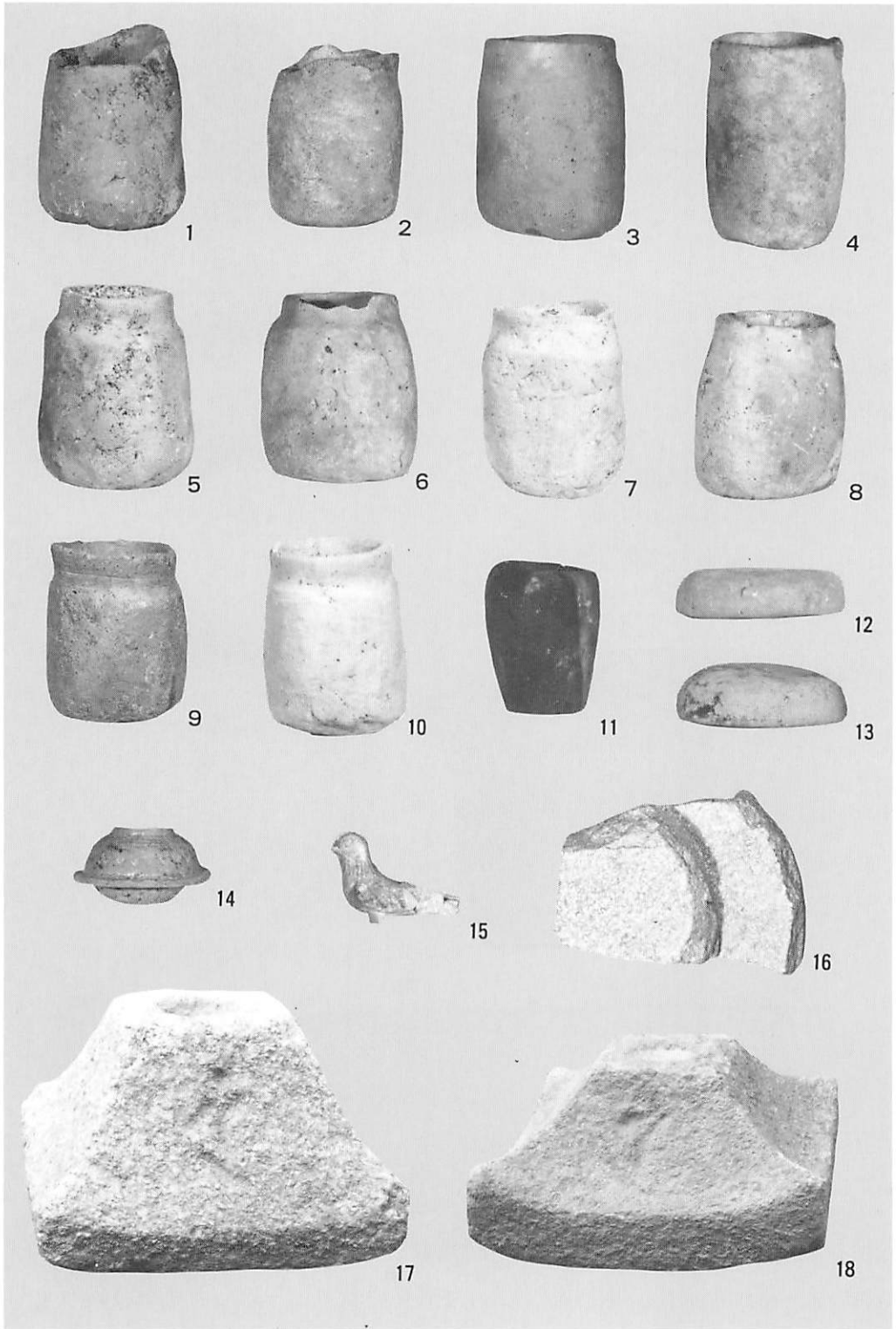




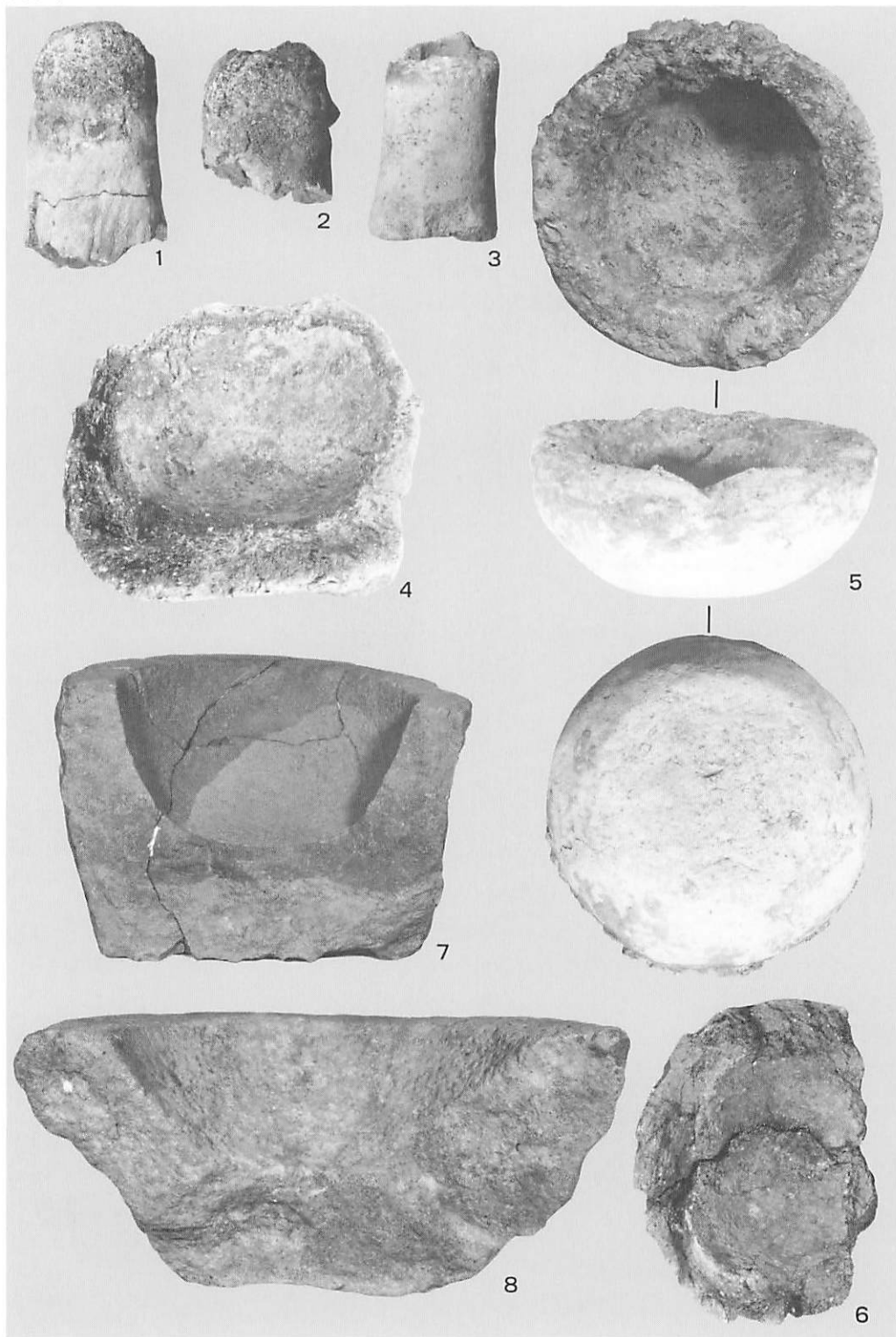
美濃(志野)系陶器・美濃(織部)系陶器・伊万里系陶器・京焼系陶器



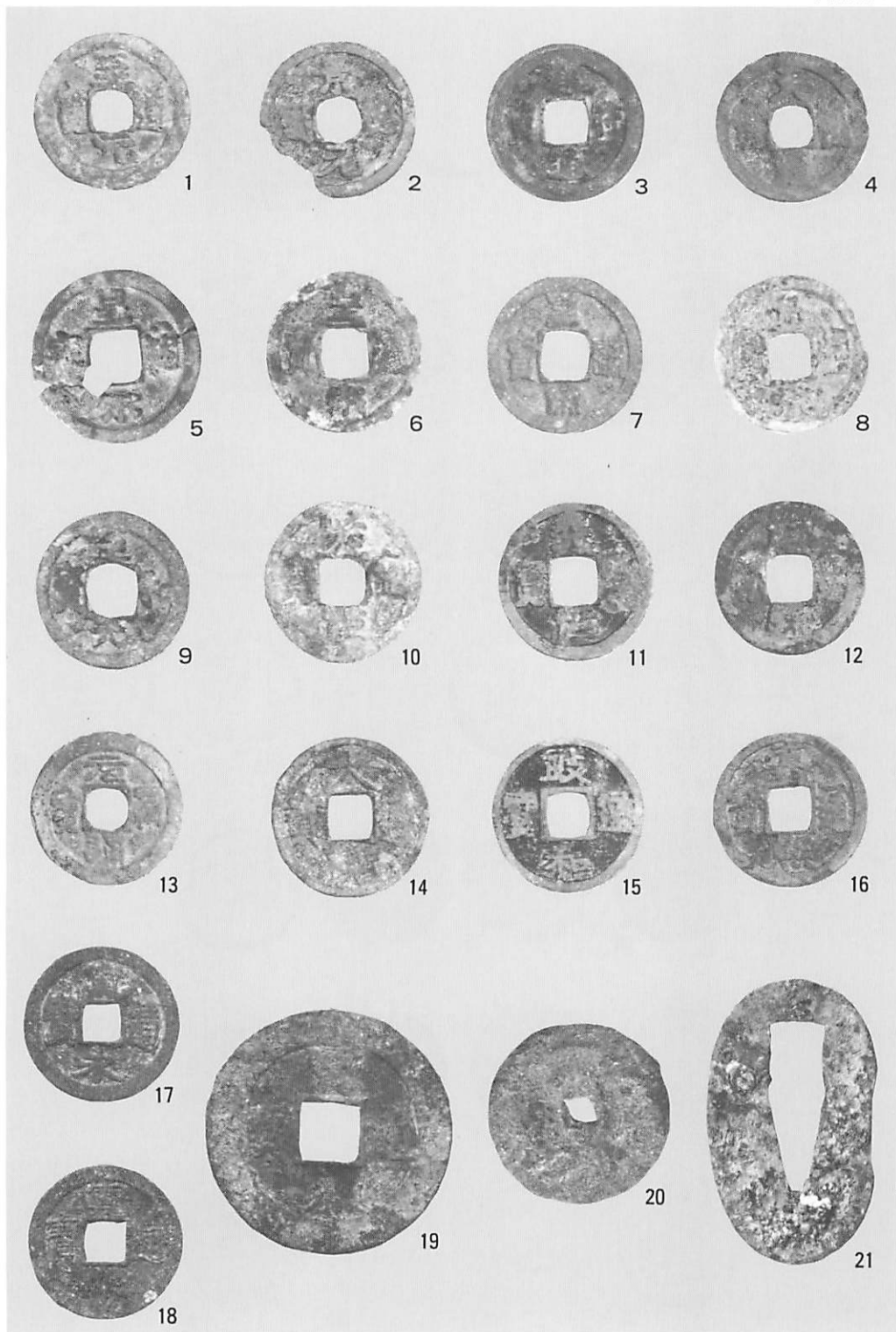
瓦質鉢・備前系陶器・信楽系陶器・丹波系陶器



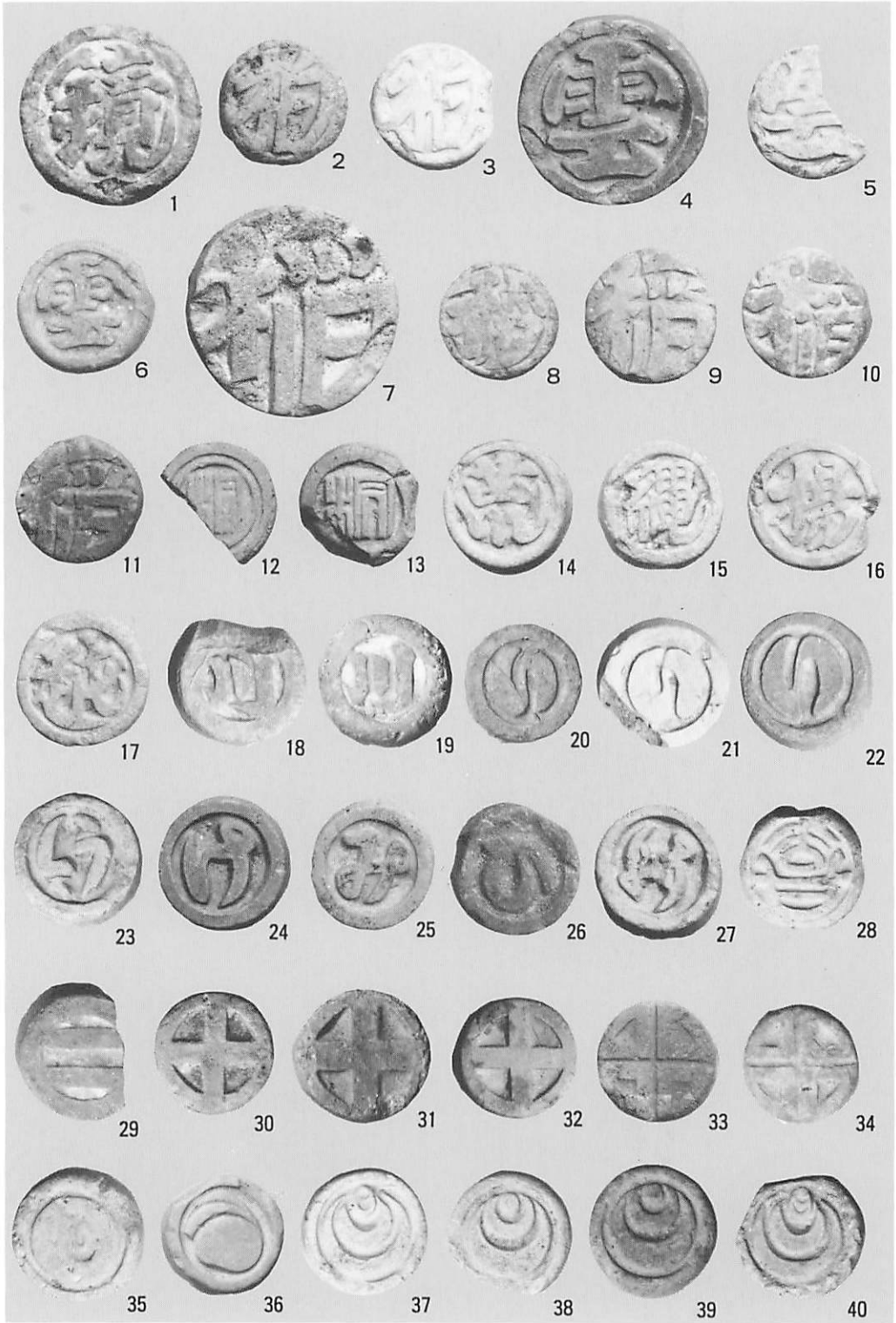
焼塩壺・伏見人形・石製器



フィゴの羽口・柑壺各種



貨幣及び鉄製品



泥面子 (1)



泥面子 (2)

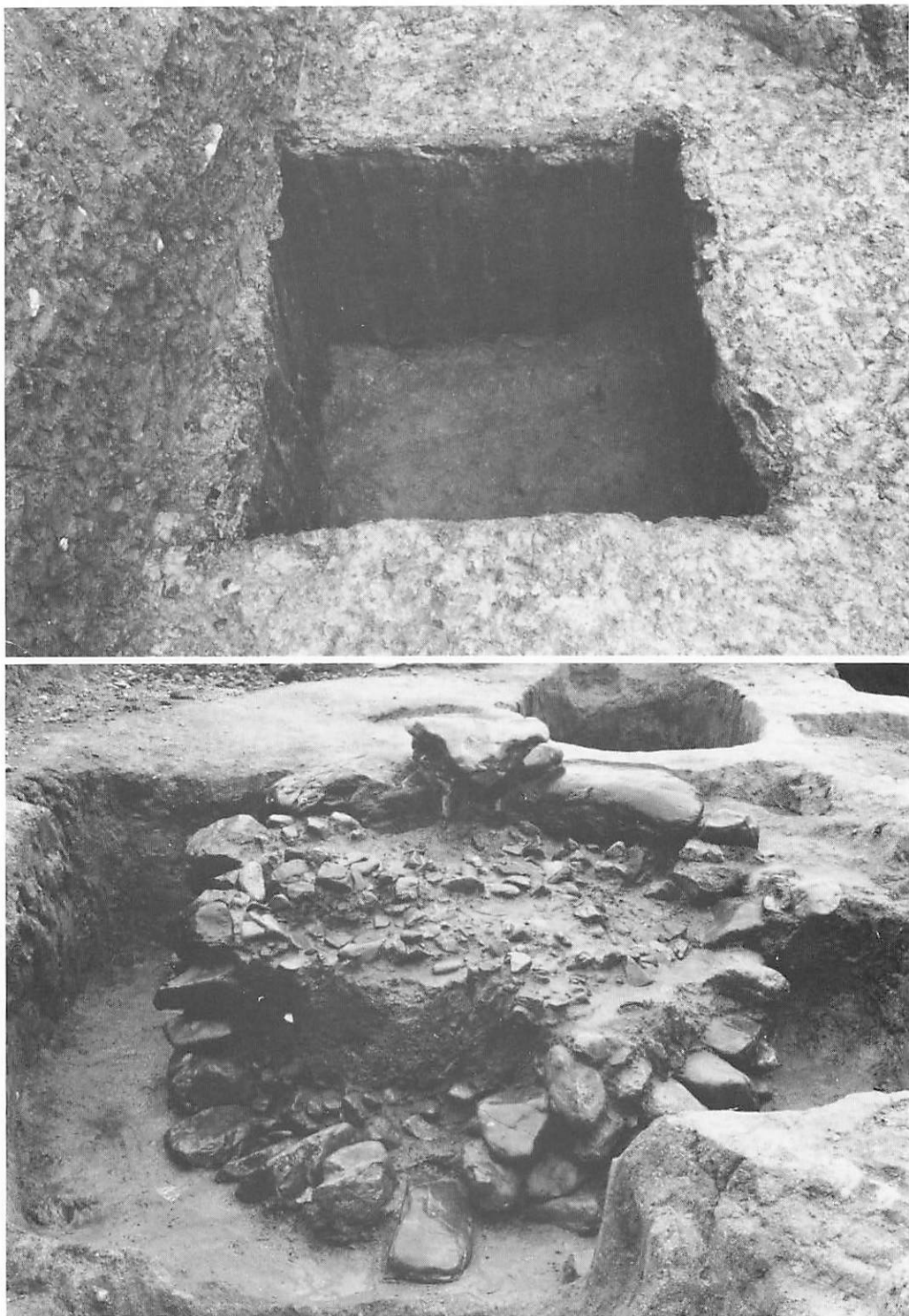
図版第64



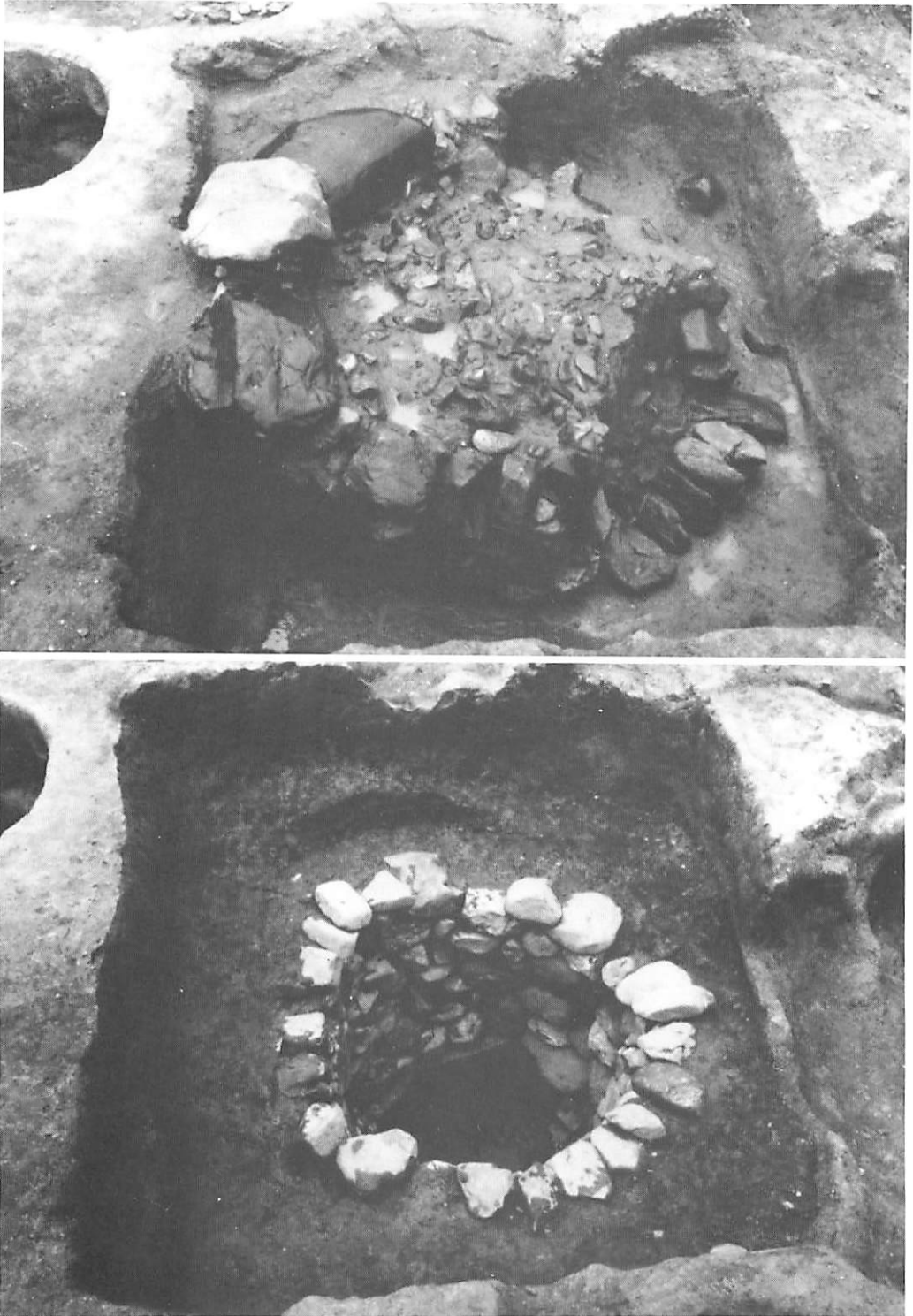
上：調査前全景(東から) 下：北部茶褐色土層全景(東から)



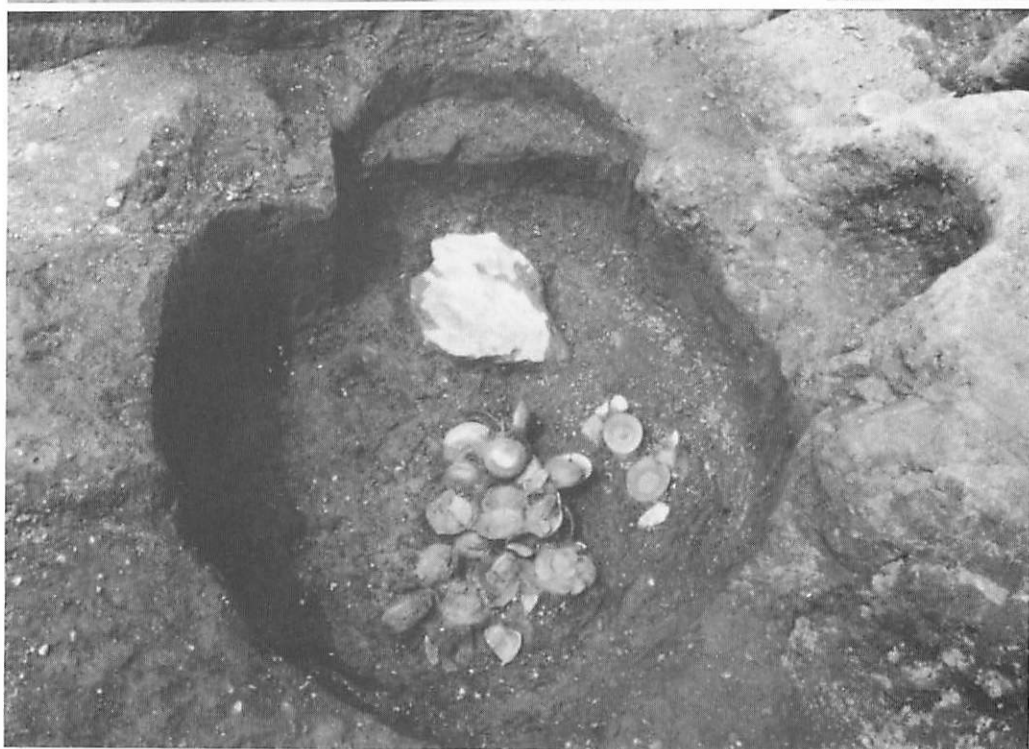
上：北部完掘後全景(東から) 下：南部完掘後全景(東から)



上：井戸206(西から) 下：井戸205(北から)



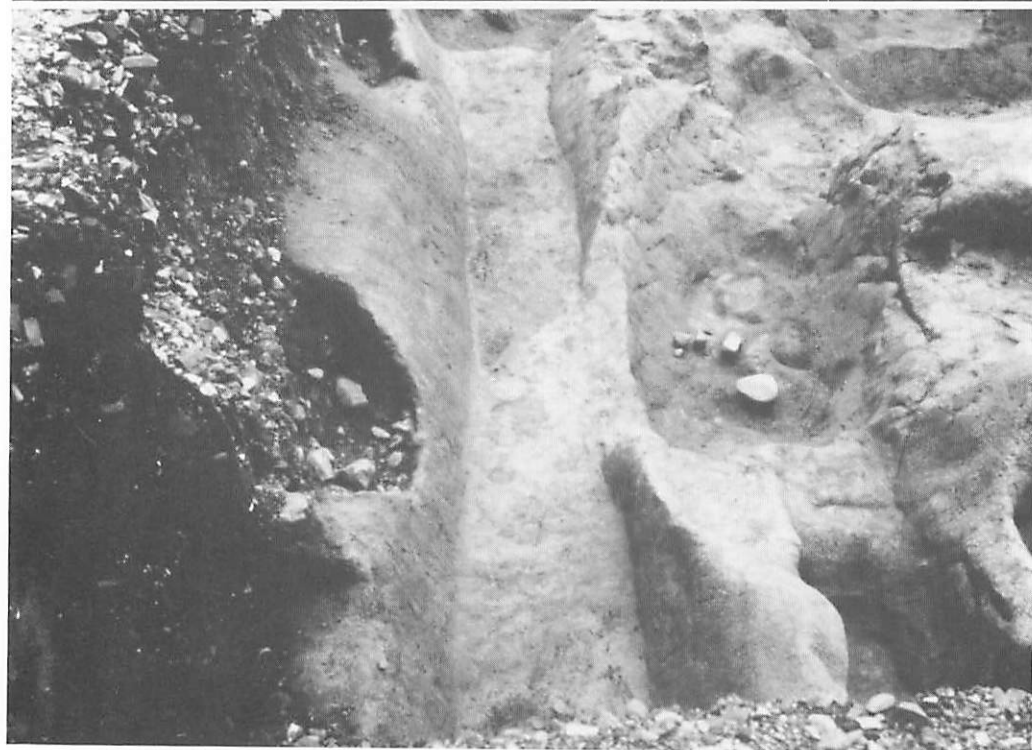
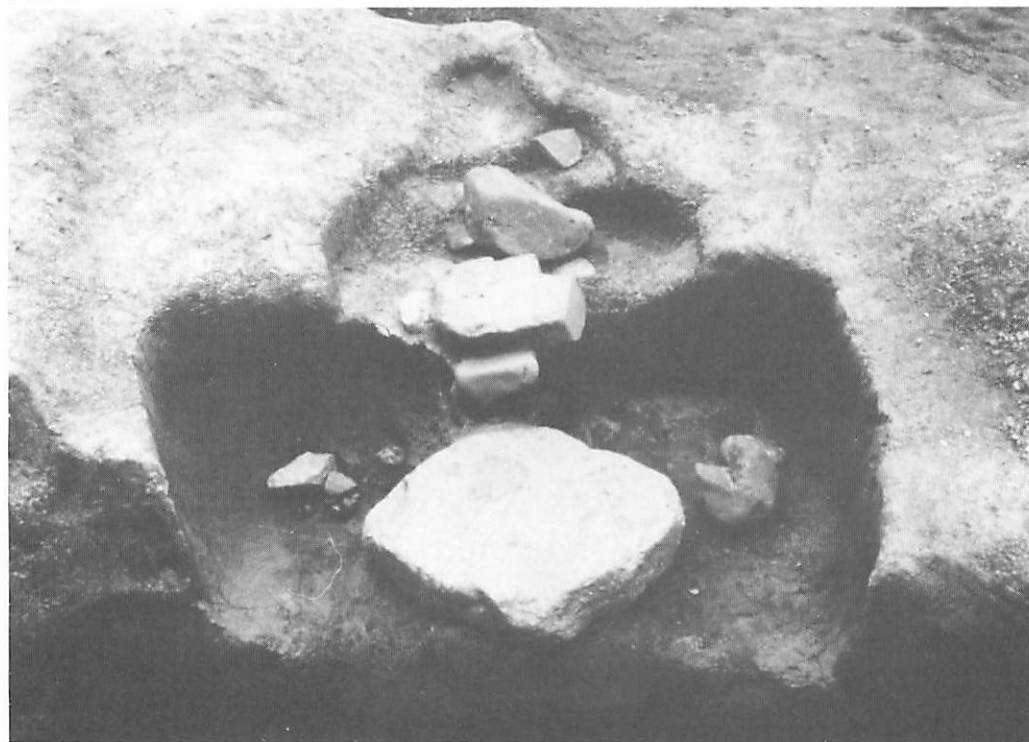
上：井戸205(東から) 下：同完掘後(東から)



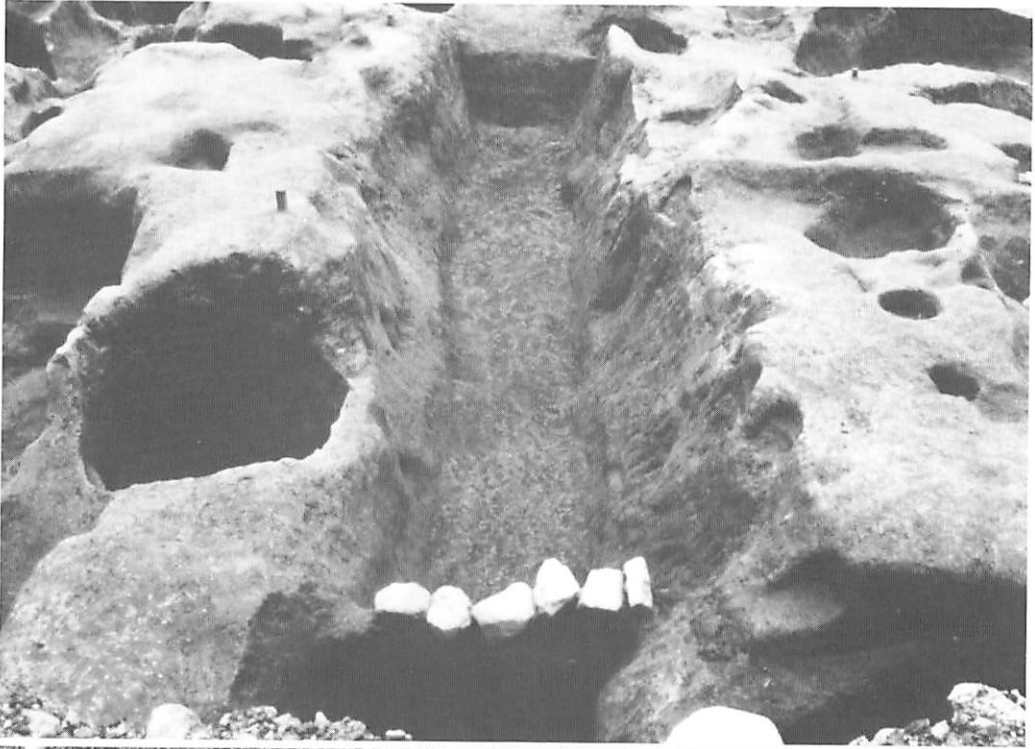
上：井戸203 下：土壇207・柱穴204



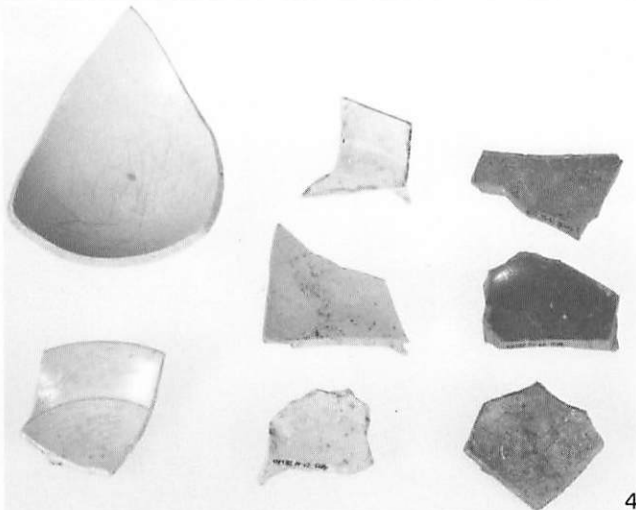
上：柱穴201 下：柱穴202



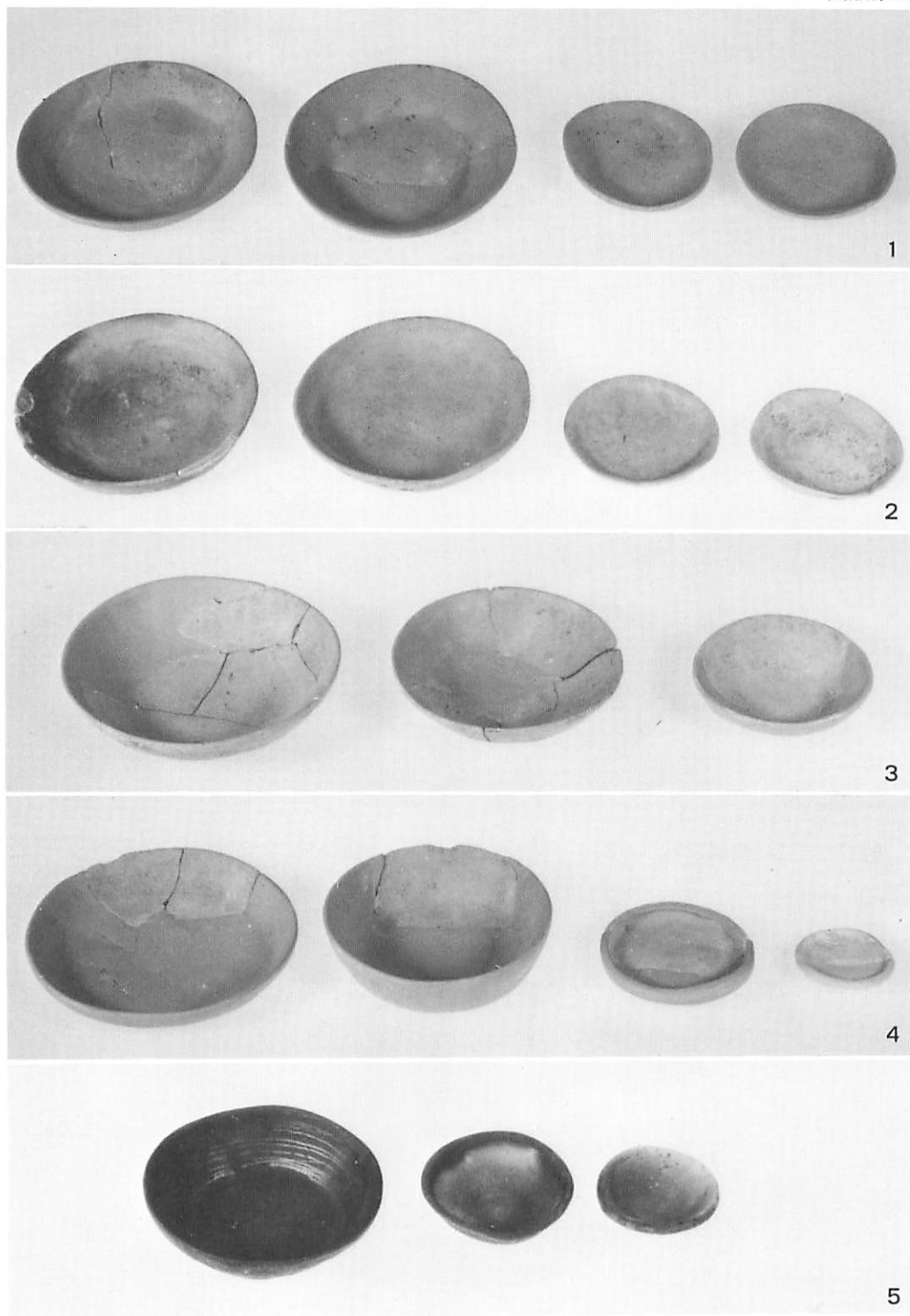
上：柱穴201(北から) 下：溝203(北から)



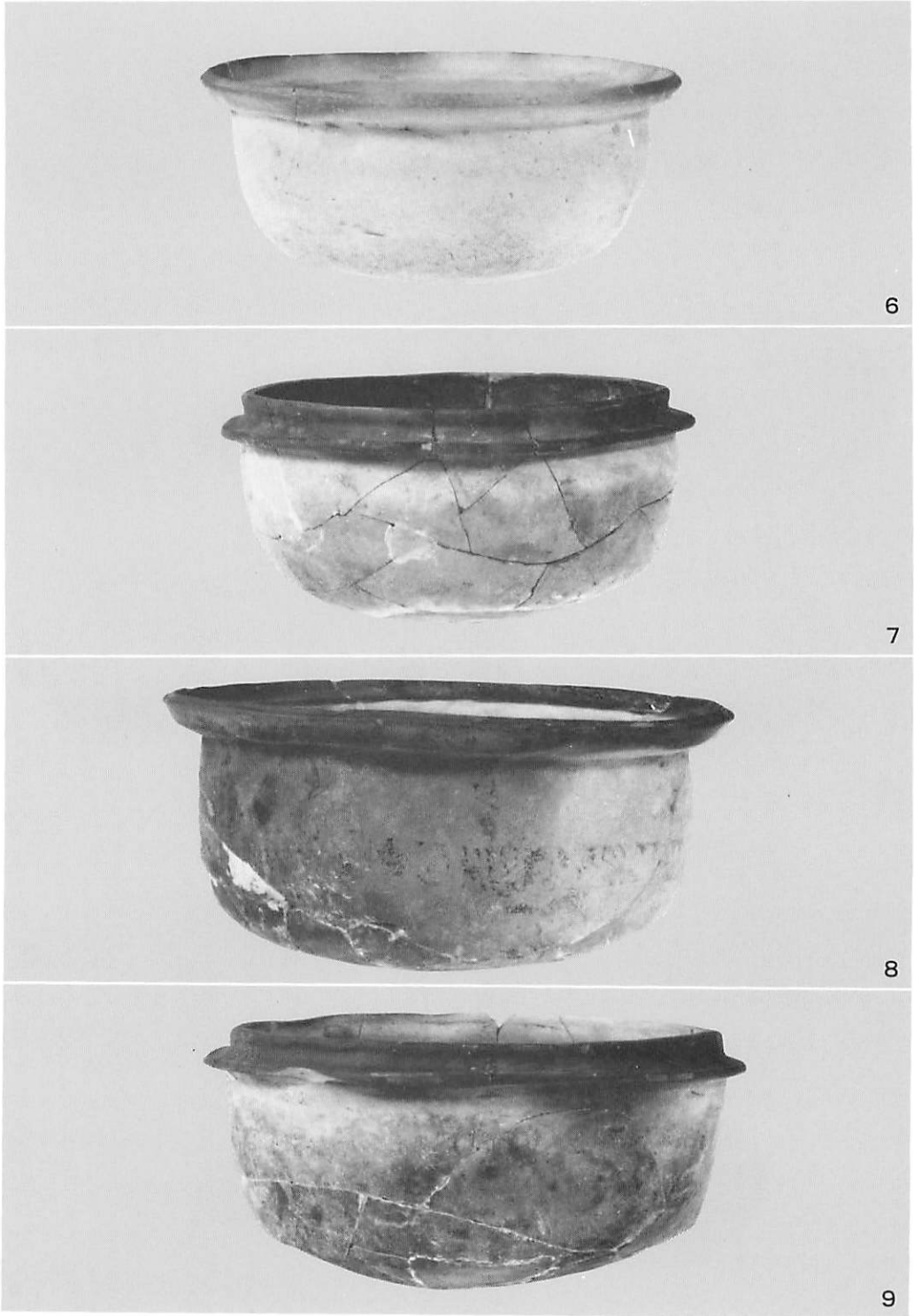
上：溝201(北から) 下：土壙101遺物出土状態



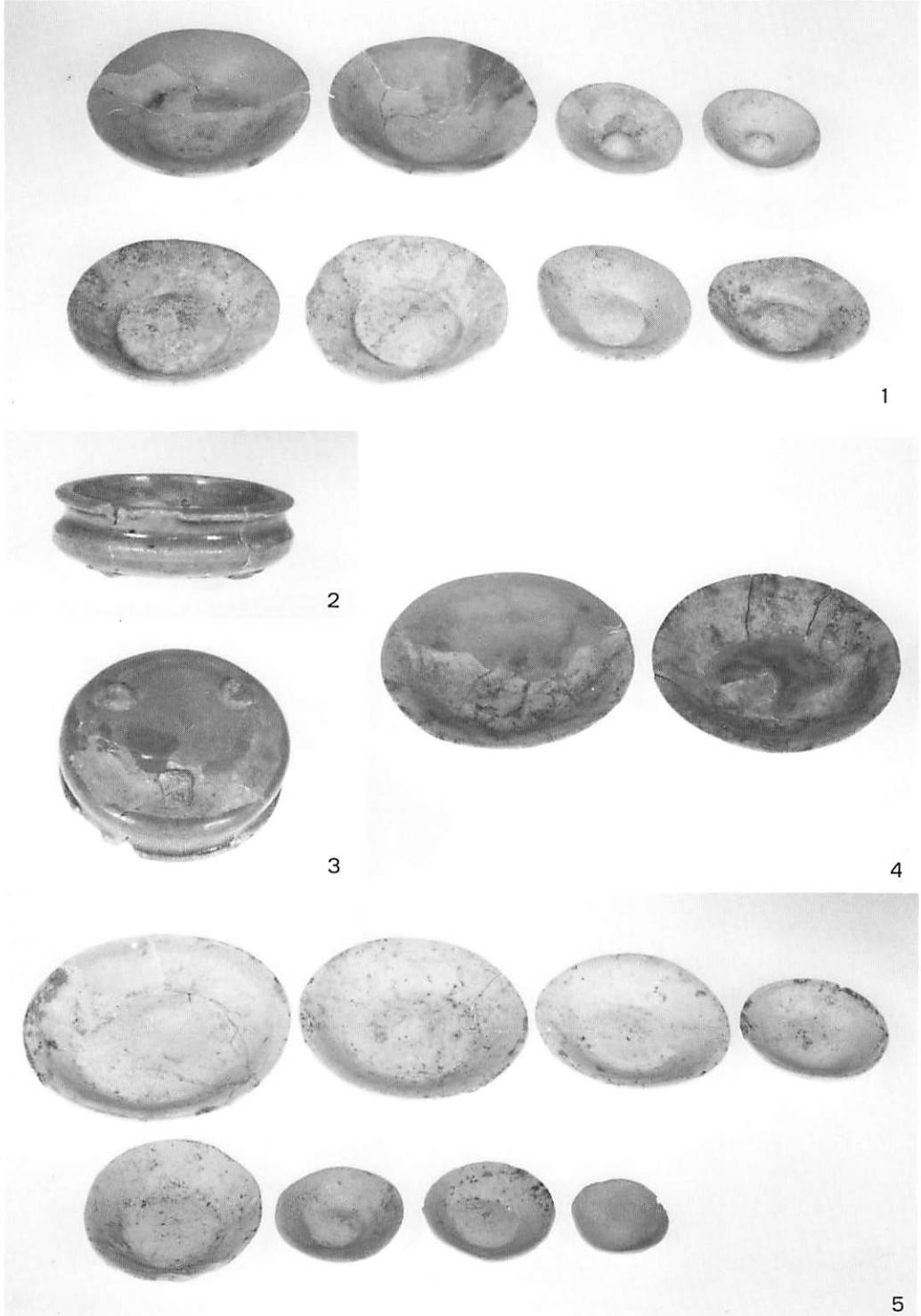
井戸206出土遺物(1～5) 緑釉耳皿(6)



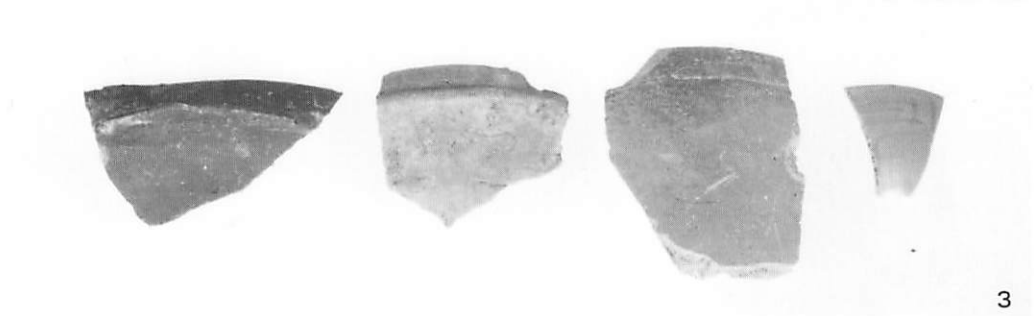
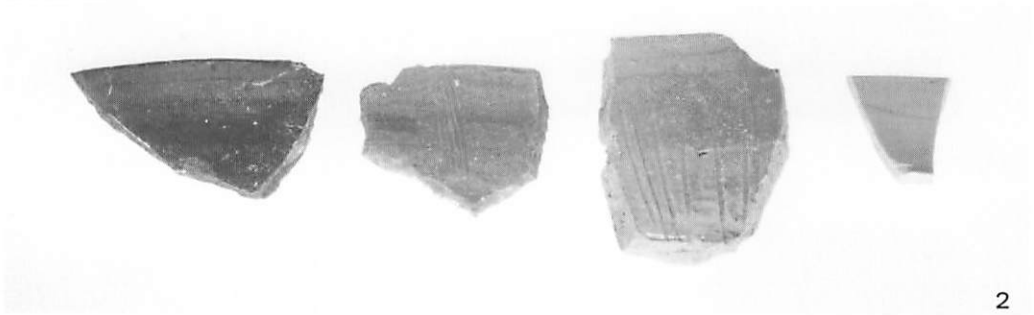
井戸205出土遺物 (1)



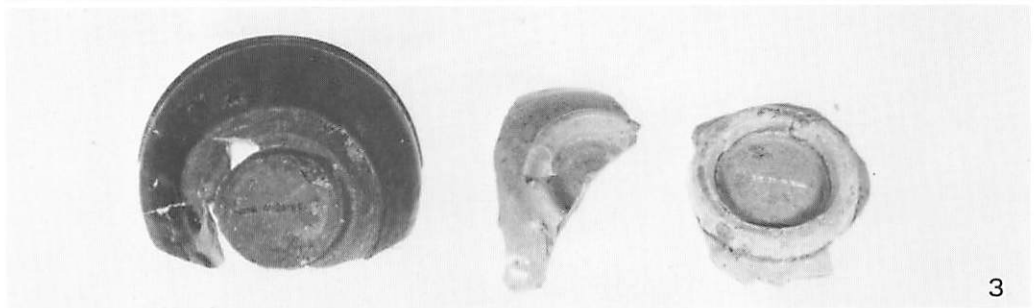
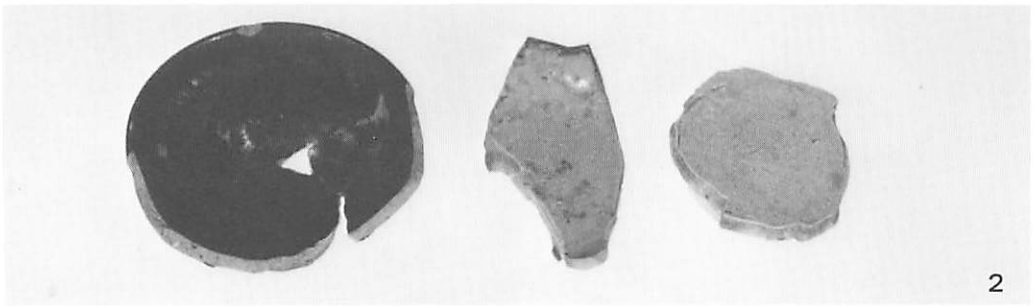
井戸205出土遺物 (2)



土壇207(1~3)・柱穴203(4)・溝203(5)出土遺物



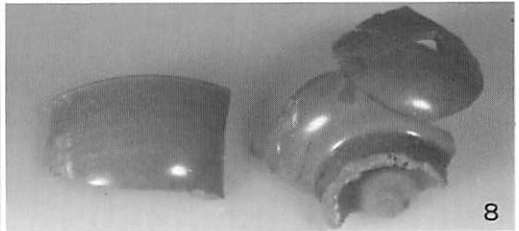
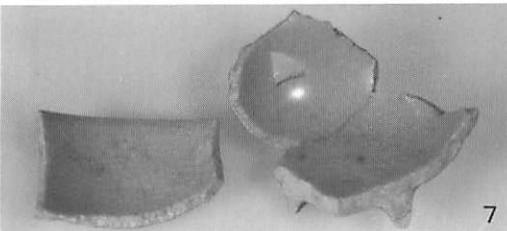
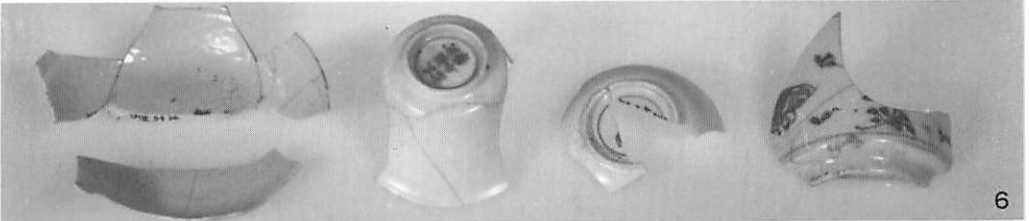
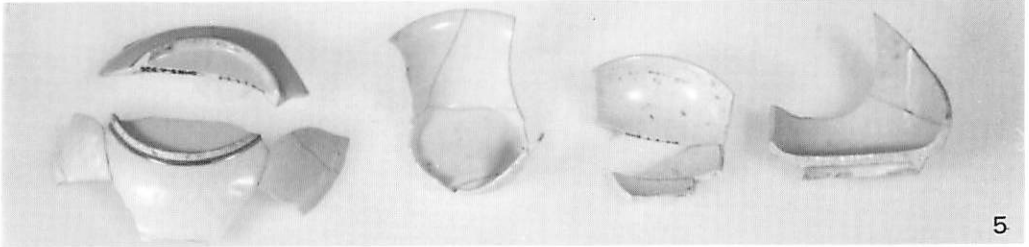
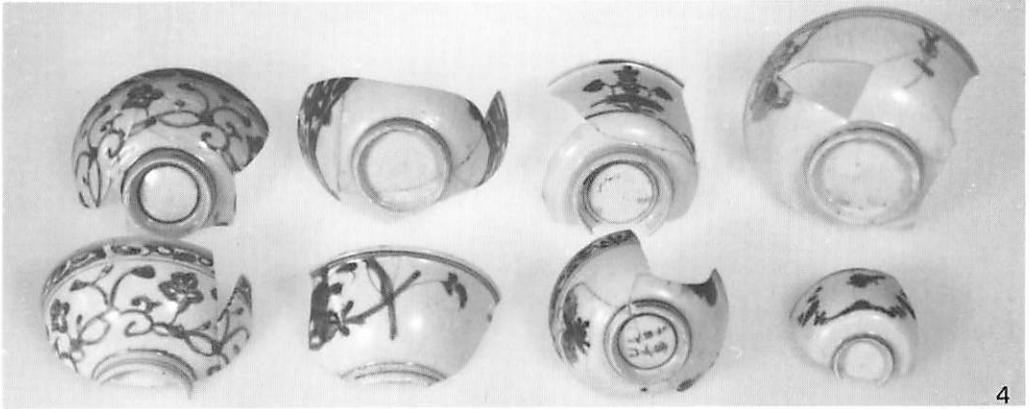
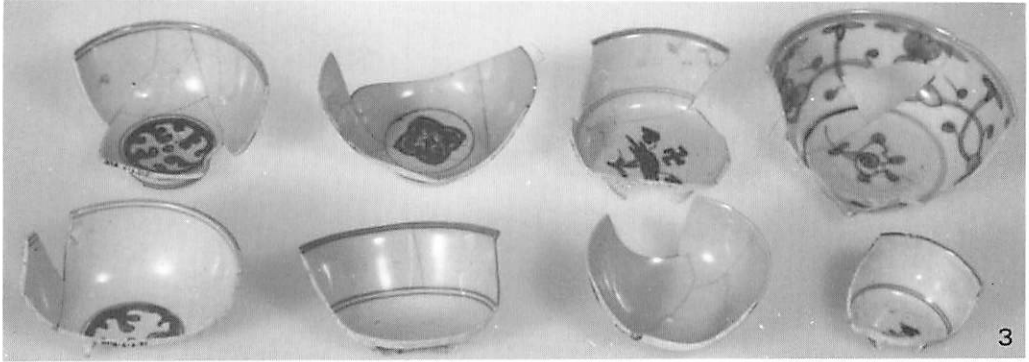
土壙206出土遺物



土壙204(1·2)·203(3·4)出土遺物



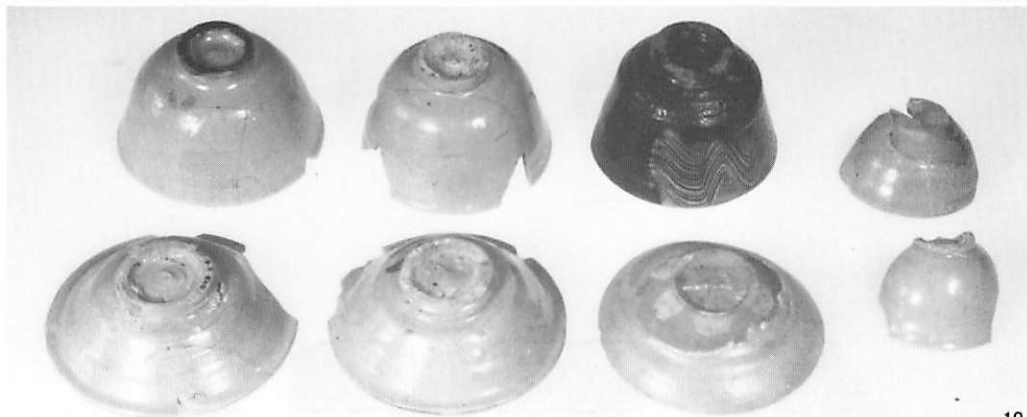
土壙101出土遺物 (1)



土壙101出土遺物 (2)



9



10



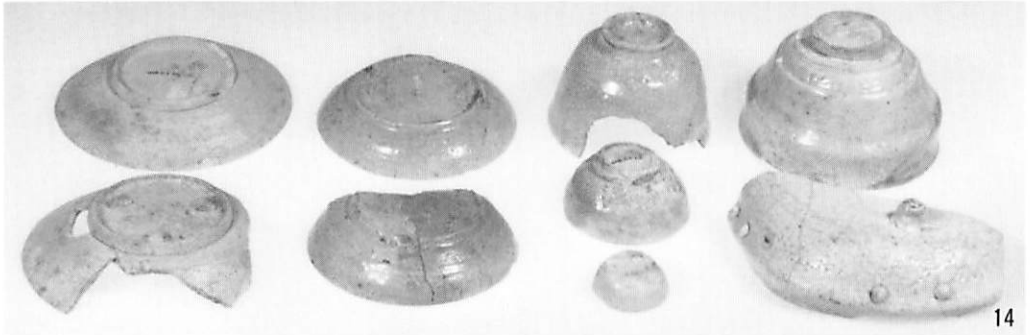
11



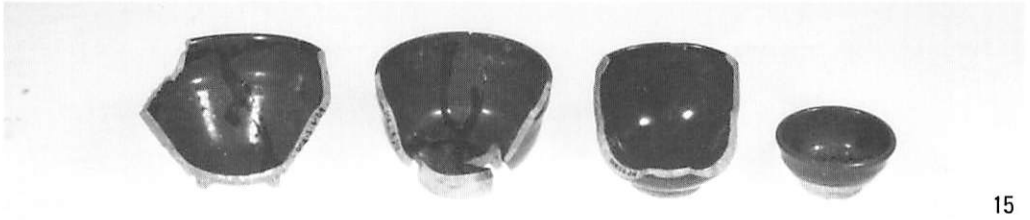
12



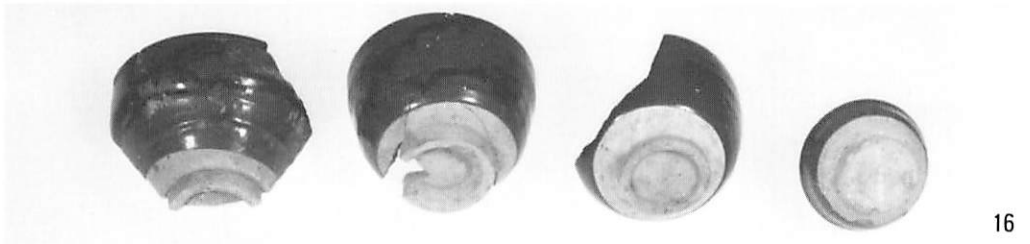
13



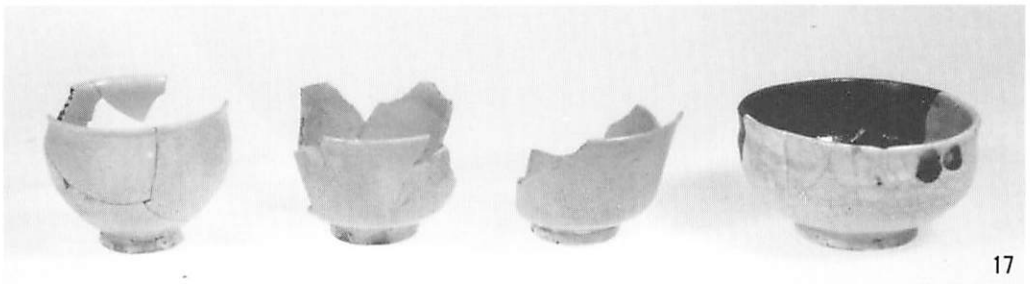
14



15



16



17

土壙101出土遺物 (4)



土壙101出土遺物 (5)



21

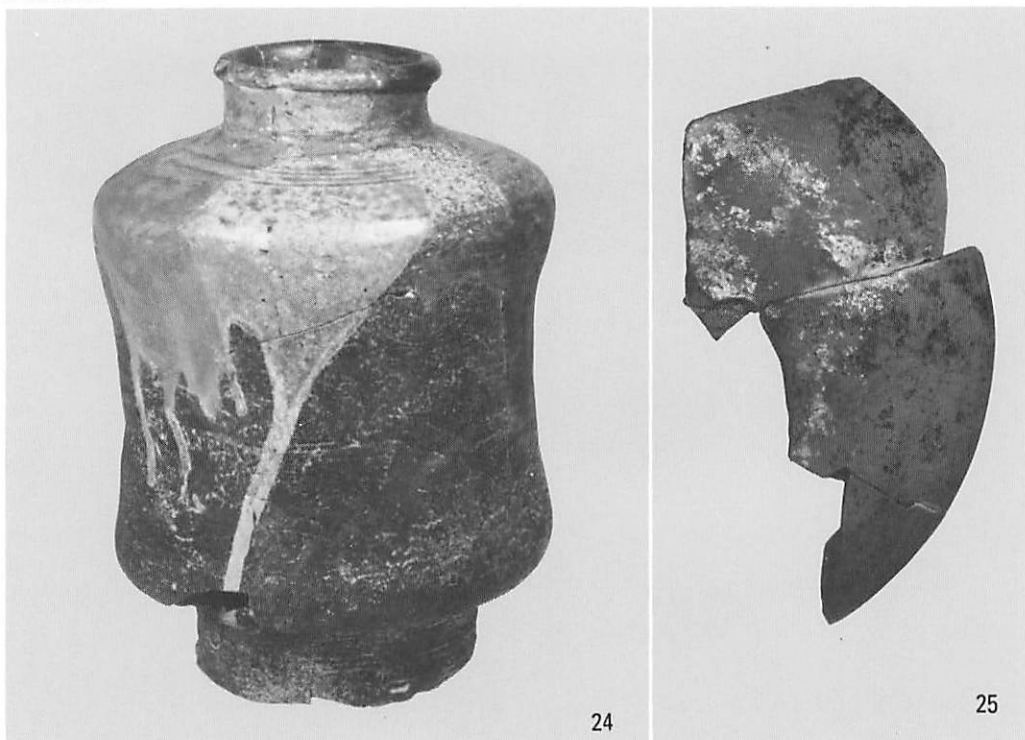


22

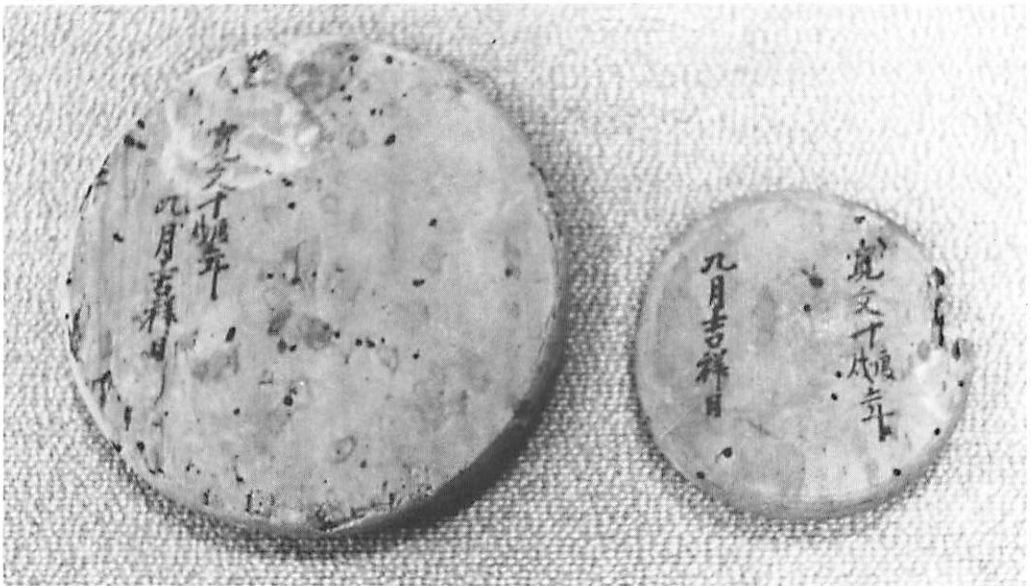


23

土壙101出土遺物 (6)



上：土壙101出土遺物(7)下：井戸203出土遺物



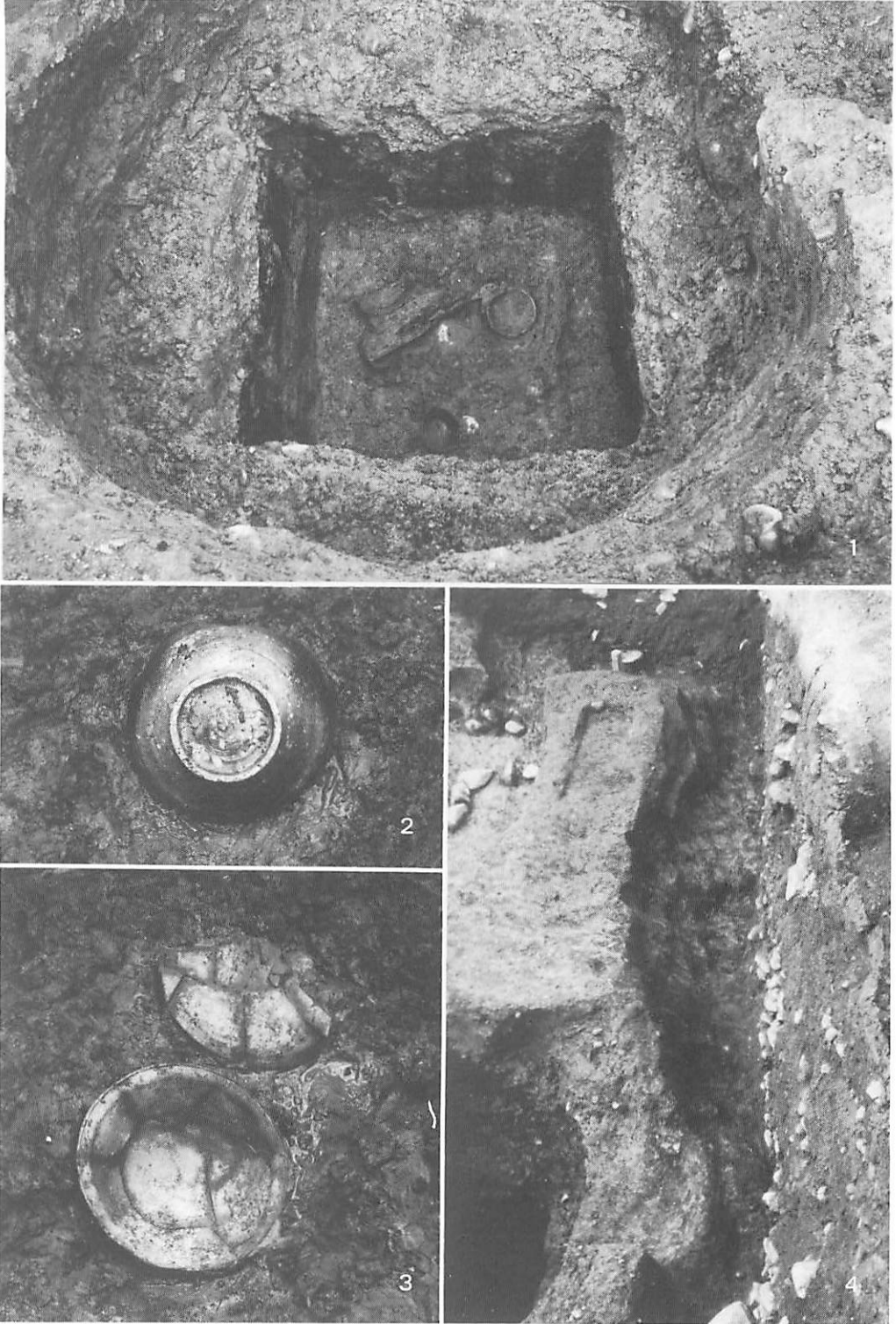
上：木野の土師皿窯 下：うつげ



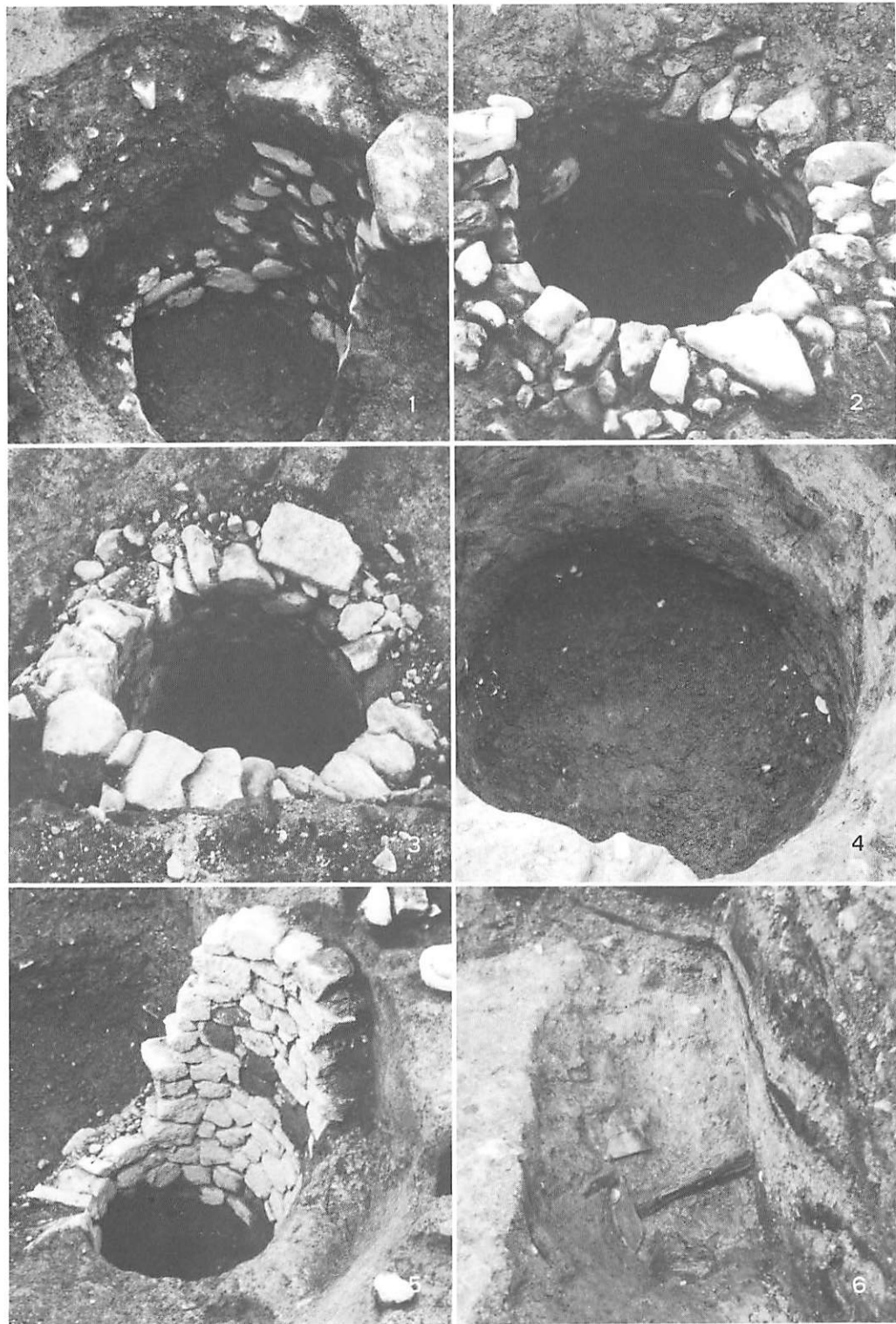
調査地全景 上：W区(東から) 下：E区(西から)



溝1(烏丸小路西側溝) 上：北から 下：西から



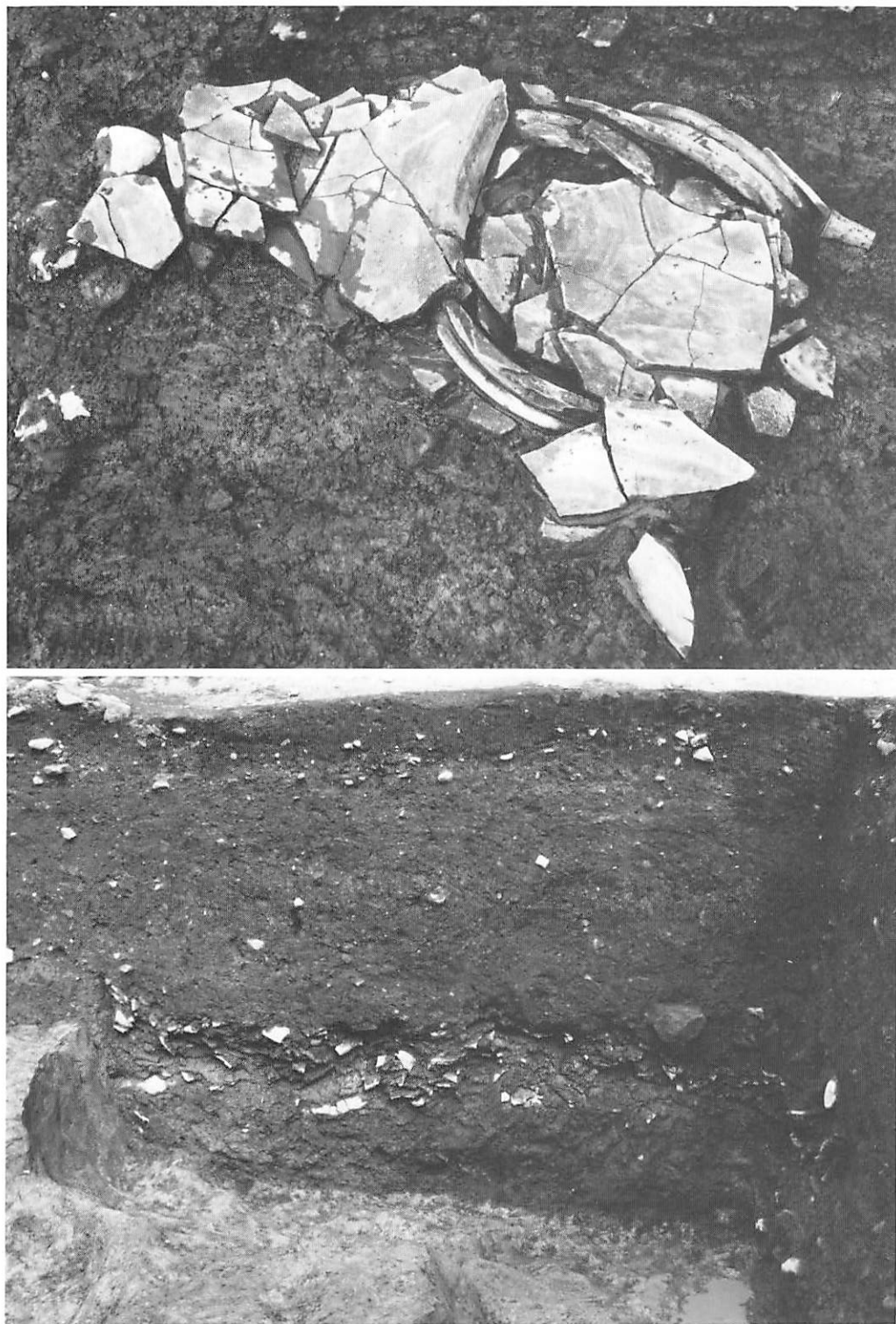
1：井戸11 2・3：同遺物出土状態 4：溝2



1 : 井戸 4 2 : 井戸 9 3 : 井戸 10 4 : 井戸 3 5 : 井戸 6 6 : 井戸 2



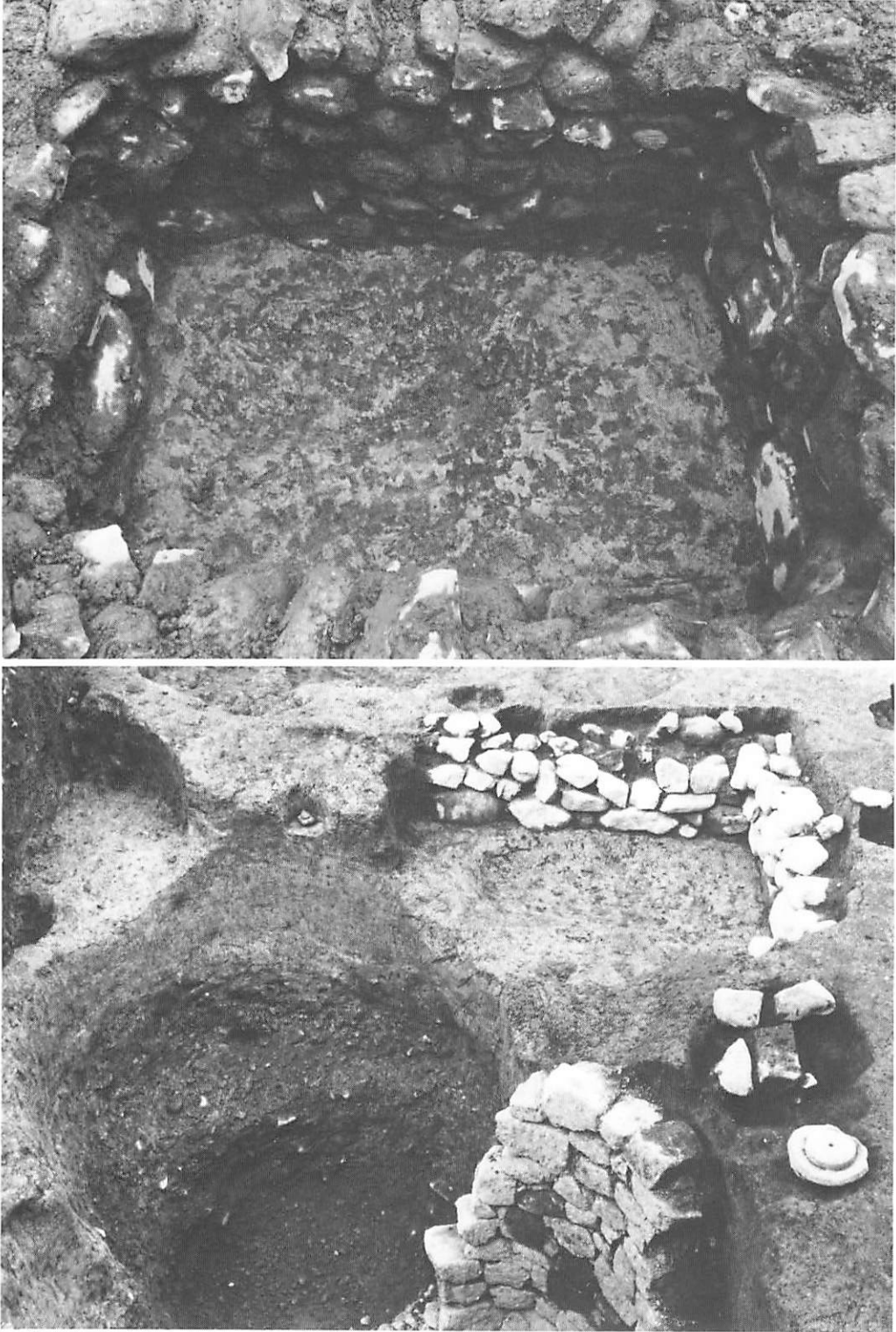
上：土壙6 下：土壙13



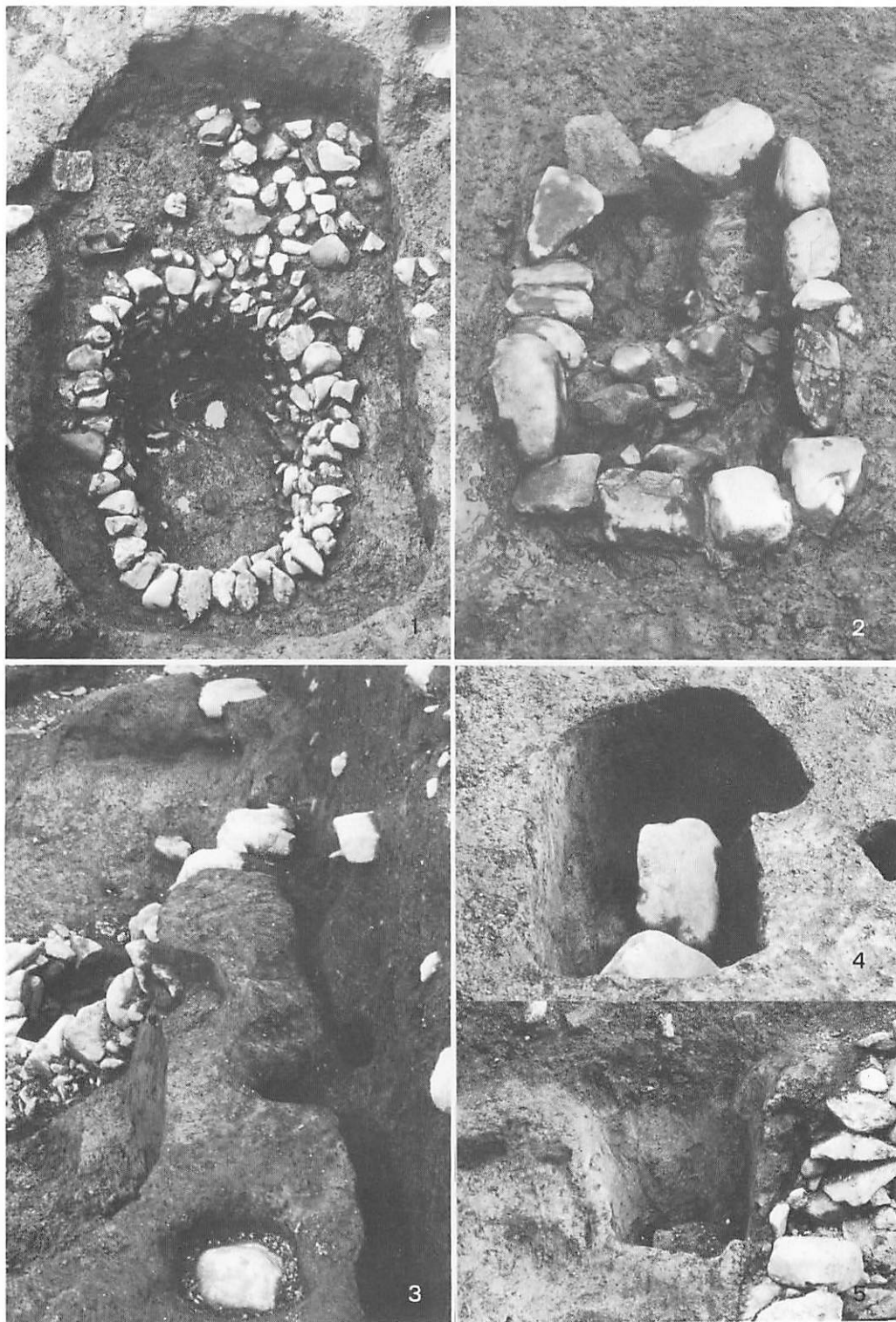
土壙 5 上：大甕出土狀態 下：W区北壁断面



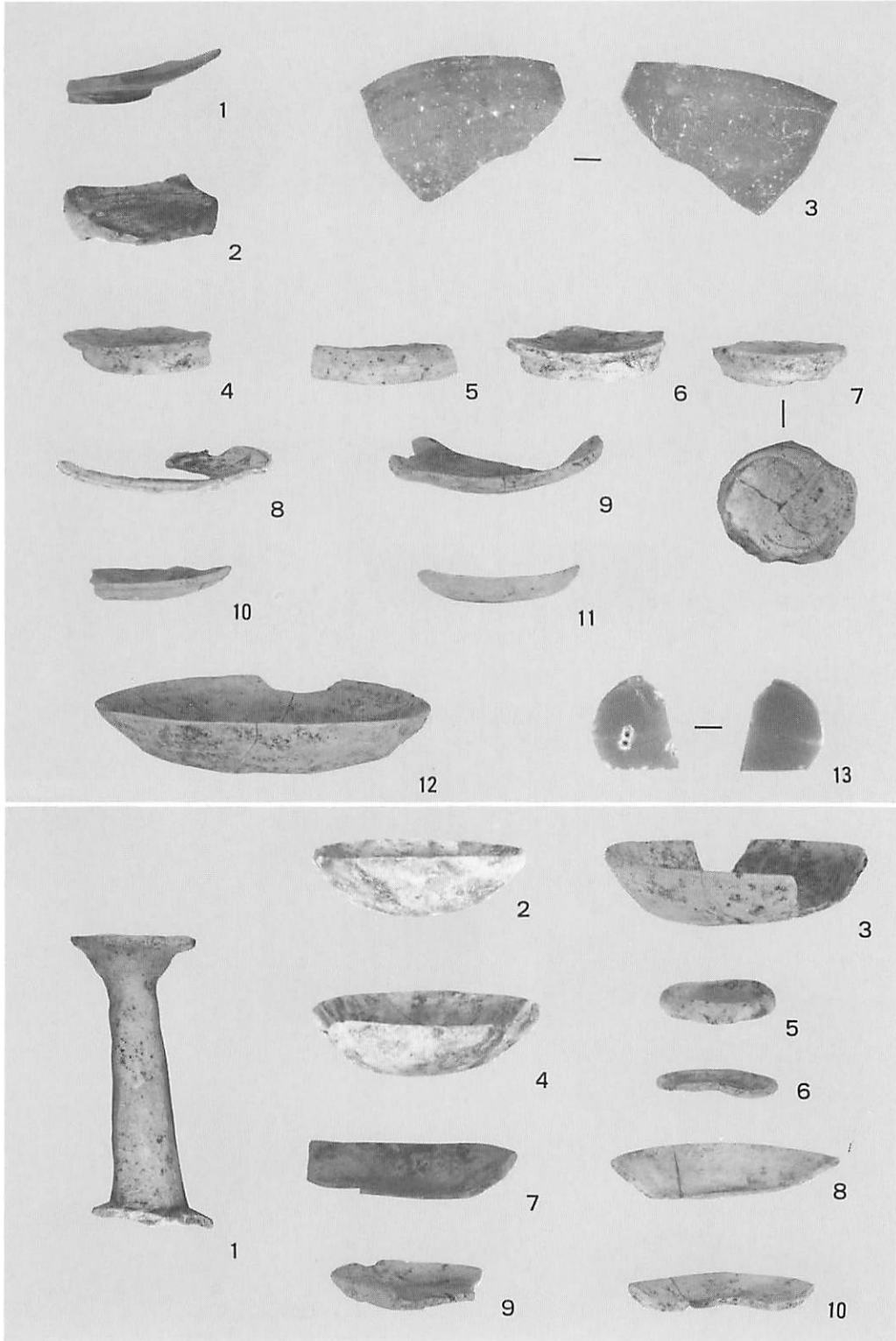
土壙14 上：全景 下：大甕出土状態



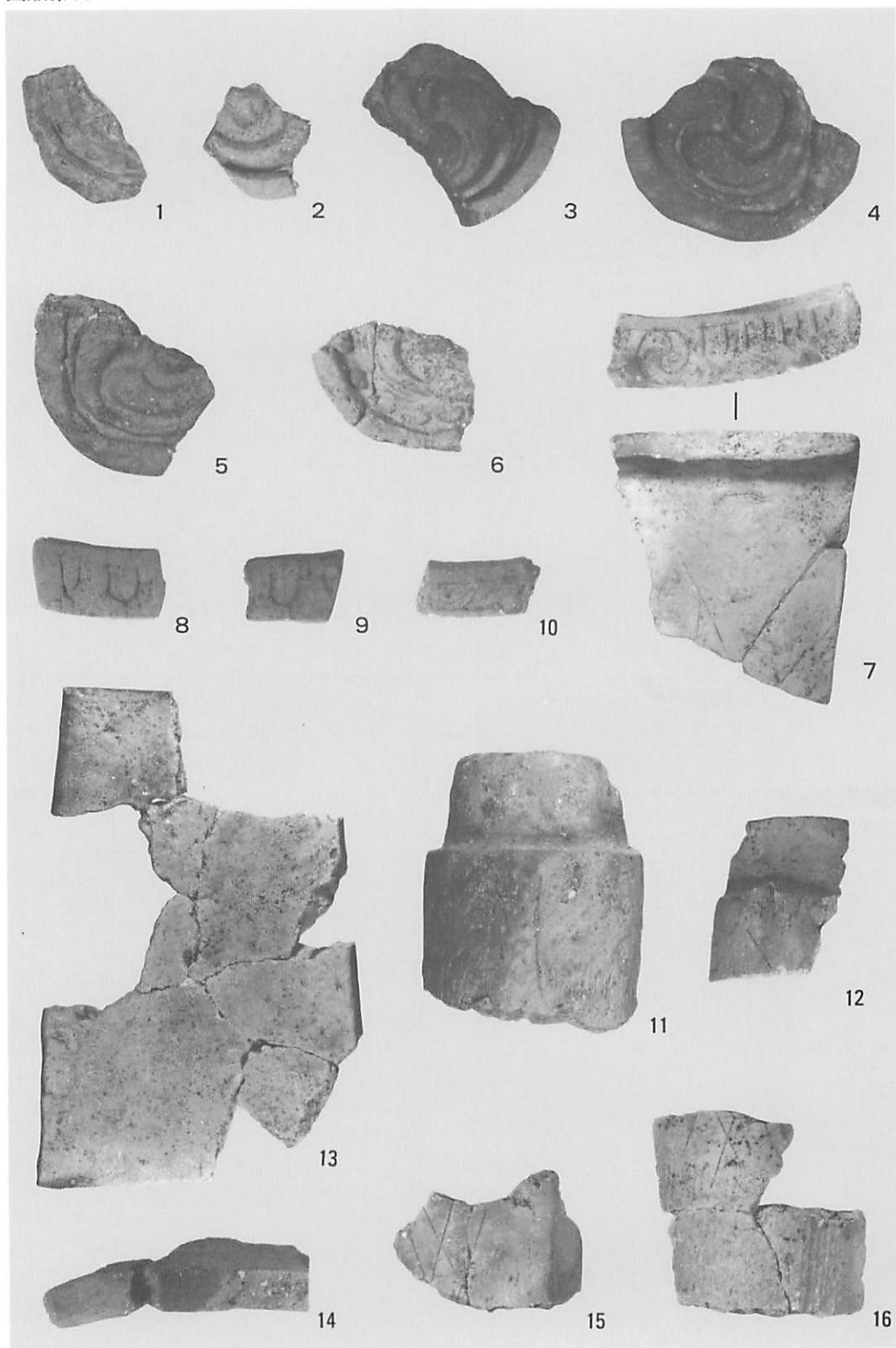
石積土壇3 上：全景(東から) 下：完掘後(南から)



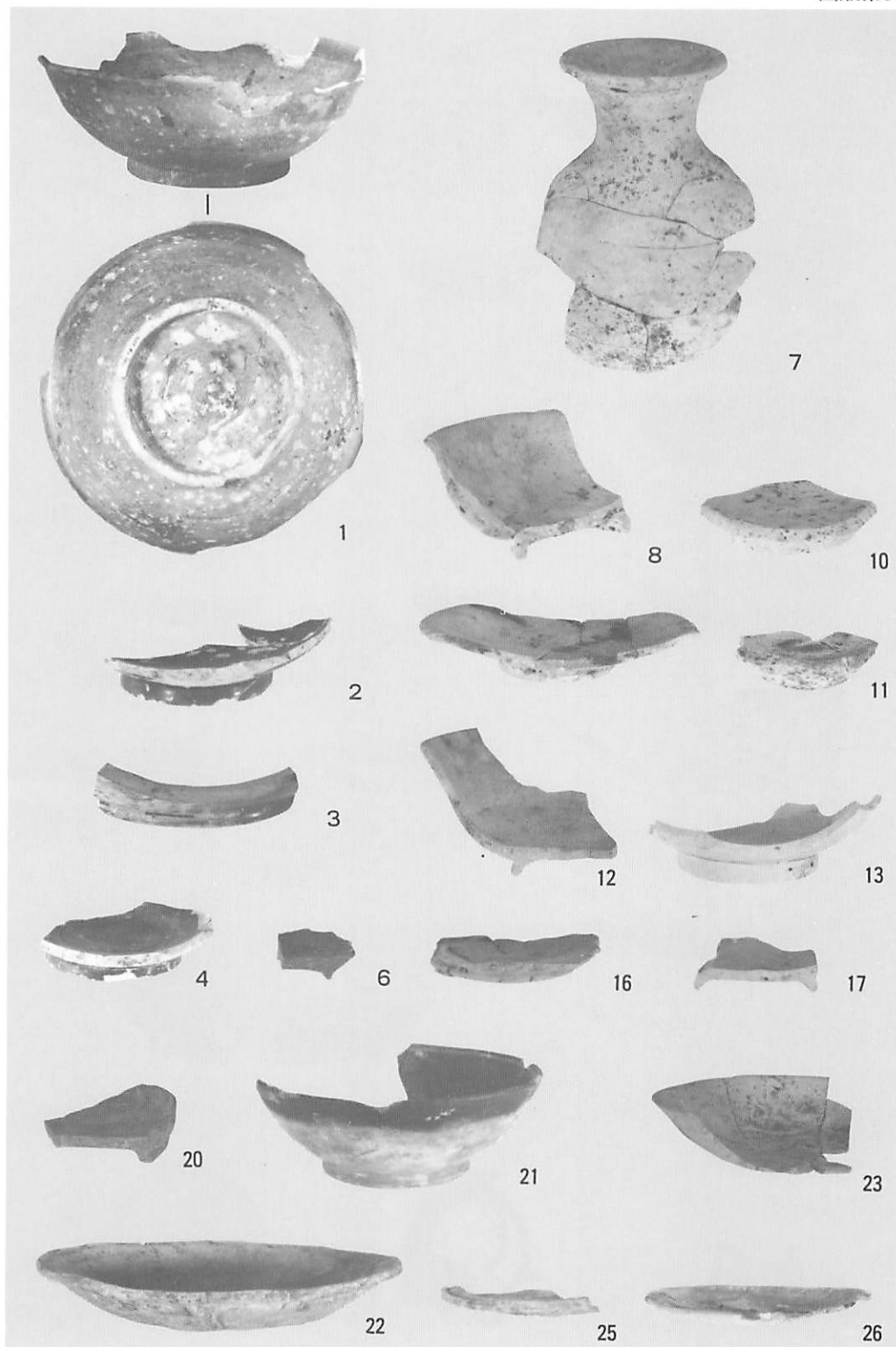
1：石積土壇 2：石積土壇 3～5：ピット群



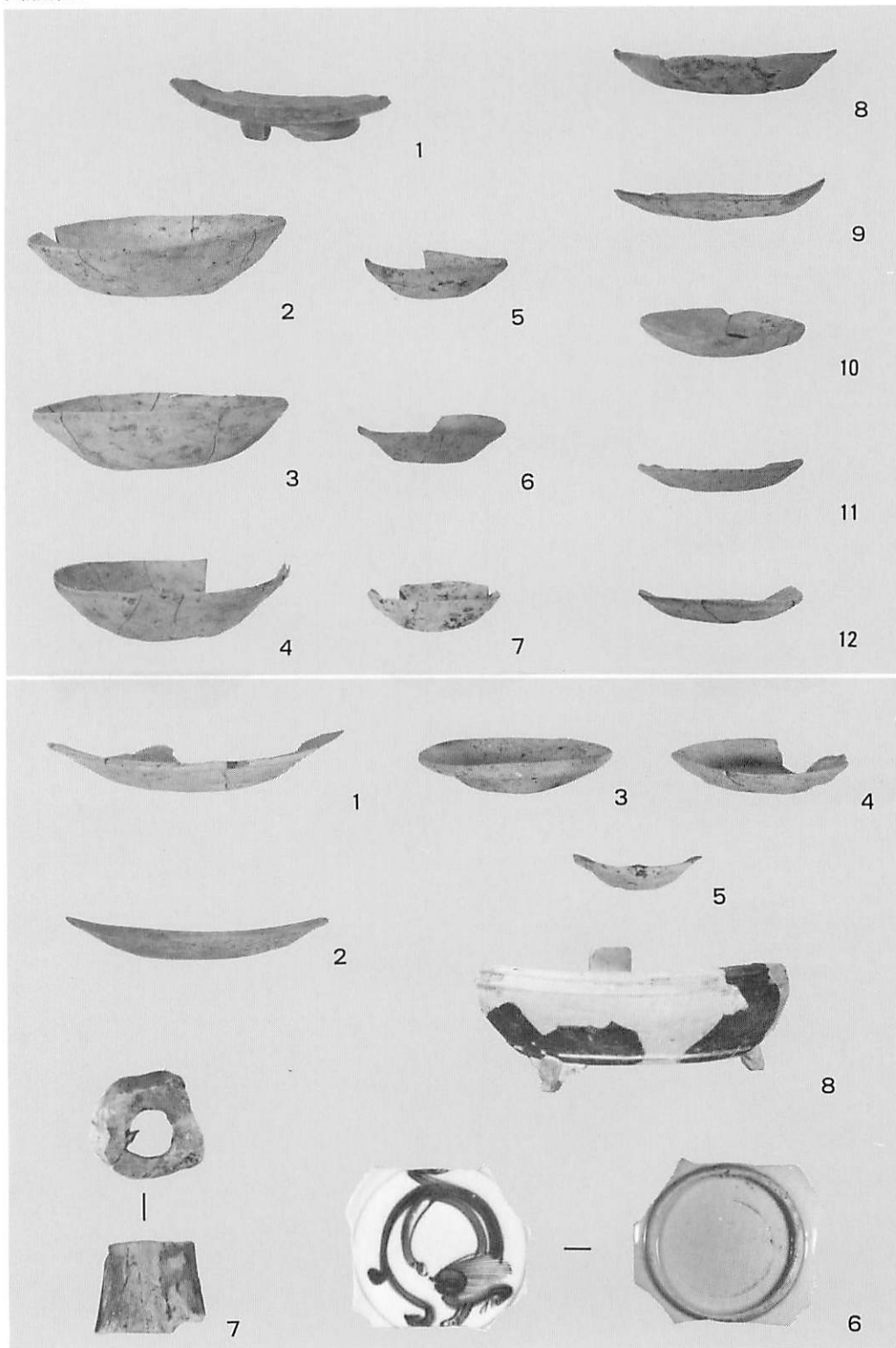
上：溝1出土遺物 下：溝2出土遺物 (1)



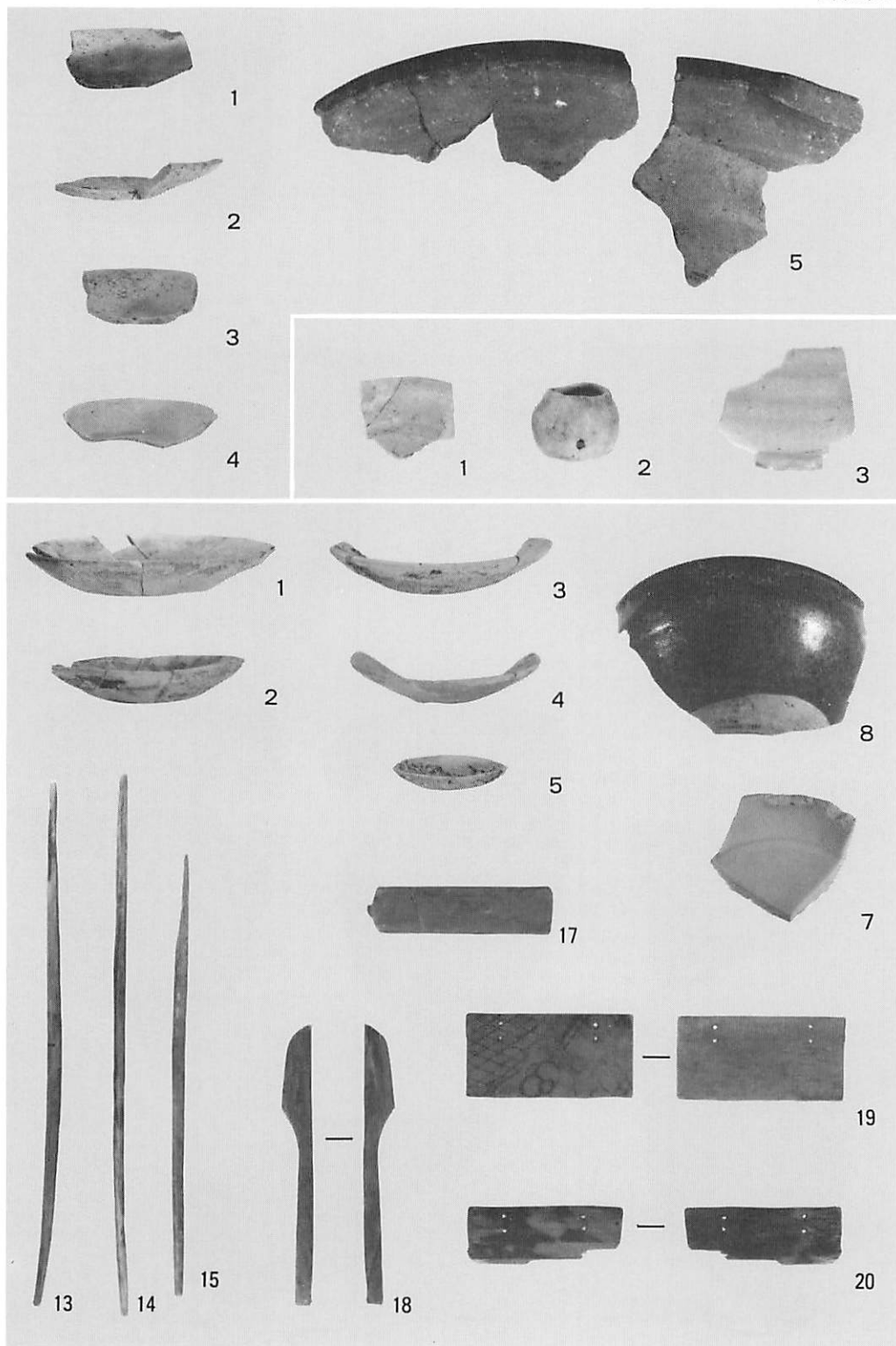
溝2 出土遺物 (2)



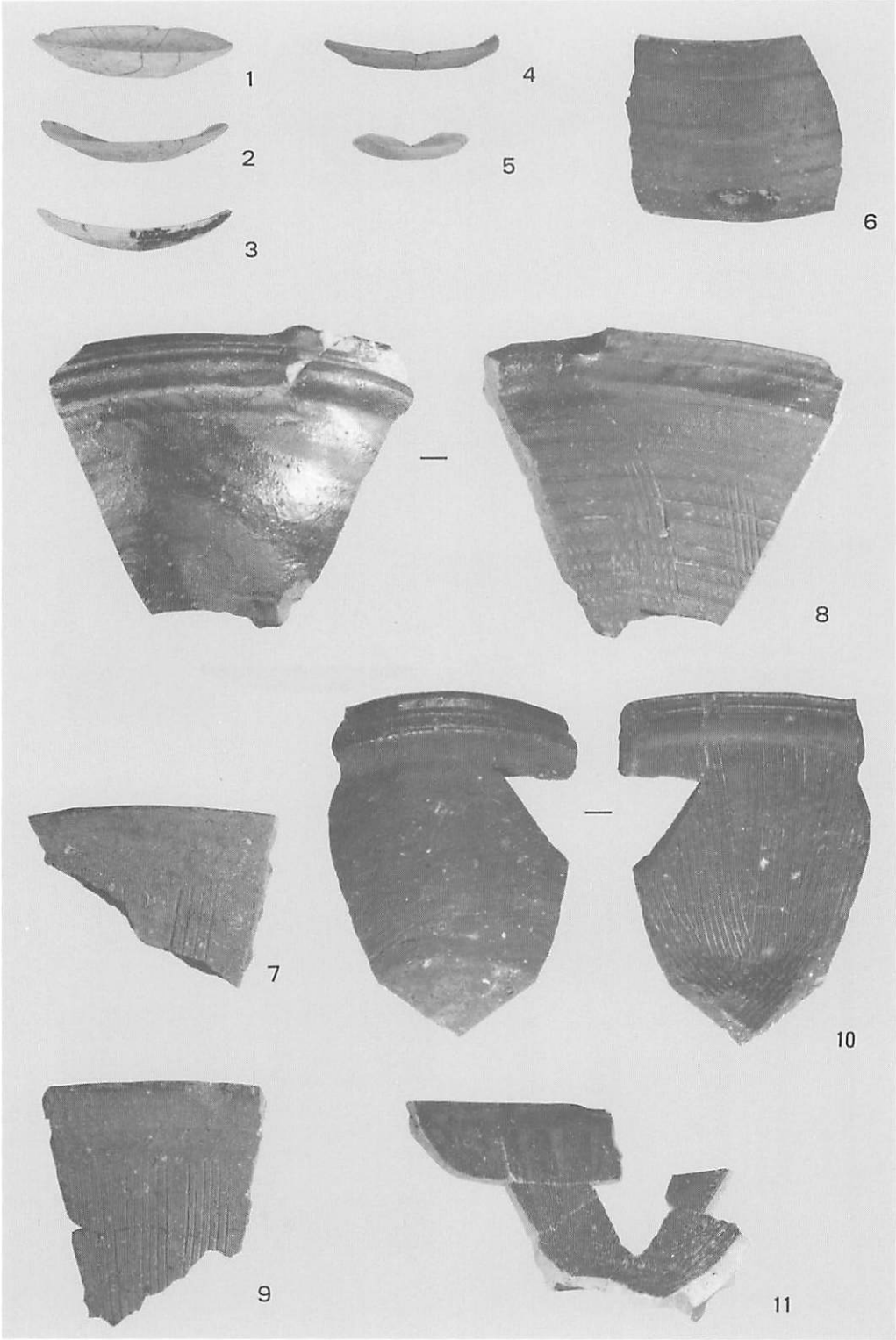
井戸11出土遺物



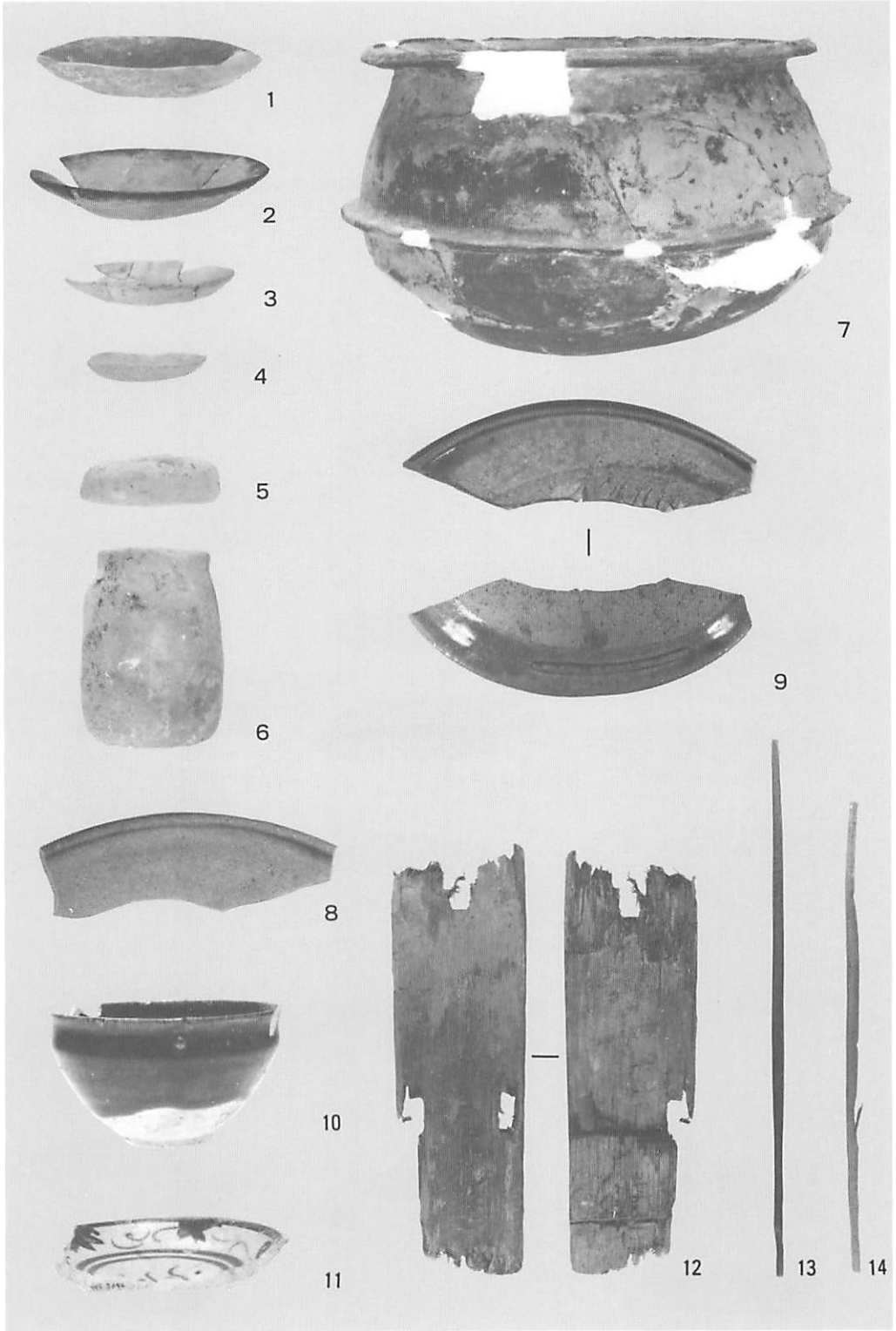
上：土城12出土遺物 下：井戸4出土遺物



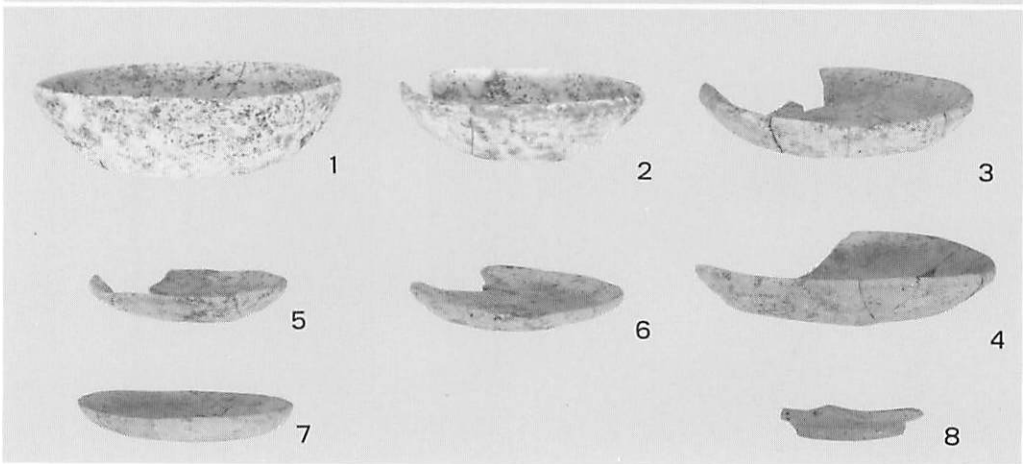
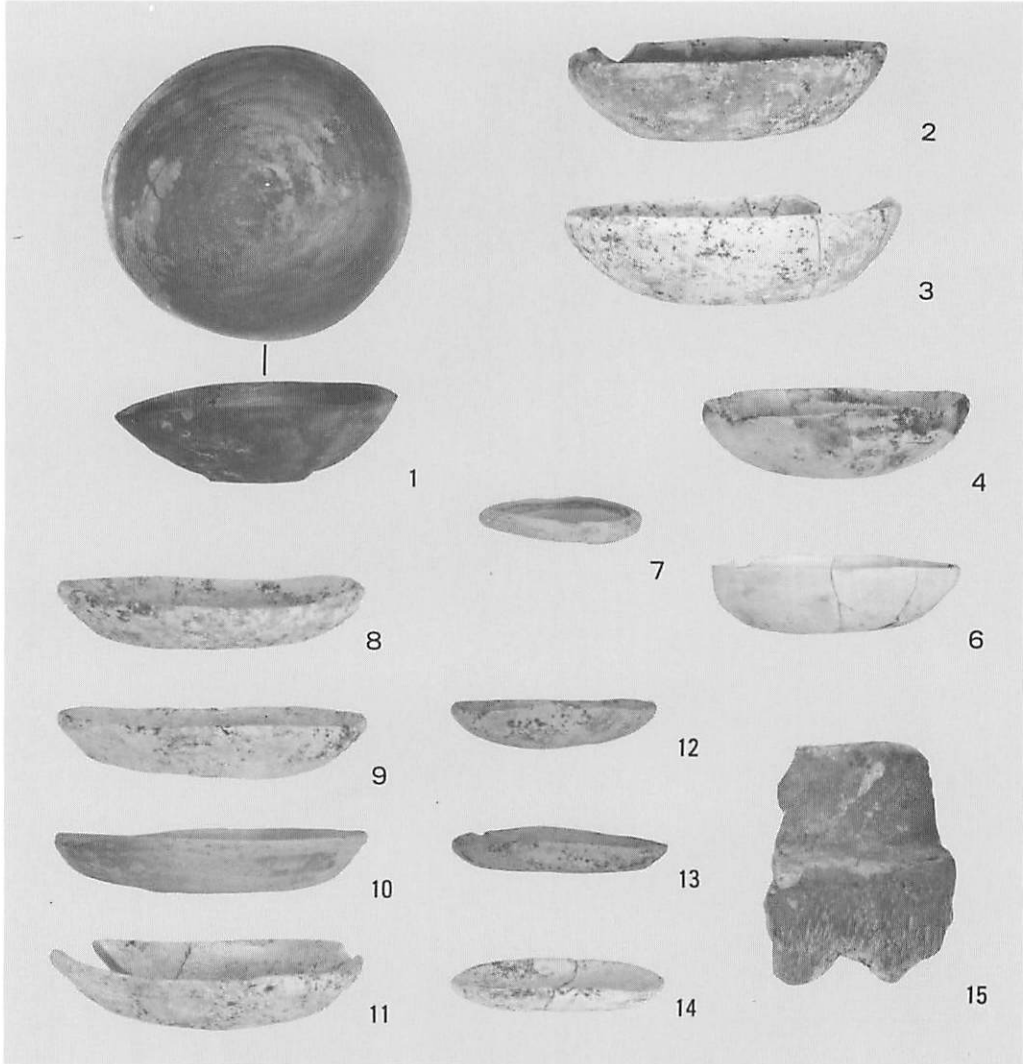
上：井戸9出土遺物 中：井戸10出土遺物 下：井戸3出土遺物



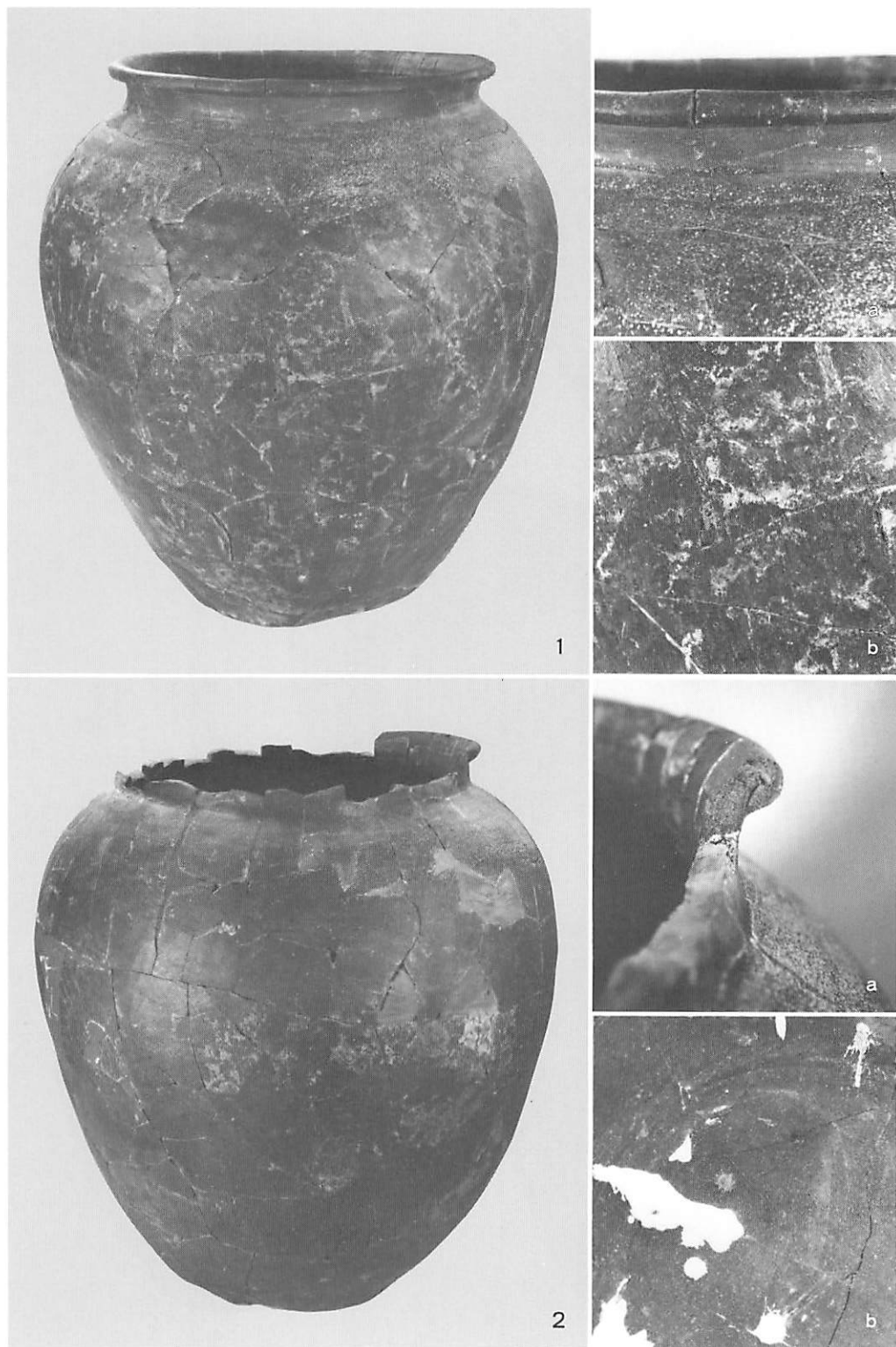
井戸 7 出土遺物



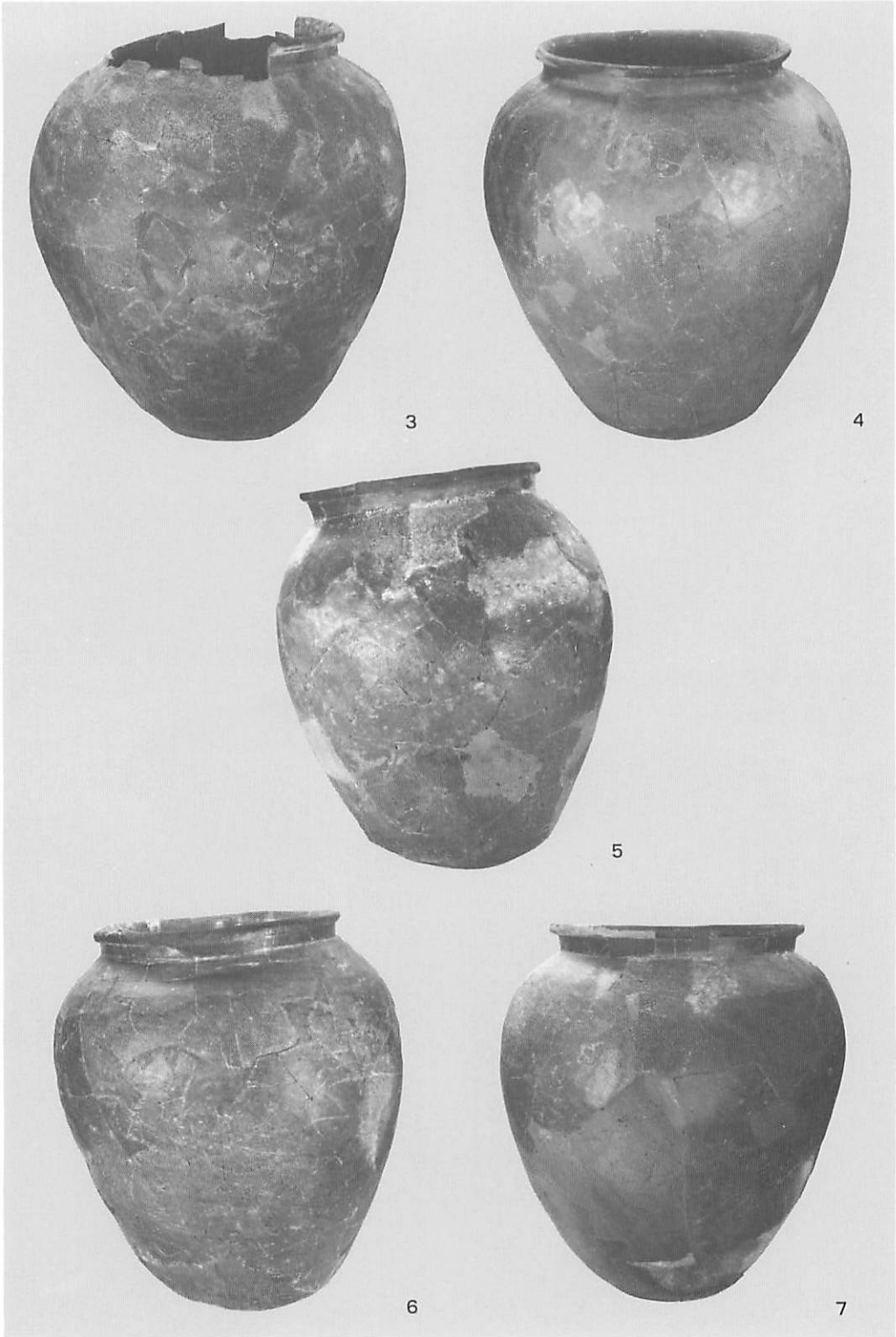
井戸 2 出土遺物



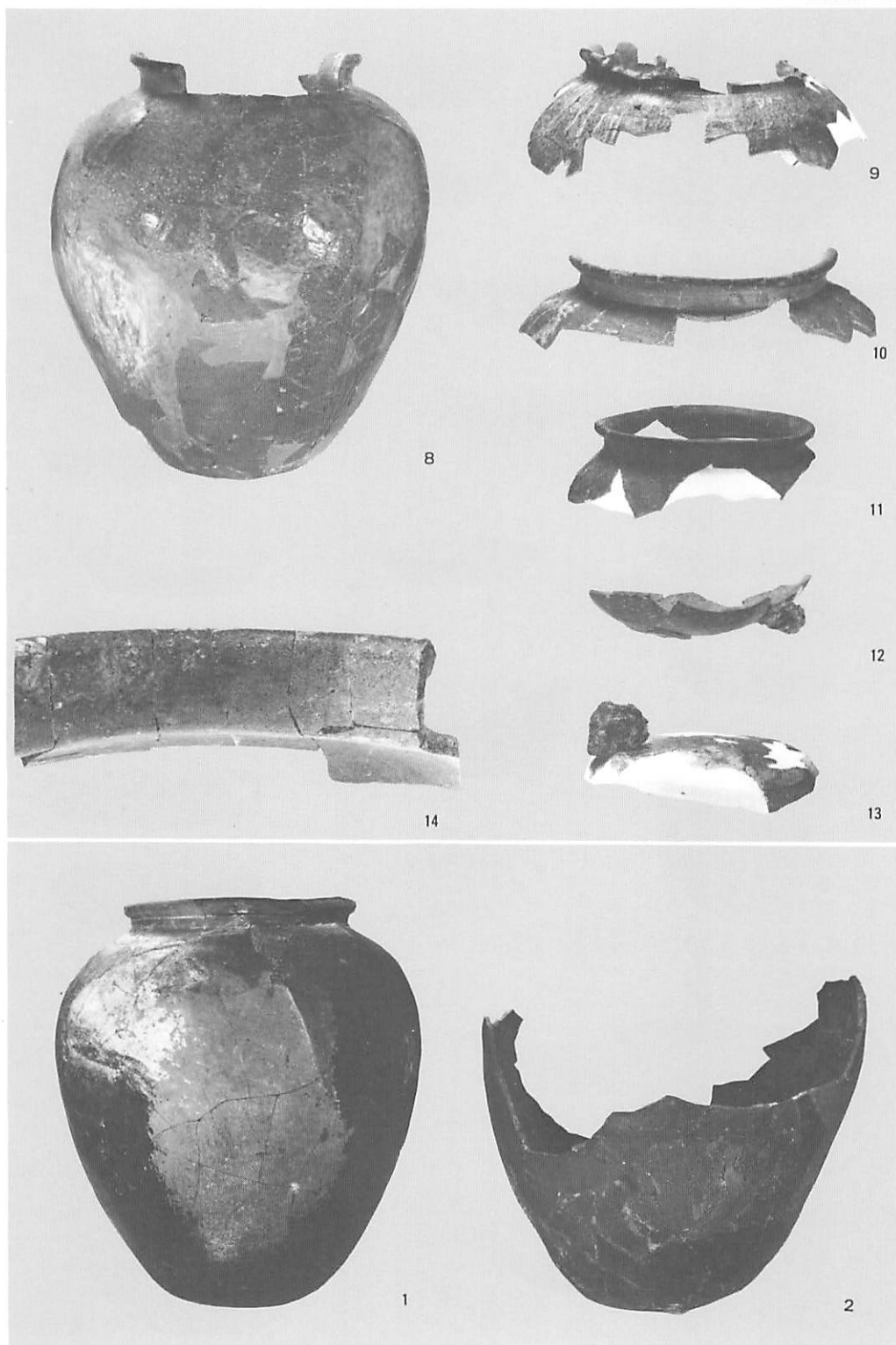
上・土壙6出土遺物 下・土壙13出土遺物



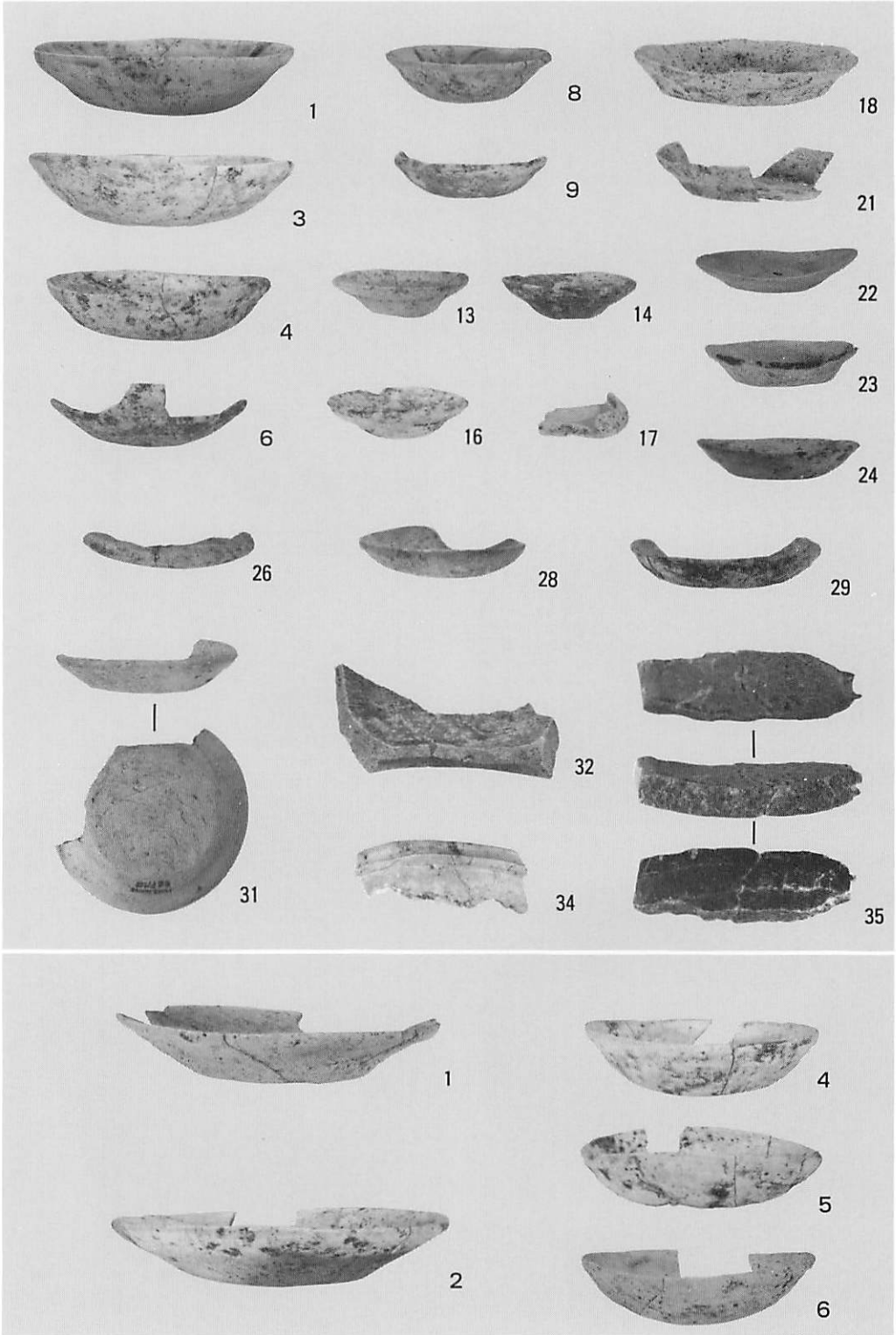
土壙 5 出土大甕 (1)



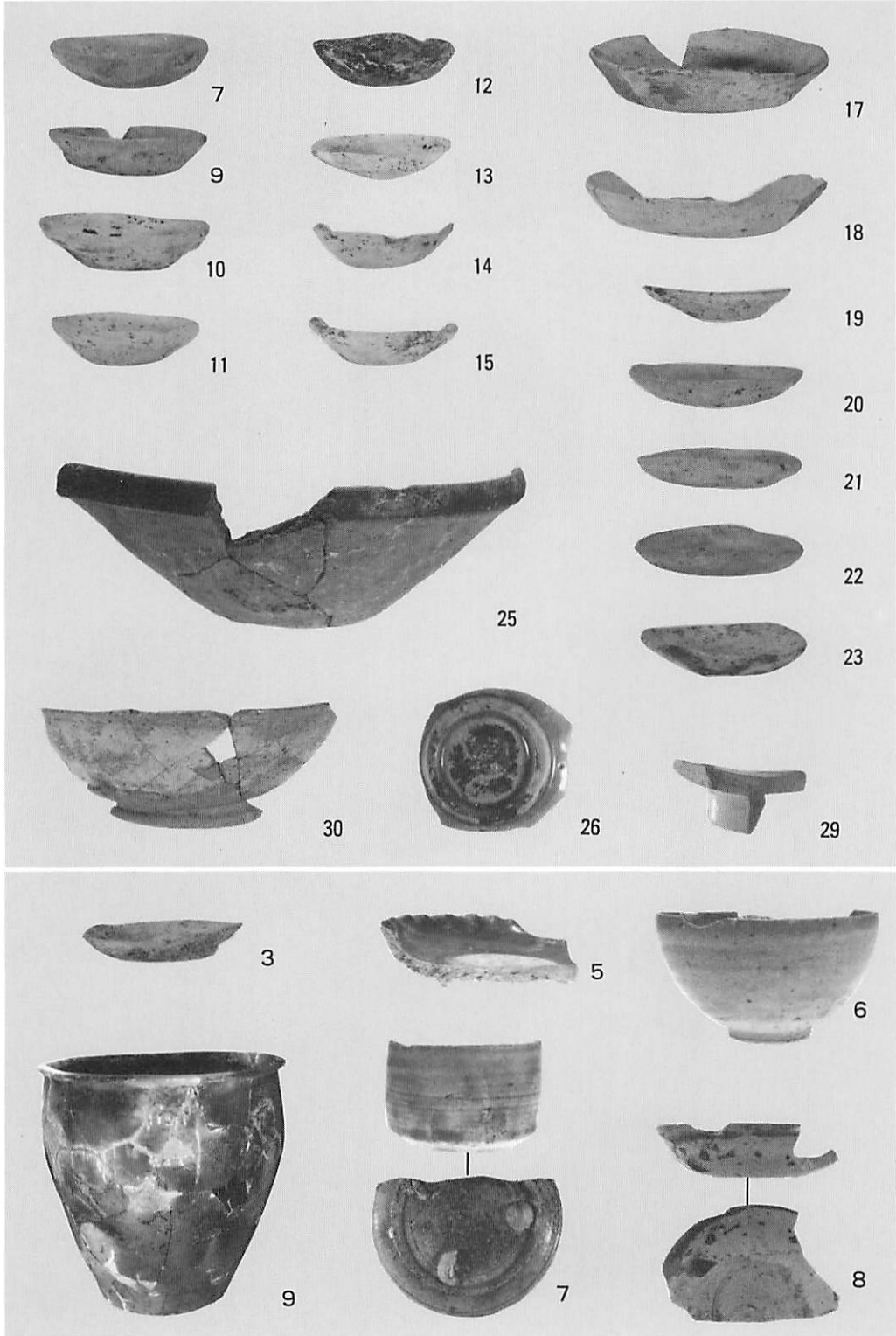
土壙 5 出土大甕 (2)



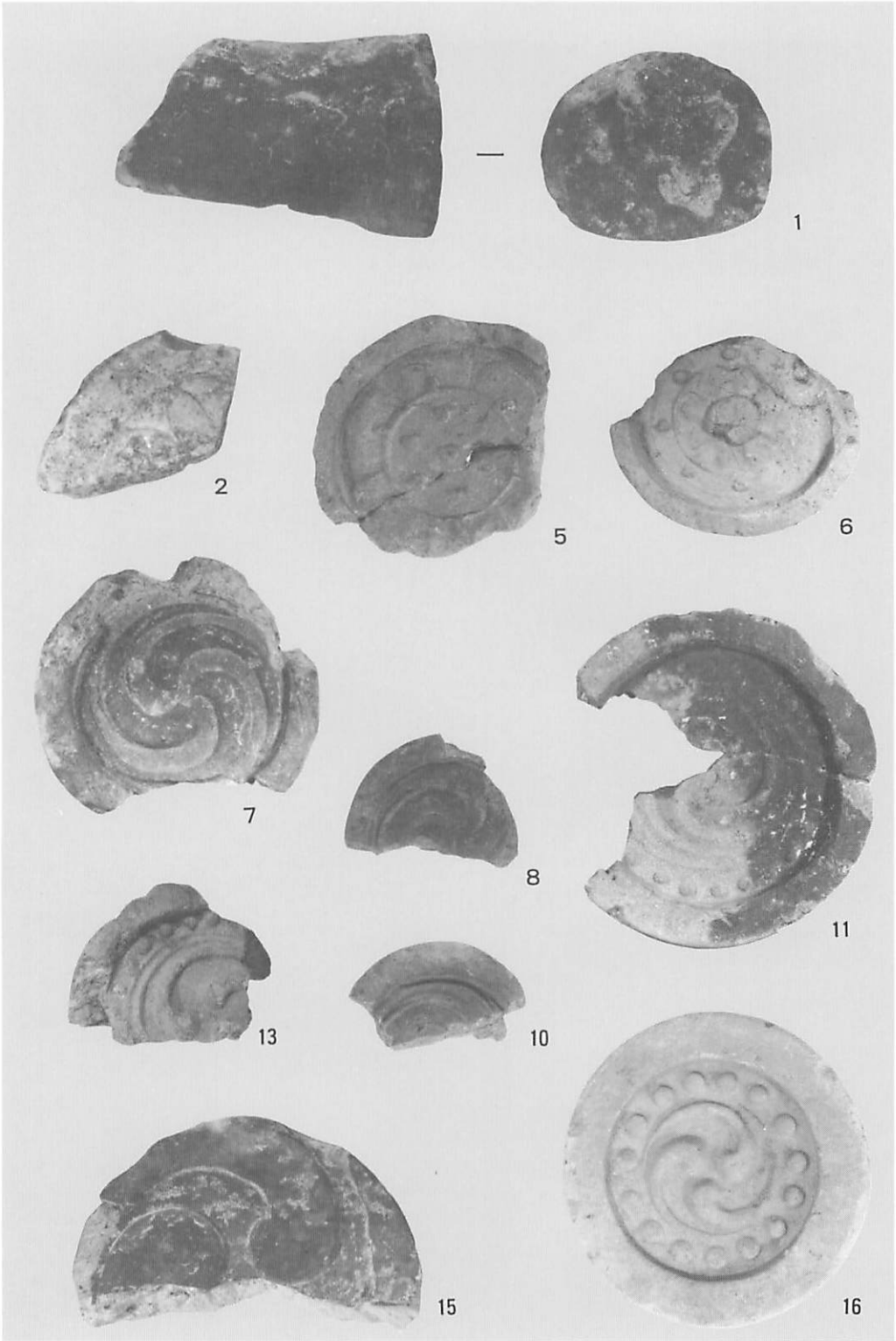
上：土壙5出土大甕 (3) 下：土壙14出土大甕



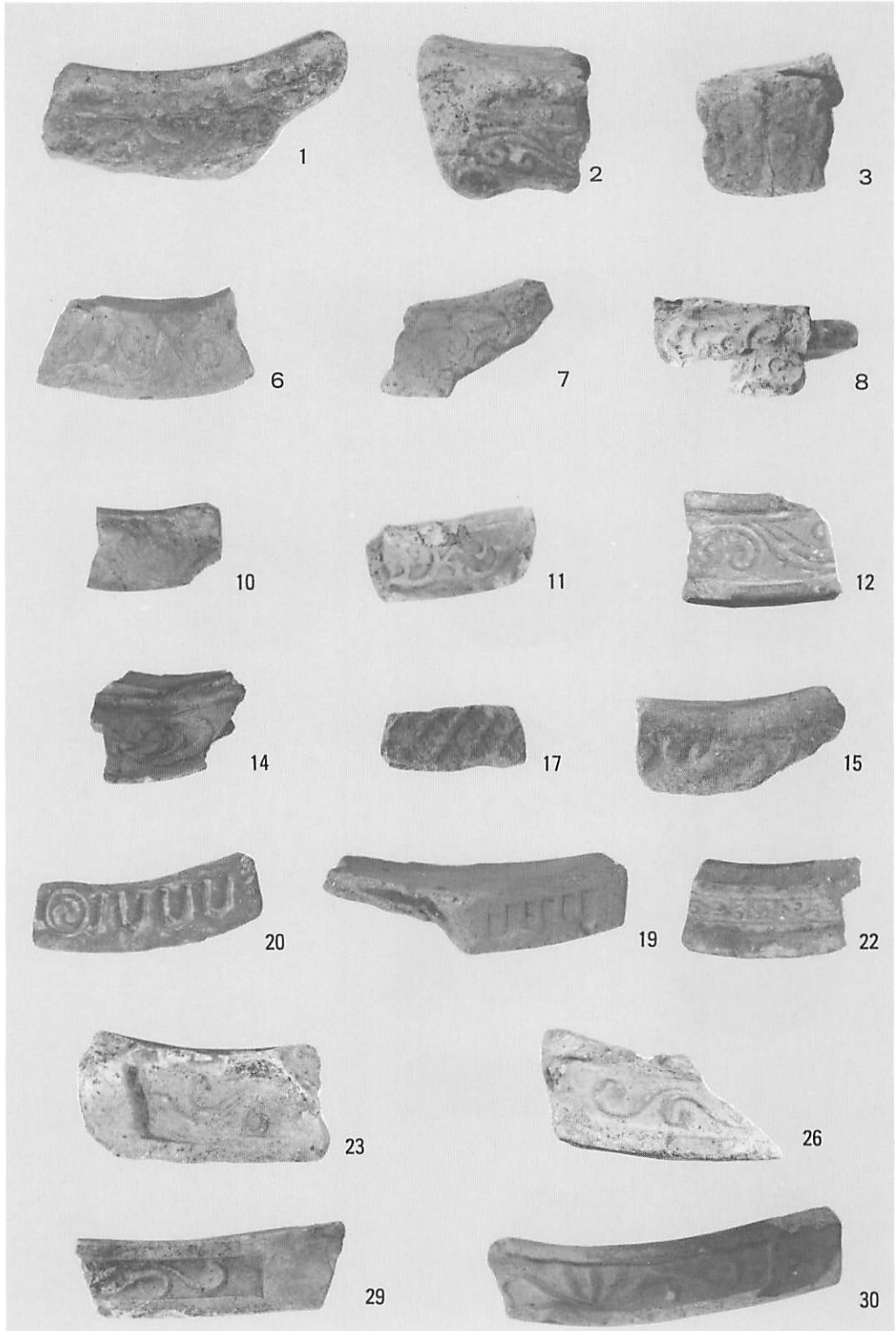
上：土壙14出土遺物 下：土壙5出土遺物 (1)



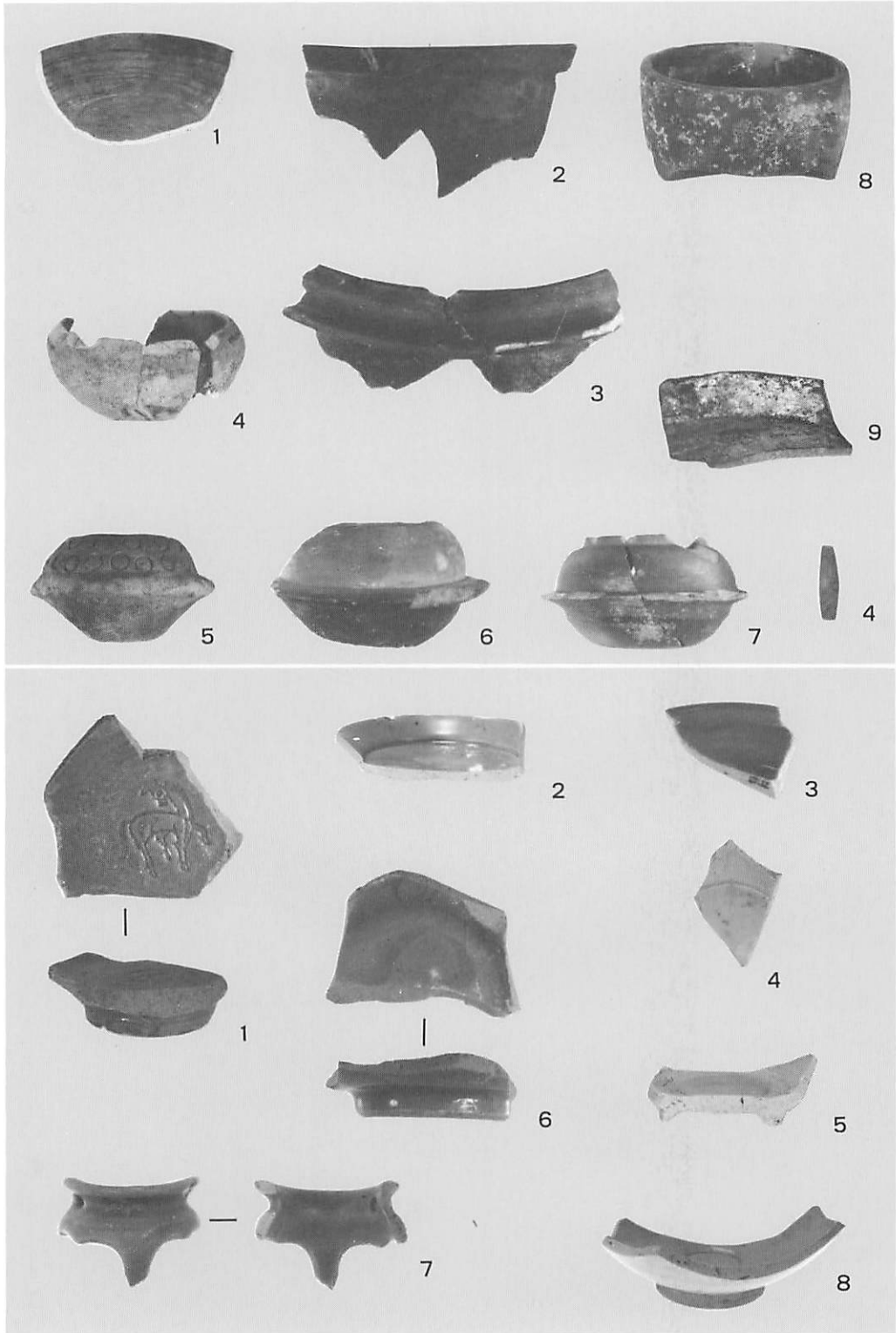
上：土壙 5 出土遺物 (2) 下：石積土壙 1 出土遺物



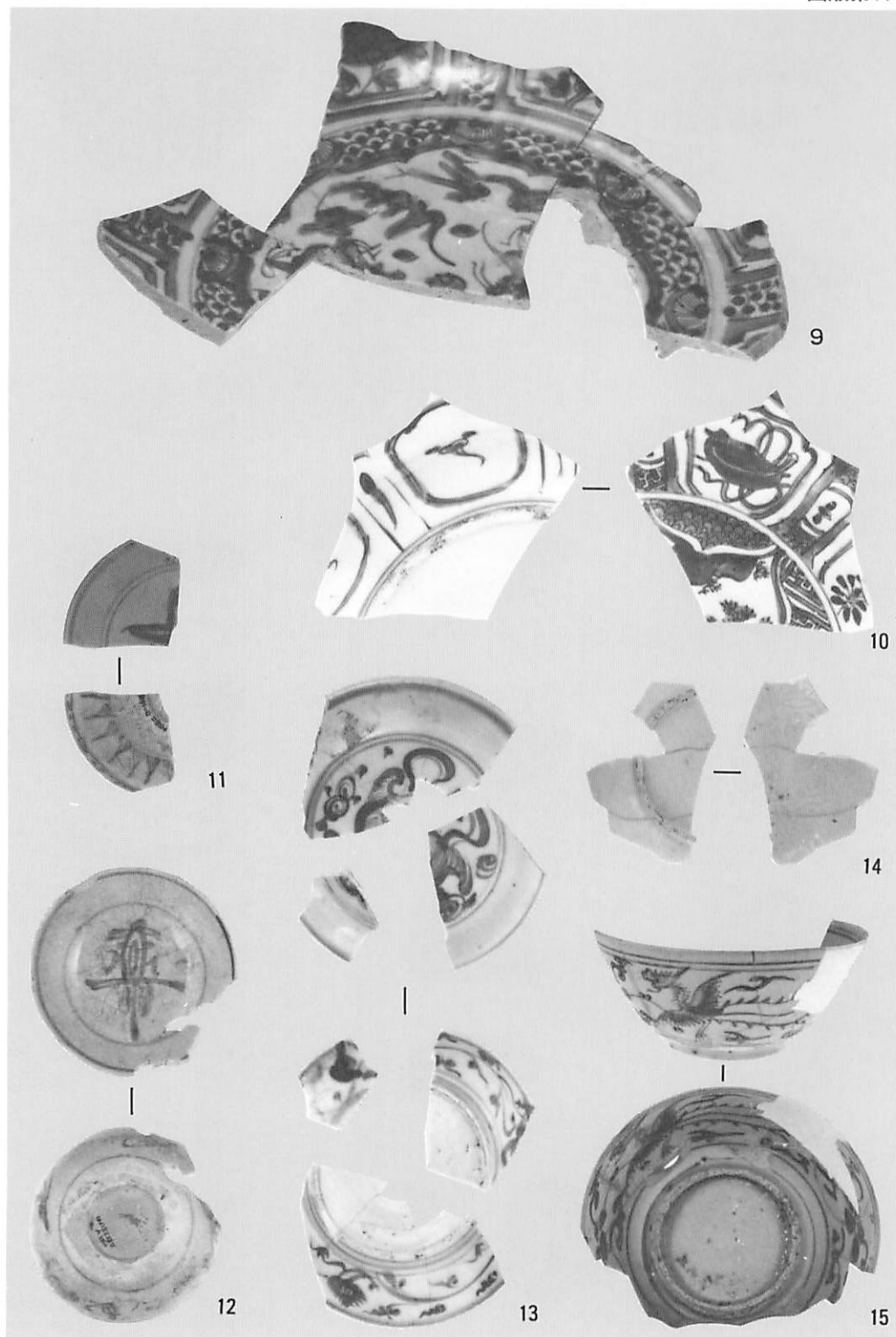
軒丸瓦



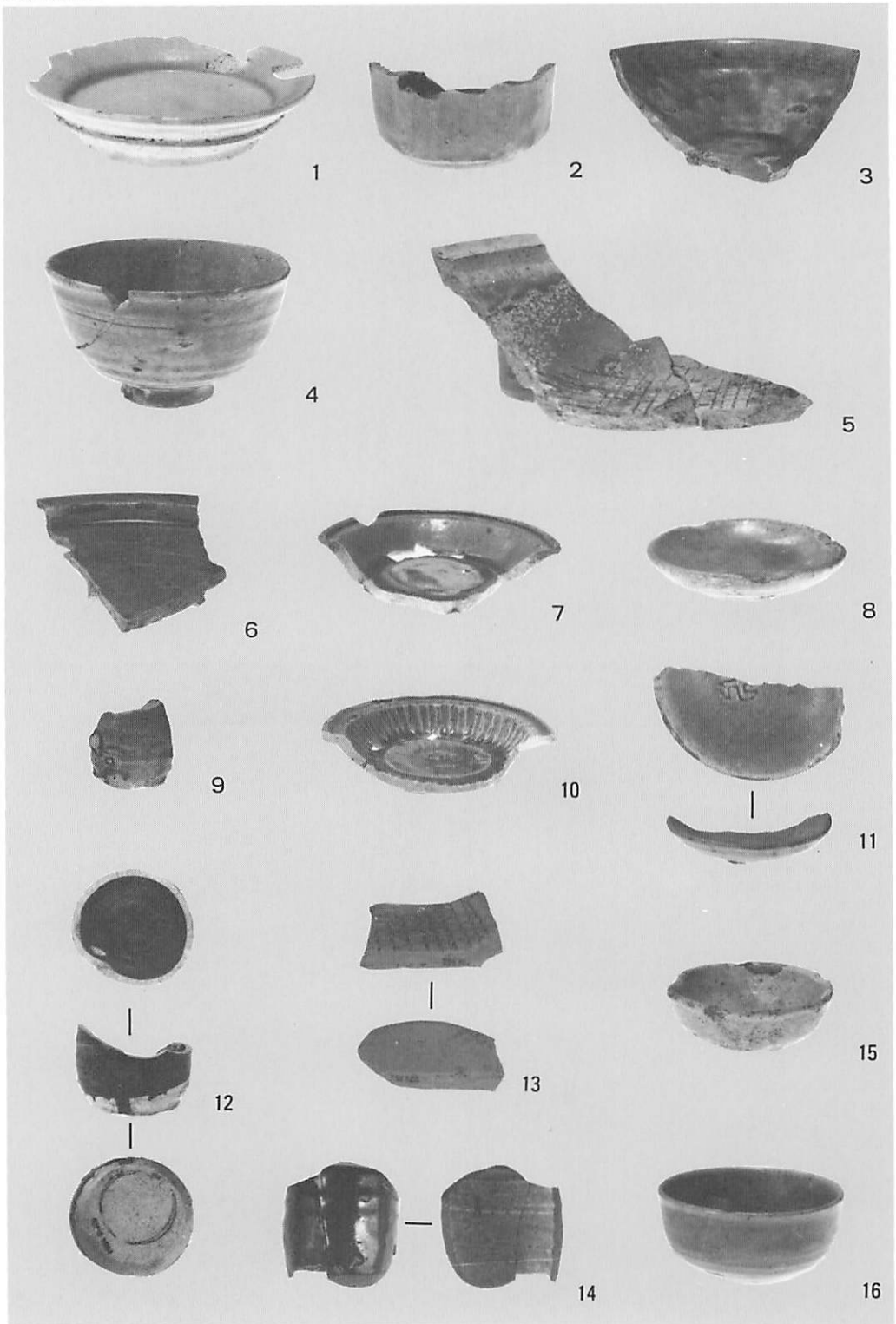
軒平瓦

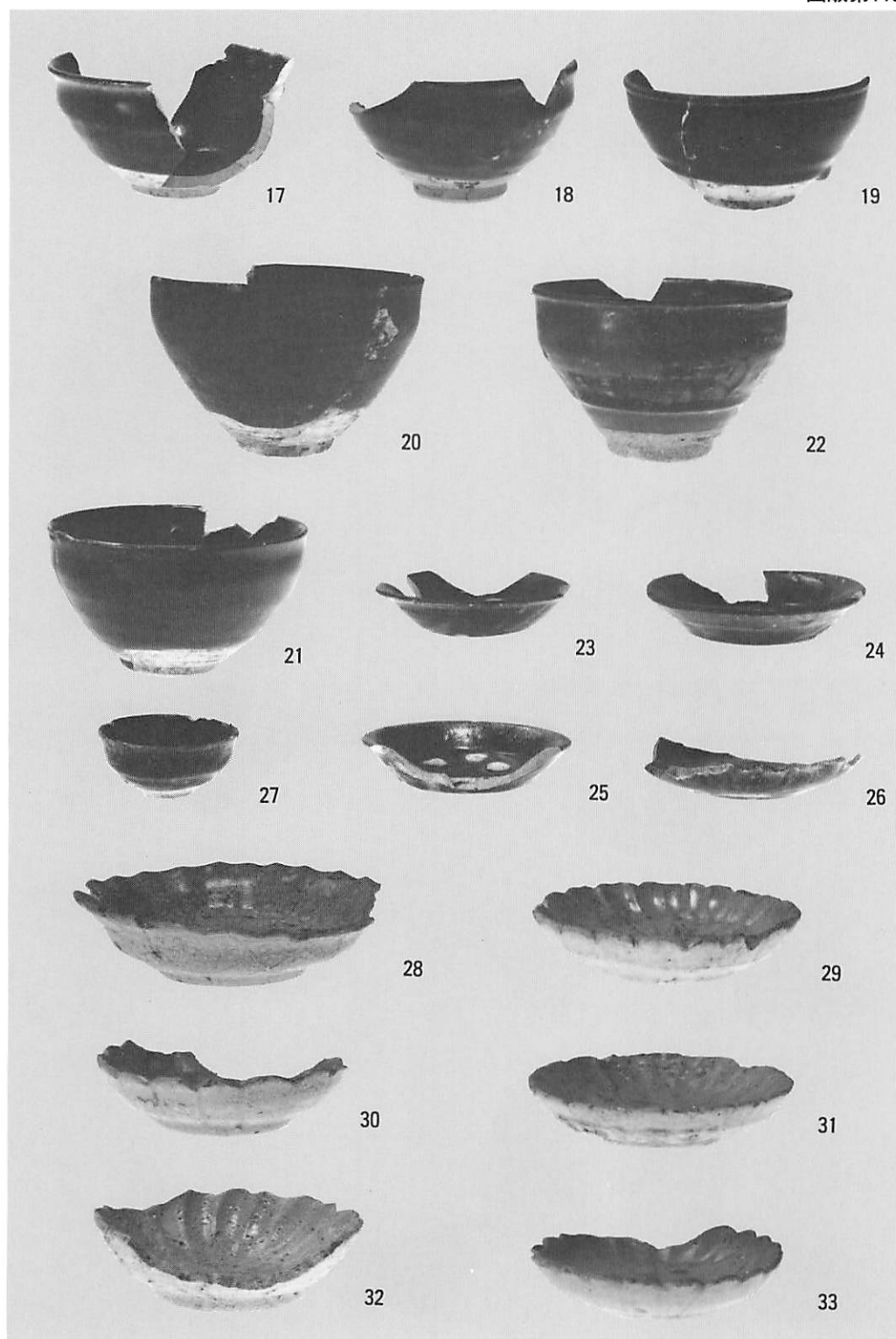


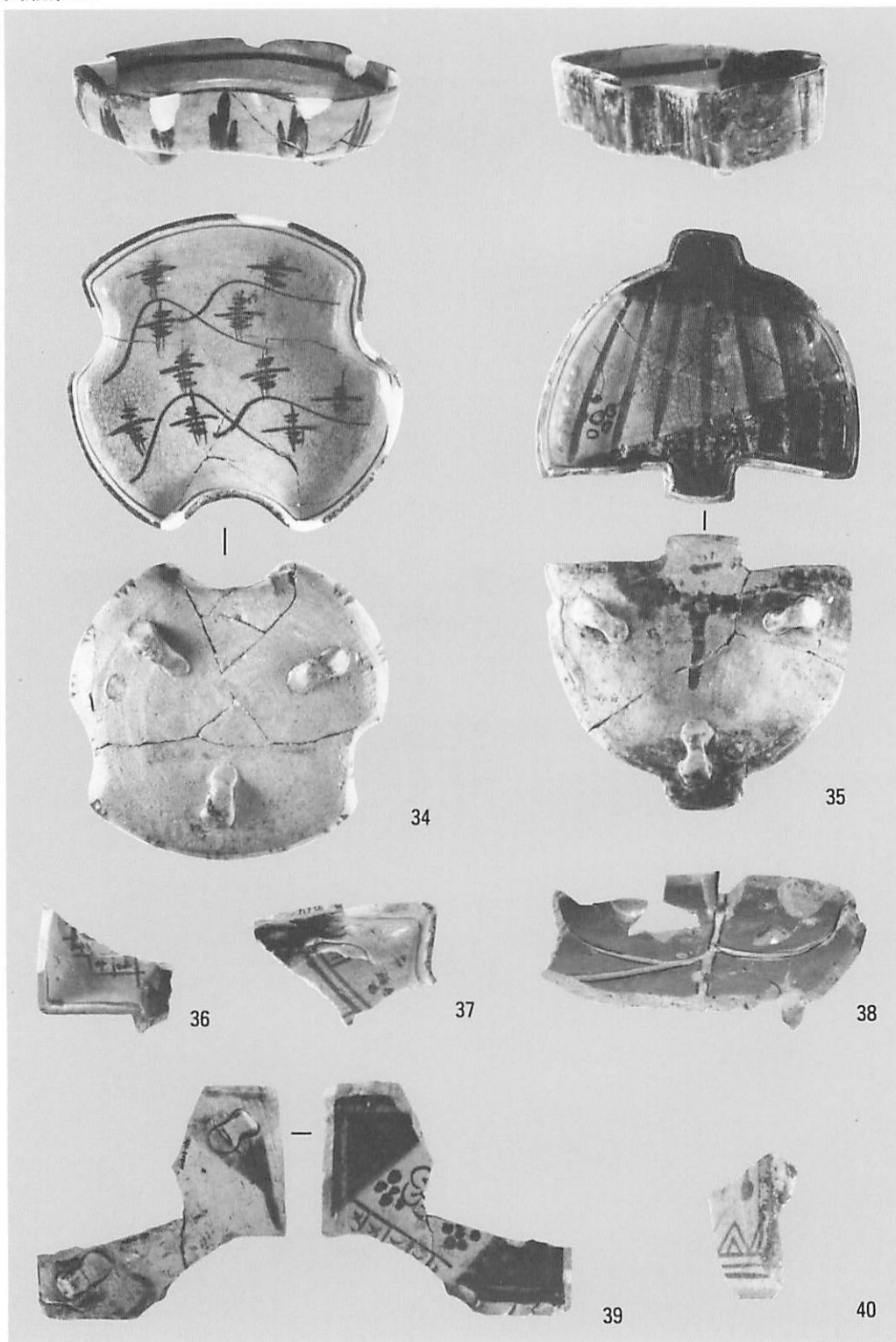
上：土製品 下：輸入磁器 (1)

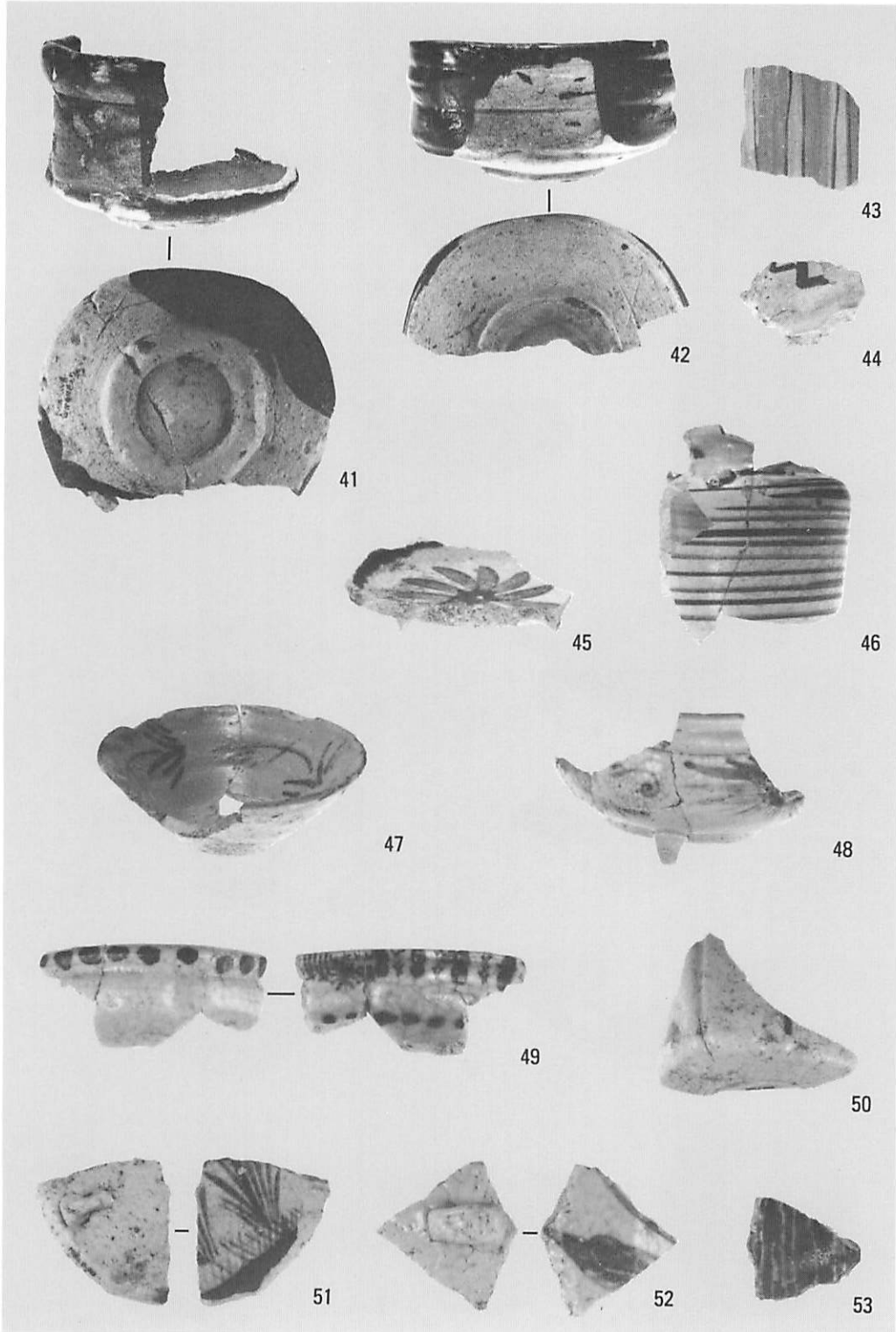


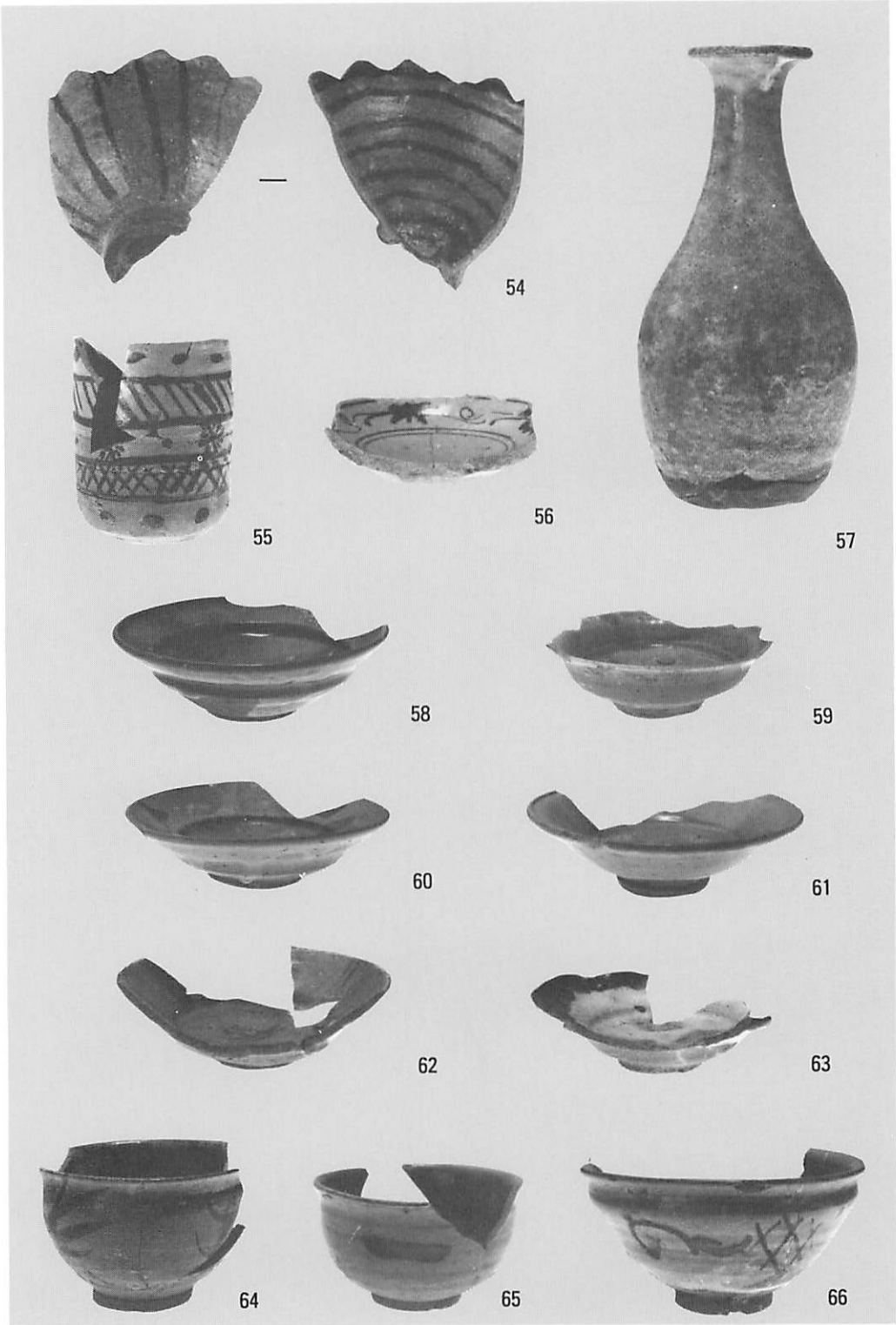
輸入磁器(2)



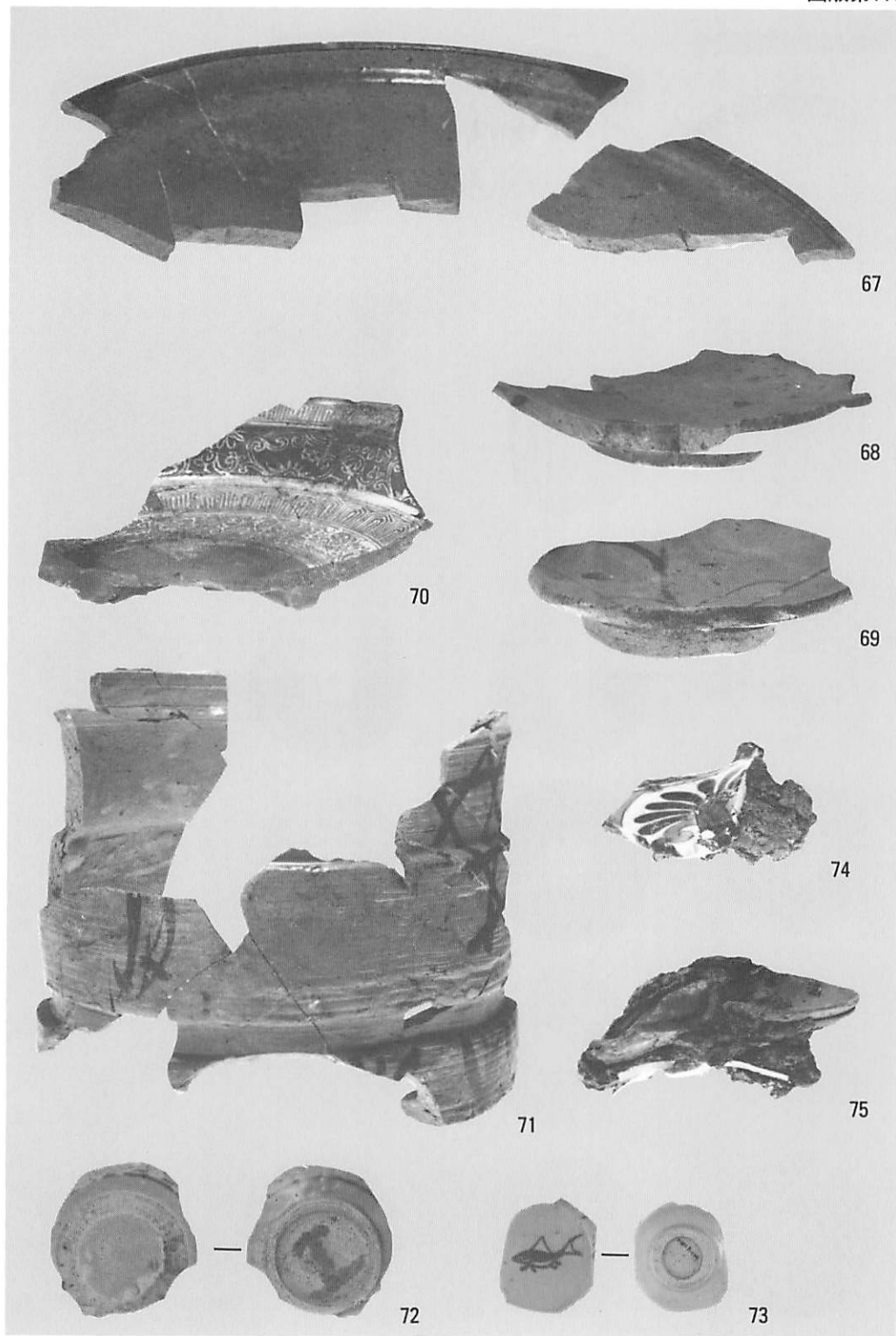




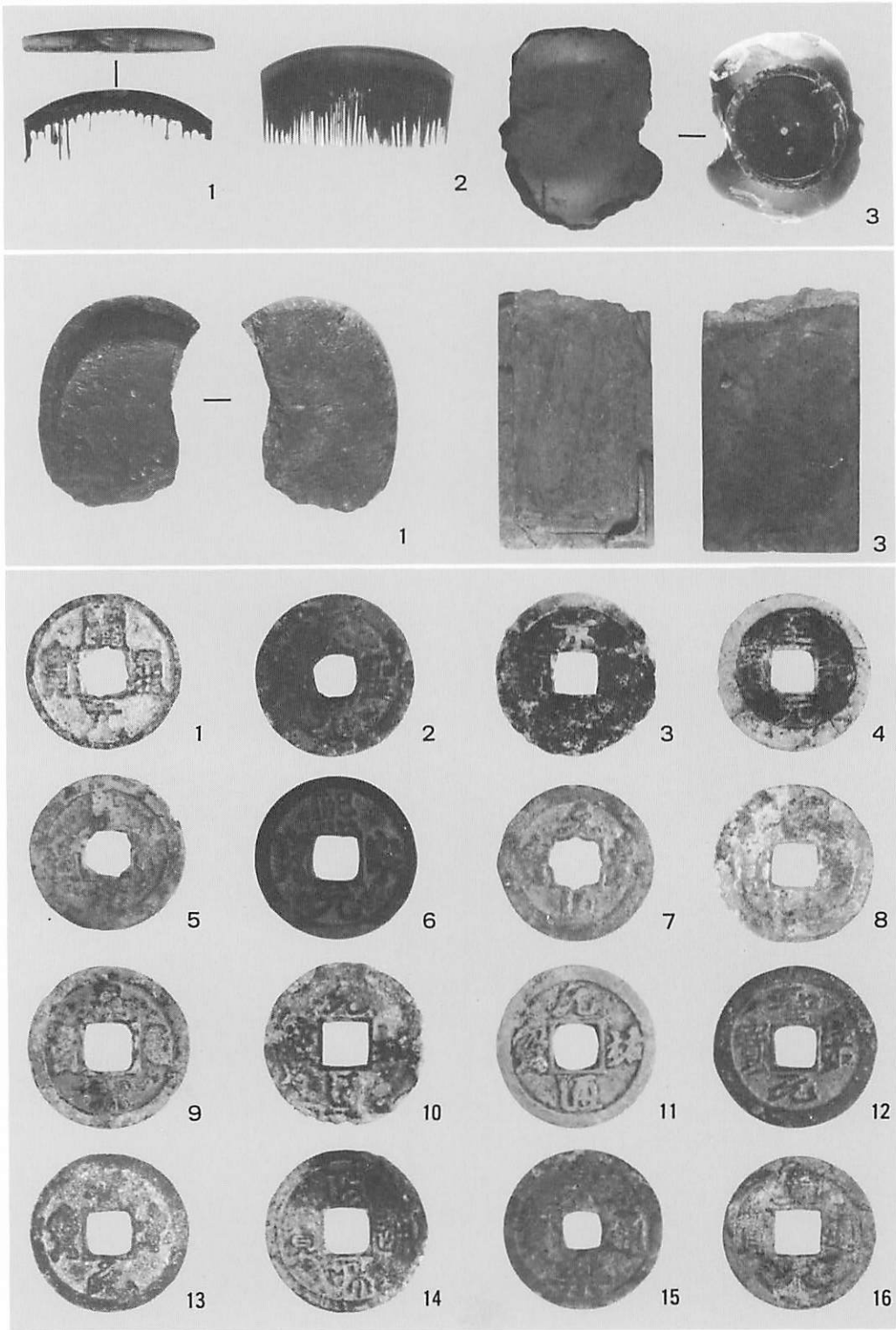




唐津系陶器



唐津·伊万里系陶磁器



平安京跡研究調査報告 第12輯

押 小 路 殿 跡
平 安 京 左 京 三 条 三 坊 十 一 町

発行日 昭和59年3月1日

編集 平安博物館考古学第四研究室 寺島 孝一

発行 財団法人 古 代 學 協 會

604 京都市中京区三条高倉
振替京都 8-850番
TEL. 075(222) 0 8 8 8

印刷 東 洋 紙 業 株 式 會 社

556 大阪市浪速区芦原1丁目3番
TEL. 06 (567) 2 1 1 1

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XII

EXCAVATIONS ON THE SITES OF THE OSIKÔJI-
DONO MANSION AND THE ELEVENTH INSULA,
REGIO III, DECUMANUS III IN THE PARS
ORIENTALIS OF THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO, MCMLXXXIV